

基本計画書

基本計画								
事項	記	入	欄	備	考			
計画の区分	学部設置							
フリガナ設置者	カッコウホジシニヒロシマジョウカクイン 学校法人広島女学院							
フリガナ大学の名称	ヒロシマジョウカクインダク 広島女学院大学 (Hiroshima Jogakuin University)							
大学本部の位置	広島県広島市東区牛田東四丁目13番1号							
大学の目的	広島女学院大学（以下、「本学」という。）は、キリスト教を教育の基盤とし、女性の生涯を支える高度の教養を授け、専門の学術を教授研究することにより、真理と平和を追究し、世界と地域の人々に仕えるゆたかな人格の育成を目的とする。							
新設学部等の目的	<p>【人文学部】 言語や文化についての豊かな教養、専門的知識及び深い洞察にもとづき、幅広い視野に立って確固たる自己を社会の中で位置づけることができ、自己の文化や異文化を理解することによって多様な価値観を受容し、高い言語運用能力をもって他者との円滑な関係を築くことができる人材を養成する。さらに、現代社会が直面する諸問題に対して主体的に関わり、他者と相互に尊重しあい女性のライフキャリアを通して協働することによって、継続してその解決に取り組むことができる人材を養成する。</p> <p>【国際英語学科】 国際共通語としての実践的な英語力を身につけ、多文化への理解と柔軟な対応を兼ね備え、自国の文化をも理解した上で、グローバル社会で活躍する人材を養成する。特に一定の基準を超えた英語力を有する学生のために、GSE(Global Studies in English)コースを用意し、国際社会で貢献できる人材を養成する。</p> <p>【日本文学科】 日本語や日本の文学・文化を深く理解し、日本の文化を世界に発信する力を語学教育や異文化コミュニケーション教育などにより育み、地域やグローバル社会に貢献できる人材を養成する。</p>							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	人文学部 (Faculty of Humanities)	年	人	年次人	人		年 月 第 年次	広島県広島市東区 牛田東四丁目13番1号
	国際英語学科 (Department of International English)	4	65	—	260	学士（文学）	平成30年4月 第1年次	
	日本文化学科 (Department of Japanese Language and Culture)	4	40	—	160	学士（文学）	平成30年4月 第1年次	
計		105	—	420				
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	<p>国際教養学部（廃止） 国際教養学科 (△240)</p> <p>人間生活学部 生活デザイン・建築学科（廃止） (△ 70) 幼児教育心理学科（廃止） (△ 90)</p> <p>※平成30年4月学生募集停止</p> <p>人間生活学部 生活デザイン学科（学科設置）（平成29年4月届出）（65） 児童教育学科（学科設置）（平成29年4月届出）（90）</p>							

教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
		講義	演習	実験・実習	計				
	人文学部 国際英語学科	168科目	53科目	16科目	237科目	124単位			
	人文学部 日本文化学科	127科目	61科目	15科目	203科目	124単位			
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等					兼任教員等	
			教授	准教授	講師	助教	計		助手
	新設	人文学部 国際英語学科	3人 (3)	0人 (0)	4人 (4)	0人 (0)	7人 (7)	0人 (0)	83人 (83)
		人文学部 日本文化学科	4 (4)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	5 (5)	0 (0)	87 (87)
		人間生活学部 生活デザイン学科	6 (4)	3 (5)	1 (1)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	91 (91)
		児童教育学科	7 (7)	5 (6)	0 (0)	0 (0)	12 (13)	0 (0)	72 (71)
		(共通教育部門)	3 (4)	3 (4)	0 (0)	3 (3)	9 (11)	0 (0)	0 (0)
		計	23 (22)	12 (16)	5 (5)	3 (3)	43 (46)	0 (0)	- (-)
	既設分	人間生活学部 管理栄養学科	4 (5)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	10 (11)	0 (0)	70 (69)
		計	4 (5)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	10 (11)	0 (0)	- (-)
	合計	27 (27)	16 (20)	7 (7)	3 (3)	53 (57)	0 (0)	- (-)	
教員以外の職員の概要	職種		専任	兼任	計				
	事務職員		33人 (37)	11人 (15)	44人 (52)				
	技術職員		0 (0)	0 (0)	0 (0)				
	図書館専門職員		3 (3)	2 (3)	5 (6)				
	その他の職員		3 (3)	1 (1)	4 (4)				
	計	39 (43)	14 (19)	53 (62)					
校地等	区分	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計				
	校舎敷地	18,414.37㎡	0㎡	0㎡	18,414.37㎡				
	運動場用地	23,191.93㎡	0㎡	0㎡	23,191.93㎡				
	小計	41,606.30㎡	0㎡	0㎡	41,606.30㎡				
	その他	160,866.03㎡	0㎡	0㎡	160,866.03㎡				
	合計	202,472.33㎡	0㎡	0㎡	202,472.33㎡				
校舎	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計					
	29,882.92㎡ (29,882.92㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	29,882.92㎡ (29,882.92㎡)					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設				
	23室	21室	25室	7室 (補助職員0人)	1室 (補助職員0人)				
専任教員研究室	新設学部等の名称			室数					
	人文学部 国際英語学科			7	室				
	人文学部 日本文化学科			5	室				
図書・設備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕	学術雑誌 〔うち外国書〕	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料	機械・器具	標本		
		冊	種	種	点	点	点		
	人文学部 国際英語学科	114,959 [26,323] (112,169 [26,098])	1,362 [316] (1,330 [313])	200 [200] (178 [178])	510 (505)	- (-)	- (-)		
	人文学部 日本文化学科	70,746 [16,200] (69,028 [16,061])	730 [87] (711 [85])	5 [0] (1 [0])	314 (311)	- (-)	- (-)		
	計	185,705 [42,523] (181,197 [42,159])	2,092 [403] (2,041 [398])	205 [200] (179 [178])	824 (816)	- (-)	- (-)		

平成29年4月
届出済
平成29年4月
届出済

大学全体

機械・器具
120 (109)
大学共通

図書館		面積		閲覧座席数			収納可能冊数			大学全体	
		5,904.61㎡		381			442,500				
体育館		面積		体育館以外のスポーツ施設の概要							
		908.22㎡		テニスコート 弓道場							
経費の見積り及び維持方法の概要	経費の見積り	区分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	図書購入費については、電子ジャーナル・データベース・その他の経費（運用コスト）を含む。 届出学部全体	
		教員1人当り研究費等		150千円	150千円	150千円	150千円	-	-		
		共同研究費等		1,964千円	1,964千円	1,964千円	1,964千円	-	-		
		図書購入費	6,099千円	6,749千円	6,749千円	6,749千円	6,749千円	-	-		
	設備購入費	6,349千円	7,955千円	7,955千円	7,955千円	7,955千円	-	-			
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次				
		1,310千円	1,060千円	1,060千円	1,060千円	-千円	-千円				
	学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学経常費補助金、寄付金収入、利息収入、雑収入							
既設大学等の状況	大学の名称		広島女学院大学								
	学部等の名称		修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	平成30年度より学生募集停止
	国際教養学部 国際教養学科		年	人	年次	人	学士（国際教養学）	0.52 0.52	平成24年度	広島県広島市東区 牛田東四丁目13番1号	
	人間生活学部 生活デザイン・建築学科		4	240	-	960	学士（家政学）	0.90 0.74	平成24年度		
	管理栄養学科		4	70	-	280	学士（家政学）	1.02	平成24年度		
	幼児教育心理学科		4	70	-	280	学士（家政学）	0.92	平成24年度		
文学部 日本語日本文学科		4	90	-	360	学士（幼児教育心理学）	-	平成12年度	平成23年度より学生募集停止		
文学部 日本語日本文学科		4	-	-	-	学士（文学）	-	平成12年度			
附属施設の概要		該当なし									

教育課程等の概要															
(人文学部国際英語学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
基礎科目	キリスト教学入門Ⅰ	1前	2			○								兼2	*外国人留学生等は「基礎英語ⅠⅡⅢⅣ」の代わりに、「基礎日本語ⅠⅡⅢⅣ」を必修とする。
	キリスト教学入門Ⅱ	1後	2			○								兼2	
	初年次セミナー	1前	2				○		3		4				
	日本語表現技法	1前	2			○								兼2	
	情報リテラシーⅠ	1前	2			○								兼2	
	情報リテラシーⅡ	1後	2			○								兼2	
	基礎英語Ⅰ	1前	1					○						兼3	
	基礎英語Ⅱ	1後	1					○						兼3	
	基礎英語Ⅲ	2前	1					○						兼3	
	基礎英語Ⅳ	2後	1					○						兼3	
	基礎日本語Ⅰ	1前		1				○						兼1	
	基礎日本語Ⅱ	1後		1				○						兼1	
	基礎日本語Ⅲ	2前		1				○						兼1	
	基礎日本語Ⅳ	2後		1				○						兼1	
小計（14科目）	—	—	16	4	0	—	—	—	3	0	4	0	0	兼11	
ライフキャリア科目	必修	キャリアプランニング	1前	2			○			3		4			兼1 共同
		女性とライフキャリア	2前	2			○					1			兼3 共同
	自己との関係科目群	女性史	1前		2			○							兼3 オムニバス
		女性とライフスタイル	1後		2			○							兼7 オムニバス
		Women in Christianity	1後		2			○							兼1
		女性文学の世界Ⅰ（近現代編）	2前		2			○							兼1
		キリスト教と女性	2後		2			○							兼1
		Women & the World Ⅰ	2後		2			○							兼1
	他者との関係科目群	対人関係の心理	1前		2			○							兼3 オムニバス
		キリスト教と教育	1前		2			○							兼1
		Intercultural Communication Ⅰ	1後		2			○							兼1
		暮らしを営む食と健康	2前		2			○							兼4 オムニバス
		子育てとライフキャリア	2後		2			○							兼1
		社会との関係科目群	World Literature Ⅰ	1前		2			○					1	
	キリスト教と社会		1後		2			○							兼1
	ビジネス実務総論Ⅰ		1後		2			○							兼1
	ビジネス実務総論Ⅱ		2前		2			○							兼1
	ヒロシマと平和		2前		2			○							兼1 集中
	ボランティア活動		2前		2			○							兼4 オムニバス
	インターンシップ		2前		2			○							兼2
Human Rights in the World	2後			2			○							兼1	
Culture Studies Ⅰ	2後		2			○							兼1		
その他科目群	ライフキャリア特別講義Ⅰ	1前		2			○							兼1 集中	
	ライフキャリア特別講義Ⅱ	1後		2			○							兼1 集中	
	ライフキャリア特別セミナーⅠ	1前		2				○						兼1 集中	
	ライフキャリア特別セミナーⅡ	1後		2				○						兼1 集中	
	オープンセミナーⅠ	1前		1				○	3		4			兼1 集中	
	オープンセミナーⅡ	1前		2				○	3		4			兼1 集中	
	スポーツ科学Ⅰ	1前		1			○							兼2 ※実習	
	スポーツ科学Ⅱ	1後		1									○	兼2	
	日本国憲法	1後		2			○							兼1	
	外国語（英語Ⅰ）	1前		1				○						兼5	
外国語（英語Ⅱ）	1後		1				○						兼5		
外国語（英語Ⅲ）	2前		1				○						兼3		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
ライフキャリア科目	その他科目群	外国語（英語Ⅳ）	2後	1			○								兼3	
		外国語（フランス語Ⅰ）	1前	1			○								兼1	
		外国語（フランス語Ⅱ）	1後	1			○								兼1	
		外国語（韓国語Ⅰ）	1前	1			○								兼1	
		外国語（韓国語Ⅱ）	1後	1			○								兼1	
		外国語（中国語Ⅰ）	1前	1			○								兼1	
		外国語（中国語Ⅱ）	1後	1			○								兼1	
		外国語（日本語Ⅰ）	1前	1			○								兼1	
		外国語（日本語Ⅱ）	1後	1			○								兼1	
		外国語（日本語Ⅲ）	2前	1			○								兼1	
		外国語（日本語Ⅳ）	2後	1			○								兼1	
小計（45科目）		—	4	69	0	—			3	0	4	0	0	兼40		
専門科目	GSEコース科目	人文学入門	1前	2			○			2					兼2 オムニバス	
		キャリア・スタディ・プログラムⅠ	1後	2			○			3		4				
		キャリア・スタディ・プログラムⅡ	2前	2			○			3		4				
		キャリア・スタディ・プログラムⅢ	2後	2			○			3		4				
		アカデミック・リサーチⅠ	3前	2			○			3		4				
		アカデミック・リサーチⅡ	3後	2			○			3		4				
		アカデミック・リサーチⅢ	4前	2			○			3		4				
		アカデミック・リサーチⅣ	4後	2			○			3		4				
		卒業論文	4後	4			○			3		4				
		English Writing Composition	1前	2			○									兼1
		Academic Writing in English	1後	2			○									兼1
		Discussion & Presentation	1前	2			○			1						
		Research & Debate	1後	2			○									兼1
		通訳の理論と実践Ⅰ	2前	2	2		○									兼1
通訳の理論と実践Ⅱ	2後	2	2		○									兼1		
通訳の理論と実践Ⅲ	3前	2	2		○									兼1		
通訳の理論と実践Ⅳ	3後	2	2		○									兼1		
Introduction to Global Studies	1後	2			○			1		1				兼1 オムニバス		
Issues in the Modern World	1後	2			○									兼1		
Introduction to Nature & the Environment	1後	2			○									兼1		
Area StudiesⅠ- The Americas	2前	2			○									兼1		
Area StudiesⅡ- Europe	2前	2			○									兼1		
Area StudiesⅢ- Asia	2後	2			○									兼1		
Area StudiesⅣ- Africa	2後	2			○									兼1		
World HistoryⅠ	2前	2			○									兼1		
Culture StudiesⅡ	3前	2			○									兼1		
Introduction to Economics	2前	2			○									兼1		
Global Citizenship	2後	2			○						1					
International Politics	3後	2			○						1					
Women & the WorldⅡ	3後	2			○						1					
Developing Global Thinking	3前	2			○						1					
Language Diversity & Society	3前	2			○			1								
Religions & the World	3後	2			○									兼1		
Language & Culture through Film	3後	2			○									兼1		
World HistoryⅡ	2後	2	2		○									兼1		
Intercultural CommunicationⅡ	2後	2	2		○									兼1		
World LiteratureⅡ	2前	2	2		○						1					
Modern Issues in Japan Studies	2後	2	2		○									兼1		
International Economics	3前	2	2		○									兼1		
Peace Studies	3後	2	2		○									兼1		
Environment & Society	3前	2	2		○						1					
English in the World	3後	2	2		○			1								

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専 門 科 目	GSE コ ー ス 科 目	Media & Culture		2		○									兼1	
		Special Issues in Global Studies I	3前		2		○					1				
		Special Issues in Global Studies II	3後		2		○								兼1	
		Independent Study	3前		2			○				1				
		GSE Internship	3前		2			○				1				
		オーラル・コミュニケーション I	1前	1				○								兼3
		オーラル・コミュニケーション II	1後	1				○								兼3
		オーラル・コミュニケーション III	2前	2			○									兼3
		オーラル・コミュニケーション IV	2後	2			○									兼3
		リーディング I	1前	1				○								兼2
		リーディング II	1後	1				○								兼2
		リーディング III	2前	2			○									兼2
		リーディング IV	2後	2			○									兼2
		ライティング I	1前	1				○								兼3
		ライティング II	1後	1				○								兼3
		ライティング III	2前	2			○									兼3
		ライティング IV	2後	2			○									兼3
		TOEIC I	1前		1			○								兼1
		TOEIC II	1後		1			○								兼1
		TOEIC III	2前		2		○									兼1
		TOEIC IV	2後		2		○									兼1
		海外研修事前指導	1後		2		○					1				
		教室英語	2後		2		○				1					
		ビジネス・イングリッシュ	3後		2		○									兼1
		ムービー&ドラマ	3前		2		○				1					
		ディベート&ディスカッション	3後		2		○									兼1
		アカデミック・ライティング	3前		2		○									兼1
		英文法 I	1前	1			○				1					
		英文法 II	1後	1			○					1				
		世界の英語	2後	2			○				1					
		国際共通語としての英語	2前	2			○				1					
		英米文学入門	1後	2			○					2				オムニバス
		英語学入門	1後	2			○				1					
		英語音声学	2前		2		○					1				
		英語科教育入門	1後	2			○				1					
		比較言語学	2後	2			○				1					
		比較文化学 I	2前	2			○				1					
		国際英語研究 I	2前		2		○					1				
		国際英語研究 II	2後		2		○					1				
		国際英語研究 III	3前		2		○					1				
		国際英語研究 IV	3後		2		○				1					
		英語児童文学	3後		2		○					1				
		アメリカ文学史	3前		2		○					1				
		イギリス文学史	3後		2		○					1				
		アメリカ文化概説	2前		2		○					1				
		イギリス文化概説	2後		2		○					1				
		小学校英語教育 I	3前		2		○									兼1
	小学校英語教育 II	3後		2		○									兼1	
	英語科教育法 I	2前		2		○				1						
	英語科教育法 II	2後		2		○				1						
	英語科教育法 III	3前		2		○					1					
	英語科教育法 IV	3後		2		○					1					

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門科目	コース共通選択科目	マンガ・アニメーション研究	2前	2		○									兼1
		都市と文化財	1後	2		○									兼1
		地域と歴史	2後	2		○									兼1
		多文化共生社会論	1後	2		○									兼1
		国際関係論	2前	2		○									兼1
		文化人類学	2後	2		○									兼1
		Global Village Field Experience I	1前	2		○					1				
		Global Village Field Experience II	1後	2		○					1				
		インディペンデント・スタディ	3前	2			○			3		4			兼5
		海外研修Ⅰ	2前	4				○			1				
		海外研修Ⅱ	2後	4					○	1					
		海外研修Ⅲ	3前	2					○						兼1
		日本語フィールドワークⅠ（日本語の方言）	2前	2					○						兼1
		日本語フィールドワークⅡ（郷土資料調査）	2後	2					○						兼1
		日本文化フィールドワーク	2前	2					○						兼1
		地域連携文化セミナーⅠ	3前	2			○			2		1			
		地域連携文化セミナーⅡ	3後	2				○							兼3 共同
		海外インターンシップ	2後	16					○			1			
		小計（112科目）	—	96	138	0	—	—	—	3	0	4	0	0	兼31
関連科目Ⅰ	教職	教育原理	2後	2		○								兼1	
		教育心理学	2前	2		○								兼2	
		教育社会学	3前	2		○								兼1	
		教職実践演習（中・高）	4後	2			○							兼4 共同	
		教育史	3後	2		○								兼1	
		学習心理学	3前	2		○								兼1	
		教育と法	3後	2		○								兼1	
		学芸員	観光学	2前	2		○								兼1
	市民社会とNGO・NPO		2前	2		○								兼1	
	世界遺産学		2前	2		○								兼4 オムニバス	
	写真映像論		2前	2		○								兼1	
	西洋服装史		1前	2		○								兼1 隔年	
	日本服装史		1後	2		○								兼1	
	生活造形論（工芸とデザイン）	1後	2		○								兼1		
日本建築史（含住居史）	2前	2		○								兼1			
西洋建築史	1後	2		○								兼1 集中			
感性デザイン論Ⅰ（ポップカルチャー）	1・2前	2		○								兼1 隔年			
感性デザイン論Ⅱ（ファッション文化史）	1・2後	2		○								兼1 隔年			
服飾美学	2・3後	2		○								兼1 隔年			
司書教諭	情報メディアの活用	2前	2		○								兼1		
	図書館情報技術論	2後	2		○								兼1		
	情報サービス論	3前	2		○								兼1		
	小計（22科目）	—	0	44	0	—	—	0	0	0	0	0	兼19		
関連科目Ⅱ	日本語	日本語教授法Ⅰ	2後		2	○								兼1	
		日本語教授法Ⅱ	3前		2	○								兼1	
		日本語教授法Ⅲ	3後		2	○								兼1	
	教職	教職論	1後		2	○								兼2 オムニバス	
		教育課程論	2前		2	○								兼1	
		教育方法論（情報機器及び教材の活用を含む）	2前		2	○								兼1	
		生徒・進路指導論（進路指導の理論及び方法を含む）	3前		2	○								兼1	
特別活動論	3後		2	○								兼1			

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
関連科目Ⅱ	教職	学校カウンセリング	3前		2	○									兼1
		道徳教育指導論	3後		2	○									兼1
		介護等体験Ⅰ	3通		1			○							兼3 共同
		介護等体験Ⅱ（事前・事後指導）	3通		1			○							兼3 オムニバス・共同（一部）
		教育実習Ⅰ	4通		2			○							兼3 共同
		教育実習Ⅱ	4通		2			○							兼4 共同
		教育実習Ⅲ（事前・事後指導）	4通		1			○							兼4 共同
	学芸員	博物館教育論	1後		2	○									兼1
		博物館概論	2前		2	○									兼1
		博物館経営論	2後		2	○									兼1
		博物館資料論	2前		2	○									兼1
		博物館情報・メディア論	2前		2	○									兼1
		博物館資料保存論	2後		2	○									兼1
		博物館展示論	2後		2	○									兼2
		博物館実習Ⅰ	4前		1			○							兼3 オムニバス
		博物館実習Ⅱ	4通		2			○							兼1
		博物館実習Ⅲ	4後		1			○							兼1
	司書・司書教諭	生涯学習論Ⅰ	2前		2	○									兼1
		図書館概論	1後		2	○									兼1
		図書館制度・経営論	3前		2	○									兼1
		図書館サービス概論	2前		2	○									兼1
		情報サービス演習Ⅰ	3前		1			○							兼1
		情報サービス演習Ⅱ	3後		1			○							兼1
		図書館情報資源概論	2後		2	○									兼1
情報資源組織論		2前		2	○									兼1	
情報資源組織演習Ⅰ		2前		1			○							兼1	
情報資源組織演習Ⅱ		2後		1			○							兼1	
児童サービス論		2前		2	○									兼1	
図書・図書館史		3後		1	○									兼1	
図書館サービス特論		3後		1	○									兼1	
図書館基礎特論		3前		1	○									兼1	
図書館情報資源特論		3前		1	○									兼1	
読書と豊かな人間性		2後		2	○									兼1	
学校経営と学校図書館		2前		2	○									兼1	
学校図書館メディアの構成	2前		2	○									兼1		
学習指導と学校図書館	2後		2	○									兼1		
小計（44科目）	—	0	0	75	—				0	0	0	0	0	兼24	
合計（237科目）			—	116	255	75	—			3	0	4	0	0	兼83
学位又は称号		学士（文学）		学位又は学科の分野				文学関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
基礎科目16単位を必修科目、ライフキャリア科目4単位を必修、12単位を選択必修として計32単位を履修し、専門科目の中から、GSEコースは必修科目を42単位、選択必修科目を10単位、英語文化コースは必修科目を34単位、選択必修科目を18単位、コア科目（計20単位）を必修科目として、残り20単位を専門科目、関連科目Ⅰから選択科目として履修し、合計124単位以上を修得すること。 卒業要件として修得すべき単位数については、一年間に履修科目として登録することができる単位数の上限を原則として50単位未満とする。ただし、直前学期の成績平均点数（GPA）が2.3未満の者については、当該学期の履修登録上限単位数を22単位とする。							1 学年の学期区分		2 学期						
							1 学期の授業期間		15 週						
							1 時限の授業時間		90 分						

教育課程等の概要																
(人文学部日本文化学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
基礎科目	キリスト教学入門Ⅰ	1前	2			○								兼1	※外国人留学生等は「基礎英語ⅠⅡⅢⅣ」の代わりに、「基礎日本語ⅠⅡⅢⅣ」を必修とする。	
	キリスト教学入門Ⅱ	1後	2			○								兼1		
	初年次セミナー	1前	2				○		4	1						
	日本語表現技法	1前	2			○								兼1		
	情報リテラシーⅠ	1前	2			○								兼2		
	情報リテラシーⅡ	1後	2			○								兼2		
	基礎英語Ⅰ	1前	1				○							兼2		
	基礎英語Ⅱ	1後	1				○							兼1		
	基礎英語Ⅲ	2前	1				○							兼2		
	基礎英語Ⅳ	2後	1				○							兼1		
	基礎日本語Ⅰ	1前		1			○							兼1		
	基礎日本語Ⅱ	1後		1			○							兼1		
	基礎日本語Ⅲ	2前		1			○							兼1		
	基礎日本語Ⅳ	2後		1			○							兼1		
小計（14科目）	—	—	16	4	0	—	—	—	4	1	0	0	0	兼9		
ライフキャリア科目	必修	キャリアプランニング	1前	2			○		1					兼1	共同	
		女性とライフキャリア	2前	2			○			1				兼3	共同	
	自己との関係科目群	女性史	1前		2			○							兼3	オムニバス
		女性とライフスタイル	1後		2			○							兼7	オムニバス
		Women in Christianity	1後		2			○			1				兼1	
		女性文学の世界Ⅰ（近現代編）	2前		2			○								
		キリスト教と女性	2後		2			○							兼1	
	他者との関係科目群	対人関係の心理	1前		2			○							兼3	オムニバス
		キリスト教と教育	1前		2			○							兼1	
		Intercultural CommunicationⅠ	1後		2			○							兼1	
		暮らしを営む食と健康	2前		2			○							兼4	オムニバス
		子育てとライフキャリア	2後		2			○							兼1	
	社会との関係科目群	World LiteratureⅠ	1前		2			○							兼1	
		キリスト教と社会	1後		2			○							兼1	
		ビジネス実務総論Ⅰ	1後		2			○							兼1	
		ビジネス実務総論Ⅱ	2前		2			○							兼1	
		ヒロシマと平和	2前		2			○							兼1	集中
		ボランティア活動	2前		2			○							兼4	オムニバス
		インターンシップ	2前		2			○	○						兼2	
		Human Rights in the World	2後		2			○							兼1	
Culture StudiesⅠ	2後		2			○							兼1			
その他科目群	ライフキャリア特別講義Ⅰ	1前		2			○							兼1	集中	
	ライフキャリア特別講義Ⅱ	1後		2			○							兼1	集中	
	ライフキャリア特別セミナーⅠ	1前		2				○						兼1	集中	
	ライフキャリア特別セミナーⅡ	1後		2				○						兼1	集中	
	オープンセミナーⅠ	1前		1				○	4	1					集中	
	オープンセミナーⅡ	1前		2				○	4	1					集中	
	スポーツ科学Ⅰ	1前		1			○							兼2	※実習	
	スポーツ科学Ⅱ	1後		1								○		兼2		
	日本国憲法	1後		2			○							兼1		
	外国語（英語Ⅰ）	1前		1				○						兼5		
外国語（英語Ⅱ）	1後		1				○						兼5			
外国語（英語Ⅲ）	2前		1				○						兼3			

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
ライフキャリア科目	その他科目群	外国語（英語Ⅳ）	2後	1			○								兼3
		外国語（フランス語Ⅰ）	1前	1			○								兼1
		外国語（フランス語Ⅱ）	1後	1			○								兼1
		外国語（韓国語Ⅰ）	1前	1			○								兼1
		外国語（韓国語Ⅱ）	1後	1			○								兼1
		外国語（中国語Ⅰ）	1前	1			○								兼1
		外国語（中国語Ⅱ）	1後	1			○								兼1
		外国語（日本語Ⅰ）	1前	1			○			1					
		外国語（日本語Ⅱ）	1後	1			○			1					
		外国語（日本語Ⅲ）	2前	1			○								兼1
		外国語（日本語Ⅳ）	2後	1			○								兼1
小計（45科目）		—	4	69	0	—			4	1	0	0	0	兼38	
専門科目	コア科目	人文学入門	1前	2			○			2					兼2 オムニバス
		キャリア・スタディ・プログラムⅠ	1後	2			○			1	1				
		キャリア・スタディ・プログラムⅡ	2前	2			○			1					
		キャリア・スタディ・プログラムⅢ	2後	2			○			1					
		アカデミック・リサーチⅠ	3前	2			○			4	1				
		アカデミック・リサーチⅡ	3後	2			○			4	1				
		アカデミック・リサーチⅢ	4前	2			○			4	1				
		アカデミック・リサーチⅣ	4後	2			○			4	1				
		卒業論文	4後	4			○			4	1				
		スキル科目	日本文学講読Ⅰ	1前	2				○						
	日本文学講読Ⅱ		1前	2				○			1				
	日本文学講読Ⅲ		1後	2				○		1					
	日本文学講読Ⅳ		1後	2				○							兼1
	日本語文章読解法	1後	2				○		1						
日本を伝える英語Ⅰ	2前	2				○							兼1		
日本を伝える英語Ⅱ	2後	2				○							兼1		
日本語文章表現法	3前	2				○		1					兼1		
日本語コミュニケーション技法Ⅰ	1後	2				○							兼1		
日本語コミュニケーション技法Ⅱ	2前	2				○							兼1		
メディアリテラシー	2前	2				○		1							
文芸創作	2後	2				○							兼1		
映画・演劇研究	3前	2				○							兼1		
内容科目	古典日本語基礎文法	2前	2				○		1						
	現代日本語基礎文法	2後	2				○		1						
	日本文学概論Ⅰ	2前	2				○		1						
	日本文学概論Ⅱ	2後	2				○			1					
	日本語学概論Ⅰ（音声言語を含む）	2前	2				○		1						
	日本語学概論Ⅱ（音声言語を含む）	2後	2				○		1						
	日本語音声学	2前	2				○							兼1	
	日本古典文学史	2後	2				○		1						
	日本近現代文学史	2前	2				○			1					
	社会言語学Ⅰ	2前	2				○							兼1 隔年	
	社会言語学Ⅱ	2前	2				○							兼1 隔年	
	言語の獲得	2前	2				○							兼1	
	日本語の文字と語彙	1後	2				○		1						
	言語とコミュニケーション	2後	2				○							兼1	
	児童文学	3後	2				○			1					
	女性文学の世界Ⅱ（古典編）	3前	2				○		1						
	日本文化研究Ⅰ	3前	2				○		1						
	日本文化研究Ⅱ	3後	2				○		1						
日本文化史Ⅰ	2前	2				○							兼1		
日本文化史Ⅱ	2後	2				○							兼1		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目	内容科目	漢文学概論Ⅰ	2前	2		○									兼1	
		漢文学概論Ⅱ	2後	2		○									兼1	
		書道Ⅰ	4前	2			○		1						兼1	オムニバス
		書道Ⅱ	4後	2				○	1						兼1	オムニバス
		国語科教育入門	1後	2			○		1							
		国語教材研究Ⅰ（古文・漢文・現代文）	3前	2			○									兼1
		国語教材研究Ⅱ（日本語文法・日本語の語彙・日本語の表記）	3後	2			○									兼1
		国語科授業実践研究Ⅰ（カリキュラム論・授業論・授業観察）	2前	2			○		1							
		国語科授業実践研究Ⅱ（国語科音声指導法、国語科文章指導法）	2後	2			○		1							
		中学校国語研究（教科書分析）	3前	2			○									兼1
		高等学校国語研究（教科書分析）	3後	2			○									兼1
		国語科教育法Ⅰ	3前	2			○		1							
		国語科教育法Ⅱ	3後	2			○		1							
		国語科教育法Ⅲ	3前	2			○		1							
	国語科教育法Ⅳ	3後	2			○		1								
	展開科目	比較言語学	2後		2		○									兼1
		比較文化学Ⅰ	2前		2		○									兼1
		比較文化学Ⅱ	2後		2		○									兼1
		日本語教育概論	2前		2		○									兼1
		マンガ・アニメーション研究	2前		2		○									兼1
		都市と文化財	1後		2		○									兼1
		地域と歴史	2後		2		○									兼1
		写真映像論	2前		2		○									兼1
		多文化共生社会論	1後		2		○									兼1
		国際関係論	2前		2		○									兼1
		文化人類学	2後		2		○									兼1
		Global Village Field ExperienceⅠ	1前		2		○									兼1
		Global Village Field ExperienceⅡ	1後		2		○									兼1
インディペンデント・スタディ		3前		2			○		4	1					兼7	
海外研修Ⅰ	2前		4				○							兼1		
海外研修Ⅱ	2後		4				○							兼1		
海外研修Ⅲ	3前		2				○	1								
日本語フィールドワークⅠ（日本語の方言）	2前		2				○	1								
日本語フィールドワークⅡ（郷土資料調査）	2後		2				○	1								
日本文化フィールドワーク	2前		2				○		1					隔年		
地域連携文化セミナーⅠ	3前		2			○								兼3		
地域連携文化セミナーⅡ	3後		2				○	2	1					共同		
	小計（79科目）	—	54	110	0	—		4	1	0	0	0		兼27		
関連科目Ⅰ	教職	教育原理	2後		2		○								兼1	
		教育心理学	2前		2		○								兼1	
		教育社会学	3前		2		○								兼1	
		教職実践演習（中・高）	4後		2			○							兼4	共同
		教育史	3後		2		○								兼1	
		学習心理学	3前		2		○								兼1	
		教育と法	3後		2		○								兼1	
		学芸員	観光学	2前		2		○								兼1
	市民社会とNGO・NPO		2前		2		○								兼1	
	世界遺産学		2前		2		○								兼4	オムニバス
		西洋服装史	1前		2		○								兼1	隔年
	日本服装史	1後		2		○								兼1		
	生活造形論（工芸とデザイン）	1後		2		○								兼1		

科目 区分	授業科目の名称	配当年度	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
関連科目Ⅰ	学芸員 司書教諭	日本建築史（含住居史）	2前	2		○									兼1	集中 隔年 隔年 隔年	
		西洋建築史	1後	2		○									兼1		
		感性デザイン論Ⅰ（ポップカルチャー）	1・2前	2		○									兼1		
		感性デザイン論Ⅱ（ファッション文化史）	1・2後	2		○									兼1		
		服飾美学	2・3後	2		○									兼1		
	司書教諭	情報メディアの活用	2前	2		○									兼1		
		図書館情報技術論	2後	2		○									兼1		
		情報サービス論	3前	2		○									兼1		
		小計（21科目）	—	0	42	0	—	—	—	0	0	0	0	0	0		兼20
		関連科目Ⅱ	教育 日本語	日本語教授法Ⅰ	2後		2		○			1					
日本語教授法Ⅱ	3前				2		○			1							
日本語教授法Ⅲ	3後				2		○			1							
教職	教職論		1後		2	○									兼2	オムニバス 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼3 共同 兼3 オムニバス・ 共同（一部） 兼3 共同 兼4 共同 兼4 共同	
	教育課程論		2前		2	○									兼1		
	教育方法論（情報機器及び教材の活用を含む）		2前		2	○									兼1		
	生徒・進路指導論（進路指導の理論及び方法を含む）		3前		2	○									兼1		
	特別活動論		3後		2	○									兼1		
	学校カウンセリング		3前		2	○									兼1		
	道徳教育指導論		3後		2	○									兼1		
	介護等体験Ⅰ		3通		1			○							兼3 共同		
	介護等体験Ⅱ（事前・事後指導）		3通		1			○							兼3		
	教育実習Ⅰ		4通		2			○							兼3 共同		
教育実習Ⅱ	4通			2			○							兼4 共同			
教育実習Ⅲ（事前・事後指導）	4通			1			○							兼4 共同			
学芸員	博物館教育論		1後		2	○									兼1	兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼2 兼3 オムニバス 兼1 兼1	
	博物館概論		2前		2	○									兼1		
	博物館経営論		2後		2	○									兼1		
	博物館資料論		2前		2	○									兼1		
	博物館情報・メディア論		2前		2	○									兼1		
	博物館資料保存論		2後		2	○									兼1		
	博物館展示論		2後		2	○									兼2		
	博物館実習Ⅰ		4前		1			○							兼3		
	博物館実習Ⅱ		4通		2			○							兼1		
	博物館実習Ⅲ		4後		1			○							兼1		
司書・司書教諭	生涯学習論Ⅰ		2前		2	○									兼1	兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1	
	図書館概論		1後		2	○									兼1		
	図書館制度・経営論		3前		2	○									兼1		
	図書館サービス概論		2前		2	○									兼1		
	情報サービス演習Ⅰ		3前		1			○							兼1		
	情報サービス演習Ⅱ	3後		1			○							兼1			
	図書館情報資源概論	2後		2	○									兼1			
	情報資源組織論	2前		2	○									兼1			
	情報資源組織演習Ⅰ	2前		1			○							兼1			
	情報資源組織演習Ⅱ	2後		1			○							兼1			
	児童サービス論	2前		2	○									兼1			
	図書・図書館史	3後		1	○									兼1			
	図書館サービス特論	3後		1	○									兼1			
	図書館基礎特論	3前		1	○									兼1			
	図書館情報資源特論	3前		1	○									兼1			
	読書と豊かな人間性	2後		2	○									兼1			
	学校経営と学校図書館	2前		2	○									兼1			
	学校図書館メディアの構成	2前		2	○									兼1			
	学習指導と学校図書館	2後		2	○									兼1			
	小計（44科目）	—	0	0	75	—	—	—	—	1	0	0	0	0	兼28		

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験 ・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	
合計 (203科目)		—	74	225	75	—			4	1	0	0	0	兼87
学位又は称号		学士 (文学)		学位又は学科の分野			文学関係							
卒業要件及び履修方法						授業期間等								
<p>基礎科目16単位を必修科目、ライフキャリア科目4単位を必修、12単位を選択必修として計32単位を履修し、専門科目の中から、必修科目を34単位、選択必修科目を18単位、コア科目 (計20単位) を必修科目として、残り20単位を専門科目、関連科目 I から選択科目として履修し、合計124単位以上を修得すること。</p> <p>卒業要件として修得すべき単位数については、一年間に履修科目として登録することができる単位数の上限を原則として50単位未満とする。ただし、直前学期の成績平均点数 (G P A) が2.3未満の者については、当該学期の履修登録上限単位数を22単位とする。</p>						1 学年の学期区分			2学期					
						1 学期の授業期間			15週					
						1 時限の授業時間			90分					

教育課程等の概要

(国際教養学部国際教養学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
共通基礎科目 (C1)	キリスト教学入門Ⅰ	1前	2			○				1	1			兼1		
	キリスト教学入門Ⅱ	1後	2			○				1	1			兼1		
	キャリアプランニング (人間生活)	1前	2			○			1	1				兼1		
	初年次セミナー	1前	2				○		3	2	3					
	日本語表現技法	1前	2			○				1				兼3		
	情報リテラシⅠ	1前	2			○								兼5		
	情報リテラシⅡ	1後	2			○								兼5		
	基礎英語Ⅰ	1前	1				○						4			
	基礎英語Ⅱ	1後	1				○						4			
	基礎英語Ⅲ	2前	1				○						4			
	基礎英語Ⅳ	2後	1				○						4			
	基礎日本語Ⅰ	1前	1				○							兼1		
	基礎日本語Ⅱ	1後	1				○							兼1	*外国人留学生等は「基礎英語ⅠⅡⅢⅣ」の代わりに、「基礎日本語ⅠⅡⅢⅣ」を必修とする。	
	基礎日本語Ⅲ	2前	1				○							兼1		
	基礎日本語Ⅳ	2後	1				○							兼1		
小計 (15科目)	—	—	18	0	0	—	—	—	4	3	3	4	0	兼12	—	
共通教養科目 (C2)	総合知 人文科学知	環境と人間	2後		2		○				1	1			兼3	
		現代女性と身体	2後		2		○								兼1	隔年
		現代ジェンダー考	2後		2		○				1				兼1	隔年
		ヒロシマ	2前		2		○				2					
		ボランティア論Ⅰ	1前		2		○								兼1	
		ボランティア論Ⅱ	1後		2		○								兼1	
		キリスト教の時間Ⅰ	2前		1		○								兼1	
		キリスト教の時間Ⅱ	2後		1		○								兼1	
		特別講義Ⅰ	1前・後		2		○								兼1	集中
		特別講義Ⅱ	1前・後		2		○								兼1	集中
		特別セミナーⅠ	1前・後		2		○								兼1	集中
		特別セミナーⅡ	1前・後		2		○								兼1	集中
		教育学入門	1前		2		○								兼1	
		心理学入門	1前		2		○								兼2	
		哲学入門	1後		2		○								兼1	
キリスト教学Ⅰ (キリスト教と倫理)	2前		2		○				1							
キリスト教学Ⅱ (キリスト教と文化)	2後		2		○								兼1			
生命倫理	1後		2		○								兼1			
アメリカの文化と歴史	2後		2		○						1		兼1			
イギリスの文化と歴史	2前		2		○						1		兼1			
ヨーロッパと文化	1後		2		○								兼1			
歴史学のみかたⅠ	1前		2		○					1						
歴史学のみかたⅡ	1後		2		○								兼1			
歴史学のみかたⅢ	2前		2		○								兼1			
色彩情報論	1後		2		○				1							
音楽の世界	1後		2		○								兼1			
日本美術史	1前		2		○					1						
西洋美術史	1後		2		○								兼1			
American Culture and History	1前		2			○							兼1			
British Culture and History	1前		2			○							兼1			
European Culture and History	1前		2			○							兼1			

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
人文科学知	American Literature and Thought	2前		2			○								兼1
	Asian and African Literature and Thought	2前		2			○								兼1
	European Literature and Thought	2後		2			○								兼1
	日本文学入門	1前		2		○			3						
	アメリカ文学史	2前		2		○					1				
	イギリス文学史	2後		2		○					1				
	日本語学の視点	1前		2		○			1						
	英語学の視点	1前		2		○					1				
	比較言語	1後		2		○					1				
共通教養科目 (C2)	社会科学知	女性学入門	1後	2		○			1						
		平和学入門	1前	2		○			1						
		社会学入門	1前	2		○				1					兼1
		現代社会と人権	1前	2		○									
		地理学概論	1前	2		○					1				
		開発と文化	2前	2		○									兼1
		民俗学	1後	2		○									兼1
		経済学入門	1前	2		○									兼1
		経営学総論	1前	2		○									兼1
		Area Studies 1 (America)	1後	2			○								兼1
		Area Studies 2 (Asia and Africa)	1後	2			○								兼1
		Area Studies 3 (Europe)	1後	2			○						1		
		金融論	2前	2		○									兼1
	国際金融論	3後	2		○									兼1	
	経理実務	3前	2		○									兼1	
	ビジネス実務演習 I	2前	2			○								兼1	
	プレゼンテーション概論	1後	2			○				1					
	インターンシップ I	2前	2				○		1						
	Social Anthropology	2後	2				○							兼1	
	Social Psychology	2後	2				○							兼1	
	World Economy	2前	2				○							兼1	
	日本国憲法	1後	2			○					1				
	ビジネス法務	3後	2			○								兼1	
	公共性と権力	1後	2			○								兼1	
	政治学入門	1後	2			○								兼1	
	国際関係論	2前	2			○								兼1	
ポストコロニアリズム/ナショナリズム	2後	2			○								兼1		
グローバル化と地域	2後	2			○								兼1		
自然科学知	数学入門	1後		2		○			1						
	生活の中の数学	1前		2		○			1						
	物理学入門	1後		2		○			1						
	情報科学入門	1前		2		○			1						
	統計学入門	1後		2		○			1						
	情報管理論 (含情報処理)	2前		2		○			1						
	家庭電気・機械	2前		2		○			1						
	バイオサイエンス入門	1後		2		○								兼1	
	自然と環境	1前		2		○								兼1	
	生物学入門	1前		2		○								兼1	
	健康科学 (含栄養学概論)	1後		2		○								兼1	
	衛生と安全	1後		2		○								兼1	
	Computer Science	1前		2			○							兼1	

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考					
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手						
自然科学知	Nature and Environment	1前		2			○				1								
	Health Science	1後		2			○											兼1	
	化学	1前		2		○												兼1	
	科学と技術	2後		2		○												兼1	
	都市と環境	2前		2		○												兼1	
	生活空間デザイン論	1前		2		○												兼1	
	感性デザイン論Ⅰ(ポップカルチャー)	1・2前		2		○												兼1 隔年	
	感性デザイン論Ⅱ(ファッション文化史)	1・2後		2		○												兼1 隔年	
	生活とファッション	1・2後		2		○												兼1 隔年	
	食品加工・商品学	2前		2		○												兼1	
	調理学概論(含厨房機器・設備)	2後		2		○												兼1	
	共通教養科目(C2)	外国語(初級英語Ⅰ)	1前		1			○		1			1						兼3
		外国語(初級英語Ⅱ)	1後		1			○											兼3
		外国語(初級独語Ⅰ)	1前		1			○											兼1
		外国語(初級独語Ⅱ)	1後		1			○											兼1
		外国語(初級仏語Ⅰ)	1前		1			○		1									
		外国語(初級仏語Ⅱ)	1後		1			○		1									
		外国語(初級中国語Ⅰ)	1前		1			○											兼1
		外国語(初級中国語Ⅱ)	1後		1			○											兼1
外国語(初級韓国語Ⅰ)		1前		1			○											兼1	
外国語(初級韓国語Ⅱ)		1後		1			○											兼1	
外国語(中級英語Ⅰ)		2前		1			○											兼3	
外国語(中級英語Ⅱ)		2後		1			○											兼3	
外国語(中級中国語Ⅰ)		2前		1			○											兼1	
外国語(中級中国語Ⅱ)		2後		1			○											兼1	
外国語(中級韓国語Ⅰ)		2前		1			○											兼1	
外国語(中級韓国語Ⅱ)		2後		1			○											兼1	
外国語(初級日本語Ⅰ)		1前		1			○			1									
外国語(初級日本語Ⅱ)		1後		1			○			1									
外国語(中級日本語Ⅰ)		2前		1			○											兼1	
外国語(中級日本語Ⅱ)	2後		1			○											兼1		
スポーツ科学知	スポーツ科学Ⅰ	1前		1		○												兼2	
	スポーツ科学Ⅱ	1後		1			○											兼2	
	スポーツ科学Ⅲ(野外活動等)	2前		1			○											兼1	
	スポーツ科学Ⅳ(スキー・スケート等)	2後		1			○											兼1	
	スポーツ科学Ⅴ(水泳等)	2前		1			○											兼1	
	スポーツ科学Ⅵ(フィットネス)	2後		1			○											兼1	
小計(118科目)		—	0	208	0	—			10	5	5	2	0	兼59	—				
専門科目(C3)	文学分野 英語系	Introduction to Global Studies	1後		2		○			1		1	1					オムニバス	
		Language Diversity & Society	3・4前		2		○			1									
		English in the World	3・4後		2		○			1									
		Language & Culture through the Internet	3・4前		2			○				1							
		Language & Culture through Film	3・4後		2			○					1						
		British Society & Culture	2前		2		○							1					
		Issues in the Modern World 1	3・4前		2			○											兼1
		Issues in the Modern World 2	3・4後		2			○											兼1
		American Society & Culture	2前		2		○							1					兼1
		Intercultural Communication	2後		2			○					1						
		Developing Global Thinking	3・4前		2			○					1						
		Religions & the World	3・4前		2			○				1							

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目(C3) 文学分野 英語系 英米文化 英語教育	Women & the World	3・4後		2		○					1			兼1		
	Environment & Society	3・4前		2			○				1					
	Introduction to Economics	2前		2		○										
	Culture Studies	2前		2			○				1					
	Global Citizenship	2後		2			○				1					
	Issues in Japan Studies	2・3・4後		2		○										兼1
	Business English	3・4後		2		○					1					
	Global Village Field Experience/Volunteer or Internship I	1前		2				○			1					
	Global Village Field Experience/Volunteer or Internship II	1後		2				○			1					
	Development Economics	3・4後		2				○								兼1
	20世紀アメリカ文学研究	3・4前		2		○					1			兼1	隔年	
	19世紀アメリカ文学研究	3・4後		2		○										
	アメリカの夢考察	2前		2		○					1					
	アメリカ文学文化の比較的アプローチ	2後		2		○					1					
	20世紀アメリカン・スタディーズ	3・4後		2		○					1				隔年	
	アメリカ黒人の歴史と文化	3・4前		2		○					1				隔年	
	ユダヤ系アメリカ人の歴史と文化	3・4後		2		○					1				隔年	
	アメリカ文化とジェンダー	3・4前		2		○							1	兼1		
	カルチュラル・スタディーズ	3・4前		2		○						1		兼1		
	児童文学とファンタジー	2後		2		○								兼1		
	イギリス文学文化の比較的アプローチ	2後		2		○								兼1		
	イギリス演劇と社会	3・4前		2		○					1			兼1	隔年	
	イギリスの女性	3・4前		2		○								兼1		
	映像と絵画から見るイギリス文学	2前		2		○								兼1		
	イギリスの都市と田園	3・4後		2		○					1			兼1	隔年	
	現代のイギリス文学	3・4前		2		○								兼1	隔年	
	英米詩の世界	3・4後		2		○					1			兼1	隔年	
	19世紀のイギリス文学	3・4前		2		○					1					
	英米文学文化の学び方	1後		2		○					1					
	海外英語研修 I	2前		2		○					1					
	海外英語研修 II	2前		4				○			1					
	国内英語研修	2前		4				○		1						
	言語学研究 I (音声学・音韻論・形態論)	3前		2		○								兼1		
言語学研究 II (統語論・意味論・語用論)	3後		2		○				1							
現代英語 I (新語や外来語の特徴)	3前		2		○					1						
現代英語 II (英語の文体)	3後		2		○					1						
比較言語学 I (英語変種の特徴: 英・米・豪・加, etc.)	2前		2		○				1							
比較言語学 II (日本語と英語の対照)	2後		2		○								兼1			
比較文化学 I (英語使用圏の文化の特徴: 英・米・豪・加, etc.)	2前		2		○				1							
比較文化学 II (日本文化と英米文化の対照)	2後		2		○				1							
第二言語習得研究(外国語としての英語の学び)	2前		2		○					1						
言語教育政策論(海外の外国語教育)	2後		2		○					1						
幼児英語研究(指導法・教材開発研究)	3後		2		○								兼1			

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目(C3)	英語系	小学校英語研究Ⅰ(教材開発研究)	3前		2		○									兼1
		小学校英語研究Ⅱ(指導法研究)	3後		2		○									兼1
		中学校英語研究(教科書分析)	3前		2		○					1				
		高校英語研究(教科書分析)	3前		2		○					1				
		英語科授業実践研究Ⅰ(カリキュラム論・授業論・授業観察)	2前		2		○				1					
		英語科授業実践研究Ⅱ(英語指導インターンシップ)	2後		2				○		1					
		生涯学習英語研究(教材開発研究、ICTを含む)	3後		2		○									兼1
		英語教育 教室英語(Classroom Englishを運用できる英会話力の養成)	2後		2			○			1					
		外国語評価論(教育研究調査法)	3後		2		○					2				オムニバス
		英語教員養成研修Ⅰ	3前		2		○					2				オムニバス
		英語教員養成研修Ⅱ	3後		2		○					2				オムニバス
		海外英語教育インターンシップ	3前		4				○		1					
		英語科教育入門	1後		2		○				1					
		英語学Ⅰ(音声学:発音の理論と実践訓練)	2前		2			○								兼1
		英語学Ⅱ(音韻論・形態論:語の仕組みと発音)	2後		2		○					1				
	英語学Ⅲ(統語論:文の仕組み)	2前		2		○										
	英語学Ⅳ(意味論・語用論:ことばの意味と用い方)	2後		2		○					1					
	文学分野	通訳	通訳の理論と実践1	2前		2		○								兼1
		通訳の理論と実践2	2後		2		○								兼1	
		通訳の理論と実践3	3前		2		○								兼1	
		通訳の理論と実践4	3後		2		○								兼1	
		通訳の理論と実践5	4前		2		○								兼1	
		通訳の理論と実践6	4後		2		○								兼1	
	日本語系	国語教育	国語科教育入門	1後		2		○			1					
		国語教材研究Ⅰ(古文・漢文・現代文)	3前		2		○								兼1	
		国語教材研究Ⅱ(日本語文法・日本語の語彙・日本語の表記)	3後		2		○								兼1	
		国語科授業実践研究Ⅰ(カリキュラム論・授業論・授業観察)	2前		2		○				1					
		国語科授業実践研究Ⅱ(国語科音声指導法、国語科文章指導法)	2後		2		○				1					
		中学校国語研究(教科書分析)	3前		2		○								兼1	
		高等学校国語研究(教科書分析)	3後		2		○								兼1	
		国語教員養成研修Ⅰ(教員採用試験対策講座 一次試験対策)	3前		2		○								兼1	
		国語教員養成研修Ⅱ(教員採用試験対策講座 二次試験対策)	3後		2		○								兼1	
		日本語文章表現法	3前		2			○			1					
書道Ⅰ		4前		2				○						兼1		
書道Ⅱ		4後		2				○						兼1		
日本語教育	日本語学概論Ⅰ(音声言語を含む)	2前		2		○				1						
	日本語学概論Ⅱ(音声言語を含む)	2後		2		○				1						
	日本語教育概論Ⅰ(コースデザイン他)	2前		2		○				1						
	日本語教育概論Ⅱ(四技能教育)	2後		2		○				1						
	日本語音声学	2前		2		○								兼1		
	現代日本語基礎文法	2後		2		○								兼1		
古典日本語基礎文法	2前		2		○				1							

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
文学分野 その他	アジア・アフリカ学演習Ⅰ（文献講読）	2前		2			○				1				
	アジア・アフリカ学演習Ⅱ（文献講読）	2後		2			○				1				
	現代アジア社会論	2後		2		○								兼1	
	現代アフリカ社会論	2後		2		○					1				
	日本通交・通商史	2前		2		○								兼1	
	外国史Ⅰ（アジア史）	2前		2		○								兼1	
	外国史Ⅱ（アフリカ史）	2後		2		○					1				
	AAフィールドワークⅠ	2前		2		○					1				
	AAフィールドワークⅡ	2後		2				○			1				
	経済学Ⅱ（含国際経済学）	2後		2		○									兼1
開発経済学	2前		2		○									兼1	
政治学Ⅱ（含国際政治学）	2前		2		○									兼1	隔年
文学分野 その他	公共政策概論	1後		2		○					1				
	公共政策演習Ⅰ（文献講読）	2前		2			○				1				
	公共政策演習Ⅱ（文献講読）	2後		2			○							兼1	
	地方自治論	2後		2		○								兼1	
	都市計画法	2後		2		○					1				
	行政法	2後		2		○				1	1				
	行政学	2前		2		○								兼1	
	現代社会論（男女共同参画社会）	2後		2		○					1				
	政治学Ⅰ	1後		2		○								兼1	隔年
	公共政策フィールドワークⅠ	2前		2		○					1				
公共政策フィールドワークⅡ	2前		2				○			1					
専門科目（C3） 家政学分野 ビジネス情報系	ビジネス実務総論Ⅰ	1後		2		○				1					
	ビジネス実務総論Ⅱ	2前		2		○	○							兼1	
	ビジネス実務演習Ⅱ	2後		2			○				1				
	プレゼンテーション演習Ⅰ（アサーティブ・コミュニケーション論演習）	2前		2			○							兼1	
	プレゼンテーション演習Ⅱ	2後		2			○							兼1	
	情報総合プレゼンテーション演習	3前		2			○				1				
	ビジネスデザインⅠ	2後		2		○					1				
	ビジネスデザインⅡ	3前		2			○				1				
	マーケティング論	2前		2		○								兼1	
	ビジネス英語	2後		2		○								兼1	
	広島地域ビジネス論	2後		2		○				1	1				
	インターンシップⅡ	3前		2				○		1					
	アメリカ・ビジネス研修Ⅰ	3前		2		○					1				
	アメリカ・ビジネス研修Ⅱ	3後		2				○			1				
	女性労働論	3後		2		○					1				
	市民社会とNGO・NPO	3前		2		○								兼1	
	ファイナンシャル・プランニングⅠ	2前		2		○								兼1	
	ファイナンシャル・プランニングⅡ	2後		2		○								兼1	
情報文化論	3後		2		○								兼1		
情報科学	生活情報論	3前		2		○				1					
	情報社会論	2後		2		○								兼1	
	情報産業論	3前		2		○								兼1	
	情報倫理	1後		2		○				1					
	情報数学	2前		2		○				1					
	情報科学とテクノロジー	3前		2			○			1					
	プログラミングⅠ（基礎）	2・3前		2			○			1					
	プログラミングⅡ（応用）	2・3後		2			○			1					

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目(C3)	ビジネス情報系 情報科学	情報と問題解決		2			○		1							
		データ解析	2前	2			○		1							
		オペレーティングシステム入門	1後	2			○		1							
		データベース概論	2・3後	2			○		1							
		システム設計	2・3後	2			○		1							
		ネットワーク概論	3前	2			○								兼1	
		ネットワーク演習	3後	2			○								兼1	
		コンピュータグラフィックス	2・3前	2			○		1							
		画像情報処理	2・3後	2			○		1							
		アニメーション作成	3前	2			○		1							
		Webデザイン演習	1後	2			○		1							
		情報社会の職業観・職業倫理	3後	2			○		1							
		情報総合演習(フィールドワーク含む)	3前	2				○		3						オムニバス
		ITパスポート演習	2前	2				○		3						オムニバス
	家政学分野 文化系 都市文化	都市文化入門	1後		2			○		1						
		外国史Ⅲ	2前		2			○		1						
		外国史Ⅳ	2後		2			○							兼1	
		芸術史研究	2前		2			○		1						
		映画史	2後		2			○							兼1	
		マンガ・アニメーション研究	2前		2			○							兼1	
		現代美術論	2後		2			○							兼1	
		芸術文化フィールドワーク	2前		4			○		1						
		アート・ワークショップ実習	2後		1				○						兼1	
		世界遺産学	2前		2			○		2	1				兼1	
		都市と文化財	2後		2			○		1						
		地域と食文化	2後		2			○		1						
		コミュニティとまちづくり	2前		2			○							兼1	
		文化プロデュース論	2前		2			○							兼1	
		アート・マネジメント実習	2後		1				○	1						
		社会教育演習Ⅰ	3前		1				○						兼1	
		社会教育演習Ⅱ	3後		1				○						兼1	
		コミュニティ論概説	2後		2				○	1						
		西洋建築史	2後		2				○						兼1	
		日本建築史(含住居史)	2前		2				○						兼1	
		観光概論	2前		2				○						兼1	
パフォーマンス・アーツ論		2前		2				○						兼1		
造形の基礎Ⅱ		2後		2				○						兼1		
演劇実技Ⅰ		2前		2				○						兼1		
演劇実技Ⅱ		2後		2				○						兼1		
演劇実技Ⅲ		3前		2				○						兼1		
演劇実技Ⅳ		3後		2				○						兼1		
造形の基礎Ⅰ	2前		2				○						兼1			
陶芸技術Ⅰ	2前		2				○						兼1			
陶芸技術Ⅱ	2後		2				○						兼1			
陶芸技術Ⅲ	3前		2				○						兼1			
陶芸技術Ⅳ	3後		2				○						兼1			
生活造形論(工芸とデザイン)	1後		2				○						兼1			
環境系 環境学	環境学概論	1後		2			○							兼1		
	環境科学概説	2前		2			○							兼1		
	植物バイオテクノロジー	2後		2			○							兼1		
	環境経済学	2後		2			○							兼1		
	環境保全学	2後		2			○							兼1		
自然地理学Ⅰ	1後		2			○							兼1			

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
家政学分野	環境系 環境学	自然地理学Ⅱ	2前	2		○									兼1	オムニバス
		環境教育概論	2前	2		○									兼1	
		比較環境政策	2前	2		○				1					兼1	
		比較環境史	2後	2		○					1				兼1	
		比較環境法	2前	2		○				1					兼1	
		地域資源管理論	2後	2		○				1					兼1	
		エコツアーリズム実習	2前	2					○						兼1	
		環境計画実習	2後	2					○						兼1	
		環境学基礎演習	2前	2				○							兼2	
		自然環境学実験	2前	2					○						兼1	
		環境科学演習	2後	2				○							兼1	
		環境フィールドワークⅠ	2前	2				○							兼1	
		環境フィールドワークⅡ	2後	2				○							兼1	
		動態地誌学	2前	2			○					1			兼1	
専門科目(C3)	総合社会	哲学Ⅰ	2前	2		○								兼1		
		基礎法学(含国際法)	2前	2		○				1				兼1		
		経済学Ⅰ(ミクロ・マクロ)	2前	2		○					1			兼1		
		日本史	1後	2		○						1		兼1		
	その他	平和学	人文地理学	2前	2		○									兼1
			平和と人権	2前	2		○									兼1
			平和学フィールドワークⅠ	2前	2			○			1					兼1
			平和学フィールドワークⅡ	2後	2			○			1					兼1
			平和学特別講義Ⅰ(戦争と人間)	2前	2		○									兼1
			平和学特別講義Ⅱ(核と人間)	2後	2		○									兼1
			平和学講読Ⅰ(Summer Cloud)	2前	2			○								兼1
			平和学講読Ⅱ(SADAKO)	2後	2			○								兼1
			Hiroshima StudiesⅠ(Abolition of Nuclear Weapons)	2前	2		○				1					兼1
			Hiroshima StudiesⅡ(Peace Studies)	2前	2			○			1					兼1
Hiroshima StudiesⅢ(Research)	2後	2			○							兼1				
セミナー		オープンセミナー	1前	2			○		6	3	2			兼1	集中	
		卒業研究プレセミナーⅠ	3前	2			○		11	3	5	1		兼1		
		卒業研究プレセミナーⅡ	3後	2			○		11	3	5	1		兼1		
		卒業研究セミナーⅠ	4前	2			○		11	3	5	1		兼1		
		卒業研究セミナーⅡ	4後	2			○		11	3	5	1		兼1		
		卒業論文	4後	4			○		11	3	5	1		兼1		
小計(289科目)		—	12	572	0	—	—	13	5	5	2	0	兼66	—		
関連科目Ⅰ(C4)	フードコーディネーター	食品学概論	2前	2		○								兼1		
		フードスペシャリスト論	2前	2		○								兼1		
		食品官能鑑別論	2前	2		○								兼1		
		食品官能鑑別演習	2後	1			○							兼1		
		食品学実習	2前	1					○					兼1		
		調理科学実習	3後	2					○					兼1		
		食品流通・消費論	2後	2		○								兼1		
		フードコーディネーター論	2前	2		○								兼1		
		フードコーディネーター実習	2後	1					○					兼1		
		医療秘書		医療秘書概論	1後	2		○								
医療秘書演習	3前			2			○							兼1		
医療事務論	2前			2		○								兼1		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
医療秘書	医療事務演習Ⅰ	2前		2			○								兼1
	医療事務演習Ⅱ	2後		2			○								兼1
	医療関係法規	2前		2		○									兼1
	医療情報処理Ⅰ	2前		2				○							兼1
	医療情報処理Ⅱ	2後		2				○							兼1
	手話	3前		2			○								兼1
関連科目Ⅰ(C4)	社会教育課題研究Ⅰ	2前		1				○		2	1				
	社会教育課題研究Ⅱ	2後		1				○		2	1				
	社会教育計画Ⅰ	2後		2		○									兼1
	社会教育計画Ⅱ	3前		2		○									兼1
	生涯学習論Ⅱ	2後		2		○									兼1
	情報メディアの活用	2前		2			○								兼1
	図書館情報技術論	2後		2		○			1						
	情報サービス論	3前		2		○									兼1
	英語科教育法Ⅰ	3前		2		○			1						
	英語科教育法Ⅱ	3後		2		○			1						
	英語科教育法Ⅲ	3前		2		○			1						
	英語科教育法Ⅳ	3後		2		○			1						
	外国語教授法(指導原理)	3前		2		○									兼1
	国語科教育法Ⅰ	3前		2		○			1						
	国語科教育法Ⅱ	3後		2		○			1						
	国語科教育法Ⅲ	3前		2		○			1						
	国語科教育法Ⅳ	3後		2		○			1						
	情報科教育法Ⅰ	3前		2		○									兼1
	情報科教育法Ⅱ	3後		2		○									兼1
	社会科教育法Ⅰ(社会:地歴分野)	2後		2		○									兼1
	社会科教育法Ⅱ(社会:公民分野)	2後		2		○									兼1
	社会科教育法Ⅲ(地歴)	3前		2		○									兼1
	社会科教育法Ⅳ(公民)	3前		2		○									兼1
	人間関係論Ⅰ(含家族関係学)	3前		2		○									兼1
	人間関係論Ⅱ	3後		2		○									兼1
	生活経営学(含家庭経営学・家庭経済学)	1前		2		○									兼1
	教育原理	2前・後		2		○									兼1
	教育心理学	2前・後		2		○									兼1
	教育社会学	3前		2		○									兼1
	教職実践演習(中・高)	4後		2			○								兼4
	教育史	3後		2		○									兼1
	学習心理学	3前		2		○									兼1
	教育と法	3後		2		○				1					
小計(51科目)		—	0	97	0		—		3	2	1	0	0	兼25	—
関連科目Ⅱ(C5)	日本語教育実習	4前			3			○	1						
	日本語教授法Ⅰ	3前			2	○			1						
	日本語教授法Ⅱ	3後			2	○			1						
	生涯学習論Ⅰ	2前		2		○									兼1
	生涯学習概論(司書)	2後		2		○									兼2
	図書館概論	1後		2		○				1					
	図書館制度・経営論	3前		2		○				1					
	図書館サービス概論	2前		2		○				1					
	情報サービス演習Ⅰ	3前		1			○								兼1
	情報サービス演習Ⅱ	3後		1			○								兼1

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
関連科目Ⅱ(C5)	図書館情報資源概論	2後			2	○			1						兼1
	情報資源組織論	2前			2	○									兼1
	情報資源組織演習Ⅰ	2前			1		○								兼1
	情報資源組織演習Ⅱ	2後			1		○								兼1
	児童サービス論	2前			2	○			1						
	図書・図書館史	3後			1	○			1						
	図書館サービス特論	3後			1	○			1						
	図書館基礎特論	3前			1	○									兼1
	図書館情報資源特論	3前			1	○									兼1
	学校経営と学校図書館	2～4前			2	○			1						
	学校図書館メディアの構成	2～4前			2	○			1						
	学習指導と学校図書館	2～4後			2	○			1						
	読書と豊かな人間性	2～4後			2	○			1						
	博物館教育論	1後			2	○									兼1
	博物館概論	2前			2	○			1						兼1
	博物館経営論	2後			2	○									兼1
	博物館資料論	2前			2	○									兼1
	博物館情報・メディア論	2前			2	○			1						
	博物館資料保存論	2後			2	○			1						
	博物館展示論	2後			2	○									兼2
	博物館実習Ⅰ	4前			1		○		1						兼2
	博物館実習Ⅱ	4後			2		○		1						集中
	博物館実習Ⅲ	4後			1		○		1						集中
	教職論	1後			2	○									兼2
	教育課程論	2前			2	○									兼1
	教育方法論(情報機器及び教材の活用を含む)	2前			2	○									兼1
	生徒・進路指導論(進路指導の理論及び方法を含む)	3前			2	○									兼1
	特別活動論	3後			2	○									兼1
	学校カウンセリング	3前			2	○									兼1
	道徳教育指導論	3後			2	○									兼1
	介護等体験Ⅰ	3通			1		○								兼3 オムニバス
	介護等体験Ⅱ(事前・事後指導)	3通			1	○									兼3 オムニバス
	教育実習Ⅰ	4通			2		○								兼3
教育実習Ⅱ	4通			2		○								兼3	
教育実習Ⅲ(事前・事後指導)	4通			1	○									兼4	
小計(45科目)		—	0	0	78	—	—	—	2	2	0	0	0	兼21	—
合計(518科目)		—	30	877	78	—	—	—	13	6	5	4	0	兼153	—
学位又は称号	学士(国際教養学)		学位又は学科の分野				文学関係・家政関係								
卒業要件及び履修方法							授業期間等								
共通基礎科目(C1)(18単位)を必修科目、共通教養科目(C2)(30単位)を選択必修科目として計48単位を履修し、専門科目(C3)の中からいずれかのメジャー科目群(40単位)を選択必修科目、卒業研究プレセミナーⅠⅡ、卒業研究セミナーⅠⅡおよび卒業論文(計12単位)を必修科目として履修し、残り24単位をC3、関連科目Ⅰ(C4)から選択科目として履修し、合計124単位以上を修得すること。(履修科目の登録上の上限:原則として22単位(半期))							1学年の学期区分		2学期						
							1学期の授業期間		15週						
							1時限の授業時間		90分						

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部国際英語学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目	キリスト教学入門Ⅰ	(1) 本学の土台であり柱であるキリスト教について、理解を深める。 (2) その「正典」である聖書について、理解を深める。 (3) 古代の文書である聖書が、なぜ、どのようにして、現代の私たちの生活に関わりを持つのか、さまざまな読み方を通じて、理解を深める。 (4) イエス・キリストの教えと行いから、「クリティカル・シンキング」を学ぶ。 (5) 一方で、人の”いのち”を活かし、尊厳・自由・平等をもたらす宗教が、他方ではなぜ人の”いのち”を奪い、尊厳・自由・平等を脅かすのかを、ともに考える。	
	キリスト教学入門Ⅱ	(1) 本学の土台であり柱であるキリスト教について、理解を深める。 (2) 前期「キリスト教学入門Ⅰ」に続いて、古代の文書である聖書が、なぜ、どのようにして、現代の私たちの生活に関わりを持つのか、さまざまな読み方を通じて、理解を深める。 (3) 人間の根本にある「宗教性」（霊性・スピリチュアリティ・帰依心）に気づき、「祈り」について学ぶことで、心と感性の豊かさを育てるきっかけとする。 (4) キリスト教的歴史観・世界観における「創造」と「終末」について学び、「いま・ここ」に生きる「意味」を各々が喜びをもって見出すきっかけとする。	
	初年次セミナー	新入生が大学での学びを進めていく上で必要とされる学びの技法、すなわち聴くこと、読むこと、書くこと、整理すること、まとめること、表現すること等を修得することを目的とする。とくに、授業の聴き方・書き方・書くことをはじめとする技法、情報の整理の仕方、まとめ方について学ぶ。さらに、整理した情報等をまとめ、プレゼンテーションする力を養う。また、情報を得る場としての図書館の利用・活用の仕方について実地体験を行う。	
	日本語表現技法	日本語で教育を受けてきた人々でさえ、日本語の使い方を誤っている場合も多い。漢字を正しく書くことだけでなく、その意味を理解し、熟語や四字熟語、慣用表現などを日常的に使用することに慣れるため、もう一度自分の日本語をみつめなおす。敬語などの基本的な表現を身に付け、手紙やビジネス文書など社会で必要とされている文書の意味を理解し、書く作業を通して、相手の理解を促すことを意識した表現方法を学ぶことを目的とする。	
	情報リテラシーⅠ	「情報活用能力」の中でも「情報活用の実践力」を学習する。特に文書作成、表計算（表の作成、目的に応じた適切なグラフの作成、関数処理、表の並べ替えや抽出操作）、プレゼンテーションの資料作成など基本的な情報スキルを学修する。さらに、大学でのさまざまな科目で出されるレポートの作成、レジメの作成および4年次の卒業論文に必要な実践的な情報活用の力、さらにビジネス文書といったビジネスの場でも役立つことのできる実践力に繋がることを目的とする。	

基礎科目

<p>情報リテラシーⅡ</p>	<p>コンピュータの基本的なハードウェアの構造（制御装置、演算装置、記憶装置、入力装置、出力装置）、個人情報保護や著作権を考慮した情報の扱い方、アプリケーションソフトウェアの種類や用途などを理解する。さらにその上で、使うべきソフトウェアを自分で判断して選択し、またこれらを利用して「課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力」の育成を目的とする。</p>	
<p>基礎英語Ⅰ</p>	<p>この授業は基本的な英会話のスキルを身につけることを目標とする。リスニングやスピーキングとともにリーディングやライティングの基礎力を養うことはもちろんであるが、最も重要な点はコミュニケーションを図る力を養うことにある。授業では、さまざまな状況における会話を想定しながら、その状況に関連する語彙も習得し、コミュニケーション能力を高めていく。また、『ミニマルエッセンシャルズ1』（ME1）も活用していくこととする。</p>	
<p>基礎英語Ⅱ</p>	<p>この授業は基礎英語Ⅰをもとにして、さらに英会話のスキルを身につけることを目標とする。リスニングやスピーキングとともにリーディングやライティング力をさらに高め、自ら発信でき、他者をより深く理解できるコミュニケーション力を高めていく。授業では、さまざまな状況における会話を想定しながら、その状況に関連する語彙も習得し、表現力を高めていく。また、『ミニマルエッセンシャルズ1』（ME1）も活用していくこととする。</p>	
<p>基礎英語Ⅲ</p>	<p>この授業は基礎英語Ⅰ・Ⅱをもとにして、中級レベルのライティングや英会話のスキルを養成していくことを目標とする。学生の強みや弱みを理解し、学習への動機づけや支援を行いながら、その目標に向かっていくが、基礎英語Ⅰ・Ⅱと同様に、授業中の活動や実践を通して最大限の成果が生まれていくようにする。また、より自然なライティングやスピーキングを目指し、引き続き、『ミニマルエッセンシャルズ1』（ME1）も活用していく。</p>	
<p>基礎英語Ⅳ</p>	<p>この授業は基礎英語Ⅰ～Ⅲをもとにして、上級レベルのライティングや英会話のスキルを養成していくことを目標とする。学生の強みや弱みを理解し、学習への動機づけや支援を行いながら、その目標に向かっていくが、基礎英語Ⅰ～Ⅲと同様に、授業中の活動や実践を通して最大限の成果が生まれていくようにする。また、より自然なライティングやスピーキングを目指し、引き続き、『ミニマルエッセンシャルズ1』（ME1）も活用していく。</p>	
<p>基礎日本語Ⅰ</p>	<p>本授業は、日本語を初めて学習する学生を対象とし、非常に簡単な単語とフレーズを理解、使用することができるようになることを目的としている。主に「自分の名前、国の名前、基礎的な単語を平仮名、片仮名でかける」「日常よく使うあいさつなどの定型表現を聞きとったり、使用したりできる」「いくらですか」「どこですか」といった基本的な質問文を聞き取り、簡単な文で答えることができる」「初級前期レベルの文型と語彙を用いた文を読める」といったことを具体的な到達目標としている。</p>	

基礎科目	基礎日本語Ⅱ	本授業は、初級前期レベルの学生を対象とし、ゆっくりであれば簡単な日常的やりとりができるようになることを目的としている。主に「日常的な場面で自分に対してゆっくり話される簡単な質問であれば、内容をほぼ理解し、応答することができる」「初級後期レベルの文型と語彙を用いた文を読める」「手書きでの簡単な自己紹介文や伝言メモを書くことができる」「パソコンで簡単な日本語文を入力できる」といったことを具体的な到達目標としている。		
	基礎日本語Ⅲ	本授業は、初級後期レベルの学生を対象とし、より自然な日本語での日常的やりとりができるようになることを目的としている。主に「日常的な場面で自分に対して話される発話だけでなく、他者同士の日常的な会話についても、ある程度内容を理解できる」「中級前期レベルの文型と語彙を用いた文を読める」「手書きやパソコンで、短くて簡単な問い合わせ文やお礼文を書くことができる」「簡単な敬語表現を使うことができる」といったことを具体的な到達目標としている。		
	基礎日本語Ⅳ	本授業では、中級前期レベルの学生を対象とし、中級中期の文型、語彙を使った様々な課題を実行できることを目的としている。主に「日常的な対面のやりとりだけでなく、電話やメールなどの非対面のやりとりも自分の言語力に対する相手の配慮のもとなら比較的スムーズにできるようになること」「簡単な日本語を使った短いプレゼンを聞きとり、これに対して簡単なコメントを述べたり、簡単な日本語を使った短いプレゼンができるようになること」を具体的な到達目標としている。		
ライフキャリア科目	必修	キャリアプランニング	この授業は、広島女学院大学の一員として大学の建学の精神・歴史・教育理念についての認識を深め、また大学の教育目標やカリキュラムを十分に理解したうえで、大学においていかに学ぶかを考え、将来のキャリアプランを形成することを目的とする。特に、学部の教育理念を理解し、責任感、倫理観、創造性、コミュニケーション力、社会貢献への意思等を形成する基礎を身につけ、ぶれない個の形成を図る。	共同
		女性とライフキャリア	ライフキャリアの観点から、女性の人生について考える。女性の生涯における様々なライフイベントを想定し、女性の置かれた現状における問題点を明らかにする。さらに、この困難な状況の中でいかに対応すべきか、また、地球市民として社会をどのように変革すべきかを考える。自分のキャリア・アンカーについて考える機会や、身近にいる先輩女性、将来目指したい職業についている女性に対するキャリア・インタビューの実施などの、アクティブ・ラーニングを授業に取り入れ、自己を振り返り、社会貢献できる将来像を描く。	共同

ライフキャリア科目 自己との関係科目群	女性史	<p>過去から現在に至るまでの女性の歴史を概観することで、女性としての自己の生き方を見つめる機会とする。また、国内外の女性の個人史を取り上げ、日本や世界の国々における女性の多様な生き方について学び、今後の自らの生き方を考える。さらに、身近な女性にインタビューを試みて、個人史を書いたり、自分史を書いてみることで、女性としての自分を歴史の中に位置づけることができる。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (35 福田道宏／5回) 日本を中心に、歴史を紐解きながら女性の生き方やその変遷を理解する。また、自分史の作成を通し、女性としての自分を歴史の中に位置づける。 (33 永野晴康／5回) ヨーロッパを中心に、歴史を紐解きながら、女性の生き方やその変遷を理解する。 (42 伊藤千尋／5回) アフリカを中心に、歴史を紐解きながら、女性の生き方やその変遷を理解する。</p>	オムニバス方式
	女性とライフスタイル	<p>衣服、住居、インテリア・建築、食生活、家庭、家族、就職、子育て等、女性を取り巻く生活環境の変化と、それに伴う女性たちのライフスタイルや価値観、生活習慣等の変遷を辿る。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (32 小林文香／3回) 女性のライフコースの変遷を事例や統計データをもとに学び、これからの女性のライフデザインについて考察する。 (21 三木幹子／2回) スターやアイドル、若者の意識調査などの事例をもとに、理想の女性像・男性像の変遷、日本女性のジェンダー意識、恋愛観にみる美意識の変化を考察する。 (39 檜崎久美子／2回) 女性の暮らしを「被服」というキーワードで読み解く。歴史的知識を持つことで、現代の衣生活との比較・分析力や、未来の衣生活への発想力を養う。 (36 熊田亜矢子／2回) ファッションを学ぶ上で重要な要素である被服材料の観点から、繊維の性質と管理について知識を養い、日常生活での活用法について考える。 (11 小野育雄／2回) 社会学者、建築家の言説をもとに、生活空間と女性（男性）との関係について考察する。 (17 細田みぎわ／2回) 近代以降の女性建築家（日本／海外）の作品をもとに、女性の暮らしを「すまい」というキーワードで読み解く。 (31 真木利江／2回) 子育て、介護・終末の空間について建築作品を通して学び、今後の福祉空間について考える。</p>	オムニバス方式

<p>Women in Christianity</p>	<p>In this course, we will examine the representation of women in the Bible, Christian literature and tradition from the critical viewpoint concerning gender issues. We will explore the various Christian views which have at times liberated women and at times oppressed them. For example, we can find some evidence and trace of female leaders in the Bible, though we at the same time find far more male-centric cases and expressions in the Biblical stories and Christian teachings. And throughout ages, churches have been shaped by the stereotypical gender models of women's life. However, those gender norms in Christianity have been challenged and transformed especially by the questioning of modern feminist theology. In this course, we will deal with those issues in the themes of: Women in the Bible; Women in the History of Christianity; Toward Gender Inclusiveness - the attempt of contemporary theology.</p> <p>この授業では、聖書、キリスト教文献および伝統的教義を、ジェンダーの視点から批判的に考察する。キリスト教の歴史においては、様々な女性に対する見解が、あるときには女性を解放し、またあるときには抑圧してきた。たとえば、聖書の中には女性のリーダーシップに関する証言や痕跡をいくつも見出すことができるが、圧倒的多数の場面や表現は男性中心的である。また過去には長い間、キリスト教は女性の生き方を理想化したステレオタイプに閉じ込めてきた。しかし、今日では特に現代的なフェミニスト神学よりの問いかけをきっかけに、こういったキリスト教的規範的女性像は変革を迫られている。</p> <p>この授業では、これらの問題を主に以下のことがらにおいて扱う。</p> <ul style="list-style-type: none"> — 聖書の中の女性 — キリスト教史における女性 — 性差別の無い社会に向けて 現代キリスト教神学の試み 	
<p>女性文学の世界 I (近現代編)</p>	<p>現代社会において、女性作家の活躍はめざましいものがある。本講義では、有吉佐和子、三浦綾子の2人の作家の代表的作品を取り上げる。女性作家の視点で人間存在や時代を見ればどのように映るのか、また、日本近現代文学史において「女性文学」はどのような意義をもつのかを、特に昭和30年代以降に焦点をおいて考察していきたい。男性作家とは異なった視野で形象した作品の多様性や独自性に着目することによって、受講生にも幅広い視野を得ることを期待する。</p>	
<p>キリスト教と女性</p>	<p>授業の目的は二点。男女を二分し、主に男性の視点から成り立ってきた社会や学問体系を、女性の視点から捉えなおす「女性学」にたいしてキリスト教が果たしてきた貢献について学ぶこと、そして、男性優位・父権主義的価値観から生じ、それを保持・強化してきたキリスト教に対し、女性学からの問い直しを果たした貢献について学ぶこと、である。そのようにして受講者各位が健全な自己像やキャリア観を形成することに寄与するとともに、新しい時代を創るひとりとなるためのちからを養う。</p> <p>より具体的には、聖書が登場人物としての女性をどのように描いているかという積義的アプローチ、聖女／魔女から現代のDVやLGBT差別に至るまでのキリスト教と性差別との関係についての宗教社会的分析などを座学およびディスカッションを通じて俯瞰、考察する。</p>	

自己との関係科目群	<p>Women & the World I</p>	<p>Throughout our history, women have played significant roles in a wide number of disciplines and walks of life. This course will introduce students to a variety of pioneering women throughout history that have fought against and dealt with injustice and prejudice. It will use a mixture of theory and historical cases to show how women have shaped the world in areas such as politics, art, music, the economy, science, the environment and cinema. Essentially, it will inspire them to play an active role in their own futures.</p> <p>この授業の目的は、女性の権利やキャリアを拡大するために重要な役割をはたし、不正と差別に対して戦った歴史上の先駆的な女性たちについて学ぶことである。授業では、どのように女性が世界を構築していったかということを明らかにしていくため、理論と歴史的資料を用いて進めていく。授業内で扱う分野としては政治、芸術、音楽、経済、科学、環境、そして映画などが挙げられる。この授業を通して、学生たちは自分たちの将来のために積極的な活動を行うことが期待される。</p>	
ライフキャリア科目	<p>対人関係の心理</p>	<p>社会に生きる私たちは、対人関係を避けて通ることはできない。また、人のメンタルヘルスで、最も影響を与えるのは対人関係のあり方である。この講義では、対人関係の心理について、臨床心理学、被服心理学、色彩情報論などの専門分野から、対人関係の心理の魅力にアプローチする。対人関係のあり方に影響を与える、話し方、動作、装い、色彩などについて、簡単な実験などを取り入れて、明らかにする。この授業を通して、他者と自己との関係について振り返り、他者も自己も尊重できる対人関係の有り方について検討する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (16 山下京子/5回) 臨床心理学分野からのアプローチを講義する。 (21 三木幹子/5回) 被服心理学の分野からのアプローチを講義する。 (18 西口理恵子/5回) 色彩情報論の分野からのアプローチを講義する。</p>	オムニバス方式
他者との関係科目群	<p>キリスト教と教育</p>	<p>本授業ではキリスト教主義教育を題材にとって、教育とは何かについて考察する。また、キリスト教の子ども観が教育史に果たしてきた役割について考察する。教育者や、子どもにかかわるキャリアを考えている学生、なかでも教職課程・初等教職課程・保育士課程に学ぶ学生、とくにキリスト教主義の園や学校への就職を考えている学生に必須の視点を提供する。受講者個々がキリスト教教育の特徴を学ぶことを通して、自らの教育観を涵養することを目的とする。より具体的には、聖書の子ども観、キリスト教の歴史における子ども観の変遷、幼児教育の歴史とキリスト教、生涯教育とキリスト教、キリスト教主義教育現場についてのケーススタディなどを、座学およびディスカッションを通じて学ぶ。</p>	

他者との関係科目群 ライフキャリア科目	Intercultural Communication I	<p>In this course, students will learn about and practice different communication strategies, such as stating opinions, making requests, and conducting negotiations. These strategies will allow students to work in a diverse, globalized workplace in their future careers. Topics introduced in the course will make students consider the implications for communication between differing cultures. By the end of this class, students will begin to understand how their communication methods can create misunderstandings between different groups of people, and how to begin to overcome this challenge.</p> <p>この授業の目的は学生がグローバルな職場において使用する必要がある、意見を述べる、要求をする、交渉をするといった、さまざまなコミュニケーションの方法を学ぶことである。授業を通じ、学生は将来の自分自身のキャリアのため、異なる文化におけるコミュニケーションの複雑さを理解することが求められる。授業を通じて、学生は自分たちのコミュニケーション技術が異なるグループに対してどのような誤解を与える可能性があり、それをどのように克服できるかを学習する。</p>	
	暮らしを営む食と健康	<p>この授業は、人が暮らしを営む中で必要な食と健康について取り上げ、現代が抱える問題を把握し、多様化するライフスタイルや、ライフステージに合わせた食生活と健康管理の在り方について理解することを目的とする。さらに、生涯にわたる食と健康の意義を考察し、自身のみならず周囲の人や地域社会との連携を図り、ライフキャリア構築のため幅広い視野を持った活動が実践できるようにする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (20 石長孝二郎/3回) 現代が抱える食と健康に関する問題について学び、自身や周囲との関わりを考察する。 (30 佐藤努/4回) 食と健康の関係について、食品の機能と栄養の特性から学ぶ。 (43 野村知未/4回) 食とライフスタイルの関わりを学び、健康管理の考え方を理解する。 (40 妻木陽子/4回) 各ライフステージの特徴を知り、ライフステージに合わせた食生活の在り方を学ぶ。</p>	オムニバス方式
	子育てとライフキャリア	<p>現代においては、「就活」、「婚活」、「妊活」、「保活」という言葉に象徴されるように、就職し、結婚し、子どもを産み育てるといふ営みは個人の努力なしには手に入れられないものとして観念されている。一方で、結婚や家族、親子のあり方はますます多様化しており、経済の不安定さからライフキャリアを描くことが難しくなりつつある。</p> <p>本授業では、現代の女性の労働や子育て、ワークライフバランスについて学び、学生が主体的に自らのライフキャリアと子育てについて考える態度を涵養する。</p>	
社会との関係科目群	World Literature I	<p>This course will offer a brief introduction of some major American, British, European and Asian writers. Students will read short stories and also write a report about these works. They are supposed to present their findings in every lesson of the class. We will read the works of Franz Kafka, Gabriel Garcia Marquez, Bernard Malamud, Yasunari Kawabata, Guillaume Apollinaire, Edgar Allan Poe, Anton Pavlovich Chekhov, Italo Calvino, Jhumpa Lahiri.</p> <p>この授業では、アメリカ、イギリス、ヨーロッパ、アジアの主要な作家について学ぶ。学生は短編小説を読み、これらの作品についてレポートを執筆する。すべての授業において、作品についての解釈や発見を発表することが求められる。授業で取り扱う作家はフランツ・カフカ、ガルシア・マルケス、バーナード・マラマッド、川端康成、ギョーム・アポリネール、エドガー・アラン・ポー、チャーホフ、イタロ・カルヴィーノ、ジュンパ・ラヒリなどである。</p>	

<p>キリスト教と社会</p>	<p>現代社会における諸課題について、キリスト教の視点からどのように答えるのかを、受講者とともに考察したい。とくに、生命倫理、環境倫理、情報倫理、平和、差別などの諸課題について、キリスト教がもたらした光と影の両面を見据えながら、受講者が社会における課題と自己の関係を見つめるにあたって、それぞれの拠って立つ視点を確立するきっかけを模索する。</p> <p>さらに、女性と社会との関わりについて、例えば、我が国における、女性が活躍する社会の実現に向けた取組などもとりあげる。具体的には、「男女雇用機会均等法」「育児休業法」「育児・介護休業法」「次世代育成支援対策推進法」「改正育児・介護休業法」「女性活躍推進法」のように、一連の女性の活躍推進に向けた法律の整備は、女性の社会進出や、仕事と家庭の両立を支援し、男女共同参画社会の実現を目指している。しかしながら、管理職の女性登用に関する国際比較では、我が国の女性管理職の占める割合は低く、課題となっている。こうした点についても、キリスト教の視点から考察を加える。</p>	
<p>ビジネス実務総論 I</p>	<p>ICT部門が急速な発展を遂げているが、その対応に追われながらも進展するビジネス社会にあって、ビジネスワーカー自身のあり方も大きく変わってきている。キャリアだけを視野に入れるのではなく、個として生きる視点を組み込む必要性をビジネスワーカーが意識しはじめた。グローバル化された社会において、ビジネスワーカーに必要なとされるビジネス実務とは何かを学ぶとともに、変化するビジネス環境の現状と課題について考察し、自らの職業観を確立することを目的とする。</p>	
<p>ビジネス実務総論 II</p>	<p>複雑化・高速化・高度化する多元的な現代社会において、あらゆる分野で適材適所の人財が求められている。経済が成熟し、モノがあふれている社会では、消費者の求める商品の質は高くなり、商品そのものの魅力だけではなく、消費者の「心」や「気持ち」を動かすようなホスピタリティあふれる販売方法の必要性も高まっている。新しい概念としての「ホスピタリティ・マネジメント」の導入は、医療・福祉・介護・生活文化・地域・金融・教育・旅行・外食・観光等々で大きな成果を挙げている。ホスピタリティを理解し、ビジネスで活かすことを目的とする。</p>	
<p>ヒロシマと平和</p>	<p>広島は「ヒロシマ」と記されるとき、「社会化された被爆体験」（歴史学者・宇吹暁による定義）の記号となる。また、「広島」とあえて表記するとき、原爆投下の背景となった「軍都」の歴史を象徴する記号となりうる。この授業では、広島／ヒロシマ／広島について、原爆投下に至る歴史、被爆の実相、戦後の復興の歴史、および核の「平和」利用との関わりについて、座学、フィールドワーク、ディスカッションを通じて総合的に学ぶことを通じて、受講者がそれぞれの平和観を確立することを目的とする。本授業は8月6日を中心とする夏期集中講義として実施される。</p> <p>より具体的には、この授業では、スクーリング、研修、事前および事後レポートを通じて総合的に下記の目標を達成する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 座学とフィールドワークから、広島への原爆投下に至る歴史的経緯、被爆の実相、広島戦後のあゆみについての知識を得、他者に伝えることができる。 2) 「平和」とは何かという課題について自らの考えを持ち、発信することができる。 3) ディスカッションを通じ、自らの考えを整理し伝えることの難しさや楽しさを経験するとともに、他者の意見に対して共感したり建設的に批判したりする力を身につける。 	<p>集中</p>

社会との関係科目群 ライフキャリア科目	ボランティア活動	<p>現代社会において、ボランティア活動を必要とする領域が拡大されてきている。本講義では、社会の中で展開される様々なボランティア活動を通して、ボランティアとは何かということを理解し、社会に参加する自分から、「参画」しながら社会を創り出していく自分へと重心を移動するために、講義とワークショップを通して、ボランティアのあり方について考え、現代社会のニーズに即応し、行動をとることのできる人材を育成する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (25 田頭紀和/4回)</p> <p>ボランティア活動の概要を説明するとともに、様々なタイプの事例に基づいてボランティア活動参加者のマナー、心構え等を伝える。 (42 伊藤千尋/4回)</p> <p>農村部におけるボランティア活動について、概要を説明するとともに、実践的指導を行う。 (33 永野晴康/4回)</p> <p>都市部におけるボランティア活動について、概要を説明するとともに、活動の実践的指導を行う。 (35 福田道宏/3回)</p> <p>ボランティア活動のワークショップを総括し、問題点、改善点を議論させるとともに、今後の地域貢献活動を展開させるために知識を伝達する。</p>	オムニバス方式
	インターンシップ	<p>ビジネス活動とそこで働く人びとのビジネスワークについて、「インターンシップ（就業体験実習）」を通じて理解を深め、自らの職業意識の形成を図るとともに、職業適性、職業生活設計、職業選択について考える契機とする。事前学習として、ビジネス組織についての理解、ビジネス・コミュニケーションの基本について理解を深め、ビジネス・ワーカーとして求められる実務能力開発やキャリア・プランニングを探求する契機とする。</p> <p>受講生は、夏期休業中に1～3週間程度の期間で、本学独自の研修先での「インターンシップ」に参加すること、ならびに事後学習としての「研修報告」（研修レポート提出と報告会参加・発表）が義務づけられる。</p>	
	Human Rights in the World	<p>This course will introduce the history of human rights, and examine human rights issues in the modern world. Students will study about the history of the formation of the 'Human Rights' concept, and about the background and ongoing process concerning some human right issues (i.e. Child labor, Human Trafficking, Peace and Justice, Discrimination, etc.). Students will be challenged to think critically about global and local issues from the viewpoint of human rights and develop the sense of a human rights advocate through studies and discussions in this course.</p> <p>この授業では、世界における人権の歴史について学ぶとともに、現代社会における人権の問題について考察する。受講者は人権概念形成の歴史について学び、また、実際の人権に関する現代的諸課題（児童労働、人身売買、正義と平和、差別、など）の背景と現状についても学ぶ。受講者はこの授業での学びと議論を通じて、現代社会の諸課題に対して人権の観点から批判的に考察するよう問いかけを受け、人権擁護の感性を発達させることとなる。</p>	

社会との関係科目群	Culture Studies I	<p>backdrop of rapid globalization that has affected communication styles and intercultural relations. It will examine key issues in culture debates and explores how the various concepts of culture can be applied in everyday life. Specifically, it will begin to introduce students to how society is impacted over time by issues such as ideology, class structure, ethnicity, sexual orientation, gender, and age. Students will thereby develop skills for cultural exchange in the contemporary world while improving their reading, writing, and critical thinking skills.</p> <p>この授業では、コミュニケーションの様式や異文化間交流に影響を与えてきた、現在もお急速に進むグローバル化の背景に関する文化論を学ぶ。授業ではさまざまな文化的な違いが日常生活にどのように反映されるのかについて考察する。特に学生は授業を通して、社会がどれほどイデオロギーや階級制度、民族、性的役割やジェンダー、年齢によって影響を受けているのかを学習する。学生は現在社会における文化的差異を理解することができるようになると同時に、リーディング、ライティング、論理的思考の技術を向上させることができる。</p>	
	ライフキャリア特別講義 I	<p>現在の社会情勢を見据え、学生に学んでほしいテーマを設定し、実社会で活躍する先達を講師に迎え、話題を提供する。あるいは、専門の学びと連携しながら学生に学んでほしいテーマを設定し、専門家から話題を提供する。この授業を通して、ライフキャリア形成に向けて、社会の中での自己の立場を理解し、そのためにどのような学びを積み重ねるべきか考えるとともに、自身の今後のライフキャリア形成の構築方法を考えるきっかけとすることを目的とする。</p>	集中
ライフキャリア科目 その他科目群	ライフキャリア特別講義 II	<p>現在の社会情勢を見据え、学生に学んでほしいテーマを設定し、実社会で活躍する先達（主に女性）を講師に迎え、話題を提供する。あるいは、専門の学びと連携しながら学生に学んでほしいテーマを設定し、専門家から話題を提供する。この授業を通して、社会に求められる人材とは何か、女性として求められる力は何かを考えると同時に、自身の専門性を高める方法をイメージしながら、専門性を踏まえたライフキャリア形成の基盤を構築することを目的とする。</p>	集中
	ライフキャリア特別セミナー I	<p>社会情勢・環境を理解し、専門の学びに基づくライフキャリア形成に向けて、学生に学んでほしいテーマを設定し、セミナー形式で授業を展開する。具体的には、学生自ら専門的な課題を見出し、自身の専門的考察力や実践力を用いて課題解決を図ってゆく。この授業を通して、自身の専門性をどのように生かすべきか考え、そのためにどのような学びを重ねていくかを想像し、そこから自身のライフキャリア形成を考えることを目的としている。</p>	集中
	ライフキャリア特別セミナー II	<p>社会情勢・環境を理解し、専門の学びに基づく女性としてのライフキャリア形成に向けて、学生に学んでほしいテーマを設定し、セミナー形式で授業を展開する。具体的には、学生がこれまでに培った教養や専門性を活かしながら、自ら専門的な課題を見出し、女性の視点から専門的な考察を行い、課題解決を図ってゆく。この授業を通して、女性として専門性をどのように生かすべきか考え、そのためにどのような学びを重ねていくかを想像し、自身のライフキャリア形成の基盤を作ることを目的としている。</p>	集中

ライフキャリア科目 その他科目群	オープンセミナーⅠ	<p>語学、文学、教育、ファッション、インテリア、デザイン、環境などの各専門分野について、基礎的、包括的な講義や演習の中から、それぞれの専門を学ぶ意味を知り、専門の学びへの理解を深める。語学・文学分野では「英語を通じたアメリカ・イギリス文化の理解」、「方言を通じた日本の理解」を、教育分野では「遊びを通じた子どもの発達過程の理解」を、ファッション・インテリア・デザイン分野では「生活空間を構成するインテリアの理解」、「設計の基本的な方法への理解」、「コーディネートやアレンジの基本についての理解」、環境分野では「地理・歴史・自然・食を通じた地域の文化への理解」などを分野に分かれて学ぶ。</p>	集中
	オープンセミナーⅡ	<p>語学、文学、教育、ファッション、インテリア、デザイン、環境などの各専門分野について、基礎的、包括的な講義や演習を通して、その実際に触れることにより、これから学ぶ専門分野への理解、実践的な学びへの理解につなげることを目的とする。具体的には、語学・文学分野では語学を通じた文化の理解等を、教育分野では幼児・児童・生徒の発育過程の理解等を、ファッション・インテリア・デザイン分野ではそれぞれの基本的概念や方法論の理解等を、環境分野では地域による環境や文化の理解等を学ぶ。</p>	集中
	スポーツ科学Ⅰ	<p>スポーツ科学Ⅰでは、スポーツを歴史的、社会的、生理的、心理的な視点から理論的に学習する。その内容として、高校までの学習内容を発展させながら、人間の身体と健康について学ぶ。また、部活やサークルでスポーツを行う学生が少なくないことから、特にスポーツが心身にもたらす影響と効果的なトレーニングについて学習し、安全にスポーツを行う方法について学ぶ。さらに、発達段階に応じた身体活動について必要な知識理解を深めていくことで、適切な判断と行動を身につけ、生涯を通じてスポーツによりよく親しめるようになる。</p>	講義 10時間 実習 20時間
	スポーツ科学Ⅱ	<p>スポーツ科学Ⅱでは、スポーツ科学Ⅰで学んだ理論を生かし、実践を通して生涯に渡り自立的な運動者となることを目指す。その内容として、バレーボール・バスケットボール・卓球・バドミントン・ニュースポーツ等、各種目のルールや技術獲得の方法を理解し、工夫された練習を通して技術を獲得する。また、技術獲得の過程で、仲間と協力して教えあいや作戦を立てることによりスポーツの楽しさや爽快感を経験する。さらに、自分の体力を知り、体力を高める生活を心がける。</p>	
	日本国憲法	<p>人権保障の砦としての憲法の役割を理解してもらえらる講義としたい。日本国憲法の規定する国民主権の内容、伝統的な基本的人権の種類と内容、新しい人権をめぐる議論について歴史的な経緯を踏まえて講義する。基本的人権の保障に関する主要な判例を取り上げる。日本国憲法の制度化する国家の統治構造（国会・内閣・裁判所）を解説する（その際、国会法、内閣法、裁判所法、国家行政組織法等にも言及する）。地方自治・地方分権に関する現在の我が国の動向について講義する。</p>	

<p>外国語（英語Ⅰ）</p>	<p>One aim of this course is to prepare learners for the TOEIC test. The first semester will familiarise students with the structure and requirements of each test part, and focus on vocabulary development – two fundamentals for TOEIC success. Lessons will take a three-pronged approach: communicative tasks, specific TOEIC focus, and extensive reading. Classroom tasks will relate to real world activities, focusing on all four skills and prioritising meaning and outcome. These tasks will engage with the specific language and skills found in the TOEIC test. An extensive reading programme will complement classroom study, providing students with the self study skills to develop their vocabulary range.</p> <p>この授業の目的の一つはTOEIC対策である。各パートの形式や内容になじみ、語彙を増やすことにあり、コミュニケーション能力、TOEICの問題、幅広いリーディングなど3点を中心に進めていく。また授業中は日常生活のテーマを題材として、英語の4技能を中心にその内容や成果を重視することとし、TOEICに見られる英語や技能を身につける。また多読を行うことで授業を補い、学生自ら語彙能力を高めていくものである。</p>	
<p>外国語（英語Ⅱ）</p>	<p>The second semester looks at some useful TOEIC test-taking strategies and continues vocabulary development. As in the previous semester, lessons will take a three-pronged approach: communicative tasks, specific TOEIC focus, and extensive reading. Classroom tasks will relate to real world activities, focusing on all four skills and prioritising meaning and outcome. These tasks will engage with the specific language and skills found in the TOEIC test. An extensive reading programme will complement classroom study, providing students with the self study skills to develop their vocabulary range.</p> <p>英語ⅡではTOEIC対策としての方策に触れ、引き続き語彙能力を高めていく。また、外国語（英語Ⅰ）と同様に、コミュニケーション能力、TOEICの問題、幅広いリーディングなど3点を中心に進めていく。授業中は日常生活のテーマを題材として、英語の4技能を中心にその内容や成果を重視することとし、TOEICに見られる英語や技能を身につける。また多読を行うことで授業を補い、学生自ら語彙能力を高めていくものである。</p>	
<p>外国語（英語Ⅲ）</p>	<p>This course is designed to improve the overall English language abilities of the students enrolled. While we will primarily focus on speaking and listening skills, we will also work on reading and writing skills. Students in this class will improve their skills as they tackle controversial topics on a wide range of important subjects. The improvement of these skills is expected to be achieved through deep understanding and active interaction about the topics provided.</p> <p>この授業は総合的な英語力を伸ばすことを目的とする。スピーキングやリスニングを中心に、リーディングやライティングの活動も行う。学生は幅広い分野において大切なトピックに触れながら自らのスキルを高めていく。ただし本授業ではトピックへの深い理解力や発信力の養成に主眼を置き、その中で必要なスキルを高めていくというアプローチをとる。</p>	

<p>外国語（英語Ⅳ）</p>	<p>This course continues the aim of improving the overall English language abilities of the students enrolled. In this one semester course we confront important problems that the world faces today. We will work to develop opinions on world issues, and to be able to communicate our opinions to others effectively. To that end, we will also be focusing on developing critical thinking skills. この授業ではさらに英語力を高めていくことを目的とする。本授業では今日世界が抱えている重要な問題を探り、その問題に対する様々な見解を深め、自分の見解を効果的に伝えることができるように進めていく。そのためには批判的思考能力も身につけていきたい。</p>	
<p>外国語（フランス語Ⅰ）</p>	<p>フランス文化とフランス人に親しみながら、フランス語の文法と読解、ヒアリング、簡単な会話の基本的な力を身につける。まずは、フランスに親しむためにフランスについての常識的知識や地理への理解を深め異文化理解を図る。その上で、フランス語文法の基礎を理解し、発音の原則を身につけ、基本的な挨拶表現、数の数え方、人物や物についての表現法を習得し、フランス語で簡単なコミュニケーションができるよう、基礎的な学びを行う。</p>	
<p>外国語（フランス語Ⅱ）</p>	<p>外国語（フランス語Ⅰ）で身につけた基礎学習をさらに充実させ、所有形容詞から英語とは違うフランス語の特徴を理解し、形容詞の比較級を使いこなせるようにする。また、基本的な日常行為をフランス語で表現でき、簡単な質問や記述ができ、身近な話題を表現できるようになることを目的とした学びを行う。さらに、少し複雑な構文の運用も身につけ、実用フランス語検定5級、4級に挑戦できる力の修得を目標とし、フランス語についてより多くのことを自ら学ぶための力を培う。</p>	
<p>外国語（韓国語Ⅰ）</p>	<p>この授業は初めて韓国語を学ぶ人のための入門クラスで、韓国語の基礎的コミュニケーション能力を獲得することをその目的とする。まず、人工的な言語である韓国語の創出起源を理解し、表音文字である各文字の発音と表記の熟達に努める。とくに、文字の発音に重点を置きながら、基本的な文法と語彙を用いて、簡単な日常会話をを行う。主な内容は、動詞・形容詞・存在詞・指定詞（四つの用言＝述語）の区分と語尾の基本的な変化、すなわち、丁寧語・否定文・疑問文・助詞の使い方などである。必要に応じて韓国映画・K-popといったメディアも活用し、学習した言語を早く使ってみる。</p>	
<p>外国語（韓国語Ⅱ）</p>	<p>この授業では、韓国語Ⅰにおいて獲得した授業成果、すなわち、ハングル文字と発音の習熟をもとに、基礎的な文法と日常会話の能力を高めていく。また、日本語との対照言語学的な観点からの理論的な面白さを満喫する一方で、実際に使える表現能力を上達を目指す。とくに、基本的な文法と語彙をもとに、読み・書き・聞き・話す四機能をバランスよく伸ばしていく。主な内容は、前期で学んだ用言（述語）の基本的な活用に加え、過去形、数詞、よく使う言い回しなどである。韓国語Ⅰと同様、必要に応じて韓国映画・K-popといったメディアも活用する。</p>	
<p>外国語（中国語Ⅰ）</p>	<p>「中国語は発音よければすべてよし」と言われているぐらい、発音が一番大切であるので、中国語の基本である発音を身につけるため、発音指導は復習や予習課題での自己学習を踏まえた個別対応で行い、正しく流暢に発音できることを目的とする。また、人称代詞（姓名）、動詞、疑問文、動詞述語文、形容詞述語文、指示代名詞などの文法を習得しながら、会話文の朗読を個人やペアで行いながら、簡単な日常会話できることを目的とする。</p>	

ライフキャリア科目 その他科目群	外国語（中国語Ⅱ）	中国語Ⅰに続き、個別の徹底した発音練習を重ねるとともに、発音を聞きながらピンイン、漢字、声調を書く練習も行う。また、量詞、所有の表現、親族呼称、反復疑問文、選択疑問文等の文法への理解をさらに深める。さらに、日常会話でよく使われる表現である曜日、日にちの表現、時間帯や時刻の表現、新事態発生、変化状況の表現、語気助詞、前置詞の修得をはかる。この授業を通して、発音の修得、基本的語彙の修得、簡単な文章作成力の修得を目的とする。	
	外国語（日本語Ⅰ）	本授業では、中級中期レベルの学生を対象に、大学生活に必要な4技能の基礎固めを行うことを目的とする。主に、「予習をしておけば、初年次生向けの講義のおおまかな内容を聞きとり、ノートにポイントを書きとめることができる」「辞書を使用すれば、必要な文献のおおまかな内容を理解できる」「あらかじめ準備をしておけば、自分の意見や考えを人前で発表できる」「授業の内容を踏まえ意見文を作成できる」ことを具体的な到達目標としている。	
	外国語（日本語Ⅱ）	本授業では、中級後期レベルの学生を対象に、大学生活に必要な4技能について一定の運用能力を獲得することを目的としている。主に「予習をしておけば、初年次生向けの講義の内容をほぼ聞きとり、ノートにまとめることができる」「辞書を使用すれば、必要な文献の内容をほぼ理解することができる」「簡単な調査を行い、手書きやパソコン入力でレポートを作成したり、発表したりすることができる」ことを具体的な到達目標としている。	
	外国語（日本語Ⅲ）	本授業では、上級前期レベルの学生を対象とし、大学生活に必要な4技能の高度な運用能力を獲得することを目的としている。主に「予習をしておけば、1、2年生対象の講義の内容を聞きとり、ノートにわかりやすくまとめ、疑問点について調べることができる」「辞書を使用すれば、必要な文献の詳細をほぼ理解することができる」「調査を行い、やや長めのレポートを作成したり、分析的発表を行うことができる」を具体的な到達目標としている。	
	外国語（日本語Ⅳ）	本授業では、上級中期レベルの学生を対象に、大学生活に必要な4技能のより高度な運用能力を獲得することを目的としている。主に「1、2年生対象の講義の内容を分析的にまとめることができる」「必要な文献を理解するだけでなく、内容をレポートの中で適切に引用したり、紹介したりすることができる」「与えられたテーマについて発表だけでなく、他者とのより分析的なディスカッションすることができる」ことを具体的な到達目標としている。	

専門科目 コア科目	人文学入門	<p>人文学とはどのような学問かを理解し、研究の方法、研究のキーワード、研究の動向を学ぶ。その上で、映画を通して、人文学の基礎・基本から最新の知見まで、楽しみながら学んでいく。例えば、「ハリーポッター」のシリーズから文字表現と映像表現の比較検討をしつつ、イギリスの伝統と文化を、ジョン・フォードの「駅馬車」、「黄色いリボン」、「シャイアン」の比較から時代と文化、マイノリティとマジョリティ、「正義」とは何かを考える。また、小津安二郎・「東京物語」から日本人の生活様式と文化、死生観に思いをはせ、黒澤明・「蜘蛛巣城」では、能の伝統の継承を捉えるとともに原点となった「マクベス」の主題の考察を進め、文学的形象や典型について考える。また、英米日の映画を音声に着目して視聴する中で、それぞれの言語の音韻の特徴にもふれる。また、台詞と字幕の比較検討から、音声言語と文字言語の違いについても考える。15回の授業を通して、映画を考察の対象としながら、風土と文化、文化の普遍性と個別性、政治と文化、作家・作品・テキスト、視点と語り、文体、通時的研究と共時的研究、メディアとメディアリテラシー、ジェンダー、ポストコロニアル等、人文学の重要なトピックを映像と活字資料を検討しながら学んでいければと考える。本学部の構成員の協働による4か年の学びへの誘いとなる授業であり、国際英語学科と日本文化学科のコラボレーションという特色を生かした授業展開をしたい。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (13 植西浩一/4回) 人文学とは。映画で学ぶ日本文化1 (3 John Herbert/3回) 映画で学ぶイギリス文化 (19 柚木靖史/4回) 映画で学ぶ日本文化2 (2 河内清志/4回) 映画で学ぶアメリカ文化</p>	オムニバス方式
	キャリア・スタディ・プログラム I	<p>NGO、貿易、ジャーナリズム、エアライン、ホテル・ブライダル、ツーリズム、マスコミ、IT、ティーチングなどのキャリア・ルートに関する、英語で書かれた文献や資料を的確に分析・理解し、得られた情報を援用しながら特定の意図をもって新たな説明資料を作成し、それを自らの言葉で分かり易く伝えることのできる、理解力、創造力、言語力を養成する。授業は1クラス10名前後のゼミ形式で行い、たとえばジャーナリズムを取り上げた場合、本科目（インプット過程）では、イギリスの高級紙とタブロイド紙の読み比べを行う。</p>	
	キャリア・スタディ・プログラム II	<p>NGO、貿易、ジャーナリズム、エアライン、ホテル・ブライダル、ツーリズム、マスコミ、IT、ティーチングなどのキャリア・ルートに関する、英語で書かれた文献や資料を的確に分析・理解し、得られた情報を援用しながら特定の意図をもって新たな説明資料を作成し、それを自らの言葉で分かり易く伝えることのできる、理解力、創造力、言語力を養成する。授業は1クラス10名前後のゼミ形式で行い、たとえばジャーナリズムを取り上げた場合、本科目（クリエーション過程）では、キャリア・スタディー・プログラム I で獲得した力量を基盤として、記事や論説のサマリー、読者意見の投稿文、壁新聞、リーフレットなどを作成する。</p>	

<p>キャリア・スタ ディ・プログラムⅢ</p>	<p>NGO、貿易、ジャーナリズム、エアライン、ホテル・ブライダル、ツーリズム、マスコミ、IT、ティーチングなどのキャリア・ルートに関する、英語で書かれた文献や資料を的確に分析・理解し、得られた情報を援用しながら特定の意図をもって新たな説明資料を作成し、それを自らの言葉で分かり易く伝えることのできる、理解力、創造力、言語力を養成する。授業は1クラス10名前後のゼミ形式で行い、たとえばジャーナリズムを取り上げた場合、本科目（アウトプット過程）では、キャリア・スタディー・プログラムⅡで獲得した力量を基盤として、自ら作成した英語資料を用いたプレゼンテーションを行う。キャリア・スタディー・プログラムにおけるⅠ・Ⅱ・Ⅲの3科目は互いに連動してアクティブ・ラーニングの場を提供することをねらいとする。</p>	
<p>アカデミック・リ サーチⅠ</p>	<p>本科目では、少人数のセミナー形式の授業をとおして、アカデミックな研究課題に対する意識と興味を深化拡充させるとともに、具体的なテーマの設定、図書館、インターネット、新聞・雑誌などを活用した文献・資料の収集と整理の方法、質問紙法やインタビューなどの調査方法とデータの分析方法、論文執筆上の基本的なルールなどについて具体的に指導を行う。特に、ブレーンストーミングやKJ法を行うことによって、受講生が自分の問題意識や疑問を他者に説得可能なかたちで説明できるよう導く。</p>	
<p>アカデミック・リ サーチⅡ</p>	<p>本科目では、「アカデミック・リサーチⅠ」で修得した知識と技能を活かして、少人数のセミナー形式の授業をとおして研究課題の絞り込みやテーマの設定を行うとともに卒業研究の計画を立案し作業行程を確認する。さらに、受講生が自ら選んだテーマに関する資料（作品、研究書、論文、報告書、インターネット情報など）を収集し、テーマに係る事実や言説についての知識と理解を深める。その際、英語または日本語で書かれた文献資料を的確に読み解き、先行研究から得られた知見を自らの研究に援用できるよう導くとともに、読解力と分析力の養成を図る。</p>	
<p>アカデミック・リ サーチⅢ</p>	<p>本科目では、「アカデミック・リサーチⅠ・Ⅱ」で修得した知識と技能を活かして、少人数のセミナー形式の授業をとおして卒業論文の構成と内容（題目、章立て、目次、本文[序論、第1章、第2章、第3章、結論など]、資料、付録、語註、引用参考文献一覧、梗概など）を仔細に検討するとともに、各章節の執筆を段階的に行う。その際、論文としての体裁や内容が整うよう、文章作法や既刊論稿のサンプルを示しながら、仮説設定、引用、考察、論証などの方法論について徹底した指導を行うことにより、文章表現力と思考力の養成を図る。</p>	
<p>アカデミック・リ サーチⅣ</p>	<p>本科目では、「アカデミック・リサーチⅠ・Ⅱ・Ⅲ」で修得した知識と技能を活かして、少人数のセミナー形式の授業をとおして原稿に基づく口頭発表や意見交換を行うことにより卒業論文の完成度を高める。その際、受講生自身の主張、意見、提言などをディフェンドするとともに、他者の論考に関する意見や質問を簡潔かつ客観的に述べるができるようプレゼンテーション及びディスカッションの技法に習熟させることにより、口頭発表力と批判力の養成を図る。</p>	
<p>卒業論文</p>	<p>「アカデミック・リサーチⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」で修得した知識と技能の集大成として、研究内容の専門性、論証方法の妥当性、分析と考察の緻密さ、論述・解説・主張・提言などの論理性と整合性、文章表現の完成度などを検証し、所定の執筆要領に従って卒業論文を完成させる。具体的には、題目、章立て、目次、本文（序論、第1章、第2章、第3章、結論など）、資料、付録、語註、引用参考文献一覧、梗概など、アカデミックな内容と書式を備えた論稿であることを求める。また、卒業研究で取り組んだ問題解決作業と研究成果の公表を通して修得した知識と技能を、卒業後のライフキャリアにおいても直接的または間接的に活かすことができるよう導くとともに、ディプロマ・ポリシーの達成に向けて体系的かつ総合的に指導する。</p>	

G S E コ ー ス 科 目 専 門 科 目	English Writing Composition	<p>This course addresses the writing processes that can best facilitate effective composition. Students will learn how to develop paragraphs with a range of rhetorical functions by employing writing strategies of planning, peer-feedback, revision and editing. The aim is to produce skilled writers capable of composing meaningful and well-organised paragraphs appropriate to purpose and audience. This class will make sure students have the basic English writing skills needed for academic composition and research in their future coursework and careers.</p> <p>この授業では読み手に向けた散文の主な特徴や効果的なライティングを生み出すプロセスを取り扱う。学生はプラン、学生間のフィードバック、改訂、編集などのライティングのテクニックを通してパラグラフ展開を学び、また、そのライティングの目的や読み手に一致した、よくまとまったパラグラフを構成することができるようになることを目指す。授業を通して、受講学生は今後の授業課題や将来のキャリアにおいて必要なアカデミックな論文執筆やリサーチの技術を習得することができる。</p>	
	Academic Writing in English	<p>This course builds upon the previous study of basic paragraph writing and composition to focus on essay writing in the academic style. Students will develop skills in the searching and selection of literature, and become aware of good academic practice. In addition, students will learn how to make a coherent argument to support their thesis statement within longer essay-writing formats. Independent writing tasks and a final academic essay will consolidate students' skills and knowledge, preparing them for future academic writing.</p> <p>この授業ではアカデミックライティングができるように基本的なパラグラフライティングを振り返る。参考文献の検索や選定におけるスキルを磨き、アカデミックなスタイルを身につける。個人レベルでのライティングや学期末のエッセイなどの課題を通して、これからのアカデミックライティングに向けたスキルや知識を確固たるものにする。さらに学生はより長いエッセイ・ライティングによって、自身の意見や議論をサポートするための方法を学習する。</p>	
	Discussion & Presentation	<p>The purpose of this course is for students to learn fundamental discussion and presentation skills related to the field of global studies. Each topic will require students to read, think critically, give opinions, react to others' opinions and make presentations. For discussions, students will learn to support their opinions with suitable evidence. They will learn appropriate English expressions to enhance their arguments and ideas. For creating effective presentations, students will learn the importance of logical structure, voice inflection, and use of visual aids, among others.</p> <p>この授業の目的はグローバル社会におけるディスカッションとプレゼンテーションのスキルを身につけることである。授業では読解、論理的思考、意見の発表、他者の意見への応答をディスカッションの形態を取って学習する。また学生はディスカッションをもとにした効果的なプレゼンテーションを行うことが求められる。ディスカッションの授業では学生は適切な証拠をもとに自身の意見を構築する方法を学習する。また自身の考えを強調するための英語表現も学ぶ。効果的なプレゼンテーションを行うため、学生は論理的な構成や発声、視聴覚資料の使用などを学習する。</p>	

Research & Debate	<p>The purpose of this course is for students to learn fundamental research and debate skills related to the field of global studies. Each topic will require students to research, read, think critically, and react to what they have learned in a debate format. Through research, students will learn to assess the validity of different source materials in the digital and non-digital domain. Through debate, students will improve their abilities to: support opinions with reasons; support reasons with evidence; refute ideas and explanations; challenge evidence; and make arguments.</p> <p>この授業の目的は、グローバル社会において求められるリサーチや討論の方法を学ぶことである。授業において、学生は調査、読解、論理的思考、及び討論において学んだことへの考察を発表することなどが求められる。リサーチを通じて学生はデジタル、および非デジタル情報の妥当性を評価することの重要性を学ぶ。またディベートを通じて、学生は自身の意見を適切な根拠をもとに補強することや、他の意見や説明に対して議論を行う方法を学習する。</p>	
通訳の理論と実践 I	<p>通訳するとはどういうことなのかを理論的に学習する。またその理論に則って実務的な練習を行う。通訳するということは、単に言語を変換することではない。通訳をするためには、まず母語である日本語のレベルを高めなければならない。日本語文の分析、要約理解、再構築ができるようにトレーニングをする。それと同時に、日本語を英語に通訳・翻訳するために並び替える訓練を繰り返す。通訳の技法としては、逐次通訳を理論的に理解し、実際に日英、英日の通訳の難しさを体験してみる。</p>	
通訳の理論と実践 II	<p>通訳するとはどういうことなのかを理論的に学習する。通訳するということは、単に言語を変換することではない。通訳をするためには、まず母語である日本語のレベルを高めなければならない。日本語文の分析、要約理解、再構築ができるようにトレーニングをする。それと同時に、日本語を英語に通訳・翻訳するために並び替える訓練を繰り返す。通訳の技法としては、逐次通訳を理論的に理解し、実際に日英、英日の通訳の難しさを体験してみる。</p>	
通訳の理論と実践 III	<p>逐次通訳と同時通訳の違いを理論的に学習する。逐次通訳はメモ取が必要条件であり、同時通訳は記憶力が必要となってくる。いずれにしてもリテンション能力を高める必要があるため、その訓練を行う。通訳をするためには、まず母語である日本語のレベルを高めなければならない。日本語文の分析、要約理解、再構築ができるように繰り返しトレーニングをする。それと同時に、日本語を英語に通訳・翻訳するために並び替える訓練を繰り返す。</p>	
通訳の理論と実践 IV	<p>歴史の中で通訳者が果たしてきた役割は大きい。その歴史を学び、通訳者として必要な素養を意識する。通訳をするには、記憶力が必要となってくる。リテンション能力を高める必要があるため、その訓練を行う。</p> <p>通訳をするためには、常に母語である日本語のレベルを高めなければならない。日本語文の分析、要約理解、再構築ができるように繰り返しトレーニングをする。それと同時に、日本語を英語に通訳・翻訳するために並び替える訓練を繰り返す。</p>	

G S E コ ー ス 科 目 専 門 科 目	Introduction to Global Studies	<p>The purpose of this course is for students to gain an insight into the global studies field. Students will be introduced to the various subjects that they can study in the following years in Global Studies in English. In addition, they will begin to learn vocabulary, gain basic knowledge about the world today, and learn major concepts and terminology related to each subject that will be important for their studies in other global studies courses. (45 Paul Spicer/3回)</p> <p>We examine the historical importance of modern and postmodern art in contemporary global culture. In a separate class, we explore popular music, and its role and effect on popular, and youth culture. (3 John Herbert/3回)</p> <p>Through mini-lectures and discussion, we discover what is happening to the world's languages in the modern day and consider important global issues, such as the validity of different varieties of English and the plight of endangered languages. (6 Ashley Hollenbeck/9回)</p> <p>Through lecture, discussion, and in-class activities students will learn the foundational principles of global studies and global politics. This includes concepts such as the nation-state and how international governmental organizations like the United Nations (UN) function in geopolitics.</p> <p>この授業の目的は、初年度の学生にグローバル・スタディの主な内容を理解してもらうことである。受講学生は、GSEの4年間で学ぶ様々な課題を理解し、グローバルな視点から問題をとらえる習慣を身につけることができる。さらに学生は授業を通してボキャブラリーを増やし、現在の世界情勢についての知識を身に付け、それぞれの内容に即した専門用語などを学習することで、今後受講する他のグローバル・スタディの基礎を構築することができる。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (45 Paul Spicer/3回)</p> <p>現代のグローバル文化における現代、及びポストモダンの芸術の歴史的な重要性について追究する。ポピュラー音楽やその役割、若年文化への影響などを扱う。 (3 John Herbert/3回)</p> <p>小講義、ディスカッション形式を用いて、現代における世界の言語に起きていることを知り、英語の多様性の妥当性や、消滅に瀕した言語の状況といった重要な問題を考察する。 (6 Ashley Hollenbeck/9回)</p> <p>講義、ディスカッション、その他のクラス活動を通じて、グローバルスタディーズや国際政治に関する基本的な原理について学ぶ。その中には、民族国家などの諸概念に加え、国連のような国際政治機関が地政学上どのように機能しているかといったことも含まれる。</p>	オムニバス方式
	Issues in the Modern World	<p>The purpose of this course is for students to discover some of today's major issues facing people around the globe, thereby gaining a greater awareness of current issues in global studies. It will require students to be engaged in current events around the world and in Japan, and think critically about the implications they might have for the future. Throughout this course, students will be expected to read the news daily, in order to deepen their understanding of what is happening around the world.</p> <p>本授業の目的は、学生たちが今日のさまざまな課題を自らの目で発見し考えることによって、われわれを取り巻くグローバルな課題に対する問題意識を深めることである。学生たちが現代世界の課題に関心を持ち調査を行い、ブログを通じて表現することで、自らの意見をまとめる力や表現する力を養うことができる。この授業では、学生は現在の世界で何が起きているのかについての理解を深めるために、毎日英語で新聞を読むことが求められる。</p>	

G S E コ ー ス 科 目 専 門 科 目	Introduction to Nature & the Environment	<p>The purpose of this course is for students to study the relationship between humans and nature. Especially, students will learn about the impact that humans have on our environment. For example, students might learn about topics related to climate change, water pollution and scarcity, deforestation, erosion, biodiversity, and agriculture, in order to understand their own relationship to the natural environment. These are important issues and students will need to look critically in order to understand the problems and suggest solutions.</p> <p>本講義の目的は、人間と自然の関係を考察することである。受講学生は特に、人間が環境に与える影響について精査を行う。たとえば、受講学生は自然環境と人間の関係性を理解するために、温暖化問題などの気温の変化についての問題や、水質汚染、食糧不足、森林破壊、河川などの浸食、生物多様性、農業などについて学習する。これらは重要な課題であり、学生は問題を理解し、解決策を提示するために洞察力を持って観察する必要がある。</p>	
	Area Studies I - The Americas	<p>The Americas are comprised of North and South America, not just the United States. This region encompasses a diverse array of cultures, political and economic systems, opportunities, and challenges. The purpose of this course is to introduce students to a multidisciplinary menu of topics related to geography, politics and current events, history and culture in the Americas. Students in this class will read a variety of works, and increase their English vocabulary while simultaneously improving their knowledge of the region.</p> <p>アメリカ合衆国は、合衆国だけでなく、北アメリカと南アメリカによって構成されている。これらの地域は、場所によって異なる多様な文化、政治、経済システム、就職などの機会や、さまざまな問題を含んでいる。この授業の目的はアメリカの地理、政治、時事問題、歴史、文化といった多様な側面について学ぶことである。授業を通じて受講学生は英語で書かれたさまざまな作品を読み、アメリカに関する知識と英語のボキャブラリーを向上させることができる。</p>	
	Area Studies II - Europe	<p>Europe is a region with a rich history and culture with many different contributions to world politics and cultural exchange, including, literature, government institutions, and global innovation. The purpose of this course is to introduce students to a multidisciplinary menu of topics related to geography, politics and current events, history and culture in Europe. Students in this class will improve their research, presentation, and speaking skills as they discover new information and present on a variety of topics relating to Europe and its connections to the rest of the world.</p> <p>ヨーロッパは豊かな歴史と文化を持ち、文学、政府機関、グローバル・イノベーションといった世界の政治や文化交流に対し、さまざまな貢献を行っている地域であるといえる。この授業の目的はヨーロッパの地理、政治、時事、歴史、文化といった多様な側面について学ぶことである。授業において、学生はヨーロッパと他国との関係性などについてのさまざまなトピックについて調査し発表することで、調査やプレゼンテーションの技能を向上させることができる。</p>	

G S E コ ー ス 科 目 専 門 科 目	Area Studies III- Asia	<p>Asia is the largest continent on earth and encompasses a diverse array of cultures, history, government systems, and economies. In this course, students will have the opportunity to explore various topics related to South Asia, Southeast Asia, and East Asia, in order to understand the differences and similarities of these regions and their relation to the rest of the world. The purpose of this course is to introduce students to a multidisciplinary menu of topics related to geography, politics and current events, history and culture in Asia. Students will improve their research and writing skills, while simultaneously improving their knowledge of the region.</p> <p>アジアは、地球上で最大の大陸であり、多様な文化、歴史、政治システム、経済システムを保有している。この授業を通じて、学生は南アジア、東南アジア、東アジアに関連するさまざまなトピックについて学習し、これらの地域の相違点や類似点、世界との関係についての理解を深めることができる。この授業の目的は アジアの地理、政治、時事、歴史、文化といった多様な側面について学ぶことである。学生はこの地域に関する知識を得るとともに、リサーチやライティングのスキルを向上させることができる。</p>	
	Area Studies IV- Africa	<p>Africa has long been represented by an image of the continent of "poverty" and "conflict". In recent years, however, Africa has attracted worldwide attention as the "last frontier". This course aims at understanding the contemporary African situation from multifaceted points, such as natural environment, local culture, and economic activities. It also aims at addressing the social problems in Japan through studying about Africa. By the end of this course, students will overcome their previously held stereotypes of the African continent, and discover its diversity and relationship to the rest of the world.</p> <p>これまで貧困や紛争のイメージによって理解されてきたアフリカは、近年、日本を含む世界各国から「最後のフロンティア」として注目されている。この授業では、現代アフリカを地域研究のアプローチを用いて、自然、文化、経済活動などの多角的な視点から理解することを目的とする。また、アフリカを学ぶことを通じて、相対的に日本社会が抱える問題点についても考える。この授業を通じて、学生はこれまで持っていたアフリカに対するステレオタイプの認識を克服し、アフリカの多様性と他国との関係性を学ぶことができる。</p>	
	World History I	<p>The purpose of this course is for students to study the political, economic, social, and cultural development of the World. This class will draw on important historical events from ancient and medieval history, the renaissance and reformation period, as well as the time of enlightenment and revolution. The historical events addressed in this class will enhance students' understanding of the contemporary, globalized world as it relates to global studies. In this class, students will improve their skills in historical interpretation, research, and writing.</p> <p>本講義の目的は、世界の政治、経済、社会、及び文化の発展について幅広く学ぶことである。古代から始まり、中世、ルネサンスや宗教改革を経て、啓蒙運動の時代やフランス革命期までに至る、歴史上の重要な事件を扱う。これらの歴史的イベントを考察することで、グローバル・スタディーズに関連付けつつ現代社会についての理解を深める。また授業を通して、学生は歴史の解釈や、リサーチ、ライティングといった技能を向上させることができる。</p>	

<p>Culture Studies II</p>	<p>This course will build on Culture Studies I and students will gain an understanding of the basics of cultural studies that will allow them to explore culture through many different subjects, including politics and history. Students will examine theories by relevant scholars such as Hall, Niranjana, Hoggart, Said and Williams, before moving on to relevant case studies, across a wide range of disciplines, including; the media, contemporary art, politics, marketing, feminism, and film. By the end of the class, students will improve their critical thinking, research and writing skills.</p> <p>本講義は、“Cultural Studies I”の講義内容の発展として、カルチュラル・スタディーズの基本について理解し、さまざまなテーマを通して文化を探求する。まず、講義の前半ではホール、ニランジャナ、ホガート、サイド、ウィリアムズのような関連する学者の理論を吟味する。その後、メディア、現代芸術、政治、マーケティング、フェミニズム、映画などを含む幅広い分野からケース・スタディを用い、考察する。また本講義を通して、批判的な思考やリサーチ、ライティングの能力を向上させる。</p>	
<p>Introduction to Economics</p>	<p>The purpose of this course is to introduce students to the fundamental principles of microeconomics and macroeconomics through both theory and practical case studies. Students will begin to understand the concepts of supply and demand, production, distribution and consumption of goods and services in economies of different scales. In addition, they will start to comprehend basic theories like rational choice, opportunity cost, and externalities, and how they impact their lives and politics. By the end of the course, students will be able to analyze how economics is connected to their lives.</p> <p>本授業では、理論と実践的なケース・スタディ、ミクロ経済とマクロ経済の基本原則に関する導入的な講義を行う。授業を通して、経済と我々の生活の関係について分析する能力を身に着けることを目的とする。まず、需要と供給、生産、商品やサービスの分配と消費といった概念について、様々な経済規模において把握する。さらに理性的選択、機会原価、外部性といった基礎的な理論と、それらの理論が我々の生活や政治にいかに関わっているかについても理解を深める。</p>	
<p>Global Citizenship</p>	<p>The purpose of this course is for students to learn about the concept of citizenship and how it is related to the global context. After doing so students will begin to build an understanding of how they are connected to the global community through utilizing a systems-thinking approach. They will then develop locally based projects to empower them to become leaders in their own community. By the end of this course, students will develop critical thinking skills, and be able to articulate how their actions are related to current global issues.</p> <p>本講義では、まず世界市民の概念と、グローバルな社会状況との関係を学んだ後、システム思考の方法論を用いて個人と国際社会がいかに関わっているかについて知識を深める。それぞれの社会を基盤としたプロジェクトを立案・実行し、それによってその社会集団のリーダーに必要とされる能力を身に着けることを目的とする。また、批判的な考え方を向上させ、目下の国際問題に対する自らの立場を明確に述べられるようになることを目指す。</p>	

専 門 科 目 G S E コ ー ス 科 目	International Politics	<p>The purpose of this course is to give students the basic analytic tools within the field of global studies, international relations, and public policy that are necessary to understand and explain a variety of international phenomena and factors that shape the current geopolitical order. It will examine how State and non-State actors work together and compete with one another concerning the global political system, hierarchy and hegemonic power. It also examines security threats and a changing global politic. Students will continue to hone research, writing, analysis and critical thinking skills.</p> <p>本講義の目的は、グローバル・スタディーズ、国際関係、公共政策の分野において分析方法の基礎を習得することである。それらの方法論を通して、現在の地政学的線引きが引き起こす様々な国際的な事象や要点への理解を促す。本講義では、国家主体と非国家主体それぞれが、国際的な政治システムや階層、覇権、さらには安全保障上の脅威や変化し続ける国際政治の場において、いかに協同しまた競争するかを検討する。また、リサーチ、レポート作成、分析、そして批判的な考え方のスキルを身に着けることを目指す。</p>	
	Women & the World II	<p>The purpose of this course is for students to learn about women, development, and issues of equity worldwide. Specifically, it will look at cases of oppression and opportunities for empowerment worldwide, and students will compare statistics, policies and various findings to gain better insight into issues related to women worldwide. The challenges discussed in this class include human trafficking, violence against women, and maternal mortality globally and in Japan. Students will then be empowered by learning about opportunities for action, such as education, microfinance and social entrepreneurship, in order to understand their role in providing a brighter future for women.</p> <p>この授業では、女性と開発、及び平等な社会における問題について学び、とりわけ世界規模での抑圧と権限委譲について検討する。また、統計学や政策などの様々な研究成果を比較し、女性を巡る諸問題への洞察を深める。人身売買、女性への暴力、妊産婦死亡などのテーマを取り上げ、これらの世界や日本における状況を考察する。本講義を通して、教育やマイクロ・ファイナンス、社会起業家などの活動について学び、女性にとってよりよい社会をつくるための役割について考える。</p>	
	Developing Global Thinking	<p>The purpose of this course is for students to develop global thinking skills and begin to understand different points of view on the same subject, and how things that happen in one part of the world may impact someone somewhere else. This course will be split into two parts. The first will utilize the Theory of Knowledge, while the second will look at the main theoretical frameworks within the field of international relations in order to discover different worldviews. The aim is to foster global thinking by viewing the world from a different cultural perspective and through the lens of international relations.</p> <p>本講義では、グローバルな思考を高めることを目的とし、視点の多様性及び、世界における相互作用について理解する。異なる文化の観点に立ち、また国際関係学の視点を通して世界に対する思考力を養うことを目指す。本講義の前半では「知の理論」を用い、後半では国際関係学の分野における主だった理論的な枠組みを検討し、多様な世界観を見出す。授業を通して、異なる文化的見地に立ち、国際関係学の視点から世界を広く見渡すことで、グローバルな思考能力を養う。</p>	

<p>Language Diversity & Society</p>	<p>The purpose of this course is for students to learn about how language used in society varies depending on the users and the context. In particular, students will consider how language differs depending on factors such as age, gender, region, and situation, and how these differences have an impact on our lives. Students will pay particular attention to issues of identity, and consider how language use is an important element within any individual's sense of personal or group identity.</p> <p>本講義の目的は、言語が使用者や文化的背景の違いによって、社会の中でどのように使われ方が変化するかを学ぶことである。特に、年齢、ジェンダー、宗教、状況といった要因が、言語だけでなく人々の生活にもどのような影響を及ぼすのかを学習する。受講学生は、アイデンティティの問題を熟慮し、人間の個別の認識や、集団に対する認識やアイデンティティの形成において、言語がいかに重要な役割を果たしているのか、ということを理解する。</p>	
<p>Religions & the World</p>	<p>This course is a basic introduction to the variety of the world's religions as well as various methods for studying them. We will also discuss about the problem and the contribution of religions in the modern world. Students should leave the course with a better comprehension and appreciation for religions around the world and better knowledge and skill concerning methodology to explore religious phenomena. By fulfilling these course objectives, at the end of semester, students will have and demonstrate:</p> <p>1.an understanding about methodologies of religious study and research. 2.a comprehension about the role of religion(s) in the modern world. 3.an appreciation of as well as a critical thinking about various kind of religious tradition and phenomena.</p> <p>この授業は、世界の様々な宗教についての基礎的なことからを学ぶとともに、宗教というものを学ぶための方法論をも扱う。授業においては、現代社会における宗教の問題や貢献についても議論する。修了した学生は、世界のいくつかの宗教についてのより良い理解と、それらについて尊重するすべを学ぶこととなる。また、宗教という現象に関する研究方法について、より良い知識や技能を身につけることとなる。</p> <p>これにより、期末の修了時において、修了生は、①宗教学の研究手法について理解し表現できるようになる。また、②現代社会における（諸）宗教の役割について理解し表現できるようになる。そして③様々な宗教の伝統やあり方について敬意をもって、かつ批判的な視点から理解し、表現できるようになる。</p>	
<p>Language & Culture through Film</p>	<p>Students will gain an understanding of the various roles that film plays in different social, cultural and national contexts and be able to apply relevant film theories to highlight and articulate their ideas. Students will review readings and offer interpretations concerning the social and cultural roles of film. The course addresses gender roles and shows how industrial, commercial and artistic factors shape the history of cinema.</p> <p>異なる社会的、文化的、国家的コンテクストにおける映画の役割を理解し、その考え方を特徴付けて説明するために適切な映画理論を用いることができる。この授業では映画の社会的・文化的役割に関する記述を読み、解釈をすることができるようになり、また、ジェンダーの役割を取り扱い、産業的、商業的、芸術的なさまざまな要素で映画ができてきたのかを示すことができるようになる。</p>	

World History II	<p>The purpose of this course is to build upon World History 1 and allow for students to study the political, economic, social, and cultural development of the World. This course will focus on the history of the 20th century, which is especially important to understand the contemporary world. Essentially, it will focus on events taking place after imperialism, through two world wars, the cold war and into the modern world. This course will help students to improve their skills in historical interpretation, research, and writing.</p> <p>本講義の目的は、“World History 1”の講義内容をもとに、政治や経済、社会、文化における世界の発展についての学びをさらに深めることである。本講義では20世紀の歴史に着眼点を置き、現代世界の状況を理解する上で必要不可欠となる歴史的な事象について学習する。とりわけ、帝国主義、第一次・第二次世界大戦、冷戦、そしてそれらを経た現代世界について考察する。この授業を通して、歴史的な解釈やリサーチ力、レポート作成のスキルを向上させることを目指す。</p>	
Intercultural Communication II	<p>The purpose of the course is for students to learn about the relationship between culture and communication in today’s world. Specifically, it will address differences between communication between cultures, and how these patterns have changed over time. This is important to understand the complexities of globalization, and the factors that drive social change. For example, students will examine how it is possible to overcome inequalities, protect human rights, or protect the environment through cultural and societal changes. Each topic requires students to read, think critically, and think deeply about their own communication skills.</p> <p>現代世界における文化とコミュニケーションの関係について講義し、とりわけ異文化間のコミュニケーションや、その歴史の変遷について言及する。これらをもとに、グローバル化の複雑さや社会変化を引き起こす要因を理解する。さらに、文化や社会が変化する中で、不平等の克服、人権の保持、また環境保全をいかに達成するかについて検討する。各回のトピックに対して批判的な思考し、受講者自らのコミュニケーション・スキルを分析し、見直すことを目指す。</p>	
World Literature II	<p>All too often, we are only introduced to literature from the US and Europe, but there is English literature that is written by writers all over the world. The purpose of this course is to compare the literature produced by writers from around the world. This course is designed to deepen students’ appreciation for literature while helping them appreciate the global role played by each literature. By the end of this course, students will be able to see differences and similarities between these works, in order to gain a more global perspective.</p> <p>本講義の目的は、これまで多くの場合「文学」が指し示してきたアメリカやヨーロッパの作家による作品という範疇を超え、世界中の作家によって創作された英語による文学作品を取り上げ、比較することである。本講義では、各文学作品のもつ世界的役割を考察しつつ、文学を鑑賞する力と、鋭い洞察力を養うことを目指す。さらに、取り上げる作品を読み比べることで、様々な相違点を見出しながら、グローバルな視点をさらに広げることを目指す。</p>	

<p>Modern Issues in Japan Studies</p>	<p>The purpose of this course is for students to examine a wide variety of issues, such as social, economic and political problems, which the Japanese government and society will confront now and in the future. Students will study not only the internal dynamics of Japanese society, but also consider Japan's role in the world. By the end of this course, students will learn about the situation in Japan and be able to see how it has influenced other countries in Asia and around the world.</p> <p>本講義では、社会、経済、政治といった様々な分野において、日本政府や日本社会が現代抱えている様々な問題や、将来直面することが予想される問題について検討することを目的とする。受講生は、日本国内の社会動学だけでなく、世界における日本の役割についても考察することが求められる。授業を通して日本の情勢を学び、それがアジアをはじめとする世界各国にどのような影響を与えてきたかという問題に対する洞察力を身につけていく。</p>	
<p>International Economics</p>	<p>The purpose of this course is to introduce students to topics important for the increasing internationalization of economics, such as international trade, politics, and international finance that are important in an increasingly globalized world. The course covers the role of governments, global and regional institutions, and individuals in the world economy. These topics have become increasingly contentious of late, so it is imperative that students not only understand how they work but also their critiques to make their own judgments on the international economic system.</p> <p>急速にグローバル化が進む世界において、貿易、政治、金融などにおける経済の国際化を考えるうえで、欠かすことのできない様々なトピックについて講義する。各国政府や組織、また個人が世界経済において担う役割についても言及する。このようなトピックは近年議論が盛んになってきており、受講生はそれらの機能を理解することだけでなく、国際経済のシステムにおいてなされる判断に対する様々な批評についても理解が求められる。</p>	
<p>Peace Studies</p>	<p>The purpose of this course is for students to learn about the field of peace studies, which draws off a variety of social science materials, such as anthropology, psychology, political science, sociology, economics, etc, in order to begin to understand factors that contribute to peace and conflict. The course will use this multidisciplinary lens to explore systemic and cultural factors that may lead to peace or conflict. Specifically, students will use a case study approach to learn about a country of their choice, in order to enhance analytic thinking skills.</p> <p>この授業の目的はピーススタディーズについて学ぶもので、人類学、心理学、政治学、社会学、経済学など、平和や対立を生み出す背景的要素を理解するためのさまざまな社会科学の領域を対象とする。また、この授業は学生的な角度から平和や対立に影響を与えている組織的、文化的要因について探究する。とりわけ、学生はケーススタディのアプローチを用いて、自分が選んだ国々について学習し、分析に必要な思考力を高めていくことを目指す。</p>	

<p>Environment & Society</p>	<p>The purpose of this course is to explore the relationship between human society and the environment. We will examine critical issues about the use and preservation of natural resources, and the ties between economics, politics, and the environment. The course may explore different case studies related to topics like urban planning and land use, environmental security, climate change, environmental health, and resource exploitation. By the end of the course, students will understand the issue at hand, and be able to prescribe multifaceted global and local solutions.</p> <p>この授業の目的は、人間社会とその環境との関係を探求することである。また、本授業において受講生は、天然資源の使用や保存、そして政治経済や環境の関係における重要な問題を吟味していくことが求められる。場合によっては都市計画や土地利用、環境安全、気候の変化、環境問題、資源の枯渇といったトピックに関して個々のケーススタディを行うことも考えられる。授業を通して、身近な問題に対する理解を深め、グローバル、ローカルな視点から改善策を提案できることを目指す。</p>	
<p>English in the World</p>	<p>The purpose of this course is for students to learn about the growing diversity of English in the world. Students will discover how the journey of English around the globe has made it so different in each place. Students will learn about the different categorizations of English, including inner-circle, outer-circle and expanding circle Englishes, and examine the differing roles of English in different categories and different parts of the world. The course contents touch on themes connected with politics, economics and social studies.</p> <p>本講義の目的は、世界で広がる英語の多様性について理解することである。受講学生は、地球上での英語の進む道がそれぞれの場所ではいかに異なっているか、ということや、世界での異なった場所での異なった英語の役割を精査し、政治、経済、社会学に關係するテーマを扱う。学生はイギリス、アメリカといった英語が主体となる言語圏のみならず、世界中に拡大するさまざまな英語のカテゴリーについて学習する。授業の内容は政治、経済、社会学とも関連を持つものとなる。</p>	
<p>Media & Culture</p>	<p>The purpose of this course is to expose students to how the media's representation of world events can be radically different in different cultures through exploring different types of media. Some argue that the manner in which the media reports is self-serving and reported with a distinct agenda. This course will explore the manner in which the media reports news to see if this is indeed correct. Students will visually and aurally analyze a number of news clips from throughout the world, examine elements of reporting, and analyze them using a variety of theories related to culture and media studies.</p> <p>この授業では、世界の出来事をメディアが映し出す手法が異なる文化においてどれほど異なっているか、異なるタイプのメディアを通して学生に伝えていく。世界中から届くニュースを視聴覚的に分析し、報道の基礎を学び、カルチャースタディーズやメディアスタディーズに関する様々な理論を用いてニュースを分析していく。メディアが出来事を報道する方法を観察し、その内容が信じであるかどうかを見極める洞察力を身につける。世界各国のたくさんのニュースを視聴し、文化やメディア論における諸理論を通して報道の要素を分析する。</p>	

G S E こ ー ス 科 目 専 門 科 目	Special Issues in Global Studies I	<p>The purpose of this course is to introduce students to a research topic related to global studies that they can explore deeply from many different viewpoints. This course will focus on topics related to culture studies, literature or linguistics. By the end of this course, students will gain an in-depth understanding of a selected topic, and insight into the academic field and how research is conducted. In addition, they will be responsible for conducting an in-depth research project following assigned methods related to the information presented in class.</p> <p>この授業の目的は学生たちが様々な視点から深く探求できるようなグローバルスタディーズ関連のトピックを紹介していく。この授業で扱うトピックは、カルチュラル・スタディーズ、文学、言語学である。授業内容を修得することによって、学んだトピックに関する深い理解を得、学術的な学び、及びその方法論に対する洞察を得ることができる。また、授業で提示される方法論に基づき、学びを深めるためのリサーチプロジェクトに責任を持って取り組んでいくことが求められる。</p>	
	Special Issues in Global Studies II	<p>The purpose of this course is to introduce students to a research topic related to global studies that they can explore deeply from many different viewpoints. This course will explore topics related to social science, such as history, politics, sociology, and anthropology. By the end of the course, students will gain in-depth knowledge on a relevant subject, insight into the academic field, and how research is conducted in the field. In addition, they will be responsible for conducting an in-depth research project following assigned methods related to the information presented in class.</p> <p>この授業の目的は学生たちが様々な視点から深く探求できるようなグローバルスタディーズ関連のトピックを紹介していく。この授業で扱うトピックは、歴史学、政治学、社会学、文化人類学といった社会科学に関連するものである。授業内容を修得することによって、学んだトピックに関する深い知識を得、学術的な学び、及びその方法論に対する洞察を得ることができる。また、授業で提示される方法論に基づき、学びを深めるためのリサーチプロジェクトに責任を持って取り組んでいくことが求められる。</p>	
	Independent Study	<p>The purpose of this course is to give students the opportunity to explore a subject of their choice related to global studies. In doing so, they will have the opportunity to conduct in-depth research in English on a subject of interest independently with the guidance of a faculty advisor. Students will be responsible for developing a research question, proposal, work schedule, and paper to investigate a subject of their choice. In addition, they will develop skills on how to best work and make decisions independently about their work.</p> <p>この授業の目的は、学生が自ら選んだテーマを探求し、グローバルスタディーズに関する徹底した研究を行うことにある。学生は学部教員の指導の下、個人で自身が関心を持ったテーマに関する研究を英語で進める。研究を進めるため、リサーチクエスト、研究計画を立て、論文にまとめることに責任を持って取り組むことが求められる。加えて、自身の研究に関して自ら様々な決断をし、取り組みを進めていくためのスキルを身につけていく。</p>	

専門科目 英語文化 コース科目	GSE コース 科目	<p>GSE Internship</p> <p>In this course, students gain practical experience through completing an internship of their choice. Students will be responsible for finding an internship at a site of their choice in Japan or abroad related to their field of interest. They will be expected to write a learning contract that must be approved by their site advisor and internship supervisor. In addition, students completing an internship will write a reflective essay on their experience and how it relates to their coursework in the GSE program.</p> <p>この授業の目的は、学生が自ら選んだインターンシップを通して、実務的な体験を行なうことにある。学生は興味関心に応じて国内あるいは海外のインターンシップ先を自分で見つけることが求められる。学生はインターンシップを始める前に、学習契約書を作成し、教員やインターンシップの責任者に受諾してもらうことになる。またインターンシップ終了時にはその体験やGSEプログラムでの学修に関連性を持たせるようなレポートをまとめていく。</p>	
	オーラル・コミュニケーション I	<p>"Students will gain confidence in a range of skills necessary to express themselves orally in English on a variety of everyday subjects. This course takes a thematic approach and focuses on English oral communication skills. Pair and group work activities, along with communication tasks, give students many opportunities for speaking practice and to share ideas. Through these activities, students will develop their ability to instigate conversations in English.</p> <p>この授業は、日常のさまざまな話題について英語で表現するのに必要なスキルを身につけ、自信を持って英会話ができるようになることを目標にする。授業では英語のコミュニケーションスキルを身につけ、英会話を積極的に展開していく能力を養成する。ペアワーク、およびグループワークの活動を行うことで、学生は実用的な会話を行い、意見を交換する機会を得ることが可能となる。これらの活動を通じて、学生の英語での会話スキルを向上させることが本授業の目的である。</p>	
	オーラル・コミュニケーション II	<p>This course reinforces and builds on the skills learned in オーラル・コミュニケーション I. Students will gain further confidence in the range of skills necessary to express themselves orally in English on a variety of everyday subjects. The thematic approach focuses on English oral communication skills and vocabulary and expression development. The frequent pair and group work activities, along with communication tasks, put the emphasis on students' active production of English. Students will therefore grow in confidence in their ability to develop conversations in English.</p> <p>この授業はオーラル・コミュニケーション I で学んだスキルをもとにして、日常のさまざまな話題について英語で表現するのに必要なスキルを身につけ、より一層の自信を持って英会話ができるようになることを目標にする。ペアワークやグループワークの活動を頻繁に行うことによって、コミュニケーションを通じて課題を解くとともに、学生が積極的に英語で発言、発表を行うことに重点を置く。授業では日常のテーマをとりあげながら、英語のコミュニケーションスキルや語彙や表現能力を身につけ、英会話を積極的に展開していく能力を養成する。</p>	

英語文化
コース科目
専門科目

<p>オーラル・コミュニケーションⅢ</p>	<p>This course builds on the オーラル・コミュニケーションⅠ and オーラル・コミュニケーションⅡ courses. Through active participation in pair and group work and communication tasks, students will become more practiced in a range of skills necessary to express themselves orally in English on a variety of everyday subjects. The thematic approach focuses on English oral communication skills, and requires students to develop their communicative ability in English to the extent that they can take part in discussions and share their ideas in a coherent manner. この授業はオーラル・コミュニケーションⅠ・Ⅱで学んだスキルをもとにして、日常のさまざまな話題について英語で表現するのに必要なスキルを身につけ、ペアワークやグループワークを通して積極的に英語での活動を行うことで、より実践的に英会話ができるようになることを目標にする。日常のテーマをとりあげるアプローチによって、英語のコミュニケーションスキルを身につけ、英語でのディスカッションを行い、意見の共有ができる程度のコミュニケーション能力を養う。</p>	
<p>オーラル・コミュニケーションⅣ</p>	<p>This course reinforces and builds on the skills learned in オーラル・コミュニケーションⅢ. Students will use the communicative skills they have learned to express themselves orally in English on a variety of everyday subjects. The thematic approach, allied with frequent communication tasks and pair and group work, requires students to further develop skills, such as opinion giving, agreeing and disagreeing. The development of these skills will allow students to take part fully in more sophisticated discussions. この授業はオーラル・コミュニケーションⅢで学んだスキルをもとにして、日常のさまざまな話題について英語で表現するのに必要なスキルを身につけ、より実践的に英会話ができるようになることを目標にする。毎回の授業テーマについて、頻繁にペアワークやグループワークでのコミュニケーションを通して課題を行うことで、意見の陳述、賛成・反対の表明などの英語のコミュニケーションスキルを身につけ、高度なディスカッションができる程度のコミュニケーション能力を養う。</p>	
<p>リーディングⅠ</p>	<p>Students will gain confidence in a range of reading skills, such as identifying main ideas, reading for details, identifying reference words and skimming and scanning, in order to understand a variety of English texts on engaging themes. Students will also pay attention to building their range of vocabulary and understanding vocabulary in context. Through graded readers, they will also develop their reading prowess and reading speed through extensive reading. この授業では、英語で書かれた様々な文章を理解するために必要な要旨の把握、細部の理解、指示語の特定、スキミングなど英語読解能力の向上を目指す。受講学生はさまざまな英語の文章のリーディングを通して、ボキャブラリーを増やし、テキストの文脈に即した意味を把握する能力を身につけることができる。また、学生の能力に合わせた段階別の読み物などを数多く読むことで、学生は自らのリーディングの能力を高め、速読の技術を学習する。</p>	

リーディングⅡ	<p>Students will gain further confidence in reading skills, such as separating fact and opinion, identifying cause and effect and inferring meaning, in order to understand a variety of English texts on engaging themes. Students will extend their bank of vocabulary and grow in confidence in understanding vocabulary through studying its context. Through graded readers, they will also develop their reading speed, confidence and general prowess, through extensive reading.</p> <p>この授業の目的は、英語で書かれた様々な文章を理解するために必要なさらなるリーディング・スキルの向上を目指すことである。たとえば、事実と意見の見極め、原因と結果の因果関係の理解、そこから推測される意味などを理解する能力である。また、学生はボキャブラリーを増やし、文脈に沿った言葉の意味を把握する力を身に着けることができる。さらに段階別の読み物を使用し、学生はリーディングスピードを高め、自らの広範囲にわたるリーディング能力を養う。</p>	
リーディングⅢ	<p>Students will continue to work on further reading skills such as identifying text organization and reading for gist in order to understand a variety of English texts on engaging themes. They will use these skills in real-life reading projects where they will build a reading portfolio based on Internet resources. Also, they will continue to develop their reading prowess and reading speed through extensive reading of graded readers.</p> <p>この授業では、受講学生は英語で書かれた様々なテーマに関する文章を読み、それらを理解する上で必要とされるテキストの構造や要点の理解といったリーディング・スキルの一層の向上に努める。受講学生は、これらのスキルを活用して、読書の幅をさらに広げ、インターネットリソースに基づく読書ポートフォリオを構築する。また、学生の能力によってレベル分けされた段階別の読み物を数多く読むことで、リーディング能力と速読の技術を高める。</p>	
リーディングⅣ	<p>This course reinforces and builds on the skills learned inリーディングⅢ. Students will continue to work on further reading skills and vocabulary development in order to understand a variety of English texts on engaging themes. They will use these skills to grow in confidence in their real-life reading projects and will expand the range in their reading portfolios based on Internet resources. Also, they will continue to develop their vocabulary pool, reading speed, and general prowess, through extensive reading.</p> <p>この授業ではリーディングⅢをもとにして、様々なテーマに沿った英語の文章を理解する上で必要とされるボキャブラリーを増やし、リーディング・スキルをさらに向上させることを目指す。受講学生は、これらのスキルを活用して、読書の幅をさらに広げ、インターネットリソースに基づく読書ポートフォリオを構築する。また、学生のレベルに応じた段階別の読み物の多読を通して、語彙力の向上や速読といったリーディング能力を高める。</p>	

<p>ライティング I</p>	<p>"Students will gain confidence in skills necessary to write well in English, such as brainstorming for ideas, creating outlines for writing, writing first drafts and editing. Students will be very active: 1. working on a variety of exercises that will allow them to construct well-structured paragraphs; and 2. writing extensively in a journal in order to breed familiarity with writing in English. Students will also pay attention to correct use of grammatical constructions and the ways to link their ideas through adequate use of appropriate conjunctions. この授業では学生はブレイン・ストーミングによるアイデアの抽出や、ライティングのためのアウトラインの書き方、原稿の執筆とその修正などを繰り返すことで、英語でのライティングに必要なスキルを身につけることを目標とする。具体的な方法としては次のような課題を行う。1. さまざまな課題を通してパラグラフ・ライティングの方法を習得する。2. 日記を書くことで集中して英語のライティングに取り組む。学生は特に文法的に正しい英語を書くことを心がけ、適切な接続詞を使うことで自身の考えを表現する方法を身につける。</p>	
<p>ライティング II</p>	<p>This course reinforces and builds on the skills learned in ライティング I. Students will continue to gain confidence in the skills necessary to write well in English by: 1. working on a variety of exercises that will allow them to construct more sophisticated paragraphs; 2. writing extensively in a journal; 3. undertaking real-life writing exercises in the digital domain (such as email and texting). In order to develop more coherent paragraphs, continued emphasis will be placed on correct use of grammar and linking ideas through conjunctions. この授業ではライティング I をもとにして、学生は次のような課題を通して英語でのライティングに必要なスキルを身につけることを目標とする。1. さまざまな課題を通してパラグラフ・ライティングの方法を習得する。2. 日記を書くことで集中して英語のライティングに取り組む。3. メールなどの電子媒体でライティングを行うことで現実に即したライティング・スキルを身につける。より一貫性のある文章を書くために、正しい文法と接続詞を効果的に用いて意見を述べる技術が引き続き重視される。</p>	
<p>ライティング III</p>	<p>This course builds on the paragraph writing skills learned in previous writing courses. Students will work on a variety of exercises that will allow them to write well-structured essays. Students will use a process approach to writing, taking them from the planing stage of brainstorming, outlining and writing a first drafts, through the editing stage, and finally to the writing of the final draft of an essay. Students will also continue to write extensively and freely in a journal to develop familiarity with writing in English. この授業ではライティング I・II をもとにして、学生は次のような課題を通して英語でのライティングに必要なスキルを身につけることを目標とする。生徒はブレインストーミングなどのよって執筆の計画を段階的に行い、最初の草稿の概要を作り、さらにそれを書き直し、最終的にはエッセイの最終草稿を仕上げるという手順を踏む。さまざまな課題について自由に書くことでパラグラフ・ライティングの技術をさらに向上させる。日記を書くことで集中して英語のライティングに取り組み、ライティング・スキルを身につける。</p>	

ライティングⅣ	<p>This course reinforces and builds on the skills learned in ライティングⅢ. Students will work on a variety of exercises, including a focus on vocabulary development, that will develop their confidence and ability to write more sophisticated well-structured essays. Students will be encouraged to help each other through a series of cooperative peer-editing exercises. Students will also continue to write extensively in a journal to further develop familiarity with writing in English. In the digital domain, they will also undertake more advanced real-life writing exercises that focus on an understanding of register.</p> <p>この授業はライティングⅢをもとにして、さらにライティングの能力を向上させることが目的である。受講学生はボキャブラリーを増やし、論理的で洗練されたエッセイを書く能力を身に着けることを目標とする。学生はまたペアワークなどにより、互いの文章を直しあうことが求められる。また、学生は英語で日記を書くことで英語でのライティング能力をさらに高めることができる。デジタル媒体でのライティングでは、より現実社会での実用に即したライティング演習を行う。</p>	
TOEIC I	<p>この授業では、TOEICのリスニングセクション（PART 1 写真描写問題、PART 2応答問題、PART 3 会話問題、PART 4 説明文問題）とリーディングセクション（PART 5 短文穴埋め問題、PART 6 長文穴埋め問題、PART 7 1つの文書・複数の文書）の問題に触れ、各セクションの問題の形式や内容に慣れることを目標とする。また、TOEICを受験する準備段階として、実用英語検定試験（英検）における準2級～2級レベルの英語の語彙や文法・語法を確認しながら、すすめていく。</p>	
TOEIC II	<p>この授業では、TOEICのリスニングセクション（PART 1 写真描写問題、PART 2応答問題、PART 3 会話問題、PART 4 説明文問題）とリーディングセクション（PART 5 短文穴埋め問題、PART 6 長文穴埋め問題、PART 7 1つの文書・複数の文書）の問題に触れ、各問題の特徴に応じて解答できる力を養成する。また、TOEICを受験する準備段階として、実用英語検定試験（英検）における準2級～2級レベルの英語の語彙や文法・語法を確認しながら、解答に際し苦手とするPARTごとに必要な英語力を特定し、必要とされる知識や応用力を身につける。</p>	
TOEIC III	<p>この授業は、1年次のTOEIC I・IIを踏まえたもので、TOEICのリスニングセクション（PART 1 写真描写問題、PART 2 応答問題、PART 3 会話問題、PART 4 説明文問題）とリーディングセクション（PART 5 短文穴埋め問題、PART 6 長文穴埋め問題、PART 7 1つの文書・複数の文書）の問題に触れ、高度な英語表現力を養成し、TOEICのスコアアップを目指す。学生時代に出くわすような日常生活のシーンの英語表現だけでなく、社会一般やビジネスの英語表現に慣れ親しみ、一方で、苦手な問題パターンを克服していけるよう展開していく。</p>	
TOEIC IV	<p>この授業は、1年次のTOEIC I・II、2年次のTOEIC IIIを踏まえたもので、TOEICのリスニングセクション（PART 1 写真描写問題、PART 2 応答問題、PART 3 会話問題、PART 4 説明文問題）とリーディングセクション（PART 5 短文穴埋め問題、PART 6 長文穴埋め問題、PART 7 1つの文書・複数の文書）の問題に触れ、さらに高度な英語表現力を養成し、TOEICのスコアアップを目指す。特に、ビジネスの英語表現を定着させ、各自が苦手な問題パターンを克服していけるよう展開していく。</p>	

英語文化コース科目 専門科目	海外研修事前指導	<p>交換留学をはじめ、「海外研修Ⅰ」「海外研修Ⅱ」「海外インターンシップ」などへの動機付けあるいはその参加を前提とした実践的な準備を図るため、現地での日常生活を体験し、海外生活に不可欠な英語のコミュニケーション能力を獲得させる。渡航前の授業は場面シラバスによる演習形式とし、入国審査、機内、公共交通機関、ホームステイ、寮、ホテル、銀行、郵便局、飲食店、スーパー、コンビニ、デパート、ショッピングモール、携帯電話取次店、土産物屋、病院、美容院などにおいて英語で不自由なく会話できるよう訓練するとともに、場面特有の諸手続きと危機管理の方法論にも習熟させる。帰国後は、海外生活を通して得た経験を総括、内在化するための振り返りを行い、今後のより本格的な海外生活に備えさせる。</p>	
	教室英語	<p>小学校、中学校、高等学校の英語の授業を英語で展開する際に求められる、教室内特有の言い回しや語句を的確かつ効果的に使用することができるよう、ペアワークまたはグルーワークを通して実践的に指導することを目的とする。特に、始業と終業、指示、質問、説明、総括、賞賛、激励、注意喚起、などの教授行動を中心とした、実践的な英語コミュニケーション能力を育むとともに、学校行事、時間割、科目名、クラブ活動、施設、教育機器、文房具など学校生活に関わりのある語彙の指導も行う。</p>	
	ビジネス・イングリッシュ	<p>A practical course in workplace English that prepares students to use English for business in Asia and beyond. This course emphasises English communication skills and vocabulary development for a variety of business settings. Students will focus on the business English required for themes that include writing summaries and reports, preparing for international meetings, dos and don'ts concerning workplace presentations, avoiding office conflicts, and writing cover letters and resumes. Students will also pay attention to the differences between business cultures in different countries.</p> <p>本授業は、アジア、その他の地域で仕事をする上で必要な実用ビジネス英語を身につけることが目的である。この授業ではさまざまなビジネスの現場に向けた英語のコミュニケーションスキルや語彙力の強化を目指す。具体的には、会議用資料の作成方法、プレゼンテーションのノウハウ、社内における円滑な人間関係のすすめ方、カバー・レター（添え状）や履歴書の作り方などを英語で学び、実践する。また、ビジネスの慣習に関する国の違いについても検討する。</p>	
	ムービー&ドラマ	<p>この授業では、主に英語圏の映画やドラマなどを題材にして、そのスクリプトに表れる多様な言語表現に触れる。映画やドラマの設定や題材に応じて言語使用域（レジスター）が異なるため、登場人物の年齢、性別、地域、職業、階級などの社会言語学的なアプローチでその言語表現の多様性を理解する。また、日常生活の会話における自然な言語から、映画やドラマにみられる技巧的な芸術言語まで、その言語表現の特徴的な要素を概観し分析していく。</p>	

英語文化コース科目 専門科目	ディベート&ディスカッション	<p>The purpose of this course is for students to improve their communicative ability in English by learning fundamental debate and discussion skills. Through a variety of topical discussion themes, students will learn the strategies required to state their opinions, support their opinions with reasons, support those reasons with evidence, and organize information into a clear message. They will also learn how to make clear arguments so that they can participate fully in debating a variety of issues with their peers.</p> <p>この授業の目的は、ディベートとディスカッションの基礎的なスキルを身につけることで英語によるコミュニケーション能力を向上させることである。学生はさまざまな時事問題に関して自分の意見を述べ、意見の根拠を示し、収集した情報を用いて明確な主張を提示するなどといった、議論を行うための技能を身につけることができる。その際、多様なテーマの問題についてクラスメイトと議論する場を適宜設け、学習した技能を実践し、さらなる向上を目指す。</p>	
	アカデミック・ライティング	<p>Students will develop the background skills necessary for writing for academic purposes. Students will learn to combine research skills with writing skills to develop well-structured written work that adheres to academic standards. Attention will be paid to creation of thesis statements and outlines, supporting points with evidence, citing sources accurately, and logical progression of ideas. Research skills and writing skills developed during this course will help during writing of the graduation thesis.</p> <p>本授業を通して、学生は学術的な論文を執筆するための基礎的な能力を身につけることができる。学生はリサーチ能力とライティングのスキルを融合させることで、アカデミックな論文にふさわしい文章を書く方法を学ぶことができる。具体的には、シーシス・ステートメント（論文の主張）やアウトラインの作成方法、論拠や参考文献の正確な提示方法、論理的な議論の進め方を学習し、実践する。この授業で身につける能力は卒業論文の執筆にも役立つものである。</p>	
	英文法 I	<p>英語の4技能を運用する上で基盤となる英文法について正確に理解するとともに、実際のコミュニケーション場面においてその知識を能動的かつ効果的に活用できるよう指導する。特に、英文法のミニマル・エッセンシャルズ（文型、冠詞、名詞、代名詞、時制、助動詞、態、不定詞、分詞、分詞構文、動名詞、比較、接続詞、関係詞、仮定法、強調、倒置、挿入、同格、慣用句・慣用表現など）を円滑かつ効果的に活用することができるよう演習形式で指導する。そのため、単文及び談話における文法事項の事例研究をとおして、英語に関するメタ言語的な知見を深めるとともに、受動的な文法知識を能動的に運用できるようコミュニカティブかつアクティブな言語練習を行う。</p>	
	英文法 II	<p>英文法 I で学んだ知識を、実際に話したり書いたりする（産出）場面で使える技能にすることを目標とする。本授業では、様々な場面におけるコミュニケーションを達成する過程を通じて必要な文の組み立てや文法規則を学ぶ。例えば、人を描写する、過去の体験を話すといったコミュニケーション上の目標を達成するために必要な言語表現の規則をペア・グループワークなどの疑似的体験を通して学んでいくことにより、理解だけでなく産出能力の養成を目指す。</p>	

英語文化コース科目 専門科目	世界の英語	<p>This course addresses the differences (phonological, lexical, grammatical) among the native English varieties. In particular, the course focuses on American, British and Australian Englishes. Examples of actual language data will be provided to help students perceive and understand the distinctive qualities of each type. Students will also be introduced to non-standard varieties of English, such as youth speech and African American Vernacular English. By the end of the course, students will understand how the English language develops differently depending on regional and social factors.</p> <p>本授業は、アメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語などに英語を細分化し、それぞれの英語の音韻的、語彙的、及び統語的な差異を比較検討することを目的とする。各英語の言語的特徴を実証的に理解できるように具体例を提供する。また、非標準的な英語の例として、若者特有の言葉、アフリカ系アメリカの英語などにも触れる。本授業を通じて、地域的要因や社会的要因によって、英語がどのように多様な発展を遂げているかを理解する。</p>	
	国際共通語としての英語	<p>今日、国際的に使用される英語に関して、年齢・性別・地域・職業・階級などの社会言語学的要因がどのように影響し、どのような言語表現が通時的に発達し、共時的に成立しているかということ考察する。グローバル化する現代社会が英語という言語に与える影響は多様で複雑なものとなっているので、この授業では、特に現代における英語の言語様式や言語変化を対象にして、社会と言語、人間関係と言語、対人関係とコミュニケーションなどを取り扱う。</p>	
	英米文学入門	<p>イギリス、およびアメリカの文学・文化に触れ、批評の多様性、時代背景との関連性などの読み解き方を学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (4 磯部祐実子/7回) イギリス文学としてシェイクスピア、ミルトンといった古典文学から、カズオ・イシグロなどの現代文学までを扱う。 (7 戸田慧/8回) アメリカ文学ではエドガー・アラン・ポー、ナサニエル・ホーソーンといった19世紀の作品からアーネスト・ヘミングウェイ、スコット・フィッツジェラルドといった20世紀の作家までを扱う。</p>	オムニバス方式
	英語学入門	<p>この授業では、英語学の基本的な分野となる音声学・音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論、社会言語学などを概観し、また英語のコミュニケーションにおける言語スタイルの選択などの言語行動も含めて、通時的・共時的に英語言語の特徴を把握することによって、さまざまな英語学的分析方法を各自が応用できるようになることを目的とする。また、これまで触れてきた英語の表現を英語学的に捉え、多角的に英語という言語を理解していく。</p>	
	英語音声学	<p>英語学の諸分野のうち、英語音声学の基礎的な理解を深め、現実場面に応用する力を養う。具体的には、まず第一に、日本語と比較することによって英語の分節素およびプロソディーの音声学的特徴を明らかにし、同時に実践的な発音と聴き取りの練習を通して英語らしい発音の習得と聴き取りの力を身につけることを目的とする。さらに第二の目的として、英語の教授者として音声面の指導を適切かつ効果的に行えるようにするための基礎を築く。</p>	

英語文化
コース科目
専門科目

英語科教育入門	<p>英語教育を取り巻く諸問題について問題意識を高揚させるとともに、英語教育学に関する基礎知識を理解し専門的な興味・関心を抱かせるよう指導する。そのため、英語教育の理論と実践に関わる主要な問題や事象を取り上げてそれらを分かりやすく解説することにより、英語教育全般について興味と関心を抱かせるとともに、外国語科（英語）の教員免許状取得希望者ならびに教育職員採用試験の受験希望者などを対象にして、英語教師に求められるミニマル・エッセンシャルズならびに英語使用者としての基本的知識を獲得させることを目的とする。</p>	
比較言語学	<p>言語に依存するコミュニケーションに関しては、使用する言語の要因やコミュニケーションに介在する要因に基づいて、言語スタイルやコミュニケーションスタイルが成立しているが、グローバル化される現代では、一つの言語コミュニケーションの理解だけでは数々の問題が生じてしまうことになりかねない。そこで、この授業では、グローバル社会で使用される英語と日本語において、それぞれの言語コミュニケーションの特徴を理解し、比較することによって、適切な言語コミュニケーションが図れるようになるための背景を考察していく。</p>	
比較文化学 I	<p>This course addresses the social and cultural differences among the native-English using nations and societies: British culture, North American culture, and Australian and New Zealand culture. Examples of social conventions, systems and common practice among local people will be illustrated to help students understand the distinctive features of each culture. Special attention will be paid to the diversity of people that make up each of the nations, and the effect of minority groups on the nation as a whole.</p> <p>この授業ではイギリス、北アメリカ、オーストラリアやニュージーランドといった、英語を母語として共有する国や地域に見られる社会的、文化的差異を取り扱う。各地域の社会的慣習や制度、日常生活の習慣などから具体的な事例を取り上げて検討し、それぞれの文化の特徴を理解する。とりわけ、国家を形成する構成員である国民に内在する多様性や、マイノリティに分類される人々が国家全体に及ぼしうる影響を、各国の状況において考察する。</p>	
国際英語研究 I	<p>イギリスの戯曲を取り上げ、実際の作品を原文で精読することで、語彙力などの英語力を高めつつ、それぞれの作品世界や作家について知識を深める。また、舞台、映画などの映像資料を鑑賞し、各演出を比較する。さらに、同時代や周辺の社会的、文化的な事象を踏まえながら幅広い視野を持って考察することで、鑑賞力と情操の育成を目的とする。取り上げる戯曲家は、ウィリアム・シェイクスピア、クリストファー・マーロウ、ベン・ジョンソン、オスカー・ワイルド、バーナード・ショー、ジェームス・マシュー・バリーなどを予定している。</p>	
国際英語研究 II	<p>イギリス、アメリカのSF小説を読み、19世紀から20世紀にかけての科学と自然に対する認識や価値観の変遷について学ぶ。科学の発展と自然破壊、機械化と人権の問題など、さまざまな現実社会の問題が、SF小説においてどのように反映されているのかを考察する。原書を読んだ上で、映像化作品とも比較を行い、比較文化論としての考察も行う。扱う主な作家はH. G. ウェルズ、フランク・ボーム、エドガー・アラン・ポー、アイザック・アシモフ、アーサー・C・クラークなどである。</p>	

国際英語研究Ⅲ	<p>外国語としての英語を効果的に指導するために必要な知識、考え方の習得を目指す。外国語を学ぶことと、母語を身につけることの違いとは何か。言葉は親の言葉を真似するだけで覚えることができるのか。適切な言語学習の開始時期は存在するのか。学習に個人差はあるのか。このような問題に取り組むことによって、最終的には自身の学習、および指導に応用する力を身につける。授業は教員からの講義、および受講生同士の討議を進める。</p>	
国際英語研究Ⅳ	<p>この授業ではメディアの中の英語表現をとりあげてその多様性に触れながら、英語特有の言語様式を理解する。例えば、インターネットに見られるような英語表現、海外の音楽の歌詞、映画やドラマのセリフ、コマーシャルや広告の表現、新聞やニュースの英語など、身近にある英語表現を取り上げる。また、英語と日本語を置き換えてみることによって、英語らしい表現や日本語らしい表現を比較し、英語と日本語のコミュニケーションの特徴も探っていく。</p>	
英語児童文学	<p>英語で書かれたイギリス、およびアメリカの児童文学やファンタジー作品を原書で読み、それらの作品が書かれた当時の英米の歴史や文化的背景などを併せて学習することで、ファンタジーの世界がどのように現実社会の問題を反映し、構成されているかについて考える。また、それらの作品に関する文学批評や映像化作品などについても学ぶことで、時代によって作品が社会に与える意味合いの変化や需要のされ方の変化についても考察を行う。授業内で扱う主要な作家はJ. R. R. トールキン、C. S. ルイス、ルイス・キャロル、ジェイムス・バリ、アーシュラ・K・ル・グウィンなどである。</p>	
アメリカ文学史	<p>アメリカ文学の流れと作家、作品の内容、歴史などを、文学作品からの抜粋や映像を通じて学習する。歴史や文化的背景を学習した上で、原書で小説を読むことによって、アメリカ文学とその歴史について、より深い理解を得ることが本授業の目的である。扱う主要な作品は19世紀のアメリカン・ルネッサンスを代表するハーマン・メルヴィル、ナサニエル・ホーソーン、エドガー・アラン・ポー、および20世紀のロスト・ジェネレーションに属するアーネスト・ヘミングウェイ、スコット・フィッツジェラルドなどである。</p>	
イギリス文学史	<p>イギリスを代表する文学作品を、時代背景や文化と絡めながら歴史的に考察し、イギリス文学・文化の特質を学ぶ。詩、演劇、小説などから多様な作品を取り上げ、テキストを原文で読み、それぞれの特徴を把握する。範囲としては、古英語で書かれた古代の文学から始まり、シェイクスピアなどのルネサンス、ロマン派、ヴィクトリア朝、モダニズム、および現代の作品を扱い、また通常「イギリス文学」に含まれるアイルランドやスコットランドを出身とする作家の作品も取り上げ、作品を味読するとともに、「イギリス文学」の意味を考える。</p>	
アメリカ文化概説	<p>15世紀のアメリカ大陸発見から、20世紀までのアメリカの歴史と文化を概観し、アメリカ特有の価値観や文化的背景と関連付けて学習することで、アメリカへの理解を深める。宗教、人種、政治だけでなく、野球や映画、遊園地、ファッションといった多様な視点からアメリカ文化を理解することを目的とする。また、文学や映画、音楽、新聞、雑誌、演説といったさまざまな媒体を通して学習することで、より実際的な英語の読解力を身につけることも本授業の目的である。</p>	

イギリス文化概説	イギリスの代表的な文化について、その歴史をたどりながら文学作品や歴史的資料といった文字資料や、映画やテレビなどの映像資料を通じて、イギリス特有の価値観や慣習、歴史の基礎的な知識を身につける。取り上げるテーマは、イギリス王室、階級制度、言語、宗教、イギリスの地理、人種、食文化、衣服、住居、教育、演劇、スポーツ、ガーデニングであり、それらを多角的に学び、イギリスの文化的特徴を捉え、現代のイギリスへの影響を考察する。	
小学校英語教育Ⅰ	小学校における英語教育及び早期英語教育のあり方について、基礎的な知識を得るとともに、中学校英語教育への橋渡しも兼ねた教材のあり方について学修する。特に、現在多くの小学校で使用されている『Hi, friends!』などの各種資料を参考にしながら、各教材のねらい、構成、使用方法及び教材を作成する場合の留意点などに習熟させることを目的とする。この授業を通して、実際に、小学校・中学校における一貫した英語教育を可能とする教材開発を演習形式で行い、教材開発能力及び教材活用能力を育成する。	
小学校英語教育Ⅱ	「小学校英語教育Ⅰ」で作成・開発した教材を実際の教室場面で活用するために、小学校における具体的な指導技術について修得する。特に、学習意欲の高め方、授業過程と指導手順、言語活動の構成と実施手順、学びの成果の確認方法などに習熟させることを目的とする。また具体的な学習指導案の作成とともに、授業実践へと繋がるような知識技能を体得する。本授業では可能な限り実際の小学校での授業とリンクできるような手立てとして、授業内での授業ビデオ視聴や模擬授業に加えて、設定された授業時間以外でも小学校訪問を促進するなどの方策を取り、より学習効果を得られるようにする。	
英語科教育法Ⅰ	中学校及び高等学校の学習指導要領に示された外国語科の目標、科目ごとの目標、指導内容、言語活動、言語の働き、言語の使用場面、言語材料（音声、語彙、連語、慣用表現、文構造、文法事項など）、題材、内容の取り扱いなどについて理解を深めるとともに、英語の授業において実際に活用できる文構造や文法事項の用例を整理あるいは作文し、教科書の基本文を説明し自ら運用するに足る英語の文法知識と、それを活かした英語の指導力を養成する。	
英語科教育法Ⅱ	英語の授業を行う上で必要となる、外国語教授法の理解、教材研究、学習指導案の作成、言語活動の進め方、指導技術の運用などを具体的に解説するとともに、主な指導法を模擬授業や教育実習において学生が自ら応用できるよう、実践的な訓練の場を設ける。その際、文部科学省検定済みの教科書を用いて、モデル・リーディング、コーラス・リーディング、口頭導入、文型練習、Q&A、情報格差を利用した言語活動、英文和訳、和文英訳、口頭作文、指名、机間指導、板書、生徒の反応・応答に対する対応行動などに習熟させる。	
英語科教育法Ⅲ	本科目は、英語の授業を展開する際に必要な言語活動の進め方や指導技術の用い方を具体的に解説するとともに、それらの指導法を模擬授業や教育実習において実習生が自ら応用することができるよう、実践的な訓練に取り組む場を設けることを目的とする。その際、文部科学省検定済みの教科書を使用して、文構造、語彙、文法事項、題材などの復習、導入、説明、練習、整理を行うことができるよう、授業の流れに則した活用例に習熟させる。	

英語文化 コース 科目 専 門 科 目 コ ー ス 共 通 選 択 科 目	英語科教育法Ⅳ	<p>本科目は、模擬授業 (peer-microteaching; simulated classroom EFL teaching) の設計・実施・評価から成る一連のサイクルを経験することにより、英語の授業を観察あるいは評価する際に求められる分析的な評価能力を養成することを目的とする。その際、Reflective Teaching (反省的教授法) の理念に基づいて、実習生が自己の教授行動を鏡的に内観する認知過程を繰り返し経験することにより、授業改善のための手掛かりを自ら発見できるよう促す。</p>	
	マンガ・アニメーション研究	<p>マンガ・アニメーションは我々の生活からの派生物として生み出されたが、日本文化への定着が進んだ現在、我々の生活に新しい影響を与えるトレンドを与える先端的文化として、国内外において評価されている。日本の輸出産業としても注目されるマンガ・アニメーションについて、日本作品を中心に海外作品との比較によって、相互の影響関係を視野に入れつつ、その歴史と表現方法の変遷をたどるとともに、現実的な我々の生活空間への影響について考える。</p>	
	都市と文化財	<p>都市化が進む現在、我々の多くの生活空間は都市に集中してきており、都市を構成する要素が我々の生活空間に密接に繋がりを持つようになっている。それぞれの都市には、都市を象徴する「文化財」が存在し、その都市を彩る要素と成っている。本講義では、「文化財」として伝わるモノが、どのような場で、どのような需要を受けて生まれ、どのように受容され、消費され、今日まで伝わったのかを「都市」というキーワードのもとに考えるとともに、いまはまだ「文化財」と認識されていない消えゆくモノについても考える。</p>	
	地域と歴史	<p>我々の衣食住の生活は、それぞれの地域の持つ歴史や文化の中で育まれ、継承されてきた産物で構成されている。本講義では、高校までに習ってきた日本史・世界史をいったん離れて、歴史学とは何かを考えたのち、歴史学の基礎、歴史学の方法、歴史学の思考法を学び、そのうえで、地域の持つ資源やその特性の背景にあつて、それぞれを特徴づけている歴史について、地域ごとの違いや共通点に着目しながら理解することで、我々の生活空間を彩る文化を洞察する目を養う。</p>	
	多文化共生社会論	<p>国内においても移民が増加する現在、「他者」「異文化」を理解し、共生していく作法を身につけることは必須となっている。本科目では、日本をはじめとして世界の様々な地域で起こっているコンフリクトや共生の事例を学ぶことを目的とする。これを通じて、グローバル化の進展とともに変わりゆく日本の生活環境において、異なる他者とどのように折り合いながら生活し、協働していくのかを考え、実践するための視点を身につける。</p>	
	国際関係論	<p>国家、地域、民族の行為主体間で展開される、政治的、経済的、歴史的、軍事的、人種的、宗教的な相互作用と、そこに提起される諸問題を学際的な観点から考察する。さらに、人類の共存と平和ならびに文明の発展を探究する姿勢を育成するとともに、個々の事象とその周辺環境を巨視的に把握する分析力を深化拡充させることを目的とする。そのため、日本を座標軸の中心に据えた世界観と、特定社会の規範に照らした日本観を相対的に比較することにより、グローバルな人材が具備すべき基本的な知識と教養を習得させる。</p>	
	文化人類学	<p>諸民族の伝統・文化、社会、言語、政治・経済、宗教、教育、芸術・音楽・映像、住環境・風俗習慣などを比較することにより、人類とその営みに関する相対的な知見を深める。その際に、文化の多様性や重層性に注目しながら異文化間の相互理解を促すための事例研究に取り組むなどして、人類共通の価値基盤の普遍性あるいは民族固有の価値基盤の妥当性に関する理解を深めるとともに、対象社会の利益や繁栄のための言説について考察する。</p>	

Global Village Field Experience I	<p>The purpose of this course is to prepare students for their fieldwork volunteer program or internship. Students will learn vital information relevant to field study, such as local history, culture, current events and the political situation. It will also include the opportunity for students to learn the basic skills necessary for cross-cultural immersion and to stay safe during fieldwork. After the completion of the course, students will go abroad on their fieldwork experience, or participate in a volunteer program or internship.</p> <p>この授業の目的は、学生がフィールドワーク、ボランティア、インターンシップなどの目的を理解し、その準備のための情報収集、調査方法、プレゼンテーションの仕方などを身につけることである。行き先の歴史や文化、最近の出来事、政治情勢といった必要な知識について学ぶ。フィールドワーク、異文化体験やそのための安全な参加の仕方に関する不可欠な情報も合わせて扱う。そのうえで、実際に海外に行きフィールドワーク、ボランティア活動、インターンシップに参加する。</p>	
Global Village Field Experience II	<p>Students will reflect upon their experience in their fieldwork, volunteer program or internship. This class will explore a variety of projects, such as globalization, development, sustainability, leadership and others, in order to connect Global Village Field Experience I to their studies. By the end of the course, students will create a community-based project proposal, during which they will think critically about how they can take action to improve the world around them.</p> <p>海外でのフィールドワークやボランティア活動、インターンシップへの参加を振り返る。この授業では、Global Village Field Experience Iをその後の学びと関連付けるために、グローバリゼーション、開発・持続可能性、リーダーシップといった、様々なプロジェクトに取り組む。地域に根差したプロジェクトの計画を考えることによって、自分たちを取り巻く世界を改善するための方法について批判的に考えられるようになることを目指す。</p>	
インディペンデント・スタディ	<p>履修者が担当者から定期的に個別指導を受けながら、国際英語学科あるいは日本文化学科が扱う対象領域及び研究分野における諸問題や今日的課題を自由に取り上げて、履修者独自の観点から当該事象の分析や考察を試み、そして、その成果を所定の報告書にまとめる。本科目は、履修者の自律的で主体的な学習を求めるものであり、研究素材・研究計画・研究手法・作業手順などを統合的に検討あるいは策定し、考察や調査の結果に基づく根拠資料（ポートフォリオ、アンケートやインタビューの結果、関連資料の解説や翻訳など）に加えて総括的なレポートを提出する。担当者は、個々の履修者の研究活動を監督するとともに必要に応じて支援することにより、履修者に自発的な研究態度と基本的な研究能力が備わるよう体系的に指導する。</p>	
海外研修 I	<p>海外の文化に直接接することで、教養を高める。そのための準備として、事前授業を踏まえて実際に海外の大学機関での実践を体験する。8月初めより、約1カ月に渡って、海外(主に、アメリカ、イギリス)の大学機関において、集中的英語研修を行う。その間の詳細なプログラムは、開催大学機関と連携しながら示していく。プログラムの基本は、4技能をまんべんなくカバーすることで英語活用能力の向上を図り、生活の面での文化的理解を深めることである。</p>	

コース共通選択科目
専門科目

海外研修Ⅱ	英語圏（イギリス・マンチェスター市）での4週間のホームステイ滞在中に、英語学校における英語学習をとおして実践的なコミュニケーション能力を向上させるとともに英語文化に関する理解を深めつつ、現地の小学校並びにハイスクールにおけるインターンシップ（授業観察、支援、教壇実習など）に従事することにより、総合的な英語のコミュニケーション能力を向上させるとともに教育現場を通してイギリス文化について理解を深めさせる。	
海外研修Ⅲ	グローバル化が進む一方で、他の文化や思考様式に対する我々の知識や理解は、依然乏しい。情報化社会の中で、マスメディアの偏った情報に大きく左右される現実がある。本授業では、海外での生活を体験することにより、自分自身の目で、異なる文化を分析し、理解し、それを自分自身の言葉で伝える能力を養うことを目的としている。また、自分自身の言葉で、自国の文化を紹介し、異なる文化的背景を持った人との相互理解を深めることを目的とする。	
日本語フィールドワークⅠ（日本語の方言）	この授業では、実際に学外で方言の調査を行うことにより、日本語の方言研究の方法の基礎を学ぶ。日本語の方言研究は、土地の人々から、情報を提供していただいて初めて成り立つ学問である。方言調査には、基本的なルールやマナーもあり、また効果的な調査方法も存する。これら、方言研究には欠かせない、調査技術を習得させることを目的とする。また、実際に学外で、土地の人々と積極的に会話させることによって、その土地土地の言葉の背景にある文化や歴史について深く理解させることを目的とする。	
日本語フィールドワークⅡ（郷土資料調査）	日本語の歴史的研究に使う資料には、様々なものがあるが、その一つに郷土資料がある。郷土資料は、その土地土地の言葉の歴史を研究する上で、欠かせない資料である。郷土資料のなかには、既に公開されて、図書館等で見る事が出来るものもあるが、その多くは、旧家や寺社、各地の郷土資料館、博物館等に納められている。未発掘の資料も多い。特に、角筆文献は、郷土資料として、日本語の歴史的研究には重要な資料である。この授業では、学外でしか見ることが出来ない、郷土資料を研究資料とするための方法を、実地調査に基づいて身に付けさせることを目的とする。	
日本文化フィールドワーク	グローバル社会を生きていく中で、日本の文学・文化を知ることが、今後ますます重要なものとして認識されていくことが予想される。こういった時代の要請に応えるべく、国内の文学ゆかりの地を踏査することによって、日本文化を学ぶ手掛かりを得ることを目的とする。事前授業では踏査対象地が舞台となる文学作品についての講義を行う。そして受講生は、行程案の検討や、その土地についての調査をグループ学習により展開させ、成果発表を行う。	
地域連携文化セミナーⅠ	履修者は、広島市及び近郊の地域社会における諸活動あるいは諸行事に参画したり、国際英語学科、日本文化学科の学生として自発的な活動を計画・実施したりして、問題解決型あるいは体験型の学びを重なることにより、大学における学習内容を現場で検証あるいは活用する。たとえば、主な活動としては、小中高生に英語を教える（あやめ英語塾）、外国人向けに地図やメニューを英訳する（英語翻訳活動）、広島市を訪れる観光客を英語で案内する（英語案内活動）、小学校や中学校で英語の授業観察や学習支援を行う（学校インターンシップ）、留学生や日本語を母語としない海外出身の子供に英語や日本語を教える（外国人に対する英語・日本語指導）、観光大使などの営利を目的としないコンテストの入賞者として公的な活動に従事し表現力や言語力を鍛える（公的イベント参画）、公民館などでの英語活動に定期的に参加し支援する（広島市牛田地区支援活動）などが考えられる。担当者は、履修者の諸活動を監督するとともに必要に応じて支援することにより、履修者が地域社会の一員としての責任感を深め、社会貢献の方法を模索するよう体系的に指導する。	

専 門 科 目	コ ー ス 共 通 選 択 科 目	地域連携文化セミナーⅡ	本授業では、「キャリア・スタディ・プログラム」を通して身に付けたスキルや、学科内での専門的学びを、学外において、地域のコミュニティの中で役立てることを目的としている。具体的な活動としては、地域公民館での朗読会の開催、ミニコミ誌の作成、外国からの観光客への広島のご案内、インターネットを利用した日本文化の発信など、企画から実践まで、受講生が主体的に関わることで、積極性や協調性などを体得することを目指している。	共同
		海外インターンシップ	英語圏（アメリカ・カリフォルニア州）での4か月間のホームステイあるいは大学寮での滞在中に、英語学校における英語学習をとおして実践的なコミュニケーション能力を向上させるとともに英語文化に関する理解を深めつつ、現地の企業、商業施設、学校、公共施設などにおけるインターンシップあるいは体験学習を行うことにより、総合的な英語のコミュニケーション能力を向上させるとともに長期にわたる実体験を通してアメリカ文化について理解を深めさせる。	
関 連 科 目 I	教 職	教育原理	学校、子ども、幼児教育の3つのテーマをもとに、歴史的・社会的視点から見ることを通して、教育の原理や本質について理解する。また、以上の理論的考察とともに、さまざまな実践的課題について自分なりの見通しを持つことができる。到達目標は以下の3点である。1点目は、学校教育・保育の本質・原理について歴史的、社会的側面から説明できることを目標とする。2点目は、学校教育・保育をめぐる課題や問題について説明できることを目標とする。3点目は、学校教育・保育をめぐる課題や問題の解決や実践に向けた見通しを持つことができることを目標とする。	
		教育心理学	学校教育においては生徒の内面を深く理解し、一人ひとりの生徒が必要としている適切な支援を行うことが大切である。そのためには心理学の基礎を身につけ、心理学的な人間のとらえ方、支援のあり方について学ぶことが有意義である。本講義では、これまでに心理学において研究されてきた発達・学習・人間関係・評価についての成果をふまえて、それらを教育にどのように生かしていくかを考える。また、教育的な支援を必要とする生徒（障がいのある生徒）への理解を深め、その支援のあり方について考える。	
		教育社会学	身近な事例やメディアにあらわれた教育事象などをもとに、社会的に教育を捉える視点を養う。具体的には学校の役割、学校と社会階層、「子どもの誕生」、教育とジェンダーなどのテーマについての理論的考察およびそれらを通じた教育の現代的課題に対する実践的な見通しを持つ。到達目標は以下の3点である。1点目は、教育社会学の主要な概念を理解することを目標とする。2点目は、教育社会学の主要な理論を理解することを目標とする。3点目は教育社会学の理論、概念を用いながら現実の教育事象について議論できることを目標とする。	
		教職実践演習（中・高）	本授業科目は4年後期に開設されていることから、これまで教職課程履修の経過をみて、学生の指導を行うとともに、不足していると認められる知識や技能を補うことを目的とする。具体的には、中学校・高等学校教諭に必要とされる実践的な活動（事例研究、現地調査、模擬授業）を通して、教師としての資質能力、知識を身につけることにより教職生活へのよりよいスタートを図ることをめざす。1、2、5、8、9回については共同で実施し、それ以外の回については取得を目指す教科を勘案して3つのクラスに分級して行う。	共同

関連科目 I	教職	教育史	現代の日本においては、教育を受けることは国民の権利であり、全国共通の教育の学校システムにおいてすべての子どもが学ぶことは自明なことと捉えられている。しかし、こうした教育のありようは18～19世紀の欧米の教育思想や制度に強い影響を受けながら形成されてきたものである。本授業では、西洋と日本という二つの視点から、それぞれの子どもと子育ての歴史、教育思想史、学校の成立史、戦争と教育の歴史、戦後教育と福祉の歴史について学ぶ。	
		学習心理学	学習に関する基礎的知識を習得し、学習に関わる諸問題を理解することができるようになることを目標とする。具体的内容としては、学習の基礎理論である条件づけ、記憶・理解・知識の獲得における認知過程、及び動機づけに関して心理学で解明されてきた知見について講義するとともに、学校における学習指導を効果的に行うための基本となる事項については具体的事例をあげ、体験的実習や演習を採り入れながら授業を進めていく。授業を通して、児童生徒の学習面でのさまざまな問題を理解し、解決するための支援ができる実践的指導力の育成をはかる。	
		教育と法	教育行政のしくみ、主に学校教育制度を法的側面から考察する。教育法規の最新の改正情報や教育をめぐる裁判例や事件記事、統計的数値といった具体的な資料を取り上げ、学生が身近に教育制度を理解できるように解説する。また、教育を受ける中心となる子供の権利について詳しく解説する。教育委員会や学校をめぐる地域との連携など、学校を取り巻き、支える組織や協力体制、安全や危機管理、個人情報保護など、教員が理解しておくべき関連法規についても理解できるように分かりやすく解説する。	
関連科目 I	学芸員	観光学	近年の海外の旅行者の増加、海外での日本文化の認知の結果、我々の生活文化は観光産業においても大きな資源となってきた。これからの日本を支える産業とも目される観光について、その歴史や産業構造などの基礎的知識を身につけ、多岐にわたる観光学の広がり理解するとともに、「知る」・「伝える」ための観光プランの作成などを通じて、我々の持つ観光資源を有効に活用し、観光に結びつけて産業化に応用する力を実践的に身につける。	
		市民社会とNGO・NPO	高度情報社会において、今までにない速度で社会が変化し、政府や自治体のみでの公的サービスにより諸問題に対処するには限界が見えてきている。こうした変化に対応するために、まちづくりや環境保全等を推進する民間非営利組織(NPO)の活動が活発に展開されている。本講義では、身近な現代社会における様々な問題に注目しながら、NGO、NPOの活動や役割を理解するとともに、活動事例の中から、様々なNGO、NPO、営利企業が地域課題や社会課題に取り組む事例を分析し、取り組む課題と効果を理解し、社会における役割について考える。	

<p>世界遺産学</p>	<p>地域環境に存在する人類普遍の遺産である世界遺産を保護する条約とその制度について学ぶとともに、世界各地の文化遺産、自然遺産について検証し、今後の世界遺産の保護制度について考える。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (25 田頭紀和／4回) 世界遺産のうち、特に、環境的な側面から自然遺産に関して解説を行う。 (35 福田道宏／4回) 厳島神社と原爆ドーム、奈良・紀伊の世界遺産、石見銀山等の日本国内の世界遺産を解説するとともに、日本の文化財保護についても触れる。 (33 永野晴康／4回) 世界遺産条約と世界遺産の保護制度の概要、ヨーロッパの世界遺産に関する解説を行う。 (42 伊藤千尋／3回) アジア・アフリカの世界遺産の状況について解説を行うとともに、危機遺産等の問題につき言及する。</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>写真映像論</p>	<p>インターネットの普及によって、写真・映像は氾濫しており、今日、写真・映像のない状況を夢想することすら困難である。現代社会において、重要な伝達メディアであり、あまりに当たり前にありふれたものになってしまっている写真・映像について当たり前を疑うことから始める。まずは写真の原理を理解し、写真・映像など視覚表現の歴史を写真の発明からたどるとともに、現在の多様な在り方、発信の双方向性などからその特性や、限界と可能性、どのように向き合っていくべきか、実践的に考える。</p>	
<p>西洋服装史</p>	<p>服装は、時代や民族により異なり流行とともに移り変わっている。この授業では、現代の服装のルーツとなる西洋の服飾史の変遷から、それぞれの時代の服装成立の条件から、気候や風土の違い、歴史的背景や繊維加工技術の発展などを読み取り、服飾についての基礎知識を修得する。また、アイテムの特徴から、デザインや素材、色、形などの基本的な知識を学び、服飾や装飾から現代のファッションについての意識を高めることを目的とする。</p>	<p>隔年</p>
<p>日本服装史</p>	<p>この授業では、体系的な日本の服装の歴史を学び、デザインや色彩、被服それぞれの構成など、それらの巧妙な組み合わせを知ること、服飾の多角的な見方を習得することを目的とする。また、自らの装う意味や他者のファッションが表現のするものを見抜く力も色や文様などの意味を知ることにより養成する。この授業で取り扱う時代は縄文、弥生、白鳳、飛鳥、奈良、平安、鎌倉、室町、戦国、江戸、明治、大正、昭和初期までとし、考古学的視点も含めた内容とする。</p>	
<p>生活造形論 (工芸とデザイン)</p>	<p>私たちの生活は様々なものに囲まれている。これらのものはどのような考えをもってつくられ、私たちの生活とどのように関わっているのだろうか。授業では産業革命以降のデザインという行為の史的展開と、基本的なデザイン理論、現代デザインの背景と課題を解説する。デザインとは何か、デザインの歴史やデザインの役割や可能性について理解を深めるとともに、デザインに対して日常的に関心を抱く態度を養うことを目的とする。</p>	

学芸員	関連科目 I	日本建築史（含住居史）	日本の古建築の特色を、寺院・神社・住宅・城郭建築の構造や意匠・技術を通して理解し、日本の文化や伝統および先人の知恵を感じ取ることを目的とする。授業の内容としては、日本建築の種類、社寺建築の構造と細部意匠、飛鳥・奈良時代の寺院建築、平安時代の寺院建築、中世の寺院建築、神社本殿の種類と構造、近世の社寺建築と地方色、古代の住居と寝殿造、寝殿造から書院造へ、書院造の構造、城郭建築（天守）の構造などを予定している。	
		西洋建築史	過去のすばらしい建築をみる喜びを体験し、西洋建築の歴史と様式について基本的な理解を得ることをめざす。授業の内容としては、建築と建築家、西洋建築史の枠組み、古代ギリシアの建築、古代ローマの建築、キリスト教建築のはじまり ビザンティンの建築、ロマネスクとゴシックの建築、ルネサンスの建築、バロックの建築、ロココと新古典主義・折衷主義の建築、アールヌーヴォーと近代建築、建築のオーダー、ヨーロッパ以外の西洋建築を予定している。	集中
		感性デザイン論Ⅰ （ポップカルチャー）	現代の日本の若者文化（ポップカルチャー）は、海外から「クール・ジャパン」と呼ばれ、称賛されている。特にアニメ、マンガ、ファッションは、日本独自のデザインや感性、個性が高く評価されている。この授業では、ポップカルチャーの中でも、特に日本の少女文化（ファッション、少女マンガ等）を取り上げ、戦後の少女文化の変遷を辿ることで、各時代に少女時代を過ごした世代が、どのような価値観（恋愛観、結婚観、人生観、将来像）を持っていたのか、また、社会背景、文化、生活習慣が女性の生き方や思考にどのような影響を与えてきたのかを理解する。	隔年
		感性デザイン論Ⅱ （ファッション文化史）	現代社会において、過剰なまでに氾濫するモノを選択するうえで、デザインは大きな要素を占めている。現代だけでなくひとはつねに新しいデザインを求めてきた。インテリア、ファッション等においても、デザインはわたしたち消費者を刺激する強い力といえる。この授業では私たちにとってもっとも身近なファッションデザインをとりあげ、特に若者の日常生活から発生・流行した“ストリート・ファッション”に注目し、戦後のファッションの歴史と、彼らの価値観の変化、および若者を取り巻く環境の影響について考察する。	隔年
		服飾美学	服飾は時代や地域・文化によって、様々な文化的表現、思想的表現を行い、また、社会的地位を表象している。この授業では、服飾に用いられる色彩、素材、技術、組み合わせを分類・分析することで、服飾が象徴する思想を客観的に読み解けるようになることを目的とする。授業内容としては、絵画における服飾美学、演劇における服飾美学、祭礼における服飾美学、文学における服飾美学を予定している。それぞれの内容において動画資料などを用い、具体的な例に触れることを重視している。	隔年
司書・司書教諭		情報メディアの活用	図書館資料を構成する多様なメディアに関する理解を深め、情報メディアを活用するための実務的技術の育成を目指す。デジタルアーカイブという観点から、情報メディアの意義・種類・特質、メディアを扱う上で必要な著作権や情報倫理について学ぶ。またコンピュータやネットワークの基本的操作や情報メディアを管理・運用するための技術を学ぶ。学習メディアセンターとしての役割を認識し、図書館に関わるさまざまな情報提供と学習者の情報メディア活用を支援するための知識と技術を修得する。	

関連科目Ⅰ	司書・司書教諭	図書館情報技術論	図書館業務に必要な基礎的な情報技術を修得するためにコンピュータ等の基礎、図書館業務システム、データベース、検索エンジン、電子資料、コンピュータシステム等について解説し、必要に応じて演習を行う。まず、コンピュータを使いこなし、自ら情報を収集し、整理し、保存する能力を身に付ける。また、図書館とコンピュータとの関係について深く理解させ、司書の業務にコンピュータを有効に活用する能力を身に付けさせる。学習者の個々に能力に応じて指導し、コンピュータ活用能力の基礎力アップを目指したい。	
		情報サービス論	図書館における情報サービスの意義とあり方について、特に近年の電子図書館化による多様な情報ニーズへの対応に主眼をおき、情報サービスの理論と情報検索の実際を解説する。まず、情報サービスの定義について明確にし、情報サービスの歴史と情報サービスの意義、サービス環境、館内インフォメーション、図書館利用者教育、情報リテラシー教育について述べる。また、情報サービスの情報源として、レファレンスコレクションの種類や電子メディアの種類と特徴、レファレンスコレクションの構築について理解させる。	
関連科目Ⅱ	日本語教育	日本語教授法Ⅰ	初級の学習者に日本語を教える際には、初級の学習項目についてその意味と用法を教師が理解していることが不可欠である。加えて、学習者のレディネスやニーズを考慮し、教案を作成し、授業活動を実行する力が不可欠である。本授業では、主に初級前半の学習項目についての把握し、初級の学習項目を教える技術を身につけることを目的としている。授業では、日本語初級前半テキストを教材とし、教案作成、模擬授業を通して、これらの力を身につけていく。	
		日本語教授法Ⅱ	初級の学習者に日本語を教える際には、初級の学習項目についてその意味と用法を教師が理解していることが不可欠である。加えて、学習者のレディネスやニーズを考慮し、教案を作成し、授業活動を実行する力が不可欠である。本授業では、主に初級後半の学習項目についての把握し、初級の学習項目を教える技術を身につけることを目的としている。授業では、日本語初級後半テキストを教材とし、教案作成、模擬授業を通して、これらの力を身につけていく。	
		日本語教授法Ⅲ	中級以上の学習者を教える際には、できるだけ生の日本語、あるいは、これに近い日本語に触れるとともに、4技能とそれぞれのサブスキルを意識した授業、これらのサブスキルを組み合わせ、現実世界のタスクに近い教室活動を行なうことが必要である。本授業では、主に中級以上のレベルの授業を行う技術を身につけることを目的としている。授業では、中級者向けテキストの分析、教案作成、模擬授業の実践を通して、これらの力を身につける。	
教職	教職論	<p>教職をめぐる組織・制度・環境等について学び、教師としての資質・能力に何が求められるのかを追究する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (27 戸田浩暢／13回)</p> <p>「教職の要件」、「教職の意義と教員の使命・資質」、「教員の研修と服務規程」、「初等・中等教育と教員」、「教員養成と教職課程」、「求められている教師の資質・能力及び指導力」等を学ぶ。また、特別講義として、教職経験者から現場の実際について講話を聞き、学びを深める。</p> <p>(41 大橋隆広／2回)</p> <p>「教員の仕事と役割」、「特別活動の在り方について」、それぞれについて授業者が説明し、理解を深める。</p>	オムニバス方式	

教育課程論	<p>中等教職をめざす学生に必要とされる「教育課程」の基礎について学ぶ。第一に、日本の教育課程の歴史と日本の新しい教育課程の取り組みについて知ることで、近代学校成立以降の日本の教育課程の変遷と現在の姿を理解する。第二に、教育課程を支える基本的な考え方や仕組み、教育課程編成の方法原理、学習指導要領、教育評価のあり方を学び、教育課程編成のための基礎的な能力を身につける。第三に、学力格差、新しい学力観、カリキュラム・マネジメント、学校間の移行期の教育問題を取り上げ、現代社会における教育課程を取り巻く諸問題について理解を深める。</p>	
教育方法論（情報機器及び教材の活用を含む）	<p>教育において、自ら学び、自ら考え、自ら決断し実行できる力を育成することが最も重要な教育目標となってきた。このような中で、これまで知識の教授に主眼をおいてきた教科指導から、自己学習能力を最大限に発揮させることのできる新しい学習指導への移行が模索されている。この講義では、伝統的な教育方法をふまえた上で、新たな視点から教科指導の方法、教育技術の開発、教育評価の問題について考えていく。具体的には、近代学校成立以来の伝統的な教育・学習方法である一斉指導およびそれらの伝統的な方法に代わる近年の個に応じた指導、協働学習などの教育・学習方法について、また近年の情報機器・技術の発展を踏まえたICTの活用方法について、そして従来の伝統的な教育評価法である相対評価、量的評価および近年の絶対評価、到達度評価、ルーブリック評価などの新しい教育評価について、説明する。</p>	
生徒・進路指導論（進路指導の理論及び方法を含む）	<p>生徒指導は、学校教育において生徒一人一人の個性を伸ばし、社会性を育てるうえできわめて重要な役割をもっている。本講義では、生徒が日常生活で直面している課題や問題を認識したうえで、将来を見据えて課題を解決していくために、教師としてどのような支援を行うべきかを考える。そして、積極的な生徒指導および進路指導の観点から生徒への対応のあり方、それらが有効に機能するために教師に求められる役割について研究する。具体的には、「生徒指導の意義と課題」、「生徒指導の原理と理論」、「生徒理解の進め方」、「学級（ホームルーム）経営の進め方」、「生徒指導と道徳教育」、「教科指導と生徒指導」等を学ぶ。</p>	
特別活動論	<p>『中学校学習指導要領解説〔特別活動〕編』（文部科学省）の内容を周知することで、特別活動の意義を理解し、その内容、計画、実践の方法などについて学習する。具体的には、「特別活動の目標・内容」、「学級活動の事例研究」、「学校行事の事例研究」、「模擬講話（個人発表）を通しての指導講話のあり方・話し方研究」、「学校行事「文化的行事」の実際（DVD）の検討」等を学ぶ。以上を通して、特別活動の教育的意義を踏まえた上で特別活動の実践を構想する方法や力量を養うことを目指す。</p>	
学校カウンセリング	<p>今日、学校教育の現場では、不登校やいじめなどさまざまな問題が見受けられる。中学生・高校生の時期は青年期にあたり、その心理的特徴として、性差や個人差が目立つこと、アンバランスな心身の発達、抽象的な思考の発達により関心が自己の内面に向かうことなどをあげることができる。この講義では、ライフサイクル上、非常に不安定になりやすいこの時期の生徒を、私達はいかに理解し、また、その心理的問題に対して、どのように対応すれば良いかを考えたい。</p>	

<p>道徳教育指導論</p>	<p>『中学校学習指導要領解説〔道徳〕編』（文部科学省）の内容を周知することで、道徳教育の意義を理解し、その内容、計画、実践の方法などについて学習する。具体的には、「道徳教育の目標・内容」、「外国の道徳教育の現状」、「道徳の授業づくりと学習指導案の書き方」、「道徳授業（DVD）の参観と授業検討」、「道徳の模擬授業と授業分析」等を学ぶ。以上を通して、道徳教育の教育的意義を踏まえたうえで道徳教育の実践を構想する力量や方法を養うことを目指す。</p>	
<p>介護等体験 I</p>	<p>小学校もしくは中学校の教諭の普通免許状の取得を希望する場合、特別支援学校（2日間）及び社会福祉施設（5日間）において7日間以上の介護等体験を行う必要がある。介護等体験は、様々な支援・福祉を必要とする、様々な方々と出会い、一人一人の生き方の多様性、重みを知ることが目的とする活動である。これらの活動を通じた学びは、教育実習において、子ども達をみる目（理解）に生かされてくることを、十分自覚して取り組む必要がある。</p>	<p>共同</p>
<p>介護等体験 II（事前・事後指導）</p>	<p>介護等体験の意味や本質について考え、その上で介護の現場としての特別支援学校における指導の実際や課題、各学校における日常生活や教師の活動について、また社会福祉施設における施設利用者の実状などについて学ぶ。</p> <p>（オムニバス方式/全10回） （41 大橋隆広/2回） オリエンテーションを実施し、介護等体験の意義と目的等について理解を深めさせる。 （27 戸田浩暢/2回） 介護等体験に係る留意点について理解させる。また、介護等体験の前期の事後指導において、体験した内容を省察するとともに体験者の間で共有することを目指す。 （15 神野正喜/1回） 介護等体験の後期の事後指導において、体験した内容を省察するとともに体験者の間で共有することを目指す。 （41 大橋隆広・27 戸田浩暢・15 神野正喜/5回） （共同） 特別支援学校（聴覚障害）・特別支援学校（視覚障害）・高齢者福祉施設・障害者福祉施設等の特別講師から、介護等体験での現場における指導の実際や課題、日常生活や教職員等の活動についてや、施設利用者の実状などの講話を伺い、介護等体験に係る学びを深める。</p>	<p>オムニバス方式・共同（一部）</p>
<p>教育実習 I</p>	<p>中学校・高等学校において1～2週間の観察・参加形式の教育実習を行う。教育実習は、大学において学んだ教職に関する科目および教科に関する専門科目の知識・技術および大学内外におけるボランティア活動の体験等をもとに得た知見を、実際の教育現場において指導教諭から指導を受けながら生徒たちとの間に展開することである。その実践を通じて、教師としての自らの適性、教育実践の技術的な面を学ぶことをめざす。</p>	<p>共同</p>
<p>教育実習 II</p>	<p>中学校・高等学校において2週間の観察・参加形式の教育実習を行う。教育実習は、大学において学んだ教職に関する科目および教科に関する専門科目の知識・技術および大学内外におけるボランティア活動の体験等をもとに得た知見を、実際の教育現場において指導教諭から指導を受けながら生徒たちとの間に展開することである。その実践を通じて、教師としての自らの適性、教育実践の技術的な面を学ぶことをめざす。</p>	<p>共同</p>

関連科目Ⅱ 学芸員	教職 教育実習Ⅲ（事前・事後指導）	本授業では教育実習前・後の指導を行う。教育実習の事前指導としては、教育実習の意義・目的を学ぶとともに実習中の授業への準備として、それぞれ取得を目指す学校段階・教科に関わる模擬授業を行う。また、現場の教師の講話を通して教育現場の実際について学ぶ。事後指導としては、教育実習を通して学びえたことをアンケート、集団討論、発表、個別面接により自覚的に捉えることを目指す。	共同
	博物館教育論	博物館は、実物資料を通して人々の学修活動を支援する社会教育施設である。博物館における教育活動の基盤となる理論や実践に関する知識と方法を習得し、博物館の教育機能に関する基礎的能力を養う。博物館教育の意義と理念、コミュニケーションとしての博物館教育、博物館教育の方針と評価について検討し、博物館の利用実態と利用者の博物館体験、博物館における学びの特性を解説、博物館教育活動の手法、企画と実施などの実際を学ぶ。また博物館と学校教育についても取り上げる。	
	博物館概論	地域の学習の場として存在する博物館は、我々の生活に密着した文化、環境、技術等を伝達する貴重な場である。本講義では、博物館に関する基礎的知識を理解し、専門性の基礎となる能力を養う。まず博物館とは何か、その歴史に簡単に触れた後、博物館の定義（類縁機関との違い）、種類（館種、設置者別、法的区分等）、目的、機能について具体的に学ぶ。また、わが国及び諸外国の博物館の歴史と現状を踏まえ、そこで「専門的事項をつかさどる」学芸員の役割と実態について、考える。あわせて、博物館関係法令を概観する。	
	博物館経営論	博物館の形態面と活動面における適切な管理・運営について理解し、博物館経営（ミュージアム・マネージメント）に関する基礎的能力を養う。まず博物館の経営基盤として、ミュージアムマネージメントの意義を説き、行財政制度、財務、施設・設備（ユニバーサル化を含む）、組織と職員などについて解説し、使命と計画と評価、博物館倫理（行動規範）、博物館の危機管理利用者との関係に関して紹介し、さらに博物館における地域や博物館間の連携にふれる。	
	博物館資料論	博物館資料の収集、整理保管等に関する理論や方法に関する知識・技術を習得し、また博物館の調査研究活動について理解することを通じて、博物館資料に関する基礎的能力を養う。まず博物館における調査研究活動についてその意義と内容を検討した後、博物館資料の概念として、資料の意義、資料の種類、資料化の過程を検討する。また博物館資料の収集・整理・活用として、収集理念と方法、資料の分類・整理、資料公開の理念と方法（アクセス権、特別利用等を含む）について論じる。	
	博物館情報・メディア論	博物館における情報の意義と活用方法及び情報発信の課題等について理解し、博物館の情報の提供と活用等に関する基礎的能力を養う。博物館における情報・メディアの意義を考察した後、博物館情報・メディアの理論として、博物館活動の情報化、資料のドキュメンテーションとデータベース化、デジタルアーカイブの現状と課題、映像理論、博物館メディアの役割と学習活用などを検討し、博物館における情報発信、博物館と知的財産などについても解説する。	

関連科目Ⅱ 学芸員	博物館資料保存論	博物館資料の保存に関する理念、その目的と意義を理解し、実際について基礎的能力を養う。「博物館法」に端的に表われているように、博物館はいくつもの機能を持っているが、外部から最も見えづらいのが保存である。博物館は収集した資料を保存し、守り伝えてゆく使命を負うが、資料は多様でその保存方法も様々である。展示と保存はしばしば背反するが、保存の必要性、資料の価値を周知するためにも展示は重要である。展示と保存の両立、或いは均衡といった観点からも博物館資料について考える。	
	博物館展示論	来館者にとって、博物館の最も身近な機能は展示である。展示のしかた次第で、来館者にとっての博物館資料の認識まで左右されかねない。資料をいかにわかり易く、或いは、見易く、また、よりよく見せるかという技術は博物館学芸員にとって必須のものである。もちろん、博物館と一口にいてもその展示室の限界や可能性はさまざまである。ここでは、そもそも展示するとはどういうことか、その意義と理念を学ぶと同時に、いくつかの具体例をもとに、展示方法に関しての技術や知識を習得する。	
	博物館実習Ⅰ	博物館学芸員の業務を理解し、実践的能力を養う。その実習Ⅰでは、学内で博物館資料の取り扱いや展示の基礎的知識・技能を実践的に学ぶ。まず、博物館資料の種類や性格について改めて学んだ後、資料の点検と整理保管、梱包を実際に行う。取り扱いでは額や掛け軸、屏風、卷子などの絵画、工芸品、服飾品など実物を用いて技能の習得をする。写真・拓本のとり方、植物資料の維持管理などについて実習を行うほか、学内で展覧会を企画して開催する。 (オムニバス方式／全30回) (35 福田道宏／27回) 学内実習全般のオリエンテーション、及び服飾品を除く博物館資料の取り扱い、資料の記録、梱包、展覧会の企画開催など実践的実務の学びを担当する。 (25 田頭紀和／2回) 植物公園への引率及び植物資料の維持管理について現地で講義する。 (39 檜崎久美子／1回) 博物館資料のうち服飾品の取り扱いについて担当する。	オムニバス方式
	博物館実習Ⅱ	博物館学芸員の業務を理解し、実践的能力を養う。その実習Ⅱでは、Ⅰで学んだ作品の取り扱いや展示の知識・技能を踏まえ、実際の博物館園において1週間程度の実務実習を行う。実習先は受講者の卒業研究テーマなどを勘案して、決定する。館園により実習内容は様々だが、実習期間中、毎日日誌をつけて実習先担当学芸員の検印を受けるとともに、実習後、自らの実習内容について受講者全員の前で口頭での報告をし、レポートにまとめて、学修内容の定着をはかる。	
	博物館実習Ⅲ	博物館学芸員の業務を理解し、実践的能力を養う。その実習Ⅲでは、多数の博物館がある関西もしくは関東などの遠隔地で2泊3日の見学研修、その事前事後指導を行う。大規模館から小規模館まで、また国公立、私立など設置・運営の形態の異なる博物館を見学することで、博物館の多様さとその実務を学ぶ。事前に見学先について受講者自身が調査して冊子にまとめ、見学後はレポートを提出する。また、ⅠからⅢの受講生の報告書を編集して、『博物館実習報告』を刊行する。	

生涯学習論Ⅰ	<p>本科目では、将来、博物館学芸員・図書館司書や社会教育主事など社会教育関連の職種に就くための基本的な素養を身につけると共に、社会教育の観点から生涯学習の全体像を理解することを目指す。まずは、日常生活の中で見聞きする「生涯学習」のイメージから離れて、生涯学習をめぐる国際機関および各国の政策、日本における社会教育の歴史と現状、人々の多様な学習活動の諸相について幅広く学んだうえで、具体的に社会教育機関における生涯学習のあり方について理解する。</p>	
図書館概論	<p>図書館とは何か、図書館の機能や社会における意義や役割について理解を図る。また、図書館がどのような歴史を持ち、現在どのような種類の図書館があり、各館種の図書館にどのような違いがあるか、その社会的意義、図書館の自由、著作権の知識、さらに、図書館職員が果たすべき役割とそのため資格および専門性の内容、図書館に係わる類縁機関について、そして、図書館の現在の課題とこれからの展望など、幅広いテーマの基本を知り、考察することによって、その中で、特にまず、身近にある図書館に興味と関心が持てるよう概説する。</p>	
図書館制度・経営論	<p>市民の知る権利（知る自由）を穂書する機関が図書館である。その権利保障機関としての図書館を支える法的環境の制度等に触れていくとともに、公立図書館の経営に係わる諸問題を概説する。図書館が市民に親しまれ役立つ施設となるために求められる経営のあり方を考える。例えば、図書館評価と統計、図書館サービスの評価、図書館の建設、図書館の施設と設備、図書館の管理運営上の諸問題、危機管理など、さらには図書館職員を取り巻く現状と課題、図書館経営の現状と課題などについて講義する。</p>	
図書館サービス概論	<p>公立図書館のサービス活動の内容を中心に、それを支える理念および近年の公立図書館のサービス活動の歩みと現在の課題を概説し、公立図書館への関心と理解を深める。公立図書館のサービス活動の歩みについて概説し、図書館サービスの概要、貸出の意義や登録・貸出方法・貸出の規程、予約サービス、相互協力、図書館サービスと著作権、行事・集会活動、AVサービス、利用に障害のある人たちへのサービス、全域サービスと図書館システムについて述べ、最終的には図書館の自由とは何かということについて理解させる。</p>	
情報サービス演習Ⅰ	<p>レファレンス・ワーク演習と関連して、文献やデータの検索が自在に行えるようにする。演習問題を文献やweb-siteから検索して回答を導き出す能力をつける。検索のツール、例えば、蔵書検索として、NDL、Webcat、Worldcat、雑誌記事検索として、NDL、NIIなどを利用する方法を学ぶ、さらには、古典籍や漢籍、公文書、政府関係資料、法令関係資料、判例や特許関係の資料の検索ツールについて学ぶ。また、さまざまな情報検索問題を与え、それを解決させることにより、情報検索問題を与え、それを解決させることにより、情報検索の技術の向上を図る。</p>	
情報サービス演習Ⅱ	<p>レファレンス・サービスを行うための、問題解析、情報源の探索、情報の評価、回答に至る一連のプロセスを演習により習得する。web-siteや図書館の活字資料から自在に情報を求めることが出来るようにする。レファレンスの問題演習を実際に行わせることによって、実践的技術を修得させる。また、レファレンスのインタビューを練習させることによって、質問の受け方の訓練を行う。また、質問内容の調査や回答の実際例を学び、実践的技術を身に付ける。</p>	

図書館情報資源概論	<p>公立図書館における資料の選択・収集の問題を中心に、図書館資料の特質と種類、新しいメディア、資料の利用、出版流通、蔵書管理と保存等の問題について学ぶ。まず、図書館資料とは何かについて明確にさせ、図書館資料としての図書、雑誌と新聞、地域資料、小冊子、地図、楽譜、外国語資料、AV資料、電子資料、インターネット情報など、さまざまな資料について理解させる。さらには、資料選択、複本購入の問題、資料選択の実際と課題、図書館資料の保存と電子化などの問題について述べる。</p>	
情報資源組織論	<p>図書館がその社会的役割を果たすための基本である図書館資料（図書館情報資源）について、その資料組織とはなにか、なぜ必要なのかといった内容から、資料が組織化されている現状、そして図書館が扱う資料・情報を組織化していく上で必要となる知識である目録法と分類法について概説する。最終的には資料組織についての理解を深める。資料組織の業務と意義、書誌コントロール、OPAC、記述目録法の実際、主題目録法について学び、分類法の基礎を理解させる。</p>	
情報資源組織演習Ⅰ	<p>今日の目録作業はコンピュータ化されそのフォーマットは国際標準化され、日本でもそれに基づいて『日本目録規則』（NCR）もできている。この『日本目録規則』を十分に理解して、これにより資料の目録が記述できるようになることを目指す。『日本目録規則』は、国際標準書誌記述（ISBD）に準拠していることを理解させる。タイトル関連情報、版表示と関連事項、出版事項、対照事項、注記などについて説明し、演習を通して正確な記述が出来るようにしていく。</p>	
情報資源組織演習Ⅱ	<p>先の『日本目録規則』（NCR）への理解を踏まえたうえで、『日本十進分類法』（NDC）についてその意義と役割への理解をすすめる、これにより資料に分類記号が与えられるようになることを目指す。個々に『日本十進分類法』の演習を解かせることにより、資料の主題を分析し最適な分類番号を付与することが出来るようにしていく。『基本件名表目標』（BHS）の仕組みを理解し、件名（主題を表す言葉）の与え方について学び、資料の主題を分析し最適な件名を付与することが出来るようにしていく。</p>	
児童サービス論	<p>公立図書館の児童サービスについて、乳幼児から中学生くらいまでを対象と考えて、児童サービスの意義とその歩み、子どもの読書の現状と読書の役割、絵本や児童文学などの図書館資料についての知識と児童書の選択・収集・保存、資料提供等の基本的なサービスと読み聞かせやストーリーテリングなどの行事・集会活動等のサービス内容、児童サービスに係わる施設・設備のあり方、ヤングアダルト・サービス、学校図書館の状況と公立図書館による学校図書館への援助、それに現在のさまざまな動きと課題等を概説する。特に、児童書の内容を知り、児童サービスの意義について理解を深めることを目的とする。</p>	
図書・図書館史	<p>図書館は人類が生み出した「知的財産」を「収集・整理・保存・提供する」ための機関である。まさしく、人類の歴史のうえに成り立つ機関なのである。そうした図書館の社会的役割を踏まえながら、世界と日本の図書および図書館の歴史を概説する。世界における、文字と図書の歴史を概括し、古代の図書館、中世の図書館、近代の図書館についてそれぞれ理解させつつ、また、各国の図書館の現在について紹介していく。日本についても同様に、古代、中世、近世、明治時代、戦後、現代へと、時代を追いながら行使し、時間と場の広がりの中で、日本の図書館の現状を意識させる。</p>	

<p>図書館サービス特論</p>	<p>実際に起きた様々な「図書館の自由」に関する事例について学び、その問題点をともに検証していく中で、図書館の存在意義や役割、サービスの意味、図書館のあり方について考察する。図書館サービス概論で学んだ内容を発展的に学習し、理解を深める観点から、図書館サービスを支えている規範について取り上げる。とくに、図書館のあり方が極限で問われる「図書館の自由」の問題について、過去の図書館の自由に関する事例を素材にして解説する。それらの事例を検証しながら、現実には置かれた図書館の姿を理解させる。さらには、その現実を踏まえたうえで、図書館の使命・役割を果たすべき図書館の在り様について、考察・提起していければと思っています。</p>	
<p>図書館基礎特論</p>	<p>図書館は人びんに対し、様々なサービスをしている。その姿は決して一様なものではない。こうした図書館を様々な視点から把握することで、図書館をより深く、より多面的に理解していく。具体的には、日本における様々な種類の図書館について概説し、外国における図書館の状況についても解説することで、図書館をいろいろな方向から見るができるようにしていく。さらには、図書館で提供する専門的な主題の資料や特殊な資料について、多角的に捉え理解して、図書館の役割について考えさせる。</p>	
<p>図書館情報資源特論</p>	<p>人類の「知的財産」の「収集・整理・保存・提供」という役割を担う図書館が扱う資料は、図書だけでなく実に幅広い。この図書館が扱う様々な情報資源（図書館資料）の現状について、印刷資料（図書や小冊子、地図などの印刷資料、新聞・雑誌などの逐次刊行物）、非印刷資料（視聴覚資料など）、それぞれの資料について、その特徴や扱い、現状と課題について概説する。図書館が提供する情報資源を使いこなすことを目指すとともに、情報資源の将来的なあり方について考えさせる。</p>	
<p>読書と豊かな人間性</p>	<p>人が成長していくためには、読書は欠かせない。人間の発達にとって「読書は権利」なのであり、その権利を保障するための機関のひとつが学校図書館である。子どもの読書状況と読書の意義、子どもの本の内容について概説したうえで、読書を推進する施設としての学校図書館や関連施設の役割および現在とこれからの問題を考察する。絵本や児童文学など、基本的な児童書を紹介することにより、子どもの本に関心を持ち、子どもの読書の現状と問題を幅広い視野で理解させることを図り、読書する子どもたちを育て、魅力的な学校図書館づくりができる能力を身につけることを目的とする。</p>	
<p>学校経営と学校図書館</p>	<p>1997（平成9）年の学校図書館法の改正により、2003（平成15）年4月から12学級以上の学校に司書教諭が配置されている。1998（平成10）年には、学校図書館経営の中核を担う司書教諭を養成する「学校図書館司書教諭講習規程」が一部改正された。司書教諭の資格を得るための講習で履修すべき5科目の一つである本科目では、学校図書館の教育的意義やその経営・管理、司書教諭の役割などについての理解を図り、学校教育目標の達成を支援する学校図書館のあるべき姿について考察する。</p>	
<p>学校図書館メディアの構成</p>	<p>指導要領では、学校図書館は「学習情報センター」としての役割が重視されている。学校図書館が十分にその木野を果たすためには、学校図書館コレクションの的確な組織化が求められる。学校図書館メディアの役割、内容と特性、選択・収集とその組織化について概説する。特に、資料の選択、受入、分類、目録など、資料組織化の実務を知ることによって、学校図書館が多様なメディアを的確に選択・収集し、組織化することが、児童・生徒の主体的な学習に役立つ図書館になるための基本的な要件であることについて理解を深めるとともに、コンピュータ化やインターネット活用の状況や今後のあり方を解説する。</p>	

関連科目Ⅱ	司書・司書教諭	学習指導と学校図書館	<p> 学校図書館法の一部が1997（平成9）年に改正され、2003（平成15）年4月以降は12学級以上の学校に、半世紀近くも配置が猶予されていた司書教諭の配置が義務づけられた。現在学校教育は、知識を一方的に教え込みがちであった教育から、自ら学び自ら考える教育へと基調の転換が図られている。1998（平成10）年に改正された学校図書館司書教諭講習の5科目の一つである本科目では、学習指導における学校図書館メディア活用の基本的な視点と具体的な活用方法などを取り扱う。 </p>	
-------	---------	------------	---	--

授 業 科 目 の 概 要			
(人文学部日本文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎科目	キリスト教学入門Ⅰ	(1) 本学の土台であり柱であるキリスト教について、理解を深める。 (2) その「正典」である聖書について、理解を深める。 (3) 古代の文書である聖書が、なぜ、どのようにして、現代の私たちの生活に関わりを持つのか、さまざまな読み方を通じて、理解を深める。 (4) イエス・キリストの教えと行いから、「クリティカル・シンキング」を学ぶ。 (5) 一方で、人の”いのち”を活かし、尊厳・自由・平等をもたらす宗教が、他方ではなぜ人の”いのち”を奪い、尊厳・自由・平等を脅かすのかを、ともに考える。	
	キリスト教学入門Ⅱ	(1) 本学の土台であり柱であるキリスト教について、理解を深める。 (2) 前期「キリスト教学入門Ⅰ」に続いて、古代の文書である聖書が、なぜ、どのようにして、現代の私たちの生活に関わりを持つのか、さまざまな読み方を通じて、理解を深める。 (3) 人間の根本にある「宗教性」（霊性・スピリチュアリティ・帰依心）に気付き、「祈り」について学ぶことで、心と感性の豊かさを育てるきっかけとする。 (4) キリスト教的歴史観・世界観における「創造」と「終末」について学び、「いま・ここ」に生きる「意味」を各々が喜びをもって見出すきっかけとする。	
	初年次セミナー	新入生が大学での学びを進めていく上で必要とされる学びの技法、すなわち聴くこと、読むこと、書くこと、整理すること、まとめること、表現すること等を修得することを目的とする。とくに、授業の聴き方・書き方・書くことをはじめとする技法、情報の整理の仕方、まとめ方について学ぶ。さらに、整理した情報等をまとめ、プレゼンテーションする力を養う。また、情報を得る場としての図書館の利用・活用の仕方について実地体験を行う。	
	日本語表現技法	日本語で教育を受けてきた人々でさえ、日本語の使い方を誤っている場合も多い。漢字を正しく書くことだけでなく、その意味を理解し、熟語や四字熟語、慣用表現などを日常的に使用することに慣れるため、もう一度自分の日本語をみつめなおす。敬語などの基本的な表現を身に付け、手紙やビジネス文書など社会で必要とされている文書の意味を理解し、書く作業を通して、相手の理解を促すことを意識した表現方法を学ぶことを目的とする。	
	情報リテラシーⅠ	「情報活用能力」の中でも「情報活用の実践力」を学習する。特に文書作成、表計算（表の作成、目的に応じた適切なグラフの作成、関数処理、表の並べ替えや抽出操作）、プレゼンテーションの資料作成など基本的な情報スキルを学修する。さらに、大学でのさまざまな科目で出されるレポートの作成、レジメの作成および4年次の卒業論文に必要な実践的な情報活用の力、さらにビジネス文書といったビジネスの場でも役立てることのできる実践力に繋がることを目的とする。	
	情報リテラシーⅡ	コンピュータの基本的なハードウェアの構造（制御装置、演算装置、記憶装置、入力装置、出力装置）、個人情報保護や著作権を考慮した情報の扱い方、アプリケーションソフトウェアの種類や用途などを理解する。さらにその上で、使うべきソフトウェアを自分で判断して選択し、またこれらを利用して「課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力」の育成を目的とする。	

基礎科目

基礎英語 I	この授業は基本的な英会話のスキルを身につけることを目標とする。リスニングやスピーキングとともにリーディングやライティングの基礎力を養うことはもちろんであるが、最も重要な点はコミュニケーションを図る力を養うことにある。授業では、さまざまな状況における会話を想定しながら、その状況に関連する語彙も習得し、コミュニケーション能力を高めていく。また、『ミニマルエッセンシャルズ1』（ME1）も活用していくこととする。	
基礎英語 II	この授業は基礎英語 I をもとにして、さらに英会話のスキルを身につけることを目標とする。リスニングやスピーキングとともにリーディングやライティング力をさらに高め、自ら発信でき、他者をより深く理解できるコミュニケーション力を高めていく。授業では、さまざまな状況における会話を想定しながら、その状況に関連する語彙も習得し、表現力を高めていく。また、『ミニマルエッセンシャルズ1』（ME1）も活用していくこととする。	
基礎英語 III	この授業は基礎英語 I・II をもとにして、中級レベルのライティングや英会話のスキルを養成していくことを目標とする。学生の強みや弱みを理解し、学習への動機づけや支援を行いながら、その目標に向かっていくが、基礎英語 I・II と同様に、授業中の活動や実践を通して最大限の成果が生まれていくようにする。また、より自然なライティングやスピーキングを目指し、引き続き、『ミニマルエッセンシャルズ1』（ME1）も活用していく。	
基礎英語 IV	この授業は基礎英語 I～III をもとにして、上級レベルのライティングや英会話のスキルを養成していくことを目標とする。学生の強みや弱みを理解し、学習への動機づけや支援を行いながら、その目標に向かっていくが、基礎英語 I～III と同様に、授業中の活動や実践を通して最大限の成果が生まれていくようにする。また、より自然なライティングやスピーキングを目指し、引き続き、『ミニマルエッセンシャルズ1』（ME1）も活用していく。	
基礎日本語 I	本授業は、日本語を初めて学習する学生を対象とし、非常に簡単な単語とフレーズを理解、使用することができるようになることを目的としている。主に「自分の名前、国の名前、基礎的な単語を平仮名、片仮名でかける」「日常よく使うあいさつなどの定型表現を聞きとったり、使用したりできる」「いくらですか」「どこですか」といった基本的な質問文を聞き取り、簡単な文で答えることができる」「初級前期レベルの文型と語彙を用いた文を読める」といったことを具体的な到達目標としている。	
基礎日本語 II	本授業は、初級前期レベルの学生を対象とし、ゆっくりであれば簡単な日常的やりとりができるようになることを目的としている。主に「日常的な場面で自分に対してゆっくり話される簡単な質問であれば、内容をほぼ理解し、応答することができる」「初級後期レベルの文型と語彙を用いた文を読める」「手書きでの簡単な自己紹介文や伝言メモを書くことができる」「パソコンで簡単な日本語文を入力できる」といったことを具体的な到達目標としている。	
基礎日本語 III	本授業は、初級後期レベルの学生を対象とし、より自然な日本語での日常的やりとりができるようになることを目的としている。主に「日常的な場面で自分に対して話される発話だけでなく、他者同士の日常的な会話についても、ある程度内容を理解できる」「中級前期レベルの文型と語彙を用いた文を読める」「手書きやパソコンで、短くて簡単な問い合わせ文やお礼文を書くことができる」「簡単な敬語表現を使うことができる」といったことを具体的な到達目標としている。	

基礎科目	基礎日本語Ⅳ	本授業では、中級前期レベルの学生を対象とし、中級中期の文型、語彙を使った様々な課題を実行できることを目的としている。主に「日常的な対面のやりとりだけでなく、電話やメールなどの非対面のやりとりも自分の言語力に対する相手の配慮のもとなら比較的スムーズにできるようになること」「簡単な日本語を使った短いプレゼンを聞きとり、これに対して簡単なコメントを述べたり、簡単な日本語を使った短いプレゼンができるようになること」を具体的な到達目標としている。		
	キャリアプランニング	この授業は、広島女学院大学の一員として大学の建学の精神・歴史・教育理念についての認識を深め、また大学の教育目標やカリキュラムを十分に理解したうえで、大学においていかに学ぶかを考え、将来のキャリアプランを形成することを目的とする。特に、学部の教育理念を理解し、責任感、倫理観、創造性、コミュニケーション力、社会貢献への意思等を形成する基礎を身につけ、ぶれない個の形成を図る。	共同	
	女性とライフキャリア	ライフキャリアの観点から、女性の人生について考える。女性の生涯における様々なライフイベントを想定し、女性の置かれた現状における問題点を明らかにする。さらに、この困難な状況の中でいかに対応すべきか、また、地球市民として社会をどのように変革すべきかを考える。自分のキャリア・アンカーについて考える機会や、身近にいる先輩女性、将来目指したい職業についている女性に対するキャリア・インタビューの実施などの、アクティブ・ラーニングを授業に取り入れ、自己を振り返り、社会貢献できる将来像を描く。	共同	
ライフキャリア科目	自己との関係科目群	女性史	過去から現在に至るまでの女性の歴史を概観することで、女性としての自己の生き方を見つめる機会とする。また、国内外の女性の個人史を取り上げ、日本や世界の国々における女性の多様な生き方について学び、今後の自らの生き方を考える。さらに、身近な女性にインタビューを試みて、個人史を書いたり、自分史を書いてみることで、女性としての自分を歴史の中に位置づけることができる。 (オムニバス方式／全15回) (31 福田道宏／5回) 日本を中心に、歴史を紐解きながら女性の生き方やその変遷を理解する。また、自分史の作成を通し、女性としての自分を歴史の中に位置づける。 (30 永野晴康／5回) ヨーロッパを中心に、歴史を紐解きながら、女性の生き方やその変遷を理解する。 (40 伊藤千尋／5回) アフリカを中心に、歴史を紐解きながら、女性の生き方やその変遷を理解する。	オムニバス方式

ライフキャリア科目 自己との関係科目群	女性とライフスタイル	<p>(概要) 衣服、住居、インテリア・建築、食生活、家庭、家族、就職、子育て等、女性を取り巻く生活環境の変化と、それに伴う女性たちのライフスタイルや価値観、生活習慣等の変遷を辿る。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (29 小林文香／3回) 女性のライフコースの変遷を事例や統計データをもとに学び、これからの女性のライフデザインについて考察する。 (18 三木幹子／2回) スターやアイドル、若者の意識調査などの事例をもとに、理想の女性像・男性像の変遷、日本女性のジェンダー意識、恋愛観にみる美意識の変化を考察する。 (35 檜崎久美子／2回) 女性の暮らしを「被服」というキーワードで読み解く。歴史的知識を持つことで、現代の衣生活との比較・分析力や、未来の衣生活への発想力を養う。 (32 熊田亜矢子／2回) ファッションを学ぶ上で重要な要素である被服材料の観点から、繊維の性質と管理について知識を養い、日常生活での活用法について考える。 (8 小野育雄／2回) 社会学者、建築家の言説をもとに、生活空間と女性（男性）との関係について考察する。 (14 細田みぎわ／2回) 近代以降の女性建築家（日本／海外）の作品をもとに、女性の暮らしを「すまい」というキーワードで読み解く。 (28 真木利江／2回) 子育て、介護・終末の空間について建築作品を通して学び、今後の福祉空間について考える。</p>	オムニバス方式
	Women in Christianity	<p>In this course, we will examine the representation of women in the Bible, Christian literature and tradition from the critical viewpoint concerning gender issues. We will explore the various Christian views which have at times liberated women and at times oppressed them. For example, we can find some evidence and trace of female leaders in the Bible, though we at the same time find far more male-centric cases and expressions in the Biblical stories and Christian teachings. And throughout ages, churches have been shaped by the stereotypical gender models of women's life. However, those gender norms in Christianity have been challenged and transformed especially by the questioning of modern feminist theology. In this course, we will deal with those issues in the themes of: Women in the Bible; Women in the History of Christianity; Toward Gender Inclusiveness - the attempt of contemporary theology.</p> <p>この授業では、聖書、キリスト教文献および伝統的教義を、ジェンダーの視点から批判的に考察する。キリスト教の歴史においては、様々な女性に対する見解が、あるときには女性を解放し、またあるときには抑圧してきた。たとえば、聖書の中には女性のリーダーシップに関する証言や痕跡をいくつも見出すことができるが、圧倒的多数の場面や表現は男性中心的である。また過去には長い間、キリスト教は女性の生き方を理想化したステレオタイプに閉じ込めてきた。しかし、今日では特に現代的なフェミニスト神学よりの問いかけをきっかけに、こういったキリスト教的規範的女性像は変革を迫られている。</p> <p>この授業では、これらの問題を主に以下のことがらにおいて扱う。</p> <ul style="list-style-type: none"> — 聖書の中の女性 — キリスト教史における女性 — 性差別の無い社会に向けて 現代キリスト教神学の試み 	

ライフキャリア科目 自己との関係科目群	女性文学の世界 I (近現代編)	現代社会において、女性作家の活躍はめざましいものがある。本講義では、有吉佐和子、三浦綾子の2人の作家の代表的作品を取り上げる。女性作家の視点で人間存在や時代を見ればどのようなか、また、日本近現代文学史において「女性文学」はどのような意義をもつのかを、特に昭和30年代以降に焦点をおいて考察していきたい。男性作家とは異なった視野で形象した作品の多様性や独自性に着目することによって、受講生にも幅広い視野を得ることを期待する。	
	キリスト教と女性	授業の目的は二点。男女を二分し、主に男性の視点から成り立ってきた社会や学問体系を、女性の視点から捉えなおす「女性学」にたいしてキリスト教が果たしてきた貢献について学ぶこと、そして、男性優位・父権主義的価値観から生じ、それを保持・強化してきたキリスト教に対し、女性学からの問い直しを果たした貢献について学ぶこと、である。そのようにして受講者各位が健全な自己像やキャリア観を形成することに寄与するとともに、新しい時代を創るひとりとなるためのちからを養う。 より具体的には、聖書が登場人物としての女性をどのように描いているかという積義的アプローチ、聖女／魔女から現代のDVやLGBT差別に至るまでのキリスト教と性差別との関係についての宗教社会的分析などを座学およびディスカッションを通じて俯瞰、考察する。	
	Women & the World I	Throughout our history, women have played significant roles in a wide number of disciplines and walks of life. This course will introduce students to a variety of pioneering women throughout history that have fought against and dealt with injustice and prejudice. It will use a mixture of theory and historical cases to show how women have shaped the world in areas such as politics, art, music, the economy, science, the environment and cinema. Essentially, it will inspire them to play an active role in their own futures. この授業の目的は、女性の権利やキャリアを拡大するために重要な役割をはたし、不正と差別に対して戦った歴史上の先駆的な女性たちについて学ぶことである。授業では、どのように女性が世界を構築していったかということを中心に明かにしていくため、理論と歴史的資料を用いて進めていく。授業内で扱う分野としては政治、芸術、音楽、経済、科学、環境、そして映画などが挙げられる。この授業を通して、学生たちは自分たちの将来のために積極的な活動を行うことが期待される。	
	対人関係の心理	社会に生きる私たちは、対人関係を避けて通ることはできない。また、人のメンタルヘルスで、最も影響を与えるのは対人関係のあり方である。この講義では、対人関係の心理について、臨床心理学、被服心理学、色彩情報論などの専門分野から、対人関係の心理の魅力にアプローチする。対人関係のあり方に影響を与える、話し方、動作、装い、色彩などについて、簡単な実験などを取り入れて、明らかにする。この授業を通して、他者と自己との関係について振り返り、他者も自己も尊重できる対人関係の有り方について検討する。 (オムニバス方式／全15回) (13 山下京子／5回) 臨床心理学分野からのアプローチを講義する。 (18 三木幹子／5回) 被服心理学の分野からのアプローチを講義する。 (15 西口理恵子／5回) 色彩情報論の分野からのアプローチを講義する。	オムニバス方式

ライ フ キ ャ リ ア 科 目 他 者 と の 関 係 科 目 群	キリスト教と教育	<p>本授業ではキリスト教主義教育を題材にとって、教育とは何かについて考察する。また、キリスト教の子ども観が教育史に果たしてきた役割について考察する。教育者や、子どもとのかかわるキャリアを考えている学生、なかでも教職課程・初等教職課程・保育士課程に学ぶ学生、とくにキリスト教主義の園や学校への就職を考えている学生に必須の視点を提供する。受講者個々がキリスト教教育の特徴を学ぶことを通して、自らの教育観を涵養することを目的とする。より具体的には、聖書の子ども観、キリスト教の歴史における子ども観の変遷、幼児教育の歴史とキリスト教、生涯教育とキリスト教、キリスト教主義教育現場についてのケーススタディなどを、座学およびディスカッションを通じて学ぶ。</p>	
	Intercultural Communication I	<p>In this course, students will learn about and practice different communication strategies, such as stating opinions, making requests, and conducting negotiations. These strategies will allow students to work in a diverse, globalized workplace in their future careers. Topics introduced in the course will make students consider the implications for communication between differing cultures. By the end of this class, students will begin to understand how their communication methods can create misunderstandings between different groups of people, and how to begin to overcome this challenge.</p> <p>この授業の目的は学生がグローバルな職場において使用する必要がある、意見を述べる、要求をする、交渉をするといった、さまざまなコミュニケーションの方法を学ぶことである。授業を通じ、学生は将来の自分自身のキャリアのため、異なる文化におけるコミュニケーションの複雑さを理解することが求められる。授業を通じて、学生は自分たちのコミュニケーション技術が異なるグループに対してどのような誤解を与える可能性があり、それをどのように克服できるかを学習する。</p>	
	暮らしを営む食と健康	<p>この授業は、人が暮らしを営む中で必要な食と健康について取り上げ、現代が抱える問題を把握し、多様化するライフスタイルや、ライフステージに合わせた食生活と健康管理の在り方について理解することを目的とする。さらに、生涯にわたる食と健康の意義を考察し、自身のみならず周囲の人や地域社会との連携を図り、ライフキャリア構築のため幅広い視野を持った活動が実践できるようにする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (17 石長孝二郎／3回) 現代が抱える食と健康に関する問題について学び、自身や周囲との関わりを考察する。 (27 佐藤努／4回) 食と健康の関係について、食品の機能と栄養の特性から学ぶ。 (43 野村知未／4回) 食とライフスタイルの関わりを学び、健康管理の考え方を理解する。 (36 妻木陽子／4回) 各ライフステージの特徴を知り、ライフステージに合わせた食生活の在り方を学ぶ。</p>	オムニバス方式
	子育てとライフキャリア	<p>現代においては、「就活」、「婚活」、「妊活」、「保活」という言葉に象徴されるように、就職し、結婚し、子どもを産み育てるといふ営みは個人の努力なしには手に入れられないものとして観念されている。一方で、結婚や家族、親子のあり方はますます多様化しており、経済の不安定さからライフキャリアを描くことが難しくなりつつある。</p> <p>本授業では、現代の女性の労働や子育て、ワークライフバランスについて学び、学生が主体的に自らのライフキャリアと子育てについて考える態度を涵養する。</p>	

ライフキャリア科目 社会との関係科目群	World Literature I	<p>This course will offer a brief introduction of some major American, British, European and Asian writers. Students will read short stories and also write a report about these works. They are supposed to present their findings in every lesson of the class. We will read the works of Franz Kafka, Gabriel Garcia Marquez, Bernard Malamud, Yasunari Kawabata, Guillaume Apollinaire, Edgar Allan Poe, Anton Pavlovich Chekhov, Italo Calvino, Jhumpa Lahiri. この授業では、アメリカ、イギリス、ヨーロッパ、アジアの主要な作家について学ぶ。学生は短編小説を読み、これらの作品についてレポートを執筆する。すべての授業において、作品についての解釈や発見を発表することが求められる。授業で取り扱う作家はフランツ・カフカ、ガルシア・マルケス、バーナード・マラマッド、川端康成、ギョーム・アポリネール、エドガー・アラン・ポー、チェーホフ、イタロ・カルヴィーノ、ジュンパ・ラヒリなどである。</p>	
	キリスト教と社会	<p>現代社会における諸課題について、キリスト教の視点からどのように答えるのかを、受講者とともに考察したい。とくに、生命倫理、環境倫理、情報倫理、平和、差別などの諸課題について、キリスト教がもたらした光と影の両面を見据えながら、受講者が社会における課題と自己の関係を見つめるにあたって、それぞれの拠って立つ視点を確立するきっかけを模索する。</p> <p>さらに、女性と社会との関わりについて、例えば、我が国における、女性が活躍する社会の実現に向けた取組などもとりあげる。具体的には、「男女雇用機会均等法」「育児休業法」「育児・介護休業法」「次世代育成支援対策推進法」「改正育児・介護休業法」「女性活躍推進法」のように、一連の女性の活躍推進に向けた法律の整備は、女性の社会進出や、仕事と家庭の両立を支援し、男女共同参画社会の実現を目指している。しかしながら、管理職の女性登用に関する国際比較では、我が国の女性管理職の占める割合は低く、課題となっている。こうした点についても、キリスト教の視点から考察を加える。</p>	
	ビジネス実務総論 I	<p>ICT部門が急速な発展を遂げているが、その対応に追われながらも進展するビジネス社会にあって、ビジネスワーカー自身のあり方も大きく変わってきている。キャリアだけを視野に入れるのではなく、個として生きる視点を組み込む必要性をビジネスワーカーが意識しはじめた。グローバル化された社会において、ビジネスワーカーに必要とされるビジネス実務とは何かを学ぶとともに、変化するビジネス環境の現状と課題について考察し、自らの職業観を確立することを目的とする。</p> <p>「ビジネス実務士」の資格取得に向けた必修科目である。</p>	
	ビジネス実務総論 II	<p>複雑化・高速化・高度化する多面的な現代社会において、あらゆる分野で適材適所の人財が求められている。経済が成熟し、モノがあふれている社会では、消費者の求める商品の質は高くなり、商品そのものの魅力だけではなく、消費者の「心」や「気持ち」を動かすようなホスピタリティあふれる販売方法の必要性も高まっている。新しい概念としての「ホスピタリティ・マネジメント」の導入は、医療・福祉・介護・生活文化・地域・金融・教育・旅行・外食・観光等々で大きな成果を挙げている。ホスピタリティを理解し、ビジネスで活かすことを目的とする。</p>	

社会との関係科目群 ライフキャリア科目	ヒロシマと平和	広島は「ヒロシマ」と記されるとき、「社会化された被爆体験」（歴史学者・宇吹暁による定義）の記号となる。また、「広島」とあえて表記するとき、原爆投下の背景となった「軍都」の歴史を象徴する記号となりうる。この授業では、広島／ヒロシマ／広島について、原爆投下に至る歴史、被爆の実相、戦後の復興の歴史、および核の「平和」利用との関わりについて、座学、フィールドワーク、ディスカッションを通じて総合的に学ぶことを通じて、受講者がそれぞれの平和観を確立することを目的とする。本授業は8月6日を中心とする夏期集中講義として実施される。 より具体的には、この授業では、スクーリング、研修、事前および事後レポートを通じて総合的に下記の目標を達成する。 1) 座学とフィールドワークから、広島への原爆投下に至る歴史的経緯、被爆の実相、広島戦後のあゆみについての知識を得、他者に伝えることができる。 2) 「平和」とは何かという課題について自らの考えを持ち、発信することができる。 3) ディスカッションを通じ、自らの考えを整理し伝えることの難しさや楽しさを経験するとともに、他者の意見に対して共感したり建設的に批判したりする力を身につける。	集中
	ボランティア活動	現代社会において、ボランティア活動を必要とする領域が拡大されてきている。本講義では、社会の中で展開される様々なボランティア活動を通して、ボランティアとは何かということを理解し、社会に参加する自分から、「参画」しながら社会を創り出していく自分へと重心を移動するために、講義とワークショップを通して、ボランティアのあり方について考え、現代社会のニーズに即応し、行動をとることのできる人材を育成する。 (オムニバス方式 全15回) (22 田頭紀和 4回) ボランティア活動の概要を説明するとともに、様々なタイプの事例に基づいてボランティア活動参加者のマナー、心構え等を伝える。 (40 伊藤千尋 4回) 農村部におけるボランティア活動について、概要を説明するとともに、実践的指導を行う。 (30 永野晴康 4回) 都市部におけるボランティア活動について、概要を説明するとともに、活動の実践的指導を行う。 (31 福田道宏 3回) ボランティア活動のワークショップを総括し、問題点、改善点を議論させるとともに、今後の地域貢献活動を展開させるために知識を伝達する。	オムニバス方式
	インターンシップ	ビジネス活動とそこで働く人びとのビジネスワークについて、「インターンシップ（就業体験実習）」を通じて理解を深め、自らの職業意識の形成を図るとともに、職業適性、職業生活設計、職業選択について考える契機とする。事前学習として、ビジネス組織についての理解、ビジネス・コミュニケーションの基本について理解を深め、ビジネス・ワーカーとして求められる実務能力開発やキャリア・プランニングを探求する契機とする。 受講生は、夏期休業中に1～3週間程度の期間で、本学独自の研修先での「インターンシップ」に参加すること、ならびに事後学習としての「研修報告」（研修レポート提出と報告会参加・発表）が義務づけられる。	

社会との関係科目群	Human Rights in the World	<p>This course will introduce the history of human rights, and examine human rights issues in the modern world. Students will study about the history of the formation of the 'Human Rights' concept, and about the background and ongoing process concerning some human right issues (i.e. Child labor, Human Trafficking, Peace and Justice, Discrimination, etc.). Students will be challenged to think critically about global and local issues from the viewpoint of human rights and develop the sense of a human rights advocate through studies and discussions in this course.</p> <p>この授業では、世界における人権の歴史について学ぶとともに、現代社会における人権の問題について考察する。受講者は人権概念形成の歴史について学び、また、実際の人権に関する現代的諸課題（児童労働、人身売買、正義と平和、差別、など）の背景と現状についても学ぶ。受講者はこの授業での学びと議論を通じて、現代社会の諸課題に対して人権の観点から批判的に考察するよう問いかけをうけ、人権擁護の感性を発達させることとなる。</p>	
	Culture Studies I	<p>This course explores the theories of culture against a backdrop of rapid globalization that has affected communication styles and intercultural relations. It will examine key issues in culture debates and explores how the various concepts of culture can be applied in everyday life. Specifically, it will begin to introduce students to how society is impacted over time by issues such as ideology, class structure, ethnicity, sexual orientation, gender, and age. Students will thereby develop skills for cultural exchange in the contemporary world while improving their reading, writing, and critical thinking skills.</p> <p>この授業では、コミュニケーションの様式や異文化間交流に影響を与えてきた、現在もお急速に進むグローバル化の背景に関する文化論を学ぶ。授業ではさまざまな文化的な違いが日常生活にどのように反映されるのかについて考察する。特に学生は授業を通して、社会がどれほどイデオロギーや階級制度、民族、性的役割やジェンダー、年齢によって影響を受けているのかを学習する。学生は現在社会における文化的差異を理解することができるようになると同時に、リーディング、ライティング、論理的思考の技術を向上させることができる。</p>	
ライフキャリア科目	ライフキャリア特別講義 I	<p>現在の社会情勢を見据え、学生に学んでほしいテーマを設定し、実社会で活躍する先達を講師に迎え、話題を提供する。あるいは、専門の学びと連携しながら学生に学んでほしいテーマを設定し、専門家から話題を提供する。この授業を通して、ライフキャリア形成に向けて、社会の中での自己の立場を理解し、そのためにどのような学びを積み重ねるべきか考えるとともに、自身の今後のライフキャリア形成の構築方法を考えるきっかけとすることを目的とする。</p>	集中
	ライフキャリア特別講義 II	<p>現在の社会情勢を見据え、学生に学んでほしいテーマを設定し、実社会で活躍する先達（主に女性）を講師に迎え、話題を提供する。あるいは、専門の学びと連携しながら学生に学んでほしいテーマを設定し、専門家から話題を提供する。この授業を通して、社会に求められる人材とは何か、女性として求められる力は何かを考えると同時に、自身の専門性を高める方法をイメージしながら、専門性を踏まえたライフキャリア形成の基盤を構築することを目的とする。</p>	集中
	ライフキャリア特別セミナー I	<p>社会情勢・環境を理解し、専門の学びに基づくライフキャリア形成に向けて、学生に学んでほしいテーマを設定し、セミナー形式で授業を展開する。具体的には、学生自ら専門的な課題を見出し、自身の専門的考察力や実践力を用いて課題解決を図ってゆく。この授業を通して、自身の専門性をどのように生かすべきか考え、そのためにどのような学びを重ねていくかを想像し、そこから自身のライフキャリア形成を考えることを目的としている。</p>	集中
その他科目群			

ライフキャリア科目 その他科目群	ライフキャリア特別 セミナーⅡ	社会情勢・環境を理解し、専門の学びに基づく女性としてのライフキャリア形成に向けて、学生に学んでほしいテーマを設定し、セミナー形式で授業を展開する。具体的には、学生がこれまでに培った教養や専門性を活かしながら、自ら専門的な課題を見出し、女性の視点から専門的な考察を行い、課題解決を図ってゆく。この授業を通して、女性として専門性をどのように生かすべきか考え、そのためどのような学びを重ねていくかを想像し、自身のライフキャリア形成の基盤を作ることを目的としている。	集中
	オープンセミナーⅠ	語学、文学、教育、ファッション、インテリア、デザイン、環境などの各専門分野について、基礎的、包括的な講義や演習の中から、それぞれの専門を学ぶ意味を知り、専門の学びへの理解を深める。語学・文学分野では「英語を通じたアメリカ・イギリス文化の理解」、「方言を通じた日本の理解」を、教育分野では「遊びを通じた子どもの発達過程の理解」を、ファッション・インテリア・デザイン分野では「生活空間を構成するインテリアの理解」、「設計の基本的な方法への理解」、「コーディネートやアレンジの基本についての理解」、環境分野では「地理・歴史・自然・食を通じた地域の文化への理解」などを分野に分かれて学ぶ。	集中
	オープンセミナーⅡ	語学、文学、教育、ファッション、インテリア、デザイン、環境などの各専門分野について、基礎的、包括的な講義や演習を通して、その実際に触れることにより、これから学ぶ専門分野への理解、実践的な学びへの理解につなげることを目的とする。具体的には、語学・文学分野では語学を通じた文化の理解等を、教育分野では幼児・児童・生徒の発育過程の理解等を、ファッション・インテリア・デザイン分野ではそれぞれの基本的な概念や方法論の理解等を、環境分野では地域による環境や文化の理解等を学ぶ。	集中
	スポーツ科学Ⅰ	スポーツ科学Ⅰでは、スポーツを歴史的、社会的、生理的、心理的な視点から理論的に学習する。その内容として、高校までの学習内容を発展させながら、人間の身体と健康について学ぶ。また、部活やサークルでスポーツを行う学生が少なくないことから、特にスポーツが心身にもたらす影響と効果的なトレーニングについて学習し、安全にスポーツを行う方法について学ぶ。さらに、発達段階に応じた身体活動について必要な知識理解を深めていくことで、適切な判断と行動を身につけ、生涯を通じてスポーツによりよく親しめるようになる。	講義 10時間 実習 20時間
	スポーツ科学Ⅱ	スポーツ科学Ⅱでは、スポーツ科学Ⅰで学んだ理論を生かし、実践を通して生涯に渡り自立的な運動者となることを目指す。その内容として、バレーボール・バスケットボール・卓球・バドミントン・ニュースポーツ等、各種目のルールや技術獲得の方法を理解し、工夫された練習を通して技術を獲得する。また、技術獲得の過程で、仲間と協力して教えあいや作戦を立てることによりスポーツの楽しさや爽快感を経験する。さらに、自分の体力を知り、体力を高める生活を心がける。	
	日本国憲法	人権保障の砦としての憲法の役割を理解してもらえ講義とした。日本国憲法の規定する国民主権の内容、伝統的な基本的人権の種類と内容、新しい人権をめぐる議論について歴史的な経緯を踏まえて講義する。基本的人権の保障に関する主要な判例を取り上げる。日本国憲法の制度化する国家の統治構造（国会・内閣・裁判所）を解説する（その際、国会法、内閣法、裁判所法、国家行政組織法等にも言及する）。地方自治・地方分権に関する現在の我が国の動向について講義する。	

<p>外国語（英語Ⅰ）</p>	<p>One aim of this course is to prepare learners for the TOEIC test. The first semester will familiarise students with the structure and requirements of each test part, and focus on vocabulary development – two fundamentals for TOEIC success. Lessons will take a three-pronged approach: communicative tasks, specific TOEIC focus, and extensive reading. Classroom tasks will relate to real world activities, focusing on all four skills and prioritising meaning and outcome. These tasks will engage with the specific language and skills found in the TOEIC test. An extensive reading programme will complement classroom study, providing students with the self study skills to develop their vocabulary range.</p> <p>この授業の目的の一つはTOEIC対策である。各パートの形式や内容になじみ、語彙を増やすことにあり、コミュニケーション能力、TOEICの問題、幅広いリーディングなど3点を中心に進めていく。また授業中は日常生活のテーマを題材として、英語の4技能を中心にその内容や成果を重視することとし、TOEICに見られる英語や技能を身につける。また多読を行うことで授業を補い、学生自ら語彙能力を高めていくものである。</p>	
<p>外国語（英語Ⅱ）</p>	<p>The second semester looks at some useful TOEIC test-taking strategies and continues vocabulary development. As in the previous semester, lessons will take a three-pronged approach: communicative tasks, specific TOEIC focus, and extensive reading. Classroom tasks will relate to real world activities, focusing on all four skills and prioritising meaning and outcome. These tasks will engage with the specific language and skills found in the TOEIC test. An extensive reading programme will complement classroom study, providing students with the self study skills to develop their vocabulary range.</p> <p>英語ⅡではTOEIC対策としての方策に触れ、引き続き語彙能力を高めていく。また、外国語（英語Ⅰ）と同様に、コミュニケーション能力、TOEICの問題、幅広いリーディングなど3点を中心に進めていく。授業中は日常生活のテーマを題材として、英語の4技能を中心にその内容や成果を重視することとし、TOEICに見られる英語や技能を身につける。また多読を行うことで授業を補い、学生自ら語彙能力を高めていくものである。</p>	
<p>外国語（英語Ⅲ）</p>	<p>This course is designed to improve the overall English language abilities of the students enrolled. While we will primarily focus on speaking and listening skills, we will also work on reading and writing skills. Students in this class will improve their skills as they tackle controversial topics on a wide range of important subjects. The improvement of these skills is expected to be achieved through deep understanding and active interaction about the topics provided.</p> <p>この授業は総合的な英語力を伸ばすことを目的とする。スピーキングやリスニングを中心に、リーディングやライティングの活動も行う。学生は幅広い分野において大切なトピックに触れながら自らのスキルを高めていく。ただし本授業ではトピックへの深い理解力や発信力の養成に主眼を置き、その中で必要なスキルを高めていくというアプローチをとる。</p>	
<p>外国語（英語Ⅳ）</p>	<p>This course continues the aim of improving the overall English language abilities of the students enrolled. In this one semester course we confront important problems that the world faces today. We will work to develop opinions on world issues, and to be able to communicate our opinions to others effectively. To that end, we will also be focusing on developing critical thinking skills.</p> <p>この授業ではさらに英語力を高めていくことを目的とする。本授業では今日世界が抱えている重要な問題を探り、その問題に対する様々な見解を深め、自分の見解を効果的に伝えることができるように進めていく。そのためには批判的思考能力も身につけていきたい。</p>	

外国語（フランス語 I）	フランス文化とフランス人に親しみながら、フランス語の文法と読解、ヒアリング、簡単な会話の基本的な力を身につける。まずは、フランスに親しむためにフランスについての常識的知識や地理への理解を深め異文化理解を図る。その上で、フランス語文法の基礎を理解し、発音の原則を身につけ、基本的な挨拶表現、数の教え方、人物や物についての表現法を習得し、フランス語で簡単なコミュニケーションができるよう、基礎的な学びを行う。	
外国語（フランス語 II）	外国語（フランス語 I）で身につけた基礎学習をさらに充実させ、所有形容詞から英語とは違うフランス語の特徴を理解し、形容詞の比較級を使いこなせるようにする。また、基本的な日常行為をフランス語で表現でき、簡単な質問や記述ができ、身近な話題を表現できるようになることを目的とした学びを行う。さらに、少し複雑な構文の運用も身につけ、実用フランス語検定5級、4級に挑戦できる力の修得を目標とし、フランス語についてより多くのことを自ら学ぶための力を培う。	
外国語（韓国語 I）	この授業は初めて韓国語を学ぶ人のための入門クラスで、韓国語の基礎的コミュニケーション能力を獲得することをその目的とする。まず、人工的な言語である韓国語の創出起源を理解し、表音文字である各文字の発音と表記の熟達に努める。とくに、文字の発音に重点を置きながら、基本的な文法と語彙を用いて、簡単な日常会話を行う。主な内容は、動詞・形容詞・存在詞・指定詞（四つの用言＝述語）の区分と語尾の基本的な変化、すなわち、丁寧語・否定文・疑問文・助詞の使い方などである。必要に応じて韓国映画・K-popといったメディアも活用し、学習した言語を早く使ってみる。	
外国語（韓国語 II）	この授業では、韓国語 I において獲得した授業成果、すなわち、ハングル文字と発音の習熟をもとに、基礎的な文法と日常会話の能力を高めていく。また、日本語との対照言語学的な観点からの理論的な面白さを満喫する一方で、実際に使える表現能力を上達を目指す。とくに、基本的な文法と語彙をもとに、読み・書き・聞き・話す四機能をバランスよく伸ばしていく。主な内容は、前期で学んだ用言（述語）の基本的な活用に加え、過去形、数詞、よく使う言い回しなどである。韓国語 I と同様、必要に応じて韓国映画・K-popといったメディアも活用する。	
外国語（中国語 I）	「中国語は発音よければすべてよし」と言われているぐらい、発音が一番大切であるので、中国語の基本である発音を身につけるため、発音指導は復習や予習課題での自己学習を踏まえた個別対応で行い、正しく流暢に発音できることを目的とする。また、人称代詞（姓名）、動詞、疑問文、動詞述語文、形容詞述語文、指示代名詞などの文法を習得しながら、会話文の朗読を個人やペアで行いながら、簡単な日常会話できることを目的とする。	
外国語（中国語 II）	中国語 I に続き、個別の徹底した発音練習を重ねるとともに、発音を聞きながらピンイン、漢字、声調を書く練習も行う。また、量詞、所有の表現、親族呼称、反復疑問文、選択疑問文等の文法への理解をさらに深める。さらに、日常会話でよく使われる表現である曜日、日にちの表現、時間帯や時刻の表現、新事態発生、変化状況の表現、語気助詞、前置詞の修得をはかる。この授業を通して、発音の修得、基本的語彙の修得、簡単な文章作成力の修得を目的とする。	
外国語（日本語 I）	本授業では、中級中期レベルの学生を対象に、大学生活に必要な4技能の基礎固めを行うことを目的とする。主に、「予習をしておけば、初年次生向けの講義のおおまかな内容を聞きとり、ノートにポイントを書きとめることができる」「辞書を使用すれば、必要な文献のおおまかな内容を理解できる」「あらかじめ準備をしておけば、自分の意見や考えを人前で発表できる」「授業の内容を踏まえ意見文を作成できる」ことを具体的な到達目標としている。	

ライフキャリア科目	その他科目群	外国語（日本語Ⅱ）	本授業では、中級後期レベルの学生を対象に、大学生活に必要な4技能について一定の運用能力を獲得することを目的としている。主に「予習をしておけば、初年次生向けの講義の内容をほぼ聞きとり、ノートにまとめることができる」「辞書を使用すれば、必要な文献の内容をほぼ理解することができる」「簡単な調査を行い、手書きやパソコン入力でレポートを作成したり、発表したりすることができる」ことを具体的な到達目標としている。	
		外国語（日本語Ⅲ）	本授業では、上級前期レベルの学生を対象とし、大学生活に必要な4技能の高度な運用能力を獲得することを目的としている。主に「予習をしておけば、1、2年生対象の講義の内容を聞きとり、ノートにわかりやすくまとめ、疑問点について調べることができる」「辞書を使用すれば、必要な文献の詳細をほぼ理解することができる」「調査を行い、やや長めのレポートを作成したり、分析的発表を行うことができる」を具体的な到達目標としている。	
		外国語（日本語Ⅳ）	本授業では、上級中期レベルの学生を対象に、大学生活に必要な4技能のより高度な運用能力を獲得することを目的としている。主に「1、2年生対象の講義の内容を分析的にまとめることができる」「必要な文献を理解するだけでなく、内容をレポートの中で適切に引用したり、紹介したりすることができる」「与えられたテーマについて発表だけでなく、他者とのより分析的なディスカッションをすることができる」ことを具体的な到達目標としている。	
専門科目	コア科目	人文学入門	<p>人文学とはどのような学問かを理解し、研究の方法、研究のキーワード、研究の動向を学ぶ。その上で、映画を通して、人文学の基礎・基本から最新の知見まで、楽しみながら学んでいく。例えば、「ハリーポッター」のシリーズから文字表現と映像表現の比較検討をしつつ、イギリスの伝統と文化を、ジョン・フォードの「駅馬車」、「黄色いリボン」、「シャイアン」の比較から時代と文化、マイノリティとマジョリティ、「正義」とは何かを考える。また、小津安二郎・「東京物語」から日本人の生活様式と文化、死生観に思いをはせ、黒澤明・「蜘蛛巣城」では、能の伝統の継承を捉えるとともに原点となった「マクベス」の主題の考察を進め、文学的形象や典型について考える。また、英米日の映画を音声に着目して視聴する中で、それぞれの言語の音韻の特徴にもふれる。また、台詞と字幕の比較検討から、音声言語と文字言語の違いについても考える。15回の授業を通して、映画を考察の対象としながら、風土と文化、文化の普遍性と個別性、政治と文化、作家・作品・テキスト、視点と語り、文体、通時的研究と共時的研究、メディアとメディアリテラシー、ジェンダー、ポストコロニアル等、人文学の重要なトピックを映像と活字資料を検討しながら学んでいければと考える。本学部の構成員の協働による4か年の学びへの誘いとなる授業であり、国際英語学科と日本文化学科のコラボレーションという特色を生かした授業展開をしたい。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (1 植西浩一／4回) 人文学とは。映画で学ぶ日本文化1 (19 John Herbert／3回) 映画で学ぶイギリス文化 (3 柚木靖史／4回) 映画で学ぶ日本文化2 (16 河内清志／4回) 映画で学ぶアメリカ文化</p>	オムニバス方式
		キャリア・スタディ・プログラムⅠ	このプログラムにおいては、社会へ目を向け、時事問題に関心を寄せることを通して、公的機関の対応や各企業の取り組みを知り、延いては自らの社会における役割を深く考えることを目的としている。さらには、実際にその役割を遂行する自己を構築していくために、日本語能力を段階的に向上させていくことを目指す。本学期においては、一般常識レベルの語彙を増やすことを徹底化する。尚、受講生には「語彙・読解力検定」3級の合格に向けて、適宜、小テストや模擬試験を実施する。	

専 門 科 目 コ ア ー 科 目	キャリア・スタ ディ・プログラムⅡ	「キャリア・スタディ・プログラムⅠ」に引き続き、社会への関心に基づきながら、語彙を増やしていく。今学期の特徴としては、新聞や雑誌を素材として授業を行うことによって、最新の時事問題にも通じ、自らの考えをまとめ、主張することができるようになることを目指す。また、時事問題を語る際に必要な語彙をグループワークやディスカッションを通して、正確に発話の中で使いこなせるようになることを徹底化する。尚、受講生には「語彙・読解力検定」準2級の合格に向けて、適宜、小テストや模擬試験を実施する。	
	キャリア・スタ ディ・プログラムⅢ	「キャリア・スタディ・プログラム」のまとめとして、様々な長文に触れる中で、読解力を身に付けていく。特に、図やグラフが意味するところを正確に読み取れるよう、文章以外の情報が含まれる資料の分析力を伸ばすことを徹底化する。就職に向けてのSPI対策としては勿論のこと、今現在、自らが社会に貢献できることを思索する上でも参考になる文章に触れることによって、実際、行動を起こしていくモチベーションを確固たるものとしていく。尚、受講生には「語彙・読解力検定」2級の合格に向けて、適宜、小テストや模擬試験を実施する。	
	アカデミック・リ サーチⅠ	日本語、日本語教育、国語科教育、日本古典文学、日本近現代文学など、各自の関心に基づいたセミナーに所属することによって、日本文化学科での学びの支柱を築いていくことを目的としている。今学期は、問題の設定という点に重点を置き、自らの関心や興味を問題として設定するという仕方を検討する。特に、演習形式をとることによって受講生が互いのテーマを他者に説得可能な形で定義することができる技能を身に付ける。同時に、論文作成上の基本的なルールを具体的な例に即して身に付ける。	
	アカデミック・リ サーチⅡ	日本語、日本語教育、国語科教育、日本古典文学、日本近現代文学など、各自の関心に基づいたセミナーに所属する中で、日本文化学科での学びの支柱を、より確固たるものとして築いていくことを目的としている。今学期は、「アカデミック・リサーチⅠ」を受けて、自らが選んだテーマを研究史の中で位置づけるために文献調査を行い、その成果発表を行う。同時に、他の受講生の発表を聴き議論する中で、卒業論文の作成に向けてのさまざまな視座や手法に触れることを目指す。	
	アカデミック・リ サーチⅢ	日本語、日本語教育、国語科教育、日本古典文学、日本近現代文学など、各自の関心に基づいたセミナーに所属する中で、日本文化学科での学びの支柱を、より確固たるものとして築いていくことを目的としている。今学期は、「アカデミック・リサーチⅠ・Ⅱ」で培った技能を用いて、具体的な素材（資料、文献、データ）を収集し、分析する。併せて、論文の構成を検討し、目次の作成を目指す。また、演習形式での中間発表を行う中で議論を繰り返して、他者に説得力をもって伝わる内容になっているかを常に吟味する。	
	アカデミック・リ サーチⅣ	日本語、日本語教育、国語科教育、日本古典文学、日本近現代文学など、各自の関心に基づいたセミナーに所属する中で、日本文化学科での学びの支柱を、より確固たるものとして築いていくことを目的としている。今学期は、「アカデミック・リサーチⅢ」までの作業を踏まえて、卒業論文を執筆し、中間発表を行う。その際、論文としての体裁、内容、論証などについて十分な検討を行い、他の受講生と積極的に議論する中で、推敲を重ねていくこととする。	
	卒業論文	日本語、日本語教育、国語科教育、日本古典文学、日本近現代文学など、各自の関心に基づいたセミナーに所属し、指導教員と個別に学術的な面談を重ねることによって、日本文化学科での学びを専門的レベルに高めることを目的としている。特に、「アカデミック・リサーチⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」における自らの学びの集大成として、卒業論文を完成させる。その際に、明確でかつ独創的な問題を設定し、論理的整合性をもった考察を加えているかどうか留意する。	

<p>日本文学講読Ⅰ</p>	<p>王朝時代の文学作品を読み解く。『源氏物語』で様々な恋を描いた紫式部の、現実の恋を『紫式部日記』から読み解く。『源氏物語』の主人公、光源氏における、さまざまなモデル論を検討し、光源氏像における先行作品の影響を考える。光源氏は、父桐壺帝の配慮により臣籍降下させられた。そのことが光源氏に及ぼした影響を作品を通して考える。また、六条御息所は生き霊となり、葵上に取り憑いたとされるが、紫式部はいかなる意図により「物の怪」を構想したのかについて考える。</p>	
<p>日本文学講読Ⅱ</p>	<p>夏目漱石の生涯を年譜で押さえつつ、彼の代表作を講読形式で精読する。特に、前期三部作と後期三部作を中心に取り上げることによって、一人の作家においてテーマが必然性をもって展開している有り様を概観することを目指す。受講生には、一つ一つの作品を丁寧に読み解いていくことを通して、文学と向き合うことの楽しさ、喜びを感じてもらいたい。また、今後の文学研究へのモチベーションを各自、確固たるものとすることを期待している。</p>	
<p>日本文学講読Ⅲ</p>	<p>中世の文学作品を読み解く。『新古今和歌集』における「新しさ」について考え、象徴的表現について理解を深める。さらに象徴的表現が京極派歌人によって、どのように展開されたのかについて考える。また、『平家物語』の人物像を考える。歴史物語であり、歴史そのものではない、その史実と異なる虚構に着目し、その意図・効果を考える。平家滅亡の理由をどのように作品に形象しているのかを読み解き、平家作者の考えた平家滅亡の理由について考察する。</p>	
<p>日本文学講読Ⅳ</p>	<p>村上春樹の生涯を年譜で押さえつつ、彼の代表作を講読形式で精読する。特に、1995年に起こった阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件を契機として、春樹の文学テーマがデタッチメントからコミットメントへと変化していく有り様を概観することを目指す。受講生には、作品を丁寧に読み解いていくことを通して、文学と向き合うことの楽しさ、喜びを感じてもらいたい。また、今後の文学研究へのモチベーションを各自、確固たるものとすることを期待している。</p>	
<p>日本語文章読解法</p>	<p>本授業では、文章表現を手掛かりとして、論の展開や作者の主張を正確に「読み取る」力を身につけるとともに、生きる力の読解に結び付く、メタ認知能力の形成について学修させる。また、文学的文章についても、その批評的な読解について理解させる。さらには、古文の読解や漢文の読解について、内容の解釈、理解にとどまらず、批評的に読む力を実践によって身につけさせる。そのため、まず、文章の内容を正確に読み解く技術を身につけさせようとして、文章を要約し、それをもとに、批評的な読みを対話形式で実践させる。</p>	
<p>日本を伝える英語Ⅰ</p>	<p>本授業は、日常会話レベルの英語を用いて、日本について紹介する力を身に付けることを目的としている。まずは、日本の年中行事や習慣など、身の周りのものを英語ではどのように表現するのかを調べ、基本となる例文を暗記し、ロールプレイを繰り返すことで、簡単な日本の紹介ができるようになることを目指す。更に、例文からの応用ができるよう、日本の観光地や伝統芸能などについても、テレビ、ラジオ、新聞、インターネットなどを活用し、英語での語彙を増やすことを徹底して行っていく。</p>	
<p>日本を伝える英語Ⅱ</p>	<p>本授業は、日常会話レベルの英語を用いて、日本の魅力を発信できる力を身に付けることを目的としている。世界の中で注目されている、和食やサブカルチャーなど、受講生自身がトピックを選び、そのことについて調査、分析を行い、英語でのロールプレイを繰り返すことによって、自信をもって語れる話題を増やしていくこととする。学期末には、それぞれの成果を発表する時間を設け、日本文化の担い手としての意識を高めることを目指したい。</p>	

スキル科目 専門科目	日本語文章表現法	中学校や高校の国語の授業において展開される、作文指導、文章表現指導のスキルを学ぶ。そのためには、教師自らが、正しい日本語文章表現の知識や技術を身に付けておかなければならない。本授業では、個々の受講者に、毎回、作文を書かせ、その作文に基づき、グループ研究、グループ発表を行い、お互いに添削し合い、批評し合うことによって、個々の日本語文章表現能力を高めていく。このような作業をとおして、正しい日本語文章表現を身につけ、さらにそれを教授していく方法を学ぶ。	
	日本語コミュニケーション技法Ⅰ	この授業の目的は、「日本語音声表現の改善」である。私たちは、自分の思いや考えを伝えるために話をする。話すということは、声を手段として相手に意志を伝えることである。声で伝える基本は、発声・発音である。「声が小さい」「音が不明瞭」では、相手にきちんと伝わらないし、相手の同意や共感は得られない。発声・発音のトレーニングも必要である。相手に届く力のある伸びやかな声や正確な発音を体で覚えるために、実際に声を出しながら授業を進める。その上で、話し言葉の表現技術を学び、魅力的で説得力ある話し言葉を目指す。	
	日本語コミュニケーション技法Ⅱ	談話によるコミュニケーション技術を習得することを目的とする。談話は、相手との協力のなかで、双方向的に行われる言語活動である。談話をスムーズに進めるためには、相手の気持ちをいかに引き込むかが重要になる。そのためには、発話技術を磨き向上させることが重要である。さらには、相手との話し合いの中で、いかにテーマを解決していくかと技能も必要とされる。本授業では、実践を多く取り入れながら、談話を円滑に進め、かつ、主導的にリードしていくための技能を身につけることをめざす。	
	メディアリテラシー	現代社会では、様々なメディアを通し様々な情報や表現が飛び交っている。メディアを通して受け取る情報の多くは、発信者の意図により、伝達する情報にバイアスがかけられている。フィクション作品についても、特定の文化的価値観が反映され、それが社会に及ぼす影響は少なくない。また、情報差による格差の問題も深刻である。本授業では、様々なメディア表現を分析し、これらの諸問題とどう向き合えばよいのかについての見解を持つことを目的とする。	
	文芸創作	本授業は、文学的文章を実際に創作することで、感性や想像力を養い、表現力を身につけることを目的としている。最初に、文学とは何かを考える意味でも、パロディの実作を行い、創作することの喜びを感じてもらいたい。次に、小説と戯曲の様式の違いを理解するために、シナリオを実際書き、グループごとに発表を行う。最後に、読者を意識した執筆ということで童話の創作を行う。子どもを読者に想定した場合にどのようなテーマがふさわしいかを議論する中で、文学と読者の関係について考え、実作の中で、魅力的な文体を追及することを目指す。	
	映画・演劇研究	日本の映画を取り上げ、実際に鑑賞することを通して、そのテーマや特質について考察していく。特にこの授業では、無声映画と弁士について学んだ上で、活動写真と呼ばれていた頃の作品を観る力を身に付ける。更に、能、歌舞伎、浄瑠璃などの形式や特質について学んだ上で、実際に上演された作品を鑑賞し、これらを観るスキルを習得する。受講生には映画や演劇の分野において、日本の伝統文化を理解し、その魅力について語れるようになることを期待する。	
内容科目	古典日本語基礎文法	この授業では、日本語の古典文法の基礎について学ぶ。高校までに学習してきた日本語の古典文法を、確実に習得させたい。さらに、大学で日本語に関する学びに適應させるべく、発展的に学習させる。日本語古典文法の知識は、日本語の古典語研究は言うまでもないが、古典文学の読解、研究においても、現代日本語の研究においても、その知識は必要である。国語教育においても必須である。日本語の古典文法の基礎を身に付けることによって、それらの研究に対応できる能力を身に付けさせたい。	

現代日本語基礎文法	我々が普段無意識に使っている日本語が持つ様々な性質を、言語学的内省を用いて考察することにより、言語の基本的な性質と日本語文法の大まかな姿を捉えることを目的とする。具体的には、言語の基本的な性質を学び、品詞、動詞の形態、助詞の「は」と「が」の使用についての理解を深め、さらにテンスとアスペクトの違いを明確にし、論理学、語用論についてもふれる。最終的に、日本語文法について、言語学的観点から大まかな理解、伝統的な国文法における文法記述の問題点の理解、外国語の文法を言語学的に見ることができるようになる。	
日本文学概論Ⅰ	日本古典文学の全体像を明らかにする。抒情・叙事・自照・劇文学の4体系を通して考える。日本古典文学は今に、何を伝えて来たのかという視点に立って、各時代をリードし、次代に多大な影響を与えた日本古典文学を推進させた作品を取り上げ、その内容を深く理解し、その本質を明らかにする。こうした作品を生んだ作家たちの苦闘の跡を辿り、その新しさを解明する。また、日本古典文学が人生にどのような影響を与えているのかを考える。	
日本文学概論Ⅱ	文学研究の対象と方法を押さえた上で、日本近代文学を例に挙げつつ、文学の専門用語や理論を概説する。語り、視点、描写といった基本的用語から、ストーリーとプロットの違い、フィクションとメタフィクションの違い、作家論、作品論、テキスト論の違いなど、文学研究を行う上で把握しておくべき事項に至るまで、具体的作品を通して学ぶ。受講生には、言語文化としての文学を体系的に捉える視座を習得することによって、卒業研究への基礎力を養うことを期待する。	
日本語学概論Ⅰ（音声言語を含む）	この授業は、日本語学という研究分野を深く学ぶための導入となるよう、これまでの研究成果に立脚して、幅広い分野の日本語学的知識の習得を目指す。日本語学概論Ⅱとの対をなす本授業では、日本語学の様々な研究分野のうち、古代語、現代語を対象に文法、音声・音韻について概説的に学ぶ。単に日本語学上の基盤知識を身につけるだけにとどまらず、身の回りに存在する日本語の問題に目を向け、それを自らの問題として捉え、解決していく方法を学ぶ。また、世界に目を向け、他の言語との比較をとおして、日本語の特徴を多角的に捉えることにより、自国の言語の特徴を深く知ることができるようになる。	
日本語学概論Ⅱ（音声言語を含む）	この授業は、日本語学という研究分野を深く学ぶための導入となるよう、これまでの研究成果に立脚して、幅広い分野の日本語学的知識の習得を目指す。日本語学概論Ⅰとの対をなす本授業では、日本語学の様々な研究分野のうち、古代語、現代語を対象に、音声・音韻、文字表記、社会言語学、文章、談話、認知言語学について概説的に学ぶ。単に日本語学上の基盤知識を身につけるだけにとどまらず、身の回りに存在する日本語の問題に目を向け、それを自らの問題として捉え、解決していく方法を学ぶ。また、世界に目を向け、他の言語との比較をとおして、日本語の特徴を多角的に捉えることにより、自国の言語の特徴を深く知ることができるようになる。	
日本語音声学	音声学に関する基本的知識を身につけた上で、日本語の分析、日本語教育の場面において、必要なデータを得るための聞き取りスキルを身につけること、及び、音韻論についての基本的な知識を学び、話者が従っている規則性について最低限の分析を行うことができる程度の能力を身につけることを目的とする。なお、この授業は、日本語教員養成課程の必修科目である。日本語教員養成課程の修了を希望する者は、3年次が終わるまでにこの科目の単位を取得しておかなければならない。	
日本古典文学史	上代・中古・中世・近世の文学作品を年表を用いて概観し、日本古典文学の基礎的知識・素養を身につける。その後、それぞれの時代を代表する作品を取り上げ、作品内容を概観し、主題・人物像・美意識・人生観・恋愛観・歴史観を視野にいれ、作品・作家の特徴を考察するとともに、前代から何を受け継ぎ、次代へいかなる影響を与えたのか、その史的意義について考える。古典撰取の方法等、引用など表現方法、近現代作家への影響についても留意する。	

日本近現代文学史	<p>始めに、日本近現代史を軸にして、〈国家〉〈制度〉〈内面〉などの観点から「近代」「現代」なるものを多角的にあぶり出し、その上で日本における〈近代文学〉の成立を見定める。その後、〈近代文学〉としての明治期から大正12年頃、〈現代文学〉としての大正13年から昭和30年頃までの代表的作家、作品の考察を通して、時代の変容から生じる作品の質の変化を追う。また、最終的には、歴史的背景等にも目配りしつつ、〈近現代文学〉における諸問題を浮き彫りにしていくことを目指す。</p>	
社会言語学 I	<p>本授業では、日常生活において意識的・無意識的に行っている様々な言語行動について、語用論の視点から観察し、分析するための理論と方法を学習し、習得することを目的とする。挨拶、謝罪、依頼など、日常生活で行う言語行動にどのような規則性があり、異文化間ではその規則性にどのような共通点と相違点があるのかを分析する。また、日本語のパラエティ、特に階層差や世代、性差、場面差などが、どのような言語事象となって表出するかを観察する。授業は、講義ならびに受講生とのディスカッションを中心に進める。</p>	隔年
社会言語学 II	<p>社会言語学は主に年齢・性別・地域・職業・階級などの社会的要因がどのように言語に影響し、どのような言語表現が成立するかということを研究の対象とするものであったが、グローバル化する現代社会が言語に与える影響は多様で複雑なものとなっている。そこでこの授業では、従来の社会言語学の研究対象や研究課題を概観し、特に現代社会における言語様式や言語変化を対象にして、社会における言語の役割、対人関係における言語の役割などを考察していく。</p>	隔年
言語の獲得	<p>この授業では、ヒトがどのようにしてことばを話せるようになるのかを、文法、音声、意味、形態の順に見ていく。それぞれの部門で、ヒトの成長に合わせて見ていく。つまり、何歳頃にどのようなことばを話せるようになるのか、を見ていく。次に、言語獲得における、周りの人たちがどのような役割を果たすのか、を考察する。更に、言語獲得についての臨界期、あるいは感受性期についても概観し、言語についてより深い興味を持てるようになることを目標とする。</p>	
日本語の文字と語彙	<p>日本語の文字や語彙は、日本語研究のなかでも、表記研究、語彙・意味研究の基礎となる、重要なテーマである。この授業では、日本語の文字や語彙について、基礎的な知識を身に付けさせるとともに、文字や語彙について、自ら問題を発見し、問題解決へと展開できるよう指導していく。日本語の文字については、漢字、仮名など、日本語表記において文字が果たす役割について考える。また、日本語の語彙については、位相、出自、意味分野などによる語彙分類を通して、語彙とは何かについて多角的に考えていく。</p>	
言語とコミュニケーション	<p>本授業では、会話から受ける相手の印象について会話を実証的に分析し、会話・談話の分析の視点、分析力を養うことを目的とする。日常生活では、よく話す人、おとなしい人、うるさい人などと相手に対して主観的な評価を行うことがあるが、そのような評価が生じる背景には、実際の会話においてどのようなやりとりによるコミュニケーションが行われているのか、接触場面と内的（母語）場面におけるなど様々な会話例から探る。授業は、講義ならびに受講生とのディスカッションを中心に進める。</p>	
児童文学	<p>本授業では、3人の作家、芥川龍之介、宮沢賢治、松谷みよ子の代表的な児童文学作品を取り上げ考察していく。それぞれの作品の持つ魅力、アプローチの仕方を解説すると同時に、日本近現代文学史において、個々の作品がどのような意義を持つのかを明らかにしていく。読者を児童に想定した作品を考察していくことを通して、子どもの文化の豊かさに気づき、受講生自らが児童文学の魅力について説明することができるようになることを目指す。</p>	

<p>女性文学の世界Ⅱ (古典編)</p>	<p>古典の時代、男性中心と言ってよい社会の中で、女性たちは何を考えどう生きたのかを考える。前半は和歌の贈答を取り上げる。贈答歌には大きくは2つの決まり事がある。1つは相手の詞を自歌に取り込む。2つは男性の求愛を 切り返し、否定・反論する。その応酬の中で、歌才とともに女心が垣間見える。額田王・和泉式部・小野小町・式子内親王の歌を対象として、歌人は歌に何を託したのかを考える。後半は、『平家物語』の女性たちの愛別離苦の哀しみを通して、祇王・横笛・小督・巴御前・小宰相・重衡北の方の生き方を考える。</p>	
<p>日本文化研究Ⅰ</p>	<p>絵巻物の制作の目的、絵巻を通して何をみることができるのかを考える。併せて、詞章(詞書)である作品を読解し、その問題点を明らかにする。絵巻には『伴大納言絵巻』には、「二人の謎の人物」が問題としてあるように謎が残されたものもある。こうした謎に対して、様々な推論を検討して妥当な結論を導く。日本文化の基底にある、もののけ・異類婚姻・鬼・妖怪退治の物語を通して、発生の場、異界の問題と異類の存在意義について考える。</p>	
<p>日本文化研究Ⅱ</p>	<p>日本の和歌修辞について考える。掛詞とは何なのか、その発生、いかなる価値が認められるのかについて、『万葉集』『古今集』の例歌から考える。また、序詞の起源、その展開の諸相を追い、序詞の効果・価値を考える。対象は『万葉集』『古今集』『新古今集』とする。さらに、藤原定家の本歌取りの理論を、『近代秀歌』『詠歌大概』『毎月抄』を通して考える。加えて、定家の本歌取歌を取り上げ、本歌取り論を元に、その独創的着想について考える。</p>	
<p>日本文化史Ⅰ</p>	<p>世界文化遺産に登録されている厳島神社を文化的な観点から捉えることで、地域の文化を理解する視点を身につけるのみならず、地域と自分との関わりを考えることのできる能力を培うものとする。また、厳島神社の神事・祭礼や文化財を通して、自らの感性の素晴らしさに気付くことができるようにする。『平家物語』、平清盛だけではない、厳島神社の全貌を明らかにする。講義を主体とするが、参考資料としてビデオなどの映像資料をも視聴する。</p>	
<p>日本文化史Ⅱ</p>	<p>中世から現代にいたる時期の幾つかの文化的事象を取り上げ、日本人である自分の発想や振舞い方の原点について考え分析できる能力を培うものとする。また、日本文化の優れたところや問題点を理解したうえで、外国人に correspond できる習性を身につけることを考える。日本人は明確にものを言わないと批判されることが多いが、その由来を生活習慣・人間関係から考える。講義を主体とするけれども、参考資料としてビデオなどの映像資料をも視聴する。</p>	
<p>漢文学概論Ⅰ</p>	<p>なぜいま「漢文」を読むのだろうか。この問いを考えるために、この授業では、「漢文」を知るためには何が必要なのか、「漢文」を読むとはどういうことなのか、ということをも具体的な作品の読解を通して考える。漢文の構造・語法についての理解を深め、辞書・工具書・注釈書の利用方法を説明し、その上で、『論語』『史記』『桃花源記』『唐詩』を読み、「漢文」を読むことの意義について答える。また、日本人が漢文から学んだことは何であったかをも考える。</p>	
<p>漢文学概論Ⅱ</p>	<p>なぜいま漢文を読むのだろうか。前期に引きつづき、この問いを考えるために、作品を読解しながらそれぞれの作品からどのような問題を読みとることができるのか、またその問題がどのように表現されているのかということを考える。なお、対象とする作品には主に中学校・高等学校の漢文教材を用いることとする。思想・史伝・漢詩・中国小説、時に日本人の著した漢文をも対象とし、問題の所在・作品の解釈・作品の批評を通して読み解く。</p>	

書道 I	<p>書道 I では、日本で生まれ育った仮名文字について理解し、基本的な用法、用筆を身につける事を第一の目的におく。仮名は、わが国固有の文化遺産で漢字の草体から仮名独特のフォルムを創出し、これを表音文字として国語を表現した。先賢の叡知がわが国の文字を形作った。それを美術的表現の素材としてはぐくんできた特殊性に目を向けていく。この授業では、美術的観点から見た仮名文字に焦点をあて、活字体ではなく、美的な平仮名、変体仮名を研究していく。読める、正しい筆づかいで書ける、演習形式で学ぶ。</p>	
書道 II	<p>書道 I で学んだ事を基にして、それを一步前進させ、和歌等を題材にして、連綿の歴史や方法を学び、墨継ぎなどを考えあわせながら作品作りをめざしていく。四行書から始め、散らし書き、短冊と形を変え、より高度な美的表現を研究していく。その過程に於いて、書く楽しさ、奥深さを感じて、日本古来の仮名芸術のすばらしさを自身で感じ味わう。ひいては、次の世代にこの貴重な遺産を少しでも伝承していける様学生に考える場を設ける。日常生活においても「実用の書」としての1書、年賀状等に応用できる事を学ぶ。</p>	
国語科教育入門	<p>中学校・高等学校の国語科教員の道を歩もうと真剣に考えている学生、あるいは迷っている学生を対象にし、国語科教員免許取得に対する学生の意識を高め、その後の学びをより効果的にすることを、目的とする。講義では、国語科教育の目標をまず把握させる。その上で、国語科教育に携わる者の基本的な心構えを提示するとともに、国語科教員に求められる知識や技能について考えさせ、その獲得の方途を示す。さらに、これからの国語科教育の進むべき方向性についても考えさせる。</p>	
国語教材研究 I (古文・漢文・現代文)	<p>中学校・高等学校国語科教育の基礎理論の理解の上に、主として中学校・高等学校教科書に取り上げられた教材(現代文・古文・漢文)について、授業の実際の観点から、教材研究を行う。中学校教材では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が、授業構成にどのように関わっているかを中心に研究を行う。高等学校教材では、主に国語総合採録の現代文・古文・漢文教材について、実際の授業展開に必要な能力を養成するための研究を行う。</p>	
国語教材研究 II (日本語文法・日本語の語彙・日本語の表記)	<p>中学校・高等学校国語科教育の基礎理論の理解の上に、主として中学校・高等学校教科書に取り上げられた教材(現代文・古文・漢文)について、授業の実際の観点から、教材研究を行う。中学校教材では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が、授業構成にどのように関わっているかについてより深い研究を行う。高等学校教材では、国語総合・現代文B・古典B採録の現代文・古文・漢文教材について、実際の授業展開に必要なより高い能力を養成するための研究を行う。</p>	
国語科授業実践研究 I (カリキュラム論・授業論・授業観察)	<p>国語科教員として授業を構想し、それを実践に移すための基本的な考え方を提示し、授業者に求められる技能および知識を獲得するための支援をする。講義では、授業を行うために求められる力を授業構想力と授業実践力とに二分して示し、それぞれの内容を具体的に示す。また、すぐれたカリキュラムの例や授業実践例を示しながら、カリキュラム構築から授業実践への道筋を理解させる。さらに自らの授業を鍛え高めるための国語科授業観察のポイントを提示し、授業を見る目を養う。</p>	
国語科授業実践研究 II (国語科音声指導法、国語科文章指導法)	<p>国語科教員として授業を実践するために必要な技能や知識を身につけさせる。特に、「話すこと・聞くこと」の指導および「書くこと」の指導を効果的に行うための、音声言語指導法と文章表現指導法を習得させることに重点を置く。音声言語指導法では、聞くことの技能の系統的指導、場に応じて適切に話すことの指導、円滑に話し合いを進めるための指導等のあり方を示す。文章表現指導法では、目的や相手に応じて適切に表現する力を高めるための作文指導法を、課題や条件の示し方や実際の例文を引きながら提示する。</p>	

専 門 科 目 内 容 科 目	中学校国語研究 (教科書分析)	中学校の国語の教科書を、教える立場から、様々な角度により徹底的に分析することを授業の目的とする。学習指導要領と教科書との関わり、教科書の歴史、教科書と思想、教科書の構造分析、教科書間の記述・内容の違いとそれへの対応、授業における教科書のあり方の問題などとおして、教科書の現状を明らかにする。特に、典型教材として長く掲載されている「少年の日の思い出」、「走れメロス」、「故郷」等については、単元での位置づけ、目標、学習の手引き、注釈等の比較検討を掘り下げて行う。また、近年大きく内容が改善された「話すこと・聞くこと」および「書くこと」の教材の分析にも力を入れ、読むこと中心の指導に終わらない国語教室経営を行うための素地を養う。中学校の国語教員になるための資質、特に教材研究と学習指導案、年間学習指導計画作成のための能力の向上を図ることを企図した授業である。	
	高等学校国語研究 (教科書分析)	高等学校の国語の教科書を、教える立場から、様々な角度により徹底的に分析することを授業の目的とする。学習指導要領と教科書との関わり、教科書の歴史、教科書と思想、教科書の構造分析、教科書間の記述・内容の違いとそれへの対応、授業における教科書のあり方の問題などとおして、教科書の現状を明らかにする。特に、古典教材における本文、注釈、挿絵、学習の手引き等については、教科書間の比較検討を精緻に行い、伝統的な言語文化に親しませるための教材作成と指導のあり方について考察を深める。現代文においても、典型教材「羅生門」、「心」、「山月記」等の教科書間の教材化の違いの比較検討を通しての学びを重視する。高等学校の国語教員としての深い教材理解の必要性を受講生に理解させ、教材研究と学習指導案作成のために必要な力の育成を目指す。	
	国語科教育法Ⅰ	国語科授業(中学校・高等学校)を構想・実践するための基盤となる学習指導要領に対する理解を深めさせることを、目的とする。講義では、現行学習指導要領で国語科の目標に示されている「伝え合う力を高める」ことや「思考力や想像力」を養い伸ばすことの重要性を認識させるとともに、確かに豊かな言語活動を通して系統的な言語技能を高めることの必要性等について考えさせる。また、戦後、今日に至るまで改訂を重ねられてきた学習指導要領の史的変遷についても、資料の検討を通して理解させる。	
	国語科教育法Ⅱ	実際に国語科の模擬授業を行わせ、それを相互に批評し合わせることを通して、学習指導案作成能力と授業実践力を向上させることをねらいとする。学習指導案の作成にあたっては、いくつかの形式の学習指導案のフォーマットにそって授業を構想させ、指導案と授業の関係について考えさせる。また、指導案作成の段階で持った授業イメージと、実際の模擬授業との違いについて分析させることによって、学習者とのやりとりを進める実践的な力の大切さについても気づかせる。本科目は、質の高い教育実習を行うための基盤としても位置付けられる。	
	国語科教育法Ⅲ	学習指導の技術を、多角的に学ばせる。講義では、発問、板書、ノートテキング、ワークシート作成、机間指導等の指導技術の基礎・基本について実践事例に即して理解させる。また、国語教室経営という視点からも、授業の構築について考えさせていく。さらに、教師主導型の注入的な授業ではなく、学習者の主体的な学びを可能にするための、学習意欲喚起の手立てや、生徒との対話を開くための方法、学習形態の工夫等についても、すぐれた授業実践にふれながら考えさせていく。	
	国語科教育法Ⅳ	学習者の意欲喚起と国語力の向上に資する国語科評価のあり方について理解させることを、目的とする。授業では、まず評価と評定の違いを明確にする。その上で診断的評価、形成的評価、総括的評価を適切に位置付け、指導と評価の一体化を図ることの大切さを理解させる。また、教師による評価だけではなく、学習者による自己評価や相互評価を適切に取り入れることの必要性を具体的事例の提示を通して指摘する。さらに、評価対象については、認知面や技能面に偏ることなく、情意面にも着目することの必要性を説く。	

比較言語学	<p>言語に依存するコミュニケーションに関しては、使用する言語の要因やコミュニケーションに介在する要因に基づいて、言語スタイルやコミュニケーションスタイルが成立しているが、グローバル化される現代では、一つの言語コミュニケーションの理解だけでは数々の問題が生じてしまうことになりかねない。そこで、この授業では、グローバル社会で使用される英語と日本語において、それぞれの言語コミュニケーションの特徴を理解し、比較することによって、適切な言語コミュニケーションが図れるようになるための背景を考察していく。</p>	
比較文化学 I	<p>This course addresses the social and cultural differences among the native-English using nations and societies: British culture, North American culture, and Australian and New Zealand culture. Examples of social conventions, systems and common practice among local people will be illustrated to help students understand the distinctive features of each culture. Special attention will be paid to the diversity of people that make up each of the nations, and the effect of minority groups on the nation as a whole.</p> <p>この授業ではイギリス、北アメリカ、オーストラリアやニュージーランドといった、英語を母語として共有する国や地域に見られる社会的、文化的差異を取り扱う。各地域の社会的慣習や制度、日常生活の習慣などから具体的な事例を取り上げて検討し、それぞれの文化の特徴を理解する。とりわけ、国家を形成する構成員である国民に内在する多様性や、マイノリティに分類される人々が国家全体に及ぼしうる影響を、各国の状況において考察する。</p>	
比較文化学 II	<p>日本文化について深く理解し、さらに日本文化を海外に発信するための能力を養うために、アジア圏諸国の文化を取り上げて、比較しつつ、日本文化とアジア諸国の文化の違いについて考察していく。文化の根底にある内面性の違いを探ることによって、異文化理解力を身につけることを目的としている。具体的には、衣・食・住を中心とした生活様式や、教育や政治、思想、娯楽、歴史的背景など、幅広く例を提示しながら、単なる知識の吸収にとどまらず、積極的に自らの考えをお互いに出し合う授業内容とする。</p>	
日本語教育概論	<p>今様々な事情で日本語を学ぶ人の数が増えている。本授業では、日本語教育とはどのような仕事なのかを把握するとともに、日本語教師に必要な資質と能力とは何なのかについて考える。本授業の最終的な到達目標は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① コースデザインについての知識を獲得する。 ② 外国語教授法の理論についての知識を獲得する。 ③ 学習者の立場に立つことの意味を理解する。 ④ 初級の教え方、中級以上の教え方の相違を把握する。 	
マンガ・アニメーション研究	<p>マンガ・アニメーションは我々の生活からの派生物として生み出されたが、日本文化への定着が進んだ現在、我々の生活に新しい影響を与えるトレンドを与える先端的文化として、国内外において評価されている。日本の輸出産業としても注目されるマンガ・アニメーションについて、日本作品を中心に海外作品との比較によって、相互の影響関係を視野に入れつつ、その歴史と表現方法の変遷をたどるとともに、現実的な我々の生活空間への影響について考える。</p>	
都市と文化財	<p>都市化が進む現在、我々の多くの生活空間は都市に集中してきており、都市を構成する要素が我々の生活空間に密接に繋がりを持つようになってきている。それぞれの都市には、都市を象徴する「文化財」が存在し、その都市を彩る要素と成っている。本講義では、「文化財」として伝わるモノが、どのような場で、どのような需要を受けて生まれ、どのように受容され、消費され、今日まで伝わったのかを「都市」というキーワードのもとに考えるとともに、いまはまだ「文化財」と認識されていない消えゆくモノについても考える。</p>	

地域と歴史	我々の衣食住の生活は、それぞれの地域の持つ歴史や文化の中で育まれ、継承されてきた産物で構成されている。本講義では、高校までに習ってきた日本史・世界史をいったん離れて、歴史学とは何かを考えたのち、歴史学の基礎、歴史学の方法、歴史学の思考法を学び、そのうえで、地域の持つ資源やその特性の背景にあって、それを特徴づけている歴史について、地域ごとの違いや共通点に着目しながら理解することで、我々の生活空間を彩る文化を洞察する目を養う。	
写真映像論	インターネットの普及によって、写真・映像は氾濫しており、今日、写真・映像のない状況を夢想することすら困難である。現代社会において、重要な伝達メディアであり、あまりに当たり前にありふれたものになってしまっている写真・映像について当たり前を疑うことから始める。まずは写真の原理を理解し、写真・映像など視覚表現の歴史を写真の発明からたどるとともに、現在の多様な在り方、発信の双方向性などからその特性や、限界と可能性、どのように向き合っていくべきか、実践的に考える。	
多文化共生社会論	国内においても移民が増加する現在、「他者」「異文化」を理解し、共生していく作法を身につけることは必須となっている。本科目では、日本をはじめとして世界の様々な地域で起こっているコンフリクトや共生の事例を学ぶことを目的とする。これを通じて、グローバル化の進展とともに変わりゆく日本の生活環境において、異なる他者とどのように折り合いながら生活し、協働していくのかを考え、実践するための視点を身につける。	
国際関係論	国家、地域、民族の行為主体間で展開される、政治的、経済的、歴史的、文化的、宗教的な相互作用と、そこに提起される諸問題を学際的な観点から考察する。さらに、人類の共存と平和ならびに文明の発展を探究する姿勢を育成するとともに、個々の事象とその周辺環境を巨視的に把握する分析力を深化拡充させることを目的とする。そのため、日本を座標軸の中心に据えた世界観と、特定社会の規範に照らした日本観を相対的に比較することにより、グローバルな人材が具備すべき基本的な知識と教養を習得させる。	
文化人類学	諸民族の伝統・文化、社会、言語、政治・経済、宗教、教育、芸術・音楽・映像、住環境・風俗習慣などを比較することにより、人類とその営みに関する相対的な知見を深める。その際に、文化の多様性や重層性に注目しながら異文化間の相互理解を促すための事例研究に取り組むなどして、人類共通の価値基盤の普遍性あるいは民族固有の価値基盤の妥当性に関する理解を深めるとともに、対象社会の利益や繁栄のための言説について考察する。	
Global Village Field Experience I	The purpose of this course is to prepare students for their fieldwork volunteer program or internship. Students will learn vital information relevant to field study, such as local history, culture, current events and the political situation. It will also include the opportunity for students to learn the basic skills necessary for cross-cultural immersion and to stay safe during fieldwork. After the completion of the course, students will go abroad on their fieldwork experience, or participate in a volunteer program or internship. この授業の目的は、学生がフィールドワーク、ボランティア、インターンシップなどの目的を理解し、その準備のための情報収集、調査方法、プレゼンテーションの仕方などを身につけることである。行き先の歴史や文化、砂金の出来事、政治情勢といった必要な知識について学ぶ。フィールドワーク、異文化体験やそのための安全な参加の仕方に関する不可欠な情報も合わせて扱う。そのうえで、実際に海外に行きフィールドワーク、ボランティア活動、インターンシップに参加する。	

<p>Global Village Field Experience II</p>	<p>Students will reflect upon their experience in their fieldwork, volunteer program or internship. This class will explore a variety of projects, such as globalization, development, sustainability, leadership and others, in order to connect Global Village Field Experience I to their studies. By the end of the course, students will create a community-based project proposal, during which they will think critically about how they can take action to improve the world around them.</p> <p>海外でのフィールドワークやボランティア活動、インターンシップへの参加を振り返る。この授業では、Global Village Field Experience Iをその後の学びと関連付けるために、グローバリゼーション、開発・持続可能性、リーダーシップといった、様々なプロジェクトに取り組む。地域に根差したプロジェクトの計画を考えることによって、自分たちを取り巻く世界を改善するための方法について批判的に考えられるようになることを目指す。</p>	
<p>インディペンデント・スタディ</p>	<p>履修者が担当者から定期的に個別指導を受けながら、国際英語学科あるいは日本文化学科が扱う対象領域及び研究分野における諸問題や今日の課題を自由に取り上げて、履修者独自の観点から当該事象の分析や考察を試み、そして、その成果を所定の報告書にまとめる。本科目は、履修者の自律的で主体的な学習を求めるものであり、研究素材・研究計画・研究手法・作業手順などを統合的に検討あるいは策定し、考察や調査の結果に基づく根拠資料（ポートフォリオ、アンケートやインタビューの結果、関連資料の解説や翻訳など）に加えて総括的なレポートを提出する。担当者は、個々の履修者の研究活動を監督するとともに必要に応じて支援することにより、履修者に自発的な研究態度と基本的な研究能力が備わるよう体系的に指導する。</p>	
<p>海外研修 I</p>	<p>海外の文化に直接接することで、教養を高める。そのための準備として、事前授業を踏まえて実際に海外の大学機関での実践を体験する。8月初めより、約1カ月に渡って、海外(主に、アメリカ、イギリス)の大学機関において、集中的英語研修を行う。その間の詳細なプログラムは、開催大学機関と連携しながら示していく。プログラムの基本は、4技能をまんべんなくカバーすることで英語活用能力の向上を図り、生活の面での文化的理解を深めることである。</p>	
<p>海外研修 II</p>	<p>英語圏（イギリス・マンチェスター市）での4週間のホームステイ滞在中に、英語学校における英語学習をとおして実践的なコミュニケーション能力を向上させるとともに英語文化に関する理解を深めつつ、現地の小学校並びにハイスクールにおけるインターンシップ(授業観察、支援、教壇実習など)に従事することにより、総合的な英語のコミュニケーション能力を向上させるとともに教育現場を通してイギリス文化について理解を深めさせる。</p>	
<p>海外研修 III</p>	<p>グローバル化が進む一方で、他の文化や思考様式に対する我々の知識や理解は、依然乏しい。情報化社会の中で、マスメディアの偏った情報に大きく左右される現実がある。本授業では、海外での生活を体験することにより、自分自身の目で、異なる文化を分析し、理解し、それを自分自身の言葉で伝える能力を養うことを目的としている。また、自分自身の言葉で、自国の文化を紹介し、異なる文化的背景を持った人との相互理解を深めることを目的とする。</p>	
<p>日本語フィールドワーク I (日本語の方言)</p>	<p>この授業では、実際に学外で方言の調査を行うことにより、日本語の方言研究の方法の基礎を学ぶ。日本語の方言研究は、土地の人々から、情報を提供していただいて初めて成り立つ学問である。方言調査には、基本的なルールやマナーもあり、また効果的な調査方法も存する。これら、方言研究には欠かせない、調査技術を習得させることを目的とする。また、実際に学外で、土地の人々と積極的に会話させることによって、その土地土地の言葉の背景にある文化や歴史について深く理解させることを目的とする。</p>	

専門科目	展開科目	日本語フィールドワークⅡ（郷土資料調査）	日本語の歴史的研究に使う資料には、様々なものがあるが、その一つに郷土資料がある。郷土資料は、その土地土地の言葉の歴史を研究する上で、欠かせない資料である。郷土資料のなかには、既に公刊されて、図書館等で見ることが出来るものもあるが、その多くは、旧家や寺社、各地の郷土資料館、博物館等に納められている。未発掘の資料も多い。特に、角筆文献は、郷土資料として、日本語の歴史的研究には重要な資料である。この授業では、学外でしか見ることが出来ない、郷土資料を研究資料とするための方法を、実地調査に基づいて身に付けさせることを目的とする。	
		日本文化フィールドワーク	グローバル社会を生きていく中で、日本の文学・文化を知ることが、今後ますます重要なものとして認識されていくことが予想される。こういった時代の要請に応えるべく、国内の文学ゆかりの地を踏査することによって、日本文化を学ぶ手掛かりを得ることを目的とする。事前授業では踏査対象地が舞台となる文学作品についての講義を行う。そして受講生は、行程案の検討や、その土地についての調査をグループ学習により展開させ、成果発表を行う。	隔年
		地域連携文化セミナーⅠ	履修者は、広島市及び近郊の地域社会における諸活動あるいは諸行事に参画したり、国際英語学科、日本文化学科の学生として自発的な活動を計画・実施したりして、問題解決型あるいは体験型の学びを重なることにより、大学における学習内容を現場で検証あるいは活用する。たとえば、主な活動としては、小中高生に英語を教える（あやめ英語塾）、外国人向けに地図やメニューを英訳する（英語翻訳活動）、広島市を訪れる観光客を英語で案内する（英語案内活動）、小学校や中学校で英語の授業観察や学習支援を行う（学校インターンシップ）、留学生や日本語を母語としない海外出身の子供に英語や日本語を教える（外国人に対する英語・日本語指導）、観光大使などの営利を目的としないコンテストの入賞者として公的な活動に従事し表現力や言語力を鍛える（公的イベント参画）、公民館などでの英語活動に定期的に参加し支援する（広島市牛田地区支援活動）などが考えられる。担当者は、履修者の諸活動を監督するとともに必要に応じて支援することにより、履修者が地域社会の一員としての責任感を深め、社会貢献の方法を模索するよう体系的に指導する。	
		地域連携文化セミナーⅡ	本授業では、「キャリア・スタディ・プログラム」を通して身に付けたスキルや、学科内での専門的学びを、学外において、地域のコミュニティの中で役立てることを目的としている。具体的な活動としては、地域公民館での朗読会の開催、ミニコミ誌の作成、外国からの観光客への広島の案内、インターネットを利用した日本文化の発信など、企画から実践まで、受講生が主体的に関わることで、積極性や協調性を体得することを目指している。	共同
関連科目Ⅰ	教職	教育原理	学校、子ども、幼児教育の3つのテーマをもとに、歴史的・社会的視点から見ることを通して、教育の原理や本質について理解する。また、以上の理論的考察とともに、さまざまな実践的課題について自分なりの見通しを持つことができる。到達目標は以下の3点である。1点目は、学校教育・保育の本質・原理について歴史的、社会的側面から説明できることを目標とする。2点目は、学校教育・保育をめぐる課題や問題について説明できることを目標とする。3点目は、学校教育・保育をめぐる課題や問題の解決や実践に向けた見通しを持つことができることを目標とする。	
		教育心理学	学校教育においては生徒の内面を深く理解し、一人ひとりの生徒が必要としている適切な支援を行うことが大切である。そのためには心理学の基礎を身につけ、心理学的な人間のとらえ方、支援のあり方について学ぶことが有意義である。本講義では、これまでに心理学において研究されてきた発達・学習・人間関係・評価についての成果をふまえて、それらを教育にどのように生かしていくかを考える。また、教育的な支援を必要とする生徒（障がいのある生徒）への理解を深め、その支援のあり方について考える。	

関連科目 I	教職	教育社会学	身近な事例やメディアにあらわれた教育事象などをもとに、社会的に教育を捉える視点を養う。具体的には学校の役割、学校と社会階層、「子どもの誕生」、教育とジェンダーなどのテーマについての理論的考察およびそれらを通じた教育の現代的課題に対する実践的な見通しを持つ。到達目標は以下の3点である。1点目は、教育社会学の主要な概念を理解することを目標とする。2点目は、教育社会学の主要な理論を理解することを目標とする。3点目は教育社会学の理論、概念を用いながら現実の教育事象について議論できることを目標とする。	
		教職実践演習（中・高）	本授業科目は4年後期に開設されていることから、これまで教職課程履修の経過をみて、学生の指導を行うとともに、不足していると認められる知識や技能を補うことを目的とする。具体的には、中学校・高等学校教諭に必要とされる実践的な活動（事例研究、現地調査、模擬授業）を通して、教師としての資質能力、知識を身につけることにより教職生活へのよりよいスタートを図ることをめざす。1、2、5、8、9回については共同で実施し、それ以外の回については取得を目指す教科を勘案して3つのクラスに分級して行う。	共同
		教育史	現代の日本においては、教育を受けることは国民の権利であり、全国共通の教育の学校システムにおいてすべての子どもが学ぶことは自明なことと捉えられている。しかし、こうした教育のありようは18～19世紀の欧米の教育思想や制度に強い影響を受けながら形成されてきたものである。本授業では、西洋と日本という二つの視点から、それぞれの子どもと子育ての歴史、教育思想史、学校の成立史、戦争と教育の歴史、戦後教育と福祉の歴史について学ぶ。	
		学習心理学	学習に関する基礎的知識を習得し、学習に関わる諸問題を理解することができるようになることを目標とする。具体的内容としては、学習の基礎理論である条件づけ、記憶・理解・知識の獲得における認知過程、及び動機づけに関して心理学で解明されてきた知見について講義するとともに、学校における学習指導を効果的に行うための基本となる事項については具体的事例をあげ、体験的実習や演習を採り入れながら授業を進めていく。授業を通して、児童生徒の学習面でのさまざまな問題を理解し、解決するための支援ができる実践的指導力の育成をはかる。	
		教育と法	教育行政のしくみ、主に学校教育制度を法的側面から考察する。教育法規の最新の改正情報や教育をめぐる裁判例や事件記事、統計的数値といった具体的な資料を取り上げ、学生が身近に教育制度を理解できるように解説する。また、教育を受ける中心となる子供の権利について詳しく解説する。教育委員会や学校をめぐる地域との連携など、学校を取り巻き、支える組織や協力体制、安全や危機管理、個人情報保護など、教員が理解しておくべき関連法規についても理解できるように分かりやすく解説する。	
		学芸員	観光学	近年の海外の旅行者の増加、海外での日本文化の認知の結果、我々の生活文化は観光産業においても大きな資源となってきている。これからの日本を支える産業とも目される観光について、その歴史や産業構造などの基礎的知識を身につけ、多岐にわたる観光学の広がり理解するとともに、「知る」・「伝える」ための観光プランの作成などを通じて、我々の持つ観光資源を有効に活用し、観光に結びつけて産業化に応用する力を実践的に身につける。

市民社会とNGO・NPO	<p>高度情報社会において、今までにない速度で社会が変化し、政府や自治体のみでの公的サービスにより諸問題に対処するには限界が見えてきている。こうした変化に対応するために、まちづくりや環境保全等を推進する民間非営利組織(NPO)の活動が活発に展開されている。本講義では、身近な現代社会における様々な問題に注目しながら、NGO、NPOの活動や役割を理解するとともに、活動事例の中から、様々なNGO、NPO、営利企業が地域課題や社会課題に取り組む事例を分析し、取り組む課題と効果を理解し、社会における役割について考える。</p>	
世界遺産学	<p>地域環境に存在する人類普遍の遺産である世界遺産を保護する条約とその制度について学ぶとともに、世界各地の文化遺産、自然遺産について検証し、今後の世界遺産の保護制度について考える。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (22 田頭紀和／4回) 世界遺産のうち、特に、環境的な側面から自然遺産に関して解説を行う。 (31 福田道宏／4回) 厳島神社と原爆ドーム、奈良・紀伊の世界遺産、石見銀山等の日本国内の世界遺産を解説するとともに、日本の文化財保護に関しても触れる。 (30 永野晴康／4回) 世界遺産条約と世界遺産の保護制度の概要、ヨーロッパの世界遺産に関する解説を行う。 (40 伊藤千尋／3回) アジア・アフリカの世界遺産の状況について解説を行うとともに、危機遺産等の問題につき言及する。</p>	オムニバス方式
西洋服装史	<p>服装は、時代や民族により異なり流行とともに移り変わっている。この授業では、現代の服装のルーツとなる西洋の服飾史の変遷から、それぞれの時代の服装成立の条件から、気候や風土の違い、歴史的背景や繊維加工技術の発展などを読み取り、服飾についての基礎知識を修得する。また、アイテムの特徴から、デザインや素材、色、形などの基本的な知識を学び、服飾や装飾から現代のファッションについての意識を高めることを目的とする。</p>	隔年
日本服装史	<p>この授業では、体系的な日本の服装の歴史を学び、デザインや色彩、被服それぞれの構成など、それらの巧妙な組み合わせを知ること、服飾の多角的な見方を習得することを目的とする。また、自らの装う意味や他者のファッションが表現のするものを見抜く力も色や文様などの意味を知ることにより養成する。この授業で取り扱う時代は縄文、弥生、白鳳、飛鳥、奈良、平安、鎌倉、室町、戦国、江戸、明治、大正、昭和初期までとし、考古学的視点も含めた内容とする。</p>	
生活造形論 (工芸とデザイン)	<p>私たちの生活は様々なものに囲まれている。これらのものはどのような考えをもってつくられ、私たちの生活とどのように関わっているのだろうか。授業では産業革命以降のデザインという行為の史的展開と、基本的なデザイン理論、現代デザインの背景と課題を解説する。デザインとは何か、デザインの歴史やデザインの役割や可能性について理解を深めるとともに、デザインに対して日常的に関心を抱く態度を養うことを目的とする。</p>	
日本建築史 (含住居史)	<p>日本の古建築の特色を、寺院・神社・住宅・城郭建築の構造や意匠・技術を通して理解し、日本の文化や伝統および先人の知恵を感じ取ることを、また建築学の基礎知識を習得することを目的とする。授業の内容としては、日本建築の種類、社寺建築の構造と細部意匠、飛鳥・奈良時代の寺院建築、平安時代の寺院建築、中世の寺院建築、神社本殿の種類と構造、近世の社寺建築と地方色、古代の住居と寝殿造、寝殿造から書院造へ、書院造の構造、城郭建築(天守)の構造などを予定している。</p>	

学 芸 員	関 連 科 目 I	西洋建築史	過去のすばらしい建築をみる喜びを体験し、西洋建築の歴史と様式について基本的な理解を得ることをめざす。授業の内容としては、建築と建築家、西洋建築史の枠組み、古代ギリシアの建築、古代ローマの建築、キリスト教建築のはじまり ビザンティンの建築、ロマネスクとゴシックの建築、ルネサンスの建築、バロックの建築、ロココと新古典主義・折衷主義の建築、アールヌーヴォーと近代建築、建築のオーダー、ヨーロッパ以外の西洋建築を予定している。	集中
		感性デザイン論Ⅰ (ポップカルチャー)	現代の日本の若者文化(ポップカルチャー)は、海外から「クール・ジャパン」と呼ばれ、称賛されている。特にアニメ、マンガ、ファッションは、日本独自のデザインや感性、個性が高く評価されている。 この授業では、ポップカルチャーの中でも、特に日本の少女文化(ファッション、少女マンガ等)を取り上げ、戦後の少女文化の変遷を辿ることで、各時代に少女時代を過ごした世代が、どのような価値観(恋愛観、結婚観、人生観、将来像)を持っていたのか、また、社会背景、文化、生活習慣が女性の生き方や思考にどのような影響を与えてきたのかを理解する。	隔年
		感性デザイン論Ⅱ (ファッション文化史)	現代社会において、過剰なまでに氾濫するモノを選択するうえで、デザインは大きな要素を占めている。現代だけでなくひとはつねに新しいデザインを求めてきた。インテリア、ファッション等においても、デザインはわたしたち消費者を刺激する強い力といえる。 この授業では私たちにとつてもっとも身近なファッションデザインをとりあげ、特に若者の日常生活から発生・流行した“ストリート・ファッション”に注目し、戦後のファッションの歴史と、彼らの価値観の変化、および若者を取り巻く環境の影響について考察する。	隔年
		服飾美学	服飾は時代や地域・文化によって、様々な文化的表現、思想的表現を行い、また、社会的地位を表象している。 この授業では、服飾に用いられる色彩、素材、技術、組み合わせを分類・分析することで、服飾が象徴する思想を客観的に読み解けるようになることを目的とする。 授業内容としては、絵画における服飾美学、演劇における服飾美学、祭礼における服飾美学、文学における服飾美学を予定している。それぞれの内容において動画資料などを用い、具体的な例に触れることを重視している。	隔年
		情報メディアの活用	図書館資料を構成する多様なメディアに関する理解を深め、情報メディアを活用するための実務的技術の育成を目指す。デジタルアーカイブという観点から、情報メディアの意義・種類・特質、メディアを扱う上で必要な著作権や情報倫理について学ぶ。またコンピュータやネットワークの基本的操作や情報メディアを管理・運用するための技術を学ぶ。学習メディアセンターとしての役割を認識し、図書館に関わるさまざまな情報提供と学習者の情報メディア活用を支援するための知識と技術を修得する。	
司 書 ・ 司 書 教 諭	関 連 科 目 II	図書館情報技術論	図書館業務に必要な基礎的な情報技術を修得するためにコンピュータ等の基礎、図書館業務システム、データベース、検索エンジン、電子資料、コンピュータシステム等について解説し、必要に応じて演習を行う。まず、コンピュータを使いこなし、自ら情報を収集し、整理し、保存する能力を身に付ける。また、図書館とコンピュータとの関係について深く理解させ、司書の業務にコンピュータを有効に活用する能力を身に付けさせる。学習者の個々に能力に応じて指導し、コンピュータ活用能力の基礎力アップを目指したい。	
		情報サービス論	図書館における情報サービスの意義とあり方について、特に近年の電子図書館化による多様な情報ニーズへの対応に主眼をおき、情報サービスの理論と情報検索の実際を解説する。まず、情報サービスの定義について明確にし、情報サービスの歴史と情報サービスの意義、サービス環境、館内インフォメーション、図書館利用者教育、情報リテラシー教育について述べる。また、情報サービスの情報源として、レファレンスコレクションの種類や電子メディアの種類と特徴、レファレンスコレクションの構築について理解させる。	

日本語教育	日本語教授法Ⅰ	初級の学習者に日本語を教える際には、初級の学習項目についてその意味と用法を教師が理解していることが不可欠である。加えて、学習者のレディネスやニーズを考慮し、教案を作成し、授業活動を実行する力が不可欠である。本授業では、主に初級前半の学習項目についての把握し、初級の学習項目を教える技術を身につけることを目的としている。授業では、日本語初級前半テキストを教材とし、教案作成、模擬授業を通して、これらの力を身につけていく。		
	日本語教授法Ⅱ	初級の学習者に日本語を教える際には、初級の学習項目についてその意味と用法を教師が理解していることが不可欠である。加えて、学習者のレディネスやニーズを考慮し、教案を作成し、授業活動を実行する力が不可欠である。本授業では、主に初級後半の学習項目についての把握し、初級の学習項目を教える技術を身につけることを目的としている。授業では、日本語初級後半テキストの分析、教案作成、模擬授業、日本語学習者を対象とした「日本語」クラスでの実習を通してこれらの力を身につけていく。		
	日本語教授法Ⅲ	中級以上の学習者を教える際には、できるだけ生の日本語、あるいは、これに近い日本語に触れるとともに、4技能とそれぞれのサブスキルを意識した授業、これらのサブスキルを組み合わせ、現実世界のタスクに近い教室活動を行なうことが必要である。本授業では、主に中級以上のレベルの授業を行う技術を身につけることを目的としている。授業では、中級者向けテキストの分析、教案作成、模擬授業、日本語学習者を対象とした「日本語」クラスでの実習を通してこれらの力を身につけていく。		
関連科目Ⅱ	教職論	<p>教職をめぐる組織・制度・環境等について学び、教師としての資質・能力に何が求められるのかを追究する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回) (24 戸田浩暢/13回)</p> <p>「教職の要件」、「教職の意義と教員の使命・資質」、「教員の研修と服務規程」、「初等・中等教育と教員」、「教員養成と教職課程」、「求められている教師の資質・能力及び指導力」等を学ぶ。また、特別講義として、教職経験者から現場の実際について講話を聞き、学びを深める。</p> <p>(37 大橋隆広/2回)</p> <p>「教員の仕事と役割」、「特別活動の在り方について」、それぞれについて授業者が説明し、理解を深める。</p>	オムニバス方式	
	教職	教育課程論	中等教職をめざす学生に必要なとされる「教育課程」の基礎について学ぶ。第一に、日本の教育課程の歴史と日本の新しい教育課程の取り組みについて知ることで、近代学校成立以降の日本の教育課程の変遷と現在の姿を理解する。第二に、教育課程を支える基本的な考え方や仕組み、教育課程編成の方法原理、学習指導要領、教育評価のあり方を学び、教育課程編成のための基礎的な能力を身につける。第三に、学力格差、新しい学力観、カリキュラム・マネジメント、学校間の移行期の教育問題を取り上げ、現代社会における教育課程を取り巻く諸問題について理解を深める。	
	教育方法論 (情報機器及び教材の活用を含む)	教育において、自ら学び、自ら考え、自ら決断し実行できる力を育成することが最も重要な教育目標となってきた。このような中で、これまで知識の教授に主眼をおいてきた教科指導から、自己学習能力を最大限に発揮させることのできる新しい学習指導への移行が模索されている。この講義では、伝統的な教育方法をふまえた上で、新たな視点から教科指導の方法、教育技術の開発、教育評価の問題について考えていく。具体的には、近代学校成立以来の伝統的な教育・学習方法である一斉指導およびそれらの伝統的な方法に代わる近年の個に応じた指導、協働学習などの教育・学習方法について、また近年の情報機器・技術の発展を踏まえたICTの活用方法について、そして従来の伝統的な教育評価法である相対評価、量的評価および近年の絶対評価、到達度評価、ルーブリック評価などの新しい教育評価について、説明する。		

関連科目Ⅱ

教職

<p>生徒・進路指導論 (進路指導の理論及び方法を含む)</p>	<p>生徒指導は、学校教育において生徒一人一人の個性を伸ばし、社会性を育てるうえできわめて重要な役割をもっている。本講義では、生徒が日常生活で直面している課題や問題を認識したうえで、将来を見据えて課題を解決していくために、教師としてどのような支援を行うべきかを考える。そして、積極的な生徒指導および進路指導の観点から生徒への対応のあり方、それらが有効に機能するために教師に求められる役割について研究する。具体的には、「生徒指導の意義と課題」、「生徒指導の原理と理論」、「生徒理解の進め方」、「学級（ホームルーム）経営の進め方」、「生徒指導と道徳教育」、「教科指導と生徒指導」等を学ぶ。</p>	
<p>特別活動論</p>	<p>『中学校学習指導要領解説〔特別活動〕編』（文部科学省）の内容を周知することで、特別活動の意義を理解し、その内容、計画、実践の方法などについて学習する。具体的には、「特別活動の目標・内容」、「学級活動の事例研究」、「学校行事の事例研究」、「模擬講話（個人発表）を通しての指導講話のあり方・話し方研究」、「学校行事「文化的行事」の実際（DVD）の検討」等を学ぶ。以上を通して、特別活動の教育的意義を踏まえた上で特別活動の実践を構想する方法や力量を養うことを目指す。</p>	
<p>学校カウンセリング</p>	<p>今日、学校教育の現場では、不登校やいじめなどさまざまな問題が見受けられる。中学生・高校生の時期は青年期にあたり、その心理的特徴として、性差や個人差が目立つこと、アンバランスな心身の発達、抽象的な思考の発達により関心が自己の内面に向かうことなどをあげることができる。この講義では、ライフサイクル上、非常に不安定になりやすいこの時期の生徒を、私達はいかに理解し、また、その心理的問題に対して、どのように対応すれば良いかを考えたい。</p>	
<p>道徳教育指導論</p>	<p>『中学校学習指導要領解説〔道徳〕編』（文部科学省）の内容を周知することで、道徳教育の意義を理解し、その内容、計画、実践の方法などについて学習する。具体的には、「道徳教育の目標・内容」、「外国の道徳教育の現状」、「道徳の授業づくりと学習指導案の書き方」、「道徳授業（DVD）の参観と授業検討」、「道徳の模擬授業と授業分析」等を学ぶ。以上を通して、道徳教育の教育的意義を踏まえたうえで道徳教育の実践を構想する力量や方法を養うことを目指す。</p>	
<p>介護等体験Ⅰ</p>	<p>小学校もしくは中学校の教諭の普通免許状の取得を希望する場合、特別支援学校（2日間）及び社会福祉施設（5日間）において7日間以上の介護等体験を行う必要がある。介護等体験は、様々な支援・福祉を必要とする、様々な方々と出会い、一人一人の生き方の多様性、重みを知ることが目的とする活動である。これらの活動を通じた学びは、教育実習において、子ども達をみる目（理解）に生かされてくることを、十分自覚して取り組む必要がある。</p>	<p>共同</p>

関連科目Ⅱ	教職	介護等体験Ⅱ（事前・事後指導）	<p>介護等体験の意味や本質について考え、その上で介護の現場としての特別支援学校における指導の実際や課題、各学校における日常生活や教師の活動について、また社会福祉施設における施設利用者の実状などについて学ぶ。</p> <p>（オムニバス方式/全10回） （37 大橋隆広/2回）</p> <p>オリエンテーションを実施し、介護等体験の意義と目的等について理解を深めさせる。 （24 戸田浩暢/2回）</p> <p>介護等体験に係る留意点について理解させる。また、介護等体験の前期の事後指導において、体験した内容を省察するとともに体験者の間で共有することを目指す。 （11 神野正喜/1回）介護等体験の後期の事後指導において、体験した内容を省察するとともに体験者の間で共有することを目指す。 （37 大橋隆広・24 戸田浩暢・11 神野正喜/5回） （共同）</p> <p>特別支援学校（聴覚障害）・特別支援学校（視覚障害）・高齢者福祉施設・障害者福祉施設等の特別講師から、介護等体験での現場における指導の実際や課題、日常生活や教職員等の活動についてや、施設利用者の実状などの講話を伺い、介護等体験に係る学びを深める。</p>	オムニバス方式・共同（一部）
		教育実習Ⅰ	<p>中学校・高等学校において1～2週間の観察・参加形式の教育実習を行う。教育実習は、大学において学んだ教職に関する科目および教科に関する専門科目の知識・技術および大学内外におけるボランティア活動の体験等をもとに得た知見を、実際の教育現場において指導教諭から指導を受けながら生徒たちとの間に展開することである。その実践を通じて、教師としての自らの適性、教育実践の技術的な面を学ぶことをめざす。</p>	共同
		教育実習Ⅱ	<p>中学校・高等学校において2週間の観察・参加形式の教育実習を行う。教育実習は、大学において学んだ教職に関する科目および教科に関する専門科目の知識・技術および大学内外におけるボランティア活動の体験等をもとに得た知見を、実際の教育現場において指導教諭から指導を受けながら生徒たちとの間に展開することである。その実践を通じて、教師としての自らの適性、教育実践の技術的な面を学ぶことをめざす。</p>	共同
		教育実習Ⅲ（事前・事後指導）	<p>本授業では教育実習前・後の指導を行う。教育実習の事前指導としては、教育実習の意義・目的を学ぶとともに実習中の授業への準備として、それぞれ取得を目指す学校段階・教科に関わる模擬授業を行う。また、現場の教師の講話を通して教育現場の実際について学ぶ。事後指導としては、教育実習を通して学びえたことをアンケート、集団討論、発表、個別面接により自覚的に捉えることを目指す。</p>	共同
学芸員	博物館教育論	<p>博物館は、実物資料を通して人々の学修活動を支援する社会教育施設である。博物館における教育活動の基盤となる理論や実践に関する知識と方法を習得し、博物館の教育機能に関する基礎的能力を養う。博物館教育の意義と理念、コミュニケーションとしての博物館教育、博物館教育の方針と評価について検討し、博物館の利用実態と利用者の博物館体験、博物館における学びの特性を解説、博物館教育活動の手法、企画と実施などの実際を学ぶ。また博物館と学校教育についても取り上げる。</p>		

<p>博物館概論</p>	<p>地域の学習の場として存在する博物館は、我々の生活に密着した文化、環境、技術等を伝達する貴重な場である。本講義では、博物館に関する基礎的知識を理解し、専門性の基礎となる能力を養う。まず博物館とは何か、その歴史に簡単に触れた後、博物館の定義（類縁機関との違い）、種類（館種、設置者別、法的区分等）、目的、機能について具体的に学ぶ。また、わが国及び諸外国の博物館の歴史と現状を踏まえ、そこで「専門的事項をつかさどる」学芸員の役割と実態について、考える。あわせて、博物館関係法令を概観する。</p>	
<p>博物館経営論</p>	<p>博物館の形態面と活動面における適切な管理・運営について理解し、博物館経営（ミュージアム・マネージメント）に関する基礎的能力を養う。まず博物館の経営基盤として、ミュージアムマネージメントの意義を説き、行財政制度、財務、施設・設備（ユニバーサル化を含む）、組織と職員などについて解説し、使命と計画と評価、博物館倫理（行動規範）、博物館の危機管理利用者との関係に関して紹介し、さらに博物館における地域や博物館間の連携にふれる。</p>	
<p>博物館資料論</p>	<p>博物館資料の収集、整理保管等に関する理論や方法に関する知識・技術を習得し、また博物館の調査研究活動について理解することを通じて、博物館資料に関する基礎的能力を養う。まず博物館における調査研究活動についてその意義と内容を検討した後、博物館資料の概念として、資料の意義、資料の種類、資料化の過程を検討する。また博物館資料の収集・整理・活用として、収集理念と方法、資料の分類・整理、資料公開の理念と方法（アクセス権、特別利用等を含む）について論じる。</p>	
<p>博物館情報・メディア論</p>	<p>博物館における情報の意義と活用方法及び情報発信の課題等について理解し、博物館の情報の提供と活用等に関する基礎的能力を養う。博物館における情報・メディアの意義を考察した後、博物館情報・メディアの理論として、博物館活動の情報化、資料のドキュメンテーションとデータベース化、デジタルアーカイブの現状と課題、映像理論、博物館メディアの役割と学習活用などを検討し、博物館における情報発信、博物館と知的財産などについても解説する。</p>	
<p>博物館資料保存論</p>	<p>博物館資料の保存に関する理念、その目的と意義を理解し、実際について基礎的能力を養う。「博物館法」に端的に表われているように、博物館はいくつもの機能を持っているが、外部から最も見えづらいのが保存である。博物館は収集した資料を保存し、守り伝えてゆく使命を負うが、資料は多様でその保存方法も様々である。展示と保存はしばしば相反するが、保存の必要性、資料の価値を周知するためにも展示は重要である。展示と保存の両立、或いは均衡といった観点からも博物館資料について考える。</p>	
<p>博物館展示論</p>	<p>来館者にとって、博物館の最も身近な機能は展示である。展示のしかた次第で、来館者にとっての博物館資料の認識まで左右されかねない。資料をいかにわかりやすく、或いは、見やすく、また、よりよく見せるかという技術は博物館学芸員にとって必須のものである。もちろん、博物館と一口にいってもその展示室の限界や可能性はさまざまである。ここでは、そもそも展示するとはどういうことか、その意義と理念を学ぶと同時に、いくつかの具体例をもとに、展示方法に関しての技術や知識を習得する。</p>	

学芸員	博物館実習 I	<p>博物館学芸員の業務を理解し、実践的能力を養う。その実習 I では、学内で博物館資料の取り扱いや展示の基礎的知識・技能を実践的に学ぶ。まず、博物館資料の種類や性格について改めて学んだ後、資料の点検と整理保管、梱包を実際に行う。取り扱いでは額や掛け軸、屏風、卷子などの絵画、工芸品、服飾品など実物を用いて技能の習得をする。写真・拓本のとり方、植物資料の維持管理などについて実習を行うほか、学内で展覧会を企画して開催する。</p> <p>(オムニバス方式/全30回) (31 福田道宏/27回)</p> <p>学内実習全般のオリエンテーション、及び服飾品を除く博物館資料の取り扱い、資料の記録、梱包、展覧会の企画開催など実践的実務の学びを担当する。 (22 田頭紀和/2回)</p> <p>植物公園への引率及び植物資料の維持管理について現地で講義する。 (35 檜崎久美子/1回)</p> <p>博物館資料のうち服飾品の取り扱いについて担当する。</p>	オムニバス方式
	博物館実習 II	<p>博物館学芸員の業務を理解し、実践的能力を養う。その実習 II では、I で学んだ作品の取り扱いや展示の知識・技能を踏まえ、実際の博物館園において1週間程度の実務実習を行う。実習先は受講者の卒業研究テーマなどを勘案して、決定する。館園により実習内容は様々だが、実習期間中、毎日日誌をつけて実習先担当学芸員の検印を受けるとともに、実習後、自らの実習内容について受講者全員の前で口頭での報告をし、レポートにまとめて、学修内容の定着をはかる。</p>	
	博物館実習 III	<p>博物館学芸員の業務を理解し、実践的能力を養う。その実習 III では、多数の博物館がある関西もしくは関東などの遠隔地で2泊3日の見学研修、その事前事後指導を行う。大規模館から小規模館まで、また国公立、私立など設置・運営の形態の異なる博物館を見学することで、博物館の多様さとその実務を学ぶ。事前に見学先について受講者自身が調査して冊子にまとめ、見学後はレポートを提出する。また、I から III の受講生の報告書を編集して、『博物館実習報告』を刊行する。</p>	
司書・司書教諭	生涯学習論 I	<p>本科目では、将来、博物館学芸員・図書館司書や社会教育主事など社会教育関連の職種に就くための基本的な素養を身につけると共に、社会教育の観点から生涯学習の全体像を理解することを目指す。まずは、日常生活の中で見聞きする「生涯学習」のイメージから離れて、生涯学習をめぐる国際機関および各国の政策、日本における社会教育の歴史と現状、人々の多様な学習活動の諸相について幅広く学んだうえで、具体的に社会教育機関における生涯学習のあり方について理解する。</p>	
	図書館概論	<p>図書館とは何か、図書館の機能や社会における意義や役割について理解を図る。また、図書館がどのような歴史を持ち、現在どのような種類の図書館があり、各館種の図書館にどのような違いがあるか、その社会的意義、図書館の自由、著作権の知識、さらに、図書館職員が果たすべき役割とそのため資格および専門性の内容、図書館に係わる類縁機関について、そして、図書館の現在の課題とこれからの展望など、幅広いテーマの基本を知り、考察することによって、その中で、特にまず、身近にある図書館に興味と関心を持つよう概説する。</p>	
	図書館制度・経営論	<p>市民の知る権利（知る自由）を穂書する機関が図書館である。その権利保障機関としての図書館を支える法的環境の制度等に触れていくとともに、公立図書館の経営に係わる諸問題を概説する。図書館が市民に親しまれ役立つ施設となるために求められる経営のあり方を考える。例えば、図書館評価と統計、図書館サービスの評価、図書館の建設、図書館の施設と設備、図書館の管理運営上の諸問題、危機管理など、さらには図書館職員を取り巻く現状と課題、図書館経営の現状と課題などについて講義する。</p>	

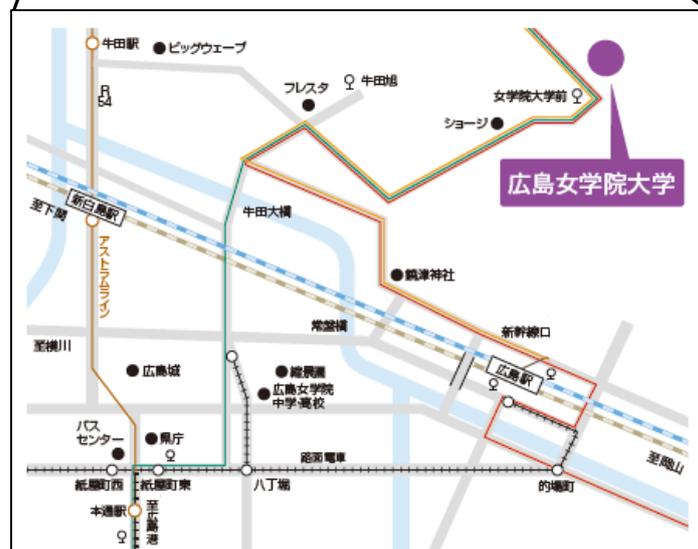
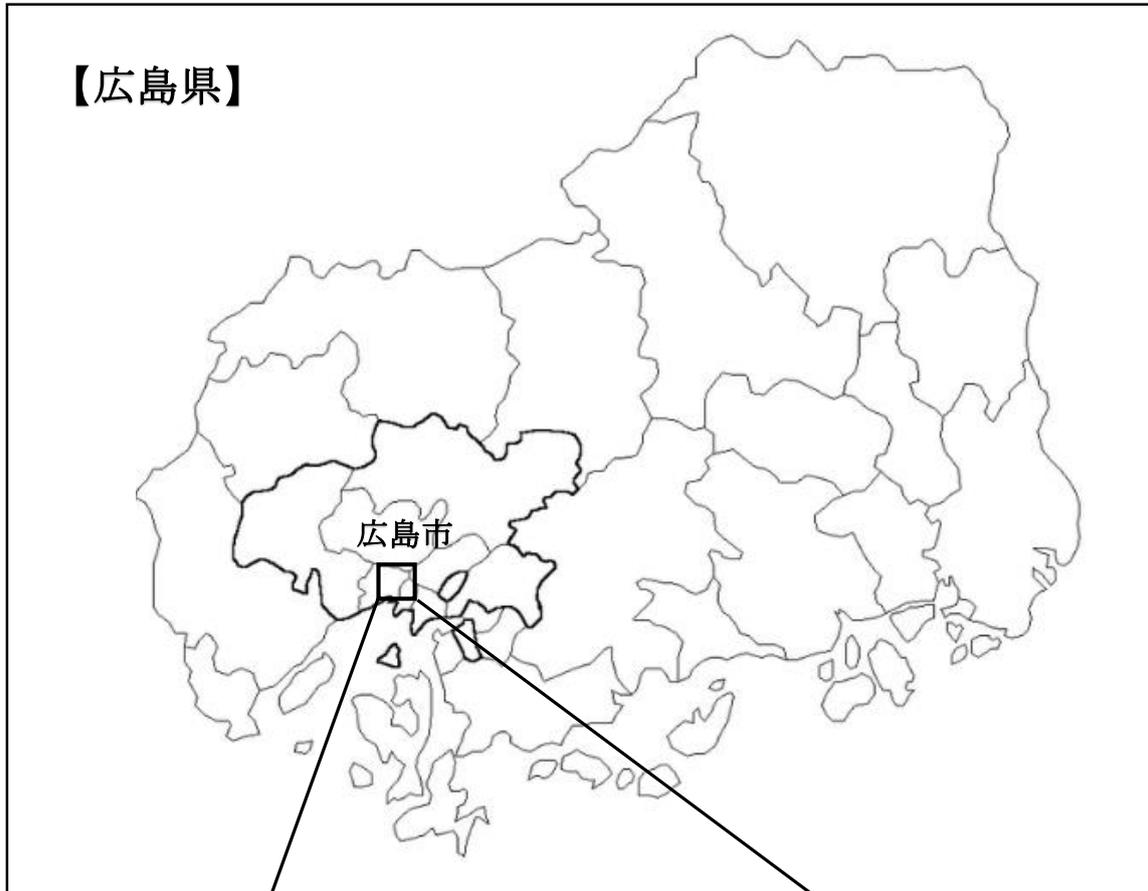
図書館サービス概論	<p>公立図書館のサービス活動の内容を中心に、それを支える理念および近年の公立図書館のサービス活動の歩みと現在の課題を概説し、公立図書館への関心と理解を深める。公立図書館のサービス活動の歩みについて概説し、図書館サービスの概要、貸出の意義や登録・貸出方法・貸出の規程、予約サービス、相互協力、図書館サービスと著作権、行事・集会活動、AVサービス、利用に障害のある人々へのサービス、全域サービスと図書館システムについて述べ、最終的には図書館の自由とは何かということについて理解させる。</p>	
情報サービス演習Ⅰ	<p>レファレンス・ワーク演習と関連して、文献やデータの検索が自在に行えるようにする。演習問題を文献やweb-siteから検索して回答を導き出す能力をつける。検索のツール、例えば、蔵書検索として、NDL、Webcat、Worldcat、雑誌記事検索として、NDL、NIIなどを利用する方法を学ぶ、さらには、古典籍や漢籍、公文書、政府関係資料、法令関係資料、判例や特許関係の資料の検索ツールについて学ぶ。また、さまざまな情報検索問題を与え、それを解決させることにより、情報検索問題を与え、それを解決させることにより、情報検索の技術の向上を図る。</p>	
情報サービス演習Ⅱ	<p>レファレンス・サービスを行うための、問題解析、情報源の探索、情報の評価、回答に至る一連のプロセスを演習により習得する。web-siteや図書館の活字資料から自在に情報を求めることが出来るようにする。レファレンスの問題演習を実際に行わせることにより、実践的技術を修得させる。また、レファレンスのインタビューを練習させることにより、質問の受け方の訓練を行う。また、質問内容の調査や回答の実際例を学び、実践的技術を身に付ける。</p>	
図書館情報資源概論	<p>公立図書館における資料の選択・収集の問題を中心に、図書館資料の特質と種類、新しいメディア、資料の利用、出版流通、蔵書管理と保存等の問題について学ぶ。まず、図書館資料とは何かについて明確にさせ、図書館資料としての図書、雑誌と新聞、地域資料、小冊子、地図、楽譜、外国語資料、AV資料、電子資料、インターネット情報など、さまざまな資料について理解させる。さらには、資料選択、複本購入の問題、資料選択の実際と課題、図書館資料の保存と電子化などの問題について述べる。</p>	
情報資源組織論	<p>図書館がその社会的役割を果たすための基本である図書館資料（図書館情報資源）について、その資料組織とはなにか、なぜ必要なのかといった内容から、資料が組織化されている現状、そして図書館が扱う資料・情報を組織化していく上で必要となる知識である目録法と分類法について概説する。最終的には資料組織についての理解を深める。資料組織の業務と意義、書誌コントロール、OPAC、記述目録法の実際、主題目録法について学び、分類法の基礎を理解させる。</p>	
情報資源組織演習Ⅰ	<p>今日の目録作業はコンピュータ化されそのフォーマットは国際標準化され、日本でもそれに基づいて『日本目録規則』（NCR）もできている。この『日本目録規則』を十分に理解して、これにより資料の目録が記述できるようになることを目指す。『日本目録規則』は、国際標準書誌記述（ISBD）に準拠していることを理解させる。タイトル関連情報、版表示と関連事項、出版事項、対照事項、注記などについて説明し、演習を通して正確な記述が出来るようにしていく。</p>	
情報資源組織演習Ⅱ	<p>先の『日本目録規則』（NCR）への理解を踏まえたうえで、『日本十進分類法』（NDC）についてその意義と役割への理解をすすめ、これにより資料に分類記号が与えられるようになることを目指す。個々に『日本十進分類法』の演習を解かせることにより、資料の主題を分析し最適な分類番号を付与することが出来るようにしていく。『基本件名表目録』（BHS）の仕組みを理解し、件名（主題を表す言葉）の与え方について学び、資料の主題を分析し最適な件名を付与することが出来るようにしていく。</p>	

<p>児童サービス論</p>	<p>公立図書館の児童サービスについて、乳幼児から中学生くらいまでを対象と考えて、児童サービスの意義とその歩み、子どもの読書の現状と読書の役割、絵本や児童文学などの図書館資料についての知識と児童書の選択・収集・保存、資料提供等の基本的なサービスと読み聞かせやストーリーテリングなどの行事・集会活動等のサービス内容、児童サービスに係わる施設・設備のあり方、ヤングアダルト・サービス、学校図書館の状況と公立図書館による学校図書館への援助、それに現在のさまざまな動きと課題等を概説する。特に、児童書の内容を知り、児童サービスの意義について理解を深めることを目的とする。</p>	
<p>図書・図書館史</p>	<p>図書館は人類が生み出した「知的財産」を「収集・整理・保存・提供する」ための機関である。まさしく、人類の歴史のうえに成り立つ機関なのである。そうした図書館の社会的役割を踏まえながら、世界と日本の図書および図書館の歴史を概説する。世界における、文字と図書の歴史を概括し、古代の図書館、中世の図書館、近代の図書館についてそれぞれ理解させつつ、また、各国の図書館の現在について紹介していく。日本についても同様に、古代、中世、近世、明治時代、戦後、現代へと、時代を追いながら行使し、時間と場の広がりの中で、日本の図書館の現状を意識させる。</p>	
<p>図書館サービス特論</p>	<p>実際に起きた様々な「図書館の自由」に関する事例について学び、その問題点をともに検証していく中で、図書館の存在意義や役割、サービスの意味、図書館のあり方について考察する。図書館サービス概論で学んだ内容を発展的に学習し、理解を深める観点から、図書館サービスを支えている規範について取り上げる。とくに、図書館のあり方が極限で問われる「図書館の自由」の問題について、過去の図書館の自由に関する事例を素材にして解説する。それらの事例を検証しながら、現実には置かれた図書館の姿を理解させる。さらには、その現実を踏まえたうえで、図書館の使命・役割を果たすべき図書館の在り様について、考察・提起していければと思っています。</p>	
<p>図書館基礎特論</p>	<p>図書館は人びんに対し、様々なサービスをしている。その姿は決して一様なものではない。こうした図書館を様々な視点から把握することで、図書館をより深く、より多面的に理解していく。具体的には、日本における様々な種類の図書館について概説し、外国における図書館の状況についても解説することで、図書館をいろいろな方向から見るができるようにしていく。さらには、図書館で提供する専門的な主題の資料や特殊な資料について、多角的に捉え理解して、図書館の役割について考えさせる。</p>	
<p>図書館情報資源特論</p>	<p>人類の「知的財産」の「収集・整理・保存・提供」という役割を担う図書館が扱う資料は、図書だけでなく実に幅広い。この図書館が扱う様々な情報資源（図書館資料）の現状について、印刷資料（図書や小冊子、地図などの印刷資料、新聞・雑誌などの逐次刊行物）、非印刷資料（視聴覚資料など）、それぞれの資料について、その特徴や扱い、現状と課題について概説する。図書館が提供する情報資源を使いこなすことを目指すとともに、情報資源の将来的なあり方について考えさせる。</p>	
<p>読書と豊かな人間性</p>	<p>人が成長していくためには、読書は欠かせない。人間の発達にとって「読書は権利」なのであり、その権利を保障するための機関のひとつが学校図書館である。子どもの読書状況と読書の意義、子どもの本の内容について概説したうえで、読書を推進する施設としての学校図書館や関連施設の役割および現在とこれからの問題を考察する。絵本や児童文学など、基本的な児童書を紹介することにより、子どもの本に関心を持ち、子どもの読書の現状と問題を幅広い視野で理解させることを図り、読書する子どもたちを育て、魅力的な学校図書館づくりができる能力を身につけることを目的とする。</p>	

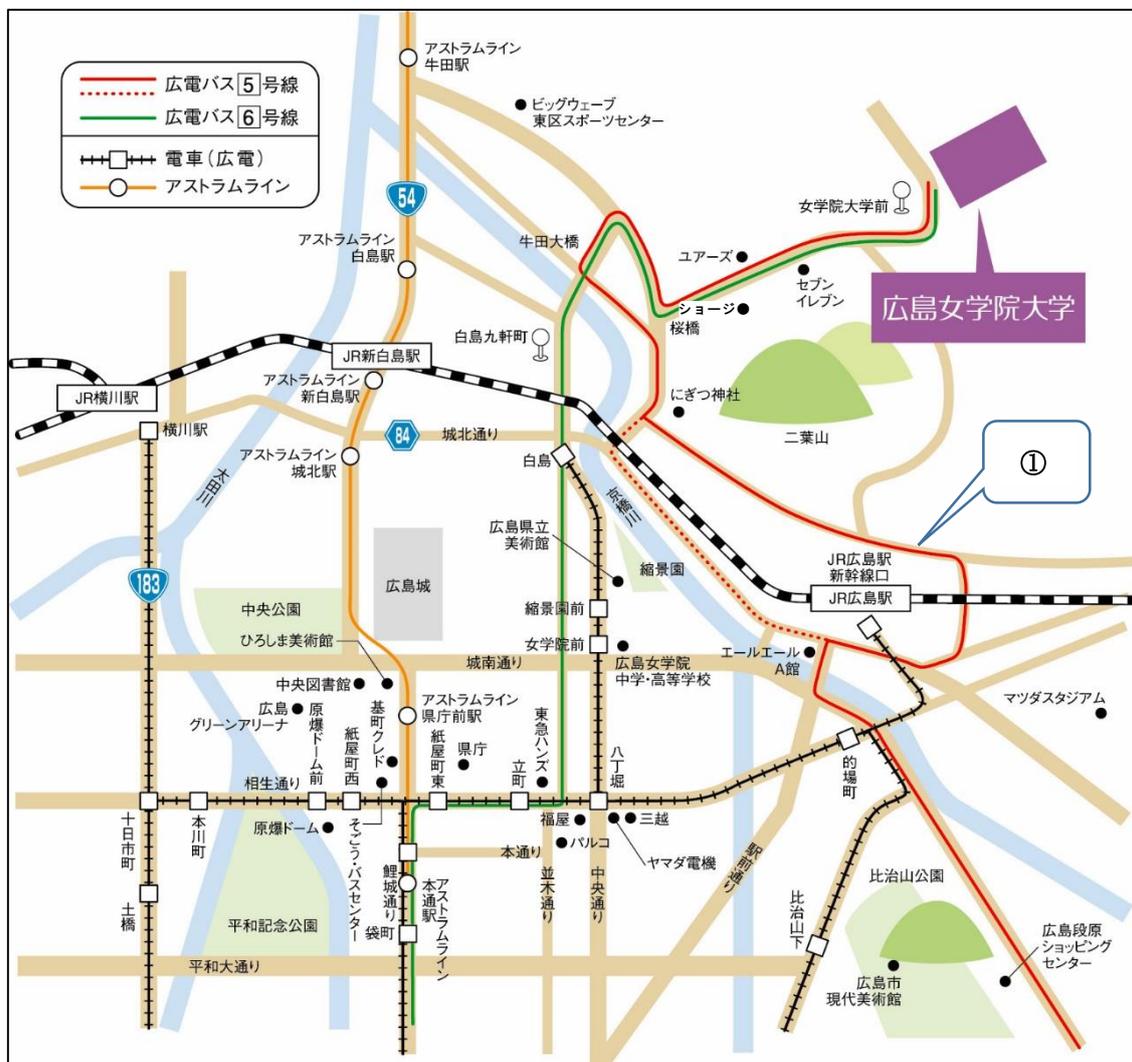
司書・司書教諭 関連科目Ⅱ	学校経営と学校図書館	1997（平成9）年の学校図書館法の改正により、2003（平成15）年4月から12学級以上の学校に司書教諭が配置されている。1998（平成10）年には、学校図書館経営の中核を担う司書教諭を養成する「学校図書館司書教諭講習規程」が一部改正された。司書教諭の資格を得るための講習で履修すべき5科目の一つである本科目では、学校図書館の教育的意義やその経営・管理、司書教諭の役割などについての理解を図り、学校教育目標の達成を支援する学校図書館のあるべき姿について考察する。	
	学校図書館メディアの構成	指導要領では、学校図書館は「学習情報センター」としての役割が重視されている。学校図書館が十分にその木野を果たすためには、学校図書館コレクションの的確な組織化が求められる。学校図書館メディアの役割、内容と特性、選択・収集とその組織化について概説する。特に、資料の選択、受入、分類、目録など、資料組織化の実務を知ることによって、学校図書館が多様なメディアを的確に選択・収集し、組織化することが、児童・生徒の主体的な学習に役立つ図書館になるための基本的な要件であることについて理解を深めるとともに、コンピュータ化やインターネット活用の状況や今後のあり方を解説する。	
	学習指導と学校図書館	学校図書館法の一部が1997（平成9）年に改正され、2003（平成15）年4月以降は12学級以上の学校に、半世紀近くも配置が猶予されていた司書教諭の配置が義務づけられた。現在学校教育は、知識を一方的に教え込みがちであった教育から、自ら学び自ら考える教育へと基調の転換が図られている。1998（平成10）年に改正された学校図書館司書教諭講習の5科目の一つである本科目では、学習指導における学校図書館メディア活用の基本的な視点と具体的な活用方法などを取り扱う。	

(1) 都道府県内における位置関係の図面

大学所在地：〒732-0063 広島県広島市東区牛田東 4-13-1



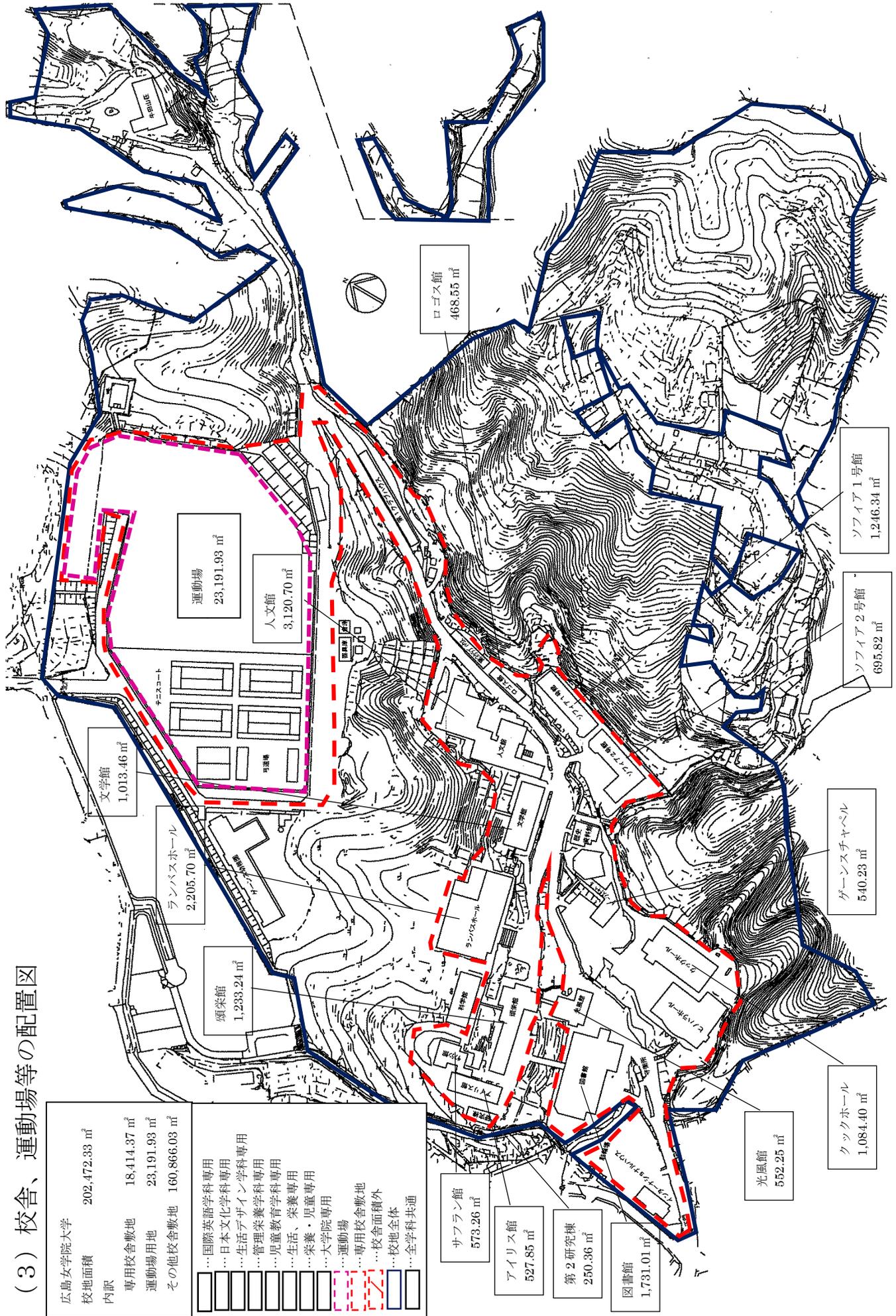
(2) 最寄り駅からの距離や交通機関がわかる図面



① . . . 広島駅北口から約 3km

広電バス (5 号線) にておよそ 15 分

(3) 校舎、運動場等の配置図



設置の趣旨等を記載した書類

目 次

①設置の趣旨及び必要性	・ ・ ・ ・ ・	P. 1
②学部・学科等の特色	・ ・ ・ ・ ・	P. 3
③学部・学科等の名称及び学位の名称	・ ・ ・ ・ ・	P. 5
④教育課程の編成の考え方及び特色	・ ・ ・ ・ ・	P. 8
⑤教員組織の編成の考え方及び特色	・ ・ ・ ・ ・	P.12
⑥教育方法、履修指導方法及び卒業要件	・ ・ ・ ・ ・	P.14
⑦施設、設備等の設備計画	・ ・ ・ ・ ・	P.16
⑧入学者選抜の概要	・ ・ ・ ・ ・	P.19
⑨取得可能な資格	・ ・ ・ ・ ・	P.24
⑩実習の具体的計画	・ ・ ・ ・ ・	P.25
⑪企業実習や海外語学研修等の学外実習を実施する場合の具体的計画	・ ・ ・ ・ ・	P.31
⑫管理運営	・ ・ ・ ・ ・	P.33
⑬自己点検・評価	・ ・ ・ ・ ・	P.34
⑭情報の公表	・ ・ ・ ・ ・	P.35
⑮教育内容等の改善を図るための組織的な研修等	・ ・ ・ ・ ・	P.37
⑯社会的・職業的自立に関する指導等及び体制	・ ・ ・ ・ ・	P.38

「人文学部」設置の趣旨

①設置の趣旨及び必要性

(1) 改組の経緯と必要性

本学は1886(明治19)年に前身となる広島女学会を創設して以来130年以上にわたりキリスト教主義を基盤としたリベラルアーツ教育による女子の人格教育を一貫して推進してきた。その間には、時代の要請に呼応して学部・学科の再編や新設を実施することで、建学の精神を守りつつも時代のニーズに即した人材の養成を行うよう努めてきた。2012(平成24)年度には全学的改組を実施して、国際教養学部と人間生活学部の2学部に変更した。国際教養学部は、国際的な視野と時代に即応するしなやかな感性をもって、地域に根ざしつつ、常に社会的公正を希求し、キリスト教主義に基づく人間愛にあふれる豊かな人間性をもった女性の育成を目的とし、人間生活学部は、多様な問題が存在する現代社会において、人々が健康で豊かな生活を創造し、次の世代へ普遍的な価値を継承していくことで、生活の質を向上させ真の人間性を確立することができるよう支援し、家庭及び地域社会において高度に貢献できる人材の育成を目的としたものであった。

国際教養学部は、本学の創設時から教育の柱としてきたリベラルアーツ教育を現代社会において実現するために、旧文学部の日本語日本文学科及び英米言語文化学科と旧生活科学部生活デザイン・情報学科の一部を統合することで、グローバル化する社会に対応しつつ、様々な専門領域との対話・交流を通じて修得される確かな専門的知識や技能、幅広い教養に裏打ちされた判断力、粘り強い批判的思考力、国際的な視野と身の回りへの細やかな配慮に基づく問題発見・解決能力を涵養することを目指す1学部1学科体制として再編したものである。しかしながら、学生の確保については開設時の2012(平成24)年度に入学定員240名を確保することができず、その後も定員割れが恒常化した状態で現在に至っている。そこで、2014(平成26)年より学長を委員長とする大学将来計画委員会において国際教養学部の現状分析と今後の対応策について検討を開始した。

国際教養学部は、専門領域を越えた幅広い教養と国際性を育成するという教育理念ゆえに、教育課程には13のメジャー(専攻プログラム)が設けてあり、学生は1メジャーを専攻しながらも同時に他のメジャーを含む多彩な科目群の中で自らの学びを位置づけるという構成になっている。このことから生ずる問題として、①開講科目が膨大な数とならざるを得ない、②履修モデルが多様であることから履修上の指導が難しい、③専攻するメジャーの履修が3年次になってから本格化するため、希望するメジャーが入学時にすでに明確な学生にとっては専門性の修得について充実感が持ちにくい、など多くの点が指摘されてきた。学部としては、これらの課題を解決すべく履修上の工夫や徹底した個別指導を実施してきたが、今なお十分には解消されていない。

学生募集についても、地方の女子大学が1学科で240名の定員を確保することは極めて難しい。また高校現場からは、高校生にとって国際教養という総合学的な学部理念は卒業

後のキャリアが実感しにくいいため、進路指導を行うことが難しいと指摘されている。

以上のような現状をふまえて、大学将来計画委員会では国際教養学部を改組し、専門性を明確にした学科を設置した上で、本学がこれまで築いてきた教育理念である幅広い教養と豊かな国際性を身に付け自立した女性の育成を目指すとともに、将来の少子化をも見据えつつ適正な定員を設定することで、徹底した少人数教育を実施して教育の質保証を一層強固なものにしていくことを決定した。これに基づいて改組推進委員会を設置して検討した結果、学部名称を人文学部とし、国際英語学科と日本文化学科の2学科を設置することとした。

人文学部は、本学の教育理念であるキリスト教主義に基づく女子の人格教育を行うにあたって、英米を中心とした英語圏の文化及び自らが拠って立つところの日本文化について人文科学に基づく専門的な教育研究を行うとともに、豊かな教養と国際性を身に付け地域及び国際社会に貢献できる力を育成する。さらに、一人の女性として将来を見据え、あらゆるライフステージにおいて自己の力を生かしながら自らの「ライフキャリア」を確立していくための基礎力を身に付けることを目的とする。この目的を達成するために国際英語学科と日本文化学科を設置して、それぞれの学問領域における知識を深めながら、地域との関係、国際社会との関係を視野に入れた実践的な学修を通して、一人の女性として自立し生涯にわたって社会に貢献できる力を育成する。

このような趣旨に基づく学部学科を設置し、豊かな教養と確固たる信念をもち生涯を見据えながら自己確立を目指すことのできる女性を育てることは、今後ますます予測が困難となる我が国及び国際社会において必要とされる教育につながるものである。

(2) 人材の養成及び教育上の目的

人文学部は、言語や文化についての豊かな教養、専門的知識及び深い洞察にもとづき、幅広い視野に立って確固たる自己を社会の中で位置づけることができ、自己の文化や異文化を理解することによって多様な価値観を受容し、高い言語運用能力をもって他者との円滑な関係を築くことができる人材を養成する。さらに、現代社会が直面する諸問題に対して主体的に関わり、他者と相互に尊重しあい協働することによって、継続してその解決に取り組むことができる人材を養成する。教育上の目的を達成させるために、キャリア・スタディ・プログラムを通じてキャリア形成の基盤を成す言語力を習得させ、アカデミック・リサーチを通じて批判的思考力と問題解決力を習得させる。さらに、フィールドワーク、地域連携、海外研修、インターンシップなどの科目を設け体験的学修の機会を提供することで、行動力や実践力を習得させる。

国際英語学科は、国際共通語としての実践的な英語力を身に付け、多文化への理解と柔軟な対応を兼ね備え、自国の文化をも理解した上で、グローバル社会で活躍する人材を養成する。特に一定の基準を超えた英語力を有する学生のために、GSE(Global Studies in English) コースを用意し、国際社会で貢献できる人材を養成する。英米を中心とした英語

圏の文化を多面的に分析し理解するとともに、自国の文化の特質を捉えなおすことで、国際社会における出来事を的確に把握する力を習得させる。その上で、英語を用いてグローバルな観点から自己の考えや意見を伝えるとともに、積極的に行動することができる力を習得させる。

日本文化学科は、日本語や日本の文学・文化を深く理解し、日本の文化を世界に発信する力を語学教育や異文化コミュニケーション教育などにより育み、地域やグローバル社会に貢献できる人材を養成する。日本固有の文化や伝統を尊び、多角的に理解を深めることによって、次世代へその特徴や意義を発展させていくことができ、世界の中の日本、世界の中の自己という視点を身に付けることによって、国際社会のニーズを的確に察知し、専門的知見や技能を活かしながら積極的に行動することができる力を習得させる。

(3) 中心的な学問分野

改組前の旧学部（国際教養学部）は、大学設置基準に定められた教育研究上の専攻分野の「文学関係」及び「家政関係」を中心とする複合学科として設置されたが、改組後の人文学部は専門性をより明確に位置づけるために「文学関係」を中心的な学問分野とすることとした。

国際英語学科は、旧学部の GSE(Global Studies in English)メジャー、英語教育メジャー及び英米文化メジャーを統合した上で、国際社会において有効な実践的英語力をさらに洗練させ、グローバル社会において活躍するために必要な異文化に対する理解力と強いコミュニケーション力を育成するための教育研究を行う。また、日本文化学科は、旧学部の国語教育メジャー、日本語・日本語教育メジャー及び日本文学・日本文化メジャーを統合することで、日本語と日本文化に深く精通するとともに、フィールドワークやディスカッション等の実践的な学びを通じて課題を発見し問題を解決する力を身に付け、日本固有の文化を世界に発信していく力を育成するための教育研究を行う。

両学科とも「文学関係」の専攻分野を教育研究上の基礎として、英語文化あるいは日本文化の本質的な価値を探究するとともに、人文科学の方法論によって文化と人間存在との不可分な関係性を解明することを通して、幅広い教養と豊かな国際性を身に付け国際社会と地域に貢献できる力を育成しようとするものである。

②学部・学科等の特色

本学は、建学の精神「キリスト教を教育の基盤とし、女性の生涯を支える高度の教養を授け、専門の学術を教授研究することにより、真理と平和を追究し、世界と地域の人々に仕えるゆたかな人格の育成を目的とする」（学則第1条）を教育の基本として、女性のライフキャリアを支援する。この目的を達成するために、豊かな教養と専門的知識を通して、冷静な判断力と決断力を兼ね備えた「ぶれない個」を形成し、自己のライフキャリアの確立を目指すとともに、自己と他者の多様な価値観・生き方を発見し、責任を持って受容し、

他者との共生を実現することができる力を習得させる。その上で、寛容の精神をもって他者を受容し、自己の女性としての特性を活かしながら、他者と協働し、地域社会及び国際社会に貢献できる力を育成する。

中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」における「高等教育の多様な機能と個性・特色の明確化」を踏まえると、人文学部は「総合的教養教育」及び「社会貢献機能（地域貢献、産学官連携、国際交流等）」に重点を置いている。

(1) ライフキャリアを確立するための基礎力を育成する

本学は創設以来、キリスト教主義に基づく女子の人格教育を行ってきた。しかし、現代社会においては女性の生き方が多様化するとともに、女性が自己を確立し、一人の人間として自己実現を果たしていくことがますます困難な状況になっている。このような中で、本学の教育理念を達成するためには、女性の生涯を見通した「ライフキャリア」という視点に立脚した新たな教育課程に基づく女性教育が不可欠となる。そこで、ライフキャリアを次のように定義した上で教育課程を編成することとした。つまり、ライフキャリアとは「報酬が得られる職業に就いている時だけがキャリアではなく、具体的に金銭化されない労働（主婦労働・ボランティア労働・文化形成労働・定年退職後の労働など）をも含めて、各個人が全生涯にわたって組み合わせて形成した労働生活全体である。」

人文学部では、自己の文化及び異文化に対する深い洞察力を育成し、これを基盤としながら総合的な幅広い教養を身に付けるとともに、教育課程に新設する「ライフキャリア科目」によって「自己との関係」「他者との関係」「社会との関係」についての認識を深めることで、自己の将来への展望を明確にし、ライフキャリアを確立していくための基礎力を育成する。このライフキャリア基礎力をもとにして、自己の知識・技能を活用し、これまでの経験をふまえながら、自己の力を最大限に発揮し、豊かで充実した生活・労働を実行していくことで生涯にわたって自己を実現させていくことのできる女性を育てることを目的とする。

(2) 国際社会及び地域に貢献する

国際都市ヒロシマにある大学として、国際英語学科では国際共通語である英語力を強化するとともに、「Global Village Field Experience I・II」「海外研修Ⅰ～Ⅲ」「海外インターンシップ」等のフィールドワーク科目、ワールド・ビジョン・ジャパンとの提携による途上国支援の研修プログラムや ACUCA (The Association of Christian Universities and Colleges in Asia) が推進する「SMS (Student Mobility Scheme)」への参加などを通じて異文化の実体験を積み重ねることによって、常に国際社会へ目を向け、生涯を通じて国際社会に貢献していこうとする態度を育成する。また、日本文化学科においても「日本語フィールドワークⅠ（日本語の方言）」「日本語フィールドワークⅡ（郷土資料調査）」「日本文化フィールドワーク」などの国内フィールドワーク科目を履修するとともに、国際英語

学科と同様に海外フィールドワークや海外研修プログラムを体験することが可能であるため、自国の文化や平和構築へ向けてのメッセージを海外に発信していく力を身に付けられることが特色となる。

本学の学生は広島県出身者の占める比率が高く、卒業後は県内企業に就職することが多くなっている。人文学部では、総合的教養を身に付けるとともに、地域の特性を深く知り、そこで自己を発揮することで地域社会に貢献できる人材を育成する。そのために、学部共通科目として「キャリア・スタディ・プログラムⅠ～Ⅲ（必修）」「地域連携文化セミナーⅠ・Ⅱ（選択）」を開設し、県内企業と連携しながら1年次から3年次を通して地域との関わりを持ちつつ、自己のめざすべきキャリアを見定める科目を履修させることで、地域社会に貢献するための力を育成することが特色となる。

③学部・学科等の名称及び学位の名称

(1) 人文学部

人文学部は教育研究上の専攻分野を「文学関係」として、言語や文化についての豊かな教養と専門的知識、高い言語運用能力と国際性を身に付けるとともに、自己の文化や異文化を理解することによって多様な価値観を受容し、他者との円滑な関係を築くことができる人材を養成することを目的とするものであり、人文科学を学問の基礎とすることで文化と人間との関係性の解明を目指すことをふまえて学部名称を「人文学部」とした。

(2) 国際英語学科

国際英語学科は、国際共通語としての実践的な英語力を身に付け、多文化への理解と柔軟な対応を兼ね備え、自国の文化をも理解した上で、グローバル社会で活躍する人材を養成するために、英語圏の文化を多面的に分析し理解するとともに、自国の文化の特質を捉えなおすことで、国際社会における出来事を的確に把握する力を習得させる。その上で、英語を用いてグローバルな観点から自己の考えや意見を伝えるとともに、積極的に行動することができる力を習得させる。英米を中心としながらも国際共通語としての英語を身に付け、グローバルな視点から国際社会に貢献することを目指す学科を端的に表す名称として「国際英語学科」が最適であると判断した。

学位の名称は、教育研究上の専攻分野である「文学関係」にもとづいて「学士（文学）」とする。

(3) 日本文化学科

日本文化学科は、日本語や日本の文学・文化を深く理解し、日本の文化を世界に発信する力を語学教育や異文化コミュニケーション教育などにより育み、地域やグローバル社会に貢献できる人材を養成する。日本固有の文化や伝統を尊び、多角的に理解を深めることによって、次世代へその特徴や意義を発展させていくことができ、世界の中の日本、世界

の中の自己という視点を身に付けることによって、国際社会のニーズを的確に察知し、専門的知見や技能を活かしながら積極的に行動することができる力を習得させる。世界への発信を目的として日本文化を深く探究することを学科の中心的な学問分野とすることから名称を「日本文化学科」とした。

学位の名称は、教育研究上の専攻分野である「文学関係」にもとづいて「学士（文学）」とする。

以上をふまえて、人文学部及び国際英語学科・日本文化学科における卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）は次のとおりとする。

〔人文学部のディプロマ・ポリシー〕

人文学部は、次の要件と資質を有している者に対して学士（文学）の学位を授与する。

【学位授与の諸要件】

学則第 13 条に定める要件を満たし、あわせて別に定める学位論文審査基準を満たした者。

【資質】

DP1（ぶれない個）

豊かな教養と専門的知識を通して、冷静な判断力と決断力を兼ね備えた「ぶれない個」を形成し、自己のライフキャリアの確立をめざすことができる。

DP2（多様性）

自己と他者の多様な価値観・生き方を発見し、責任を持って受容し、他者との共生を実現することができる。

DP3（寛容と協働）

寛容の精神をもって他者を受容し、自己の女性としての特性を活かしながら、他者と協働し、地域社会および国際社会に貢献できる。

〔国際英語学科のディプロマ・ポリシー〕

国際英語学科は、次の要件と資質を有している者に対して学士（文学）の学位を授与する。

【学位授与の諸要件】

学則第 13 条に定める要件を満たし、あわせて別に定める学位論文審査基準を満たした者。

【資質】

DP1（ぶれない個）

言語や文化についての豊かな教養、専門的知識及び深い洞察にもとづき、幅広い視野に立って確固たる自己を社会の中で位置づけることができる。

DP2（多様性）

自己の文化や異文化を理解することによって多様な価値観を受容し、高い言語運用能力をもって他者との円滑な関係を築くことができる。

DP3 (寛容と協働)

現代社会が直面する諸問題に対して主体的に関わり、他者と相互に尊重しあい協働することによって、継続してその解決に取り組むことができる。

DP4 (文化の把握)

英米を中心とした英語圏の文化を多面的に分析し理解することにより、自国の文化の特質を捉えなおすことができる。

DP5 (共時的発信力)

国際社会における出来事を的確に把握し、英語を用いてグローバルな観点から自己の考えや意見を伝えるとともに積極的に行動することができる。

〔日本文化学科のディプロマ・ポリシー〕

日本文化学科は、次の要件と資質を有している者に対して学士（文学）の学位を授与する。

【学位授与の諸要件】

学則第 13 条に定める要件を満たし、あわせて別に定める学位論文審査基準を満たした者。

【資質】

DP1 (ぶれない個)

日本の言語や文化についての豊かな教養、専門的知識及び深い洞察にもとづき、幅広い視野に立って確固たる自己を社会の中で位置づけることができる。

DP2 (多様性)

日本文化と他の文化を比較・理解することによって多様な価値観を受容し、高い言語運用能力をもって他者との円滑な関係を築くことができる。

DP3 (寛容と協働)

現代社会が直面する諸問題に対して主体的に関わり、他者と相互に尊重しあい協働することによって、継続してその解決に取り組むことができる。

DP4 (伝統の継承)

日本固有の文化や伝統を尊び、多角的に理解を深めることによって、次世代へその特徴や意義を継承し発展させていくことができる。

DP5 (共時的発信力)

世界の中の日本、世界の中の自己という視点を身につけることによって、国際社会のニーズを的確に察知し、専門的知見や技能を活かしながら積極的に行動することができる。

<学部・学科の名称、英文名称、及び学位の名称>

学部	学科	学位	学生定員		卒業要件 単位数
			入学定員	収容定員	
人文学部 Faculty of Humanities	国際英語学科 Department of International English	学士（文学） Bachelor of Literature	65 名	260 名	124 単位
	日本文化学科 Department of Japanese Language and Culture	学士（文学） Bachelor of Literature	40 名	160 名	124 単位

④教育課程の編成の考え方及び特色

（１）教育課程の編成の考え方

人文学部の教育課程は、全学共通の「基礎科目」「ライフキャリア科目」と、各学科の専門科目である「専門科目」「関連科目Ⅰ」「関連科目Ⅱ」から編成される。

「基礎科目」は、①大学における主体的な学びの態度を身に付け、他者と協働して一つの課題に取り組むことができる（主体的な学びの態度と他者との協働）、②キリスト教主義に基づく倫理観を持ち、自己理解と他者理解を深め、他者に対する思いやりを持つことができる（キリスト教主義に基づく人格形成）、③日本語と英語を使って、読む、書く、聞く、話すことができ、基本的な IT スキルを身に付け、コンピュータを用いて情報を活用できる（基礎学力）、の 3 点を学修目標とする。学修目標①(主体的な学びの態度と他者との協働)に対応する授業科目として「初年次セミナー」、学修目標②（キリスト教主義に基づく人格形成）に対応する授業科目として「キリスト教学入門Ⅰ」「キリスト教学入門Ⅱ」、学修目標③(基礎学力)に対応する授業科目として「日本語表現技法」「基礎英語Ⅰ」「基礎英語Ⅱ」「基礎英語Ⅲ」「基礎英語Ⅳ」「情報リテラシーⅠ」「情報リテラシーⅡ」を置いた。「基礎科目」はすべて必修科目である。なお、外国人留学生等は、「基礎英語Ⅰ」「基礎英語Ⅱ」「基礎英語Ⅲ」「基礎英語Ⅳ」の代わりに、「基礎日本語Ⅰ」「基礎日本語Ⅱ」「基礎日本語Ⅲ」「基礎日本語Ⅳ」を必修とする。

「ライフキャリア科目」は、生涯にわたって女性のライフキャリアを支える根幹を形成することを目標とし、各学科及び共通教育部門から提供される、女性のライフキャリアを活かす科目で構成される。「ライフキャリア科目」は、必修科目「キャリアプランニング」

「女性とライフキャリア」と選択科目からなり、選択科目は、「自己との関係科目群」「他者との関係科目群」「社会との関係科目群」「その他科目群」で構成される。「ライフキャリア科目」における必修科目と、自己、他者、社会との関係における選択科目の学修を通して、①冷静な判断力と決断力、②前に踏み出す行動力、③自己を活かし、他者と協働する力の「社会人基礎力」を身に付けることを目標とする。

国際英語学科では、ディプロマ・ポリシーを達成するために、「基礎科目」「ライフキャリア科目」の修得を土台とした深い専門性を身に付けることのできる教育課程を編成した。国際英語学科の教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）は、次のとおりである。

〔国際英語学科のカリキュラム・ポリシー〕

- CP1: 基礎科目、ライフキャリア科目の修得を土台とした深い専門性を身につけることのできるカリキュラムとなっている。
- CP2: 国際英語学科は、ほぼすべての授業科目を英語で行う GSE(Global Studies in English) コースと、英語圏の文化を多面的に学ぶ英語コースから成り、英語の使えるグローバル人材を育成する。
- CP3: 専門科目では言語の習熟に必要なスキル科目及びより高度な学修につながる内容科目を設置している。
- CP4: すべての学年にセミナー授業を取り入れ、1年次から2年次までキャリア・スタディ・プログラムを通じてキャリア形成の基盤を成す言語力を育成し、3年次からはアカデミック・リサーチを通じて批判的思考力と問題解決力を養う。
- CP5: 行動力や実践力を養うため、フィールドワーク、地域連携、海外研修、インターンシップなどの科目を設け体験的学修の機会を提供する。

国際英語学科の専門科目は、「専門科目」「関連科目Ⅰ」「関連科目Ⅱ」で編成される。専門科目は、「コア科目」「GSE コース科目」「英語文化コース科目」「コース共通選択科目」からなる。「関連科目Ⅰ」「関連科目Ⅱ」は資格関連科目であり、関連科目Ⅰは「教職」「学芸員」「司書・司書教諭」、関連科目Ⅱは「日本語教育」「教職」「学芸員」「司書・司書教諭」に区分される。なお、関連科目Ⅰは卒業要件に含めるが、関連科目Ⅱは卒業要件外としている。

国際英語学科は、ほぼすべての授業科目を英語で行う GSE(Global Studies in English) コースと、英語圏の文化を多面的に学ぶ英語文化コースからなり、それぞれのコースに対応して「GSE コース科目」「英語文化コース科目」を置いた。また両コースの学生が選択できる「コース共通選択科目」に、フィールドワーク、地域連携、海外研修、インターンシップなどの科目を設け、体験的学修の機会を提供する。

国際英語学科の「専門科目」のうち「コア科目」はすべて必修科目であり、授業科目「人文学入門」「キャリア・スタディ・プログラムⅠ」「キャリア・スタディ・プログラムⅡ」「キャリア・スタディ・プログラムⅢ」「アカデミック・リサーチⅠ」「アカデミック・リサーチⅡ」「アカデミック・リサーチⅢ」「アカデミック・リサーチⅣ」「卒業論文」からなる。1・2年次における「キャリア・スタディ・プログラムⅠ」「キャリア・スタディ・プログラムⅡ」「キャリア・スタディ・プログラムⅢ」を通してキャリア形成の基盤をなす言語力を育成し、3年次以降の「アカデミック・リサーチⅠ」「アカデミック・リサーチⅡ」「アカデミック・リサーチⅢ」「アカデミック・リサーチⅣ」を通して批判的思考力と問題解決力を養うことを目標とする。

国際英語学科の「専門科目」と、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーとの対応関係について、国際英語学科カリキュラム・マップ（資料1）に示した。また、科目間の関連について、国際英語学科カリキュラム・ツリー（資料2）に示した。（資料1）と（資料2）に示されたように、GSEコース、英語文化コースともに、1年次に「コア科目」である「人文学入門」「キャリア・スタディ・プログラムⅠ」を配置し、さらにGSEコースでは「GSEコース科目」の必修科目、英語文化コースでは「英語文化コース科目」の必修科目を履修することで、GSEコースでは世界を学ぶ基礎知識、英語文化コースでは基礎的な英語力を身に付け、言語や文化を学ぶ基礎を形成する。2年次に、「コア科目」の「キャリア・スタディ・プログラムⅡ」「キャリア・スタディ・プログラムⅢ」を両コースに配置し、「GSEコース科目」の必修科目、「英語文化コース科目」の必修科目を履修することで、将来のキャリアを見据えて、英語と文化について幅広く学ぶ。3年次からゼミでの卒業研究が始まり、これは「コア科目」の「アカデミック・リサーチⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」に対応している。「卒業論文」において、4年間の集大成を行う。

日本文化学科では、ディプロマ・ポリシーを達成するために、「基礎科目」「ライフキャリア科目」の修得を土台とした深い専門性を身に付けることのできる教育課程を編成した。日本文化学科の教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)は次のとおりである。

〔日本文化学科のカリキュラム・ポリシー〕

- CP1: 基礎科目、ライフキャリア科目の修得を土台にした深い専門性を身につけることのできるカリキュラムとなっている。
- CP2: 専門科目では言語の修得に必要なスキル科目及びより高度な学修につながる内容科目を設置している。
- CP3: すべての学年にセミナー授業を取り入れ、1年次から2年次までキャリア・スタディ・プログラムを通じてキャリア形成の基盤を成す言語力を育成し、3年次からはアカデミック・リサーチを通じて批判的思考力と問題解決力を養う。
- CP4: 行動力や実践力を養うため、フィールドワーク、地域連携、海外研修、インターンシップなどの科目を設け体験的学修の機会を提供する。

日本文化学科の専門科目は、「専門科目」「関連科目Ⅰ」「関連科目Ⅱ」で編成される。「専門科目」は、「コア科目」「スキル科目」「内容科目」「展開科目」からなる。「関連科目Ⅰ」「関連科目Ⅱ」は資格関連科目であり、「関連科目Ⅰ」は「教職」「学芸員」「司書・司書教諭」、「関連科目Ⅱ」は「日本語教育」「教職」「学芸員」「司書・司書教諭」に区分される。なお、「関連科目Ⅰ」は卒業要件に含めるが、「関連科目Ⅱ」は卒業要件外としている。

日本文化学科の「専門科目」のうち「コア科目」はすべて必修科目であり、授業科目「人文学入門」「キャリア・スタディ・プログラムⅠ」「キャリア・スタディ・プログラムⅡ」「キャリア・スタディ・プログラムⅢ」「アカデミック・リサーチⅠ」「アカデミック・リサーチⅡ」「アカデミック・リサーチⅢ」「アカデミック・リサーチⅣ」「卒業論文」からなる。1・2年次における「キャリア・スタディ・プログラムⅠ・Ⅱ・Ⅲ」を通してキャリア形成の基盤をなす言語力を育成し、3年次以降の「アカデミック・リサーチⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」を通して批判的思考力と問題解決力を養うことを目標とする。

日本文化学科の「専門科目」とディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーとの対応関係について、日本文化学科カリキュラム・マップ（資料3）と日本文化学科カリキュラム・ツリー（資料4）に示した。（資料3）と（資料4）に示されたように、「スキル科目」は1・2年次に配置され、日本文学、日本語学、日本文化に関する専門性を深めるために必要とされる基本的な技法を習得することを目標としている。したがって、「スキル科目」のうち「日本語コミュニケーション技法Ⅰ・Ⅱ」「映画・演劇研究」の3科目を除く科目全てを必修科目とした。「内容科目」は、日本文学、日本語学、日本文化、国語教育に関する専門科目であり、学生のキャリアプランに従って選択できるようになっている。「内容科目」の必修科目はすべて2年次配置であり、「日本語の文字と語彙」「国語科教育入門」を除く科目はすべて2年次以降に配置している。「展開科目」はすべて選択科目であり、学生の興味・関心により選択できる多彩な講義科目や、フィールドワーク、地域連携、海外研修などの体験学修の機会を提供する科目を置く。

日本文化学科では、1年次で、人文学とはどのような学問であるかを理解し、研究の方法、キーワード、動向を学んでいくことで、言葉と向き合うための基礎力や、表現力、コミュニケーション能力の土台を形成する。2年次では、古典から現代までの幅広い言語や文学・文化を学ぶことにより、語彙・読解力を身に付け、社会に視野を広げるとともに、日本語だけでなく英語を使用した表現力やコミュニケーション能力を高めることを目標とする。そのために、「スキル科目」に「日本を伝える英語Ⅰ」「日本を伝える英語Ⅱ」を必修科目として置いている。1年次後期から始まる「キャリア・スタディ・プログラムⅠ・Ⅱ・Ⅲ」を通して、3年次からは、将来のライフキャリアを見据え、興味・関心や適性に従い、ゼミを選択し、卒業研究に取り組む。これは、「コア科目」の「アカデミック・リサーチⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」に対応しており、「卒業論文」において、4年間の学びの集大成を行う。

（2）教育課程の特色

人文学部では、「基礎科目」における主体的な学びの態度と協働、キリスト教主義に基づく人格形成、基礎学力の向上と、「ライフキャリア科目」における生涯にわたる女性のライフキャリアを支える根幹の形成をもとに、国際英語学科と日本文化学科において、それぞれの専門性を確実に身に付けることができるように、体系化された教育課程となっている。すなわち、全学共通科目である「基礎科目」「ライフキャリア科目」と各学科の専門科目の学修を通して、自己と他者の多様な価値観・生き方を発見し、人間・社会・自然に対する理解を深め、専門領域を超えて問題を探求する姿勢を身に付けることができる。4年間にわたり総合的に学んだ知識の活用能力、批判的・論理的思考力、課題探求力、表現能力、コミュニケーション能力等をもとに、4年次に学業の集大成として「卒業論文」を執筆することで、女性の一生涯を活かす力を身に付けることができる。

国際英語学科では、ほぼすべての授業科目を英語で行う GSE コースがあり、英語の使えるグローバル人材の育成を重点的に行う。英語文化コースにおいても、ネイティブ教員が担当する授業を多く配置し、総合的な英語の運用能力の向上を図る。また、GSE コース、英語文化コースとともに、すべての学年に少人数のセミナー形式の授業を取り入れ、一人ひとりの学生の教育的ニーズに対応できるようになっている。さらに、行動力や実践力を養うために、フィールドワーク、地域連携、海外研修、インターンシップなど、国内外で活躍できる体験的学修の機会を用意している。国際英語学科は、英語を通して国際理解を深め、行動力を身に付けることで、国際社会で活躍するライフキャリアの基礎を形成することを特色とする。「関連科目Ⅰ」「関連科目Ⅱ」を履修することにより、中学校・高等学校教諭免許（英語）、学芸員、日本語教員などの、女性のライフキャリアを支援する免許・資格を取得できることも特色である。

日本文化学科では、日本の文化や伝統を多角的に理解し、次世代にその特徴や意義を継承し発展させていくことができるだけでなく、世界の中の日本という国際的な観点から、日本の文化や伝統を世界に向けて発信するとともに、国際社会のニーズに対応できるように教育課程が編成されている。また、行動力や実践力を養うために、地域連携や国内のフィールドワークだけでなく、海外研修などの科目を設け、体験的学修の機会を用意している。さらに、中学校・高等学校教諭免許（国語）取得に向け、「専門科目」に国語教育に関する専門科目を開講し、「関連科目Ⅰ」「関連科目Ⅱ」の履修により、学芸員や日本語教員、図書館司書など、女性のライフキャリアを支援する免許・資格を取得できるようになっている。日本文化学科は、国際英語学科と同様に、すべての学年に少人数のセミナー形式の授業を取り入れ、一人ひとりの学生の教育的ニーズに対応できるようになっていることも特色である。

⑤教員組織の編成の考え方及び特色

人文学部は学問の中心的分野として「文学関係」を位置づけ、人文科学を教育研究上の基礎として文化と人間の関係性について究明することを目的とするものであり、英米を中

心としながらも広く英語圏の文化を対象とする国際英語学科と日本文化を対象として異文化との関係を明らかにする日本文化学科から構成する。

学部の共通科目である「コア科目」(必修)は、「人文学入門」「キャリア・スタディ・プログラムⅠ～Ⅲ」「アカデミック・リサーチⅠ～Ⅳ」「卒業論文」からなり、「人文学入門」を除いて原則として学部の全教員が担当する。また、学部共通選択科目として「Global Village Field Experience Ⅰ・Ⅱ」「海外研修Ⅰ～Ⅲ」「海外インターンシップ」「日本語フィールドワークⅠ(日本語の方言)」「日本語フィールドワークⅡ(郷土資料調査)」「日本文化フィールドワーク」等を設けており、これらは各学科から当該科目の内容を専門とする教員を適切に配置している。

国際英語学科における中核的な科目は、GSE コース科目と英語文化コース科目から構成されており、GSE コース科目は英語を母語とする外国人教員2名と日本人教員2名が担当し、英語文化コース科目は外国人教員1名と日本人教員5名が担当する(このうち3名は両コースを担当する)。

日本文化学科の専門科目は、スキル科目、内容科目及び展開科目から構成されており、このうち学科の中核的な科目であるスキル科目については全教員(5名)が担当し、内容科目及び展開科目については日本文学・日本文化学、日本語学、国語教育学を専門とする教員が当該科目を担当する。

国際英語学科の教員の完成時における年齢構成は、60歳代2名、50歳代1名、40歳代2名、30歳代2名となっており、完成年度前に定年となる教員はいない。一方、日本文化学科においては、60歳代2名、50歳代2名、40歳代1名となっている。60歳代の教員2名(完成時66歳)については、本学の「広島女学院就業規則」第29条の7第1項第1号の規程(資料5)により完成年度前年の2021(平成33)年度末をもって定年となるが、同規程第29条の7第2項に基づいて両名とも定年を1年延長させ完成年度まで任用されることが決定している。完成年度以降の運用に当たっては、「広島女学院就業規則」「特別専任教職員の任用等に関する規程」(資料6)等の趣旨を踏まえた適切な運用に努め、計画的な後任の採用を行っていくことにしている。日本文化学科における後任の採用については、定年退職となる教授2名に代えて、まず准教授1名を教授に昇任させた上で、准教授1名、講師または助教1名を新規に採用し、バランスのとれた年齢構成となるよう計画している。この人事が着実に実行されるよう全学人事委員会に諮った上で手続きを進める計画である。

教育研究上の資格に関しては、国際英語学科を構成する教員のうち2名が博士の学位を取得し、他の5名については修士またはM. A.の学位を取得しており、いずれも十分な研究業績を有している。日本文化学科においては2名が博士の学位を取得し、3名が修士の学位を取得しており、研究業績においても当該分野における十分な成果をあげている。

本学では、教員の採用、昇任時には全学人事委員会及び学部任用教授会において厳密な資格及び業績審査を実施しており、科目担当者はいずれも当該分野における十分な資格を有するものである。

⑥教育方法、履修指導方法及び卒業要件

(1) 教育方法

共通教育においては、少人数教育を特徴としており、「基礎科目」のうち「初年次セミナー」、「基礎英語Ⅰ」「基礎英語Ⅱ」「基礎英語Ⅲ」「基礎英語Ⅳ」は、すべて20名程度のクラス編成である。1年次から少人数教育を行うことで、学生一人ひとりの教育的ニーズにきめ細やかに対応し、大学における主体的な学びの態度の育成と、基礎学力の向上をめざす。「基礎科目」のうち残りの科目においても、1クラス50名程度を適切数とし、丁寧な個人指導を可能としている。「ライフキャリア科目」の選択科目「自己との関係科目群」「他者との関係科目群」「社会との関係科目群」「その他科目群」においても、1クラス50名程度を適切数とし、グループワークやディスカッション、ディベートなど、アクティブラーニングを行う。また、「ライフキャリア科目」では、学部を超えて他学科所属の教員による授業科目を選択することが可能であり、所属する学科の専門以外の領域についての学びを通して、より広い視野から自身のライフキャリアについて考える機会を提供する。

国際英語学科の専門科目においては、さらに少人数教育を徹底させ、学生の能力に応じた少人数クラスで指導を行う。「コア科目」のうち「人文学入門」を除いた科目の授業形態は演習であり、1クラス10名程度の編成である。(資料1)と(資料2)に示したように、1年次には、スキル科目や基礎的な科目を配置し、年次が上がるにつれてより高度な学修内容となっており、適切な開講年次に適切な内容の科目が配置されている。GSEコースでは、「GSEコース科目」のうち、「Independent Study」「GSE Internship」が演習で、他は講義の授業形態となっているが、講義科目も、英語による知識伝達だけでなく、英語によるグループディスカッションやディベートなど、アクティブラーニングの方法を取り入れている。英語文化コースにおいても、「英語文化コース科目」のうち必修科目は、言語の習熟に必要なスキル科目を主としており、20名程度のクラス編成で、英語運用能力の向上のために、プレゼンテーション、グループワーク、ディスカッションやディベートなどのアクティブラーニングの方法を取り入れる。「コース共通選択科目」の「海外研修Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」「海外インターンシップ」「地域連携文化セミナーⅠ・Ⅱ」「日本語フィールドワークⅠ・Ⅱ」「日本文化フィールドワーク」など、国内外での体験学修により、国際的視野を身に付け、国際社会と積極的に関わることのできるライフキャリアの基礎を形成する。さらに、4年次に、学びの集大成として、「卒業論文」に取り組む。

日本文化学科の専門科目においては、定員数40名という小規模である利点を生かし、個々の学生の能力や適性に応じた教育方法を提供する。日本文化学科の専門科目の授業形態は、「スキル科目」はすべて演習となっているが、「内容科目」「展開科目」は講義科目が多い。演習科目はもちろんのこと、知識伝達を主とする講義科目においても、グループワーク、プレゼンテーション、ディスカッションやディベートなどのアクティブラーニングを用いる。学生の学修到達度に応じた個別指導や、グループ指導を実施する。(資料3)と(資料

4) に示されたように、1・2年次に「スキル科目」と「内容科目」の基礎的な科目が必修科目として配置され、2年次以降、ライフキャリアを見通して、科目選択ができるように、適切な開講年次に適切な内容の科目が配置されている。「展開科目」のうちの「日本語フィールドワークⅠ・Ⅱ」「日本文化フィールドワーク」「地域連携文化セミナーⅠ・Ⅱ」「海外研修Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」などの国内外の体験学修により、日本文化を理解し、世界に向けて発信することのできる人材を育成する。4年次に、学びの集大成としての「卒業論文」に取り組む。

(2) 履修指導方法

人文学部では、1年次からチューター制度を導入し、一人ひとりの学生のライフキャリアを見通した支援を行う。

国際英語学科では、学生の能力や適性を考慮した個別指導やグループ指導を行い、学生の学びへの動機づけを高め、英語と文化について広く深く学ぶように支援する。1年次から海外短期留学など、海外に視野を向けるだけでなく実際に体験する機会を提供し、2年次以降の海外研修や、フィールドワーク、インターンシップなどに、学生が積極的に参加できるように、チューターの教員を中心に事前学修を実施する。また、参加途中での学生の相談にも迅速に対応できるように学科の体制を整えており、事後学修においては、学生自身の振り返りを行い、将来のライフキャリアを見据え、これからの主体的な学びや活動に発展するように、グループや個別に指導を行う。ネイティブの教員による授業や、授業以外での様々な場面での英語を使用したネイティブの教員との交流を通して、学生が英語運用能力について自信を持てるように指導し、学生の積極性を育成する。3年次以降のゼミ担当教員は、学生一人ひとりの能力や適性をさらに発展させるために、卒業論文への取り組みに対して、個人指導を行う。

日本文化学科では、読む・書く・聞く・話すといった国語力を高めるために、1年次からきめ細やかな指導体制を提供する。学びへの動機づけを高めるために、学生の能力や興味・関心を考慮した教材を工夫し、社会への視野を広げるよう支援する。1・2年次に、将来のライフキャリアについて考えるように、授業や授業以外の個別指導において機会を提供したり、フィールドワークなどの体験学修への参加を勧めたりするなど、チューターを中心として、学生の積極性を向上させる指導を行う。3年次以降のゼミ担当教員は、学生一人ひとりの能力や適性をさらに発展させるために、卒業論文への取組に対して、個人指導を行う。

(3) 卒業要件

人文学部に4年以上8年以内の在学期間で、124単位以上を修得した者に卒業を認める。

卒業要件単位の内訳は、国際英語学科では、基礎科目16単位を必修科目、ライフキャリア科目4単位を必修、12単位を選択必修として計32単位を履修し、専門科目の中から、GSE

コースは、必修科目を 42 単位、選択必修科目を 10 単位、英語文化コースは必修科目を 34 単位、選択必修科目を 18 単位、コア科目（計 20 単位）を必修科目として、残り 20 単位を選択科目、関連科目 I から選択科目として履修し、合計 124 単位以上を修得する。GSE コースの選択必修科目は、「GSE コース科目」の選択科目を指し、この中から 10 単位選択し、残り 20 単位を、「GSE コース科目」の選択科目と、「コース共通選択科目」の中から選択する。英語文化コースの選択必修科目は、「英語文化コース科目」の選択科目を指し、この中から 10 単位選択し、残り 20 単位を、「英語文化コース科目」の選択科目と、「コース共通選択科目」の中から選択する。

卒業要件として修得すべき単位数については、1 年間に履修科目として登録することができる単位数の上限を原則として 50 単位未満とする。ただし、直前学期の成績平均点数 (GPA) が 2.3 未満の者については、当該学期の履修登録上限単位数を 22 単位とする。

国際英語学科の履修モデルを、GSE コースの履修モデル（資料 7）、英語文化コースの履修モデル（資料 8）、英語科教員をめざす履修モデル（資料 9）に示した。

日本文化学科では、基礎科目 16 単位を必修科目、ライフキャリア科目 4 単位を必修、12 単位を選択必修として計 32 単位を履修し、専門科目の中から、必修科目を 38 単位、選択必修科目を 14 単位、コア科目（計 20 単位）を必修科目として、残り 20 単位を専門科目、関連科目 I から選択科目として履修し、合計 124 単位以上を修得する。

卒業要件として修得すべき単位数については、1 年間に履修科目として登録することができる単位数の上限を原則として 50 単位未満とする。ただし、直前学期の成績平均点数 (GPA) が 2.3 未満の者については、当該学期の履修登録上限単位数を 22 単位とする。

日本文化学科の履修モデルを、日本語運用能力を磨く履修モデル（資料 10）、日本文化を発信する力を育てる履修モデル（資料 11）、国語科教員をめざす履修モデル（資料 12）に示した。

⑦施設、設備等の整備計画

（1）校地、運動場の整備計画

本学は、JR 広島駅からバスで約 15 分の距離にあり、きわめて閑静な住宅地に位置している。JR 広島駅や市内中心部とのアクセスは、私営バスが運行されているほか、JR 広島駅と大学構内を往復するシャトルバス（業務委託）により、学生等の利便性の向上を図っている。

キャンパスは自然林に囲まれ、緑深い環境の地にあるので、隣接する民家には自然環境の保持に理解を求めながら隣接地の樹木、草木の伐採、除草を定期的に行っている。キャンパス内は平坦地が少なく、移動時には多少の困難が生じる。特に、構内道路において障がいのある学生にとって一般の車椅子での移動は容易ではないので、電動車椅子を配置するなど、その解消に努めている。

校地等面積は 202,472.33 m²であり、そのうち校舎敷地は 18,414.37 m²、運動場用地は

23,191.93 m²で、設置基準上必要とされる面積 13,200 m²を上回っている。自然林に囲まれた広大な敷地の中に、校舎等を配置し、また、グラウンドにはテニス場や弓道場などを備えている。グラウンドはキャンパス構内の上部位置し、講義棟等から徒歩で10分余りの距離にある。体育の授業には教育棟最上階の体育館が使用されることが多く、その利用は課外活動のウェイトが高い。グラウンドは管理棟や講義棟等が配置されているエリアと少し離れているので周辺に防犯カメラやブザーなどを増設し、安全の確保に努めている。

学生会館の役割を果たすヒノハラホール前は原則駐車禁止とし、ATMやベンチを配置しており、施設内の食堂、売店、ラウンジ等とも相まって学生が集う場所となっている。

また、講義棟の外にもテーブルや椅子、自動販売機を設置し、講義以外の時間において休憩、交流の場となっている。

(2) 校舎等施設の整備計画

校舎面積は29,882.92 m²であり、基準校舎面積10,826 m²を上回っている。校舎には講義室23室、実験実習室25室、コンピュータールーム7室、演習室・セミナールーム21室他を設置している。また、専任教員研究室は、全室個室で研究室面積は1室約30 m²である。

国際英語学科、日本文化学科ともほぼ専用教室（日本文化学科において、筆、硯など書道に必要な用具を備えている書道室のみ）はなく、既存の講義室、パソコンルーム、語学学修施設の利用で対応することとしている。ただ、施設設備には、老朽化が進んでいるものもあり、計画的な整備が必要であるため、今後の検討課題としている。

(3) 図書等の資料及び図書館の整備計画

本学図書館の選書は、担当教員が学生の教育研究に役立つ資料を選書することを優先しているが、ブックハンティングや購入希望図書申込みによる学生選書制度や図書館職員による選書制度も導入している。現在英語学・英語教育・英米文化関連、日本語・日本語教育・日本文学・日本文化関連の資料は相応に整備されている状況である。今後新学部として必要な資料については、学科予算の中で重点的に整備していく予定である。

2017(平成29)年3月31日現在、蔵書数は286,274冊で視聴覚資料は1,613点である。このうち教育に関する資料(NDC分類370番台での抽出件数)について、図書は20,345冊(国内図書:18,855冊、外国図書:1,490冊)あり、視聴覚資料は15点である。これらの資料は新学部の教育研究に対応できる内容であり、今後は教育研究に必要な資料(視聴覚資料を重点的に)を整備していく予定である。

完成年度には、人文学部については資料点数186,529点(国内図書:143,182冊、外国図書:42,523冊、視聴覚資料:824点)を目標としている(資料13)。

雑誌は2017(平成29)年3月31日現在6,069誌を所蔵している。継続購入中の雑誌は243誌で、うち8誌が外国雑誌である。人文学部に関係する教育に関する雑誌は411誌(内外国雑誌:181誌)である(資料14・15)。2017(平成29)年度における継続購入雑誌は90誌

(内外国雑誌：6誌)の予定である(資料15)。

電子情報の種類はデータベース、電子ジャーナル、電子図書がある。本学図書館が契約している電子資料とオープンアクセスの電子資料が一括検索できる Full Text Finder を導入しており、2016(平成28)年度より図書館ホームページをリニューアルし、「情報検索」のページを整備することにより検索を簡易にしている。2017(平成29)年3月31日現在、国内電子ジャーナル2タイトル、国外電子ジャーナル179タイトル、データベース8種類、電子図書3,516タイトル(国外電子図書：3,478タイトル)を契約しており、JUSTICEにも加盟している。特に電子ジャーナル JSTOR や EBSCO のデータベース Academic Search Complete やジャパンナレッジ Lib は学生にとって教育効果の高い資料である。

2004(平成16)年10月に新設した図書館の総延面積は5,904 m²、収容可能冊数は442,500冊であり、館内の閲覧用座席数は381席で現行学生収容定員1,880名の20.3%にあたる。地下1階、地上4階建てで、地下1階には電動集密書架があり、製本した雑誌、論集、紀要が収納され、マイクロ資料コーナーも設置している。1階には2010(平成22)年4月にラーニング・コモンズを開設し、「Heartful Commons」「Joyful Commons」「Useful Commons」の3つの空間を設置している。「Heartful Commons」はラーニング・アドバイザーによる学修支援を集中的に受けることができる部屋として活用している。電子黒板を常設して、TOEIC 講座、英検対策講座、パソコンの使い方講座等も実施し、学生の共同学修の場としても利用している。また「Joyful Commons」ではDVD、レーザーディスク、語学テープ等を自由に聴くことができ、利用形態に合わせて可動式の机や椅子を自由に動かして、グループ学修ができる。更に「Useful Commons」では24台のパソコンがあり、レポートの作成等学生が自由に学修できる場となっている。また1階には貸出・返却・レファレンスコーナー、参考図書コーナー、新聞コーナー、雑誌・論集コーナー、点字図書コーナー、文庫・新書コーナー、インターネットコーナー等を設置している。2階には研究個室が12部屋あり、集中して勉強できる環境が整備され、貴重本コーナー、指定図書コーナー、栗原貞子記念平和文庫コーナーも設置している。2階から4階にはグループ演習室が7部屋あり、共同学修の場として利用されている。更に4階にはプレゼンテーションルームがあり、初年次対象の図書館ガイダンスや学科別ガイダンスを行っており、学生は図書館ホームページから予約すればプレゼンテーションの練習をすることも可能となっている。

パソコンに関しては館内利用の貸出用ノートパソコンが19台、ラーニング・コモンズに27台、インターネットコーナーに10台、プレゼンテーションルームに14台、OPAC 検索用に14台、その他情報検索用パソコンコーナーに7台設置している。館内は全館無線 LAN で利用できる環境を整備している。

2018(平成30)年度の図書館職員の構成は、専任3名、兼任の図書館長1名(教員)、特別常勤嘱託職員1名、派遣職員2名、アルバイト2名で、全員司書資格を有している。また司書課程を受講している学生との協働活動として、図書館ボランティアや ILL 業務・書庫整理のアルバイトを実施している。

開館時間は授業期の平日は8:45から20:00まで、土曜日は8:45から17:00まで開館しており、祝日に授業がある場合は通常通り開館している。またオープンキャンパス実施日や卒論期には日曜開館も実施しており、2015(平成27)年度は288日、2016(平成28)年度は278日開館している。

他大学図書館等との協力体制としては、NII(国立情報学研究所)NACSIS-CAT、NACSIS-ILLを通じた他大学との相互利用、OCLC(Online Computer Library Center)を通じた海外大学とのILLがある。また本学図書館は機関数16大学から構成される「広島県大学共同リポジトリ(HARP)」に所属し、本学の研究成果を無償で公開している。

⑧入学者選抜の概要

(1) 入学者受入れの方針(アドミSSION・ポリシー)

人文学部は、言語や文化についての豊かな教養、専門的知識及び深い洞察にもとづき、幅広い視野に立って確固たる自己を社会の中で位置づけることができ、自己の文化や異文化を理解することによって多様な価値観を受容し、高い言語運用能力をもって他者との円滑な関係を築くことができる人材を養成する。本学部の各学科では、この目的をふまえた上で学科の目標に応じた入学者受入れの方針を定めて入学者の選抜を行う。

国際英語学科は、国際共通語としての実践的な英語力を身に付け、多文化への理解と柔軟な対応を兼ね備え、自国の文化をも理解した上で、グローバル社会で活躍する人材を養成する。入学者選抜にあたっては、入学者受入れの方針(アドミSSION・ポリシー)を次のとおり定めている。

〔国際英語学科のアドミSSION・ポリシー〕

AP1: 学士課程教育を受けるに必要な、教科書レベルの基礎的知識を習得している

AP2: 自分の考えを英語で他者にわかりやすく文章表現できる

AP3: 言語や文化に関わる事象を多面的に考察し、自分の考えをまとめることができる

AP4: 言語や文化に関するさまざまな問題に関心を持ち、身に付けた知識や技能を、これらの解決に役立てたいと考えている

入学者選抜方法ごとの評価内容を示したものが(資料16)である。また、入学者受入れの方針の各項目(AP1~AP4)と学力の3要素(知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性)との関連性をふまえて、本学科で実施する入学者選抜方法との関係を示したものが(資料17)である。

日本文化学科は、日本語や日本の文学・文化を深く理解し、日本の文化を世界に発信する力を語学教育や異文化コミュニケーション教育などにより育み、地域やグローバル社会に貢献できる人材を養成する。入学者選抜にあたっては、入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）を次のとおり定めている。

〔日本文化学科のアドミッション・ポリシー〕

AP1: 学士課程教育を受けるに必要な、教科書レベルの基礎的知識を習得している

AP2: 自分の考えを日本語で他者にわかりやすく文章表現できる

AP3: 言語や文化に関わる事象を多面的に考察し、自分の考えをまとめることができる

AP4: 言語や文化に関するさまざまな問題に関心を持ち、身に付けた知識や技能を、これらの解決に役立てたいと考えている

入学者選抜方法ごとの評価内容を示したものが（資料 18）である。また、入学者受入れの方針の各項目（AP1～AP4）と学力の3要素（知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性）との関連性をふまえて、本学科で実施する入学者選抜方法との関係を示したものが（資料 19）である。

（2）入学者選抜方法

各学科では、入学者受入れの方針に基づき、オープンセミナー入試、AO入試、指定校推薦入試、公募制推薦入試、特待生入試、一般入試（前期・後期）、大学入試センター試験利用入試及び特別入試を実施する。各入学者選抜方法における募集人員は次のとおりである。

入学者選抜方法ごとの募集人員（人文学部）

学科	入学定員	オープン セミナー 入試	AO入試	指定校推 薦入試	公募制推薦入試		特待生 入試	一般入試		
					A・B方式	C方式		前期日程		後期日程
								A・B日程	C日程	
国際英語学科	65	10	5	5	6	3	2	16	3	5
日本文化学科	40	4	4	5	2	2	2	12	2	2

学科	大学入試センター試験利用入試			特別入試		
	A日程	B日程	C日程	外国人留学生	帰国生徒	社会人
国際英語学科	5	3	2	若干名	若干名	若干名
日本文化学科	2	2	1	若干名	若干名	若干名

募集人員の割合は、国際英語学科ではAO型入試（オープンセミナー入試及びAO入試）が23%、推薦入試（指定校推薦及び公募制推薦）が22%、特待生入試及び一般入試（前期及び後期）が40%、大学入試センター試験利用入試が15%となっている。日本文化学科ではAO型入試が20%、推薦入試が22.5%、特待生入試及び一般入試が45%、大学入試センター試験利用入試が12.5%となっている。

各入学者選抜方法の特徴は次のとおりである。

（ア）オープンセミナー入試

受験希望者に本学の授業方針や授業内容を十分に理解した上で出願する機会を提供する目的で、AO入試の一形態として実施するものである。受験希望者は大学で開講する3日間の授業（オープンセミナー）を受講し、大学で学んでいくための基礎的な力を育成する授業を体験する。大学側は、セミナーの中で課す各種課題（発表・レポート等）及び受講状況に基づいて評価し、後日受講者より出願があれば、授業評価と書類審査に基づいて可否を判定するものである。この入試方法は、受験生と大学側とが相互に十分な理解を得た上で入学を決定することになるため、入学者受入れの方針に基づく適切な評価を行うことが可能であるとともに、入学後の学生の適応状況も良好である。

（イ）AO入試

学科での学びに必要とされる言語や文化に関わる事象を多面的に考察する力を評価することを目的とした体験授業やプレゼンテーション等を実施し、その受講状況やプレゼンテーションの内容に基づいて学力の3要素を評価する。また、調査書、活動歴記入書（検定試験、資格、コンテスト、コンクール、競技等の実績）、資格証明書（英検2級合格証書、TOEIC500点以上のスコア表。国際英語学科のみ）の評価を含めて総合的に判定を行う。

（ウ）推薦入試（指定校推薦、公募制推薦）

指定校推薦入試においては、調査書における全体の評定平均値に基準を設け、学科が求める学生像を提示した上で高等学校長の推薦を受ける。選考方法は、小論文・面接による評価と書類審査（推薦書、自己紹介書、志望理由書及び調査書）の評価にもとづいて総合的に判定する。

公募制推薦入試は、A方式（専願）、B方式（専願）及びC方式（併願）の3方式で実施する。いずれも調査書の評定平均値による成績基準は設けていないが、B方式についてはキリスト教の学校教育を受けた者、教会生活を1年以上おこなった者、または本学同窓会会員の子・孫・姉妹であることを出願の要件とすることで、本学のキリスト教主義に立脚した教育理念を理解し、賛同する受験生を求めている。

選考方法は、小論文または資格・検定試験利用と面接であり、書類審査の評価を含めて総合的に判定を行う。なお、特定の資格・検定試験（例えば、英検、TOEIC、日本語検定、語彙・読解力検定等）の成績利用制度を設けることで、多様な評価が可能となるよう配慮している。

（エ）一般入試・特待生入試

一般入試として、前期日程と後期日程を設けている。前期日程は2月期に実施し、3日間の試験日を設けてA・B・C日程としている。A・B日程は2科目型の学力試験を実施するものであり、国際英語学科では英語を必須とし、国語または数学から1科目を選択し、日本文化学科では国語を必須とし、英語または数学から1科目を選択するものである。C日程は1科目型として国際英語学科では英語、日本文化学科では国語を必須科目として課すことにしている。なお、国際英語学科の英語の学力試験については資格・検定試験の成績利用制度を設けており、英検、TOEIC等の外部試験において一定の基準を満たした場合に得点の加点または満点に換算することができる。

後期日程は3月期に実施するものであり、学力試験として国際英語学科では英語、日本文化学科では国語を必須とする。また、国際英語学科では前期日程と同様に、英語の学力試験について資格・検定試験の成績利用制度を設けることにしている。

特待生入試は、本学での学修に強い意欲を持ち、成績優秀な者に対して入学後の勉学を奨励する目的で導入する。本入試に出願した受験生は、一般入試前期A日程を受験することになっており、各学科A日程全受験者の上位20%以内の成績であり、かつ上位2名の者に奨学金を給付する制度である。

（オ）大学入試センター試験利用入試

大学入試センター試験の成績を利用して合格者を選抜する。判定時期に応じてA・B・C日程を設けている。A・B日程はいずれも2科目型であり、国際英語学科では英語を必須とし、日本文化学科では国語を必須とした上で、地理歴史・公民、数学、理科及び国語または英語から1科目を選択して、その総合点で判定を行う。その際に、必須科目を200点満点、選択科目を100点満点とすることで学科の専門性に応じた判定が行えるようにしている。C日程は1科目型であり、国際英語学科では英語を必須とし、日本文化学科では国語を必須として学力試験を行う。

(カ) 特別入試

特別入試として、外国人留学生特別入試、帰国生徒特別入試、社会人特別入試を設けている。外国人留学生特別入試では、独立行政法人日本学生支援機構の日本留学試験「日本語」の結果通知書の提出を求め、面接及び書類審査の評価と合わせて総合的に判定する。なお、国際英語学科においては上記に加えて英語の学力試験を課すことになっている。

帰国生徒特別入試では、「日本国籍を有し、外国の高等学校段階に2年以上学んだ者」を出願資格としているが、外国の高等学校または同等の学校に在学した者のほかに、国際バカロレア資格証書を有する者も対象としている。選考方法は、小論文、英語及び面接による評価に基づいて総合的に判定する。

社会人特別入試では、「高等学校を卒業した者、または高等学校卒業と同等の資格があると認められる者で、入学年度の4月1日現在で満25歳以上の女性」を出願資格として定めている。選考方法は、小論文及び面接による評価に基づいて総合的に判定する。

(キ) GSEコースにおける入学者選抜

国際英語学科のGSEコースは、教育課程のほぼ全てが英語による授業によって構成されている。したがって、入学者選抜の全てにおいて出願資格として英検2級の資格またはTOEIC500点以上のスコアを有することを要件としており、選考方法においても英語によるエッセイライティングや英語と日本語による面接を課した上で、GSEコースの履修に耐えうる英語力を判定するよう配慮している。

(3) 選抜体制

入学者受入れの方針、入学者選抜方法、入試日程、入試科目等の入学者選抜に関わる意思決定は、学長が委員長となる入試委員会の議を経て、学長によって行われる(資料20)。また、入学者選抜の実施業務については、入試実行委員会が主導して適切に遂行している(資料21)。各学科におけるオープンセミナー入試、AO入試、指定校推薦入試、公募制推薦入試、特待生入試、一般入試(前期・後期)、大学入試センター試験利用入試、特別入試の試験実施、採点、書類審査及び面接は、学科所属の専任教員によって実施する。

(4) 科目等履修生及び聴講生制度

本学では、科目等履修生及び聴講生制度を設けており、各学科においても受け入れる予定である。いずれの制度においても、正規の学生の学修に差し支えない場合に限り教授会の議を経て学長が許可することになっており、科目等履修生の場合は当該授業科目担当教員及び当該学科において審査を行った上で許可するため、正規の学生の学修に支障をきたすことはない。

⑨取得可能な資格

人文学部国際英語学科、日本文化学科で取得可能な免許・資格は、次の通りである。

【人文学部 国際英語学科】

免許・資格	国家資格 民間資格	科目の修得・卒業要件
中学校一種免許 (英語)	国家資格	卒業要件単位に含まれる科目のほか、教職関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない
高等学校一種免許 (英語)	国家資格	卒業要件単位に含まれる科目のほか、教職関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない
学芸員	国家資格	卒業要件単位に含まれる科目のほか、学芸員関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない
学校図書館司書教諭	国家資格	教育職員免許状の取得を前提とし、卒業要件単位に含まれる科目のほか、司書教諭関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない
図書館司書	国家資格	卒業要件単位に含まれる科目のほか、司書関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない

【人文学部 日本文化学科】

免許・資格	国家資格 民間資格	科目の修得・卒業要件
中学校一種免許 (国語)	国家資格	卒業要件単位に含まれる科目のほか、教職関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない
高等学校一種免許 (国語)	国家資格	卒業要件単位に含まれる科目のほか、教職関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない

学芸員	国家資格	卒業要件単位に含まれる科目のほか、学芸員関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない
学校図書館司書教諭	国家資格	教育職員免許状の取得を前提とし、卒業要件単位に含まれる科目のほか、司書教諭関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない
図書館司書	国家資格	卒業要件単位に含まれる科目のほか、司書関連科目の履修が必要だが、資格取得が卒業の必須条件ではない

⑩実習の具体的計画

【教育実習】

(1) 実習先の確保状況

教育実習（中学校・高等学校（国語・英語））については、広島市教育委員会管轄の中学校 63 校及び高等学校 8 校、中等教育学校 1 校、呉市教育委員会管轄の中学校 26 校及び高等学校 1 校、広島県教育委員会管轄の中学校 1 校及び高等学校 82 校、さらに系列校である私立広島女学院中学校及び高等学校（資料 22）を実習先として確保している。以上のことから、実習先については十分な確保状況にある。

(2) 実習先との契約内容

広島市、呉市の市立中学校において実習を行う学生については上記の広島地区大学教育実習連絡協議会を通じて実習の承認依頼を行うが、その過程で「広島市立学校教育実習実施要項」を遵守することを誓約書にて誓約させている。また、実習における個人情報の取り扱いについては、「個人情報に関する法令及びその他の規範」を遵守するよう学生に指導するとともに実習先にも依頼している。広島県やその他の市の管轄の中学校、高等学校についても準じている（広島県「教育実習実施取扱要領」など）。

(3) 実習水準の確保の方策

実習への参加要件を以下のように定め、実習水準の確保に努めている。

(ア) 3 年次までの全履修科目の成績平均点数 (GPA) が 2.3 以上であること

編入学生は、3 年次の履修科目の成績平均点数 (GPA) が 2.3 以上であること

(イ) 3 年次終了時点において、それまでに履修した「教科に関する科目」の成績平均点数 (GPA) が 2.3 以上であること

(ウ) 1～3 年次まで下記に示した「教職に関する科目」（選択必修を除く必修科目）の単

位を取得していること

(エ) 教職に関する科目「各教科の指導法」(3年次)において、当該科目担当者が教育実習参加に相応しいか否かの判断を迷う学生に関しては、15回目の授業終了後に査定の模擬授業を実施し、本学組織・中等教職課程委員会にて教育実習参加の可否を決定する。

[教職に関する専門科目]

「教職論」「教育原理」「教育心理学」「教育課程論」「教育方法論(情報機器及び教材の活用を含む。)」 「教育社会学」「生徒・進路指導論(進路指導の理論及び方法をを含む)」「特別活動論」「学校カウンセリング」、「道德教育指導論」(中学校のみ)及び各教科の「教科教育法」

[教科に関する専門科目]

各教科の教科に関する科目の科目区分に合わせて20単位以上取得

(4) 実習先との連携体制

上述の広島地区大学教育実習連絡協議会を通じて、また本学の教職課程専任教員、巡回指導担当教員が直接実習先にかがうことで、実習先との連携を行っている。

協議会については、教育実習を円滑に進めるための連絡協議を行い、あわせて教職課程に関する情報交換を行うことを目的とするものである。定例会議は、年2回開催されることになっている。協議会には、会員大学の他に年1回は教育委員会、校長会から代表者が参加しており、実習や教職課程に関わる情報交換を行い、意見交換をしながら、教育実習の水準確保に努めている。

また実習先への訪問については、実習期間中に、本学の教職課程専任教員、巡回指導担当教員が分担して実習先を巡回指導すると共に、実習の達成目標等の共有のため校長、指導担当教員等と懇談を行っている。

(5) 実習前の準備状況(感染予防対策・保険等の加入状況)

教育実習前の感染予防対策として、実習参加学生に対し、「麻疹・風疹の抗体検査」等を実施し、感染拡大防止を心がけている。想定できない実習中の災害や事故に対応できるよう、実習参加者全員は「学研災付帯賠償責任保険」に加入している。

(6) 事前・事後における指導計画

以下のように、主に、通年科目である「教育実習Ⅲ(事前・事後指導)」を通じて事前事後指導を行っている。なお、随時、本学の教職課程専任教員、巡回指導担当教員、教職課程科目担当教員及びチューターなどが指導を行っている。

(ア) 時期及び時間数

事前指導：4年次「教育実習Ⅲ(事前・事後指導)」 (90分×16コマ)

事後指導：4年次「教育実習Ⅲ（事前・事後指導）」（90分×3コマ）

(イ) 指導計画

[事前指導]

- 第1回 オリエンテーション～教育実習の位置づけ及びスケジュール～
- 第2回 教育実習の意義と目的・教育実習と実習生の日々
- 第3回 マイクロ・ティーチングの方法について
- 第4回 模擬授業（1）
- 第5回 中学校・高等学校における生徒指導のあり方について（2コマ分）
- 第6回 模擬授業（2）
- 第7回 教育と人権について（2コマ分）
- 第8回 模擬授業（3）（4）（2コマ分）
- 第9回 模擬授業（5）
- 第10回 中学校・高等学校における教師の教育実践について（2コマ分）
- 第11回 模擬授業（6）
- 第12回 模擬授業（7）（8）（2コマ分）
- 第13回 模擬授業（9）

[事後指導]

- 第1回 教育実習を振り返って（1）～アンケート調査～
- 第2回 教育実習を振り返って（2）～グループ討議とグループごとの発表～
- 第3回 教育実習のまとめ（個別面談）

(7) 教員及び助手の配置並びに巡回指導計画

実習期間中には、各教育実習においては中等教職課程委員会の構成員である教員等で全の実習校を巡回し、授業参観等を通して実習生の状況把握や指導・助言を行っている。

巡回指導は、実習先と大学が協力して実習教育の充実を図ることを目的としている。巡回指導に際して、担当教員は事前に実習先の状況を把握した上で、実習先との面談予約をとり、学生の実習期間中に訪問する。校長などの実習先責任者や実習指導担当教諭と学生の実習状況や問題、本学への要望などについて話し合った上で、学生が行っている授業実習等の参観を行い、指導・助言を行って意欲的に実習を継続できるように指導する。巡回指導後は報告書を作成して、中等教職課程委員会に提出し、より充実した実習指導とするための資料としている。

(8) 実習施設における指導者の配置計画

実習先に対しては、本学の教職課程専任教員や巡回訪問指導担当教員が、実習先との事前の打ち合わせを通して実習生への指導計画及び実習指導担当教諭の配置計画を確認している。実習開始後は、本学の教職課程専任教員や巡回訪問指導担当教員、あるいはチュー

ターが実習指導担当教諭と緊密に連絡を取り合っ、実習の状況を常に把握し、実習生に対して効果的な助言を行うことのできる連携体制を構築する。

(9) 成績評価体制及び単位認定方法

成績評価は、教職課程専任教員等によって構成される委員会を開催し、実習先指導担当教諭や校長等による評価、実習日誌、勤務状況、巡回訪問指導の記録等と大学での事前・事後指導を総合的に判断して評価する。

教育実習及び事前・事後指導のねらいは以下のとおりであり、以下の観点から評価する。

(ア) 教育実習のねらい

中学校・高等学校の教育活動に参加し、生徒への理解を深めるとともに、授業実習を行い、中学校・高等学校の機能と中学校・高等学校教諭の職務について学ぶ。

(イ) 事前・事後指導のねらい

教育実習を円滑に進めていくための知識・技能を習得し、学習内容・課題を明確にするとともに、実習の反省を行う。

【博物館実習】

(1) 実習先の確保状況

直近の2016(平成28)年度の状況は別添の実習先一覧(資料23)、及び受け入れ館園の承諾書(資料24)のとおりである。平成28年度は11館園で16名が実習を行った。広島県立美術館、ひろしま美術館、広島市現代美術館、広島城などでは、継続して毎年複数名(2～5名)内外の学生を受け入れていただいております、ほかにも継続的に長年受け入れていただいている館園も相当数にのぼる。過去5年で見ると、2012(平成24)年度は10館園16名、2013(平成25)年度は13館園28名、2014(平成26)年度は18館園25名、2015(平成27)年度は13館園17名と、履修者が年度によって一定しないものの、毎年30名を超えていた2010(平成22)年度以前に比べると減少したことや、積極的に受け入れを行う館園が増加したこともあり、受け入れ先の確保に困難はなくなっている。実習の対象学年は原則4年生とし、前年度までに博物館実習を除くすべての学芸員課程専門科目を履修済みで、なおかつ、独自に設ける成績基準を満たした者だけに履修を認めている。実習先の決定は、実習予定の前年度末に提出する実習希望届(資料25)をもとに行う。届の際の参考資料として、実習館園の一覧(資料26)を配布するが、これは過去に受け入れがあった館園、及び、受け入れが許されると思われる館園を記載したもので、学生はこれ以外からも希望する館園を選ぶことができる。そのため、卒業論文の研究テーマなどとの関連で学生が希望した場合は、受け入れ実績のない遠隔地の館園に依頼することもあり、2016(平成28)年度には大分香りの博物館(大分県)・竹中大工道具館(兵庫県)・京都服飾文化研究財団(京都府)で各1名が実習を行った。

(2) 実習先との契約内容

本学より受け入れ先に送付する依頼状（資料 27）によって行う。受け入れ先の要請によっては契約書を交わすが、館園から過去7年間そのような要請はない。

(3) 実習水準の確保の方策

さまざまな館園の実態に則した体験をすることに一定の意義があると認識しているため、実習カリキュラムなどについて一律の要望を行うなどの措置はとっていない。また、小規模な博物館類似施設での実習も、個々の学生に適合する館園であれば、授業担当者の判断と学芸員課程委員会の審議を経て認めている。しかし、展示内容があまりに商業的である館園での実習は認めていない。また、担当学芸員の指導が不適切であると認めた場合には翌年度以降依頼を行わないこともある。

(4) 実習先との連携体制

ほぼ毎年依頼している館園とはさまざまな連携をはかっている。広島県立美術館・ひろしま美術館とは、本学が「キャンパスメンバー」となって会費を負担し、学生教職員が特別展・常設展を含め、何度でも無料で入館できる体制をとっている。ほかにも、学芸員等が本学に非常勤講師として出講している館園も複数ある。また、本学担当教員が講演、各種委員をつとめるなどの形でも連携をとるよう努めている。

(5) 実習前の準備状況（感染予防対策・保険等の加入状況）

学生の方が一の事故に備え、2016(平成 28)年度より毎年「学研災付帯賠償責任保険 A コース」に「全員加入」している。これにより、学生が誤って実習先の器物を破損したり、他人にけがをさせたりした場合に迅速な対応ができる。

(6) 事前・事後における指導計画

博物館法施行規則改正にともなう 2012(平成 24)年の新規則施行以前から、本学においては博物館実習を「博物館実習Ⅰ」(学内実習 1 単位)・「博物館実習Ⅱ」(館務実習 1 単位)・「博物館実習Ⅲ」(見学実習 1 単位)に分けて開講し、「博物館実習ガイドライン」にほぼ準拠する形で行ってきたが、2014(平成 26)年度からは新規則により近い形態に授業内容を変更し、事前・事後における指導を徹底している。すなわち、館園実習を「博物館実習Ⅱ」と位置づけ、2 単位とするが、春学期の「博物館実習Ⅰ」(1 単位)で、事前の学習として添付の一覧（資料 28）のとおり、学内で実物資料を用いて取り扱い（1 クラスあたり 15 名以下）や梱包等の保管技術の習得、展覧会の企画実施など予備的学習を行うとともに、館園実習に向けての全体・個別での指導も行う。また「博物館実習Ⅱ」(2 単位)では、館園実習終了後に事後学習として、実習報告会を行い、各自の実習の内容を担当教員及び全履修者の前で発表させている。館園実習は既述のとおり、各館園の実態に則した体験をする

ことに一定の意義を認めて、一律のカリキュラムではないため、他館での実習について聴き、質疑を行うことで、館による博物館実務の多様さへの理解を深める効果を上げている。秋学期の「博物館実習Ⅲ」(1単位)では、添付の一覧(資料28)のとおり、主に本学所在地の広島周辺では体験できない規模や種類の多様な博物館園を見学する見学実習を2泊3日で実施するとともに、学期末に「博物館実習Ⅰ」・「博物館実習Ⅱ」・「博物館実習Ⅲ」を通じての学び全体を口頭発表させて、学芸員課程での学びを自ら総括させている。なお、見学実習においては引率する担当教員と見学館の学芸員等との緊密な連携により、出来る限り現場で学芸員の解説を受けるようにし、さらに1館以上で依頼してバックヤード見学を実施している。また、「博物館実習Ⅰ」・「博物館実習Ⅱ」・「博物館実習Ⅲ」とも、実習日誌をつけさせるとともに、学期末までにレポートを課し、その報告書を中心に毎年『広島女学院大学博物館実習報告』と題した冊子を発行、関係先に配布している。

- | | |
|------|---|
| 第1回 | オリエンテーション・実習の意味と目的 |
| 第2回 | 資料の点検と調書作成 |
| 第3回 | 資料の梱包と保存(整理・保管) |
| 第4回 | 資料の取り扱い(1)掛幅(15名以下とするため2分級) |
| 第5回 | 資料の取り扱い(2)卷子・冊子・屏風(15名以下とするため2分級) |
| 第6回 | 展覧会の企画・運営・開催(1) |
| 第7回 | 資料の記録(1)写真撮影とその意味(15名以下とするため2分級) |
| 第8回 | 資料の記録(2)写真撮影とその意味(15名以下とするため2分級) |
| 第9回 | 展覧会の企画・運営・開催(2) |
| 第10回 | 資料の記録(3)拓本の採り方(15名以下とするため2分級) |
| 第11回 | 資料の取り扱い(3)額(15名以下とするため2分級) |
| 第12回 | 展示植物の継続管理(広島市植物公園見学実習) |
| 第13回 | 資料の取り扱い(4)服飾を中心とした実物資料、館務実習の準備と心得・
見学実習の準備 |
| 第14回 | 展覧会の企画・運営・開催(3) |
| 第15回 | 展覧会の企画・運営・開催(4) |

(7) 教員及び助手の配置並びに巡回指導計画

博物館勤務経験があり、博物館学の専門知識をもつ本学専任教員1名(准教授)が全体を統括担当するほか、植物学、服飾史専攻の専任教員が専門分野に関して協力し、一部の授業を担当する。なお、課程運営の事務の一部は学部事務室及び教務課で行う。

実習先の巡回について、学芸員課程委員の教員で分担し、遠隔地以外の実習先については原則すべてを訪問し、巡回指導を行うこととしているが、実習期間中に訪問できない館に関しては、事前・事後に担当教員と館の学芸員の間で緊密な連携を取って、巡回指導に代えている。2016(平成28)年度の実績は添付の表(資料23)のとおり、初めて受け入れて

いただいた遠隔地の館園も訪問した。

(8) 実習施設における指導者の配置計画

適切な指導があるかどうか精査した館園で実習させている。行き届いた指導が行えるよう事前に館園の指導者と授業担当者間で綿密な打ち合わせを行っている。

(9) 成績評価体制及び単位認定方法

館園実習については、受け入れ先の証明書、出席状況（原則全日出席）を単位認定の最低条件とし、担当学芸員の評価、受講者が提出する日誌の記述、期末レポートなどを総合的に勘案して授業担当者が成績評価を行う。学内実習・見学実習については受講者が提出する日誌の記述、期末レポートや授業への参加度合いをもとに授業担当者が行っている。

⑩企業実習や海外語学研修等の学外実習を実施する場合の具体的計画

・「海外研修事前指導」

本学の海外研修事前指導は1年次から履修可能であり、提携先はアメリカ合衆国カリフォルニア州立大学サンマルコス校である。履修単位は2単位であり、2月下旬から3月上旬にかけて約2週間実施する。交換留学をはじめ、「海外研修Ⅰ」「海外研修Ⅱ」「海外インターンシップ」などへの動機付けあるいはその参加を前提とした実践的な準備を図るため、現地での日常生活を体験し、海外生活に不可欠な英語のコミュニケーション能力を獲得させることが目的である。渡航前に留学準備の説明会を行い、入国審査、公共交通機関、ホームステイ、商店などにおける英会話などを練習すると共に、渡航準備と危機管理にも習熟させる。帰国後は、研修中に受けたテストの結果を評価すると共に、海外生活を通して得た経験を総括、内在化するための振り返りとしてレポートを提出し、それを成績評価に加え、今後のより本格的な海外生活に備えさせる。

・「海外研修Ⅰ」

本学の海外語学研修は2年次から履修可能となる「海外研修」として全学に解放している。提携先はイギリスのグロースターシャーにあるグロースターシャー大学であり、8月中旬より約3週間の集中的英語研修を実施する。履修単位は4単位である。プログラムの目的はイギリスの大学で英語の4技能をバランスよく学習することで英語活用能力の向上を図り、さらにホームステイを行うことで生活の面での文化的理解を深めることである。春学期に15回の事前指導を行い、イギリス文化の知識や英語運用能力を向上させるシラバスを組んでいる。提携先であるグロースターシャー大学はこれまでも本学の海外研修の受け入れ先として充実した語学、文化プログラムを提供してきた実績のある大学である。海外研修中の試験での成績に加え、帰国後に提出するレポートも成績評価の対象とする。

・「海外研修Ⅱ」

イギリス・マンチェスター市での4週間のホームステイ滞在中に、英語学校 (Manchester Academy of English) における英語学習を通して実践的なコミュニケーション能力を向上させるとともに英語文化に関する理解を深めつつ、現地の小学校 (Navigation Primary School) 並びにハイスクール (St Martin RC High School) におけるインターンシップ (授業観察、支援、教壇実習など) に従事することにより、総合的な英語のコミュニケーション能力を向上させるとともに教育現場を通してイギリス文化について理解を深めさせる。履修単位は4単位であり、海外研修中の姿勢や英語学校での最終試験での成績に加え、帰国後に提出するレポートも成績評価の対象とする。

・「海外研修Ⅲ」

本研修では、本学の提携校である、中国山東省済南市山東大学で、日本に関心のある学生 (主に、外国語学部の日本語学科の学生) を対象に、日本文化の紹介を行う。使用言語は、日本語、英語、研修先の母語を想定している。本研修の主な目的は、二つある。一つは、異なる文化的背景を持つ人々に日本に対する関心や理解を深めてもらうことである。二つ目は、本体験を通して、本研修に参加した本学の学生たちの日本文化発信力ならびに異文化間コミュニケーション能力を高めることである。滞在は、約1週間を計画している。宿泊には、提携大学が提供する留学生用の宿舎、もしくは、近郊のビジネスホテルを利用する予定である。渡航前の学期に本研修に向けた15回の事前授業を行う。事前授業では、提携校で行う文化紹介プログラムの具体的な準備を行うほか、提携校の言語、生活習慣、文化についても学ぶ。現在、本学は、本提携校に毎年海外日本語教育実習で訪問しているが、本研修では、日本語を教えるのではなく、日本文化を知ってもらうことに比重を置くプログラムとして実施していく。評価は、①事前準備授業における取り組み、②研修先での文化紹介の成果、③事後レポートの三つの観点から行う。単位は、事前授業ならびに研修の二つの活動を合わせ2単位とする。

・「Global Village Field Experience I」

この授業の目的は、ベトナムの The University of Da Nang の学生や、Cu Lao Cham Marine Protected Area の NGO や地元の活動家とともに伝統や文化、直面する社会問題や環境問題における課題を見つけ、解決方法を探りながら、グローバルな視点で世界の問題を捉える力を養うことである。期間は10日間であり、履修単位は2単位とする。春学期の事前指導では現地での情報収集、調査方法、プレゼンテーションの仕方などを身に付け、ベトナムの歴史や文化、政治情勢といった必要な知識について学ぶ。フィールドワーク、異文化体験やそのための安全な参加の仕方に関する不可欠な情報も合わせて扱う。帰国後に提出するレポートを成績評価の対象とする。

・「海外インターンシップ」

アメリカ合衆国カリフォルニア州立大学サンマルコス校（資料 29）での 3～4 か月間の英語学習を通して実践的なコミュニケーション能力を向上させるとともに、ホームステイを通じて英語文化に関する理解を深めることが本授業の目的である。また、現地の商業施設、学校、公共施設などにおけるボランティアなどの体験学習を通じて、総合的な英語のコミュニケーション能力を向上させるとともに長期にわたる実体験を通してアメリカ文化について理解を深めることができる。履修単位は 16 単位であり、帰国後に提出するレポートを成績評価の対象とする。

⑫管理運営

（1）教授会の役割、構成員、開催頻度及び審議事項

教授会は、全学教授会と学部教授会を設置している。全学教授会は、学長、副学長、学部長及び専任教員をもって構成し、学長が議長となり、原則として毎月 1 回開催する。審議事項は、大学の運営に関して学長が全学的な審議を必要と認める事項について審議するとともに、全学に関わる報告を行う（資料 30）。

学部教授会は、人文学部専任教員を構成員とし、学部長が議長となり、原則として毎月 1 回開催する（資料 31）。審議事項は、「学生の入学、卒業及び課程の修了に関する事項」及び「学位授与の審査に関する事項」であり、この他に教育研究に関する重要な事項で、教授会の意見を聴くことが必要であると学長が定めるものとして、「教育研究に関する諸規則の制定及び改廃に関する事項」「学生の転学部・転学科、転学、再入学及び留学に関する事項」「学生の退学、休学、復学及び除籍に関する事項で学長が教育上の判断を必要とするもの」「学生の学業成績判定に関する事項」「学生の賞罰に関する事項」「学部の教務に関する事項」「学部の学生支援に関する事項」「学部の諸委員の選出に関する事項」「学部の教育並びに研究計画に関する事項」「学部の教員の教育研究業績の審査に関する事項」「学部の自己点検・評価に関する事項」が明記されている（資料 32）。いずれの事項についても、学部教授会において審議された意見を聴取した上で、学長が意思決定を行うことになっている。

（2）教授会以外に関連する教学管理運営体制（委員会の名称と役割—教授会と関連—）

教学に関する諸課題について審議し、教育研究活動を円滑に運営していく目的で各種組織・委員会を設置している。学長の下には、学長の意思決定を支えるための学長室会議及び最高審議機関である大学評議会を置くとともに、内部質保証委員会、自己点検・評価委員会、全学人事委員会、広報委員会、入試委員会を設置し、いずれも学長が議長となることで大学の重要事項についての決定を行い、決定事項を全学教授会及び学部教授会に報告し全教員に周知するとともに、それらを教育研究に反映させることで、教学における P D C A を機能させるようにしている。

常設委員会として、授業を円滑に実施し学生の履修を適切に指導するとともに、学生の生活支援を行う「学務委員会」、共通教育の運営を円滑に実施するための「共通教育委員会」、学生のキャリアデザイン形成のためのプログラムづくりや就職活動の支援を行う「キャリア支援委員会」、学生や教職員の人権に関する問題を解決するための「人権問題委員会」及び「キャンパス・ハラスメント問題委員会」、学生のボランティア活動を支援するための「ボランティアセンター委員会」を設置している。それぞれの委員会において協議した内容は全学教授会及び学部教授会に提案し、教授会において審議することによって教育活動に生かしていくようにしている。また、教員の教育研究上の資質を向上させるために研修やワークショップを企画・運営する「ファカルティ・ディベロップメント（FD）委員会」、研究倫理に関する審査を行うことで教員の研究活動を支える「倫理審査委員会」、学内外の教育・研究・社会貢献等に関する情報を収集・分析し、必要事項を学長に報告することにより、学長の意思決定を支援する「IR委員会」を設置することで、それぞれの教育研究上の目的が達成されるようにしている。

⑬自己点検・評価

（１）実施方法、実施体制、結果の活用・公表及び評価項目等

本学は、2002(平成 14)年に自己点検・評価委員会を設置し、点検・評価を実施する体制を整えた。当委員会には、特定の評価項目について点検・評価を行うための小委員会を設置することになっており、2015(平成 27)年度については、「教育・研究評価」「アドミッション評価」「学生支援評価」「教育研究等環境・財務評価」「社会連携・社会貢献評価」「管理運営・内部質保証評価」を担当する各小委員会を設けて点検・評価を実施した。評価項目は大学基準協会の点検・評価項目に準拠しており、(1)理念・目的、(2)教育研究組織、(3)教員・教員組織、(4)教育内容・方法・成果、(5)学生の受け入れ、(6)学生支援、(7)教育研究等環境、(8)社会連携・社会貢献、(9)管理運営、(10)財務、(11)内部質保証の 11 項目に従って実施している。

実施にあたっては、学長を委員長とする「自己点検・評価委員会」が主体となって全体を統括し、各部署（学部・学科・研究科・委員会・事務組織等）において点検・評価された結果をとりまとめ、「自己点検・評価報告書（案）」を作成する。点検・評価にあたっては、大学基準協会の評価基準に従って〔現状の説明〕〔点検・評価〕〔将来に向けた発展方策〕の 3 点について行うものとする。その後、自己点検・評価委員会及び委員会のもとに置かれた前述の 6 つの小委員会が「自己点検・評価報告書（案）」をもとに、大学基準協会の評価基準に従って評価を実施する。最終的に、自己点検・評価委員会がすべての評価結果をとりまとめ、全体的な評価を行った上で「自己点検・評価報告書」を作成し、公表することになっている（資料 33）。

点検・評価結果の活用については、大学評議会において「自己点検・評価報告書」に基づく改善策を検討した上で実施することになっている。しかし、これまでは年度毎の事業

計画の策定、事業（教育研究活動）の実施、自己点検・評価の実施、さらに評価結果に基づく改善に至るPDCAサイクルが組織として明確に位置づけられていなかったため、必ずしも十分に機能していたとはいえなかった。そこで、2017(平成 29)年度より「内部質保証委員会」を設置し、PDCAの中核組織として位置づけることにした（資料 34）。内部質保証委員会は、学長室会議において作成された当該年度の事業計画が評議員会、理事会で承認された後に各部局に指示して事業を実施し、年度の間で執行状況のとりまとめと評価を行い、必要に応じて各部局に再度指示する。年度末には、自己点検・評価委員会が「自己点検・評価報告書」をとりまとめて内部質保証委員会に提出する。そして、内部質保証委員会は同報告書に基づき必要な改善策を検討し、大学評議会に提案する。大学評議会は改善策の提案を受けて、改善計画を策定し実施する。このようにして、自己点検・評価の結果が活用される体制を整備した（資料 35）。

⑭情報の公表

（１）情報の公表について方針、考え方

ホームページ上で情報公開を行っている。ウェブサイト上のトップページの「情報公開」から、「教育情報の公表」「教職課程の情報の公表」で、情報公開サイトへ移動できる。

トップページの URL は、<https://www.hju.ac.jp/>

「教育情報の公表」は、<https://www.hju.ac.jp/guide/information.php>

「教職課程の情報の公表」は、<https://www.hju.ac.jp/guide/teacher-training.php> である。

「教育情報の公表」では、学校教育法施行規則第 172 条の 2 の項目に従い、教育研究活動の基本情報公開している。すなわち、次のとおりである。

（２）ホームページへの掲載

（ア）大学の教育研究上の目的に関すること

「広島女学院大学の歩み」「建学の精神」「学部・学科の人材養成に関する目的と教育研究上の目的」「研究科・専攻の人材養成に関する目的と教育研究上の目的」、「ディプロマポリシー」「カリキュラムポリシー」「アドミッションポリシー」等を公表している。

<https://www.hju.ac.jp/guide/jinzaikyokuikumokuteki.php>

（イ）教育研究上の基本組織に関すること

「学部学科・大学院構成」「事務組織図」「教職員数」を公表している。

<https://www.hju.ac.jp/guide/about-organization.php>

<https://www.hju.ac.jp/guide/organization-chart.php>

<https://www.hju.ac.jp/guide/inc/pdf/kyoshokuinsu.pdf>

（ウ）教員組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること

「教員組織（組織内の役割分担）」「教員年齢構成」「教員一覧」を公表している。

<https://www.hju.ac.jp/guide/inc/pdf/kyoinsoshiki.pdf>

<https://www.hju.ac.jp/guide/inc/pdf/kyoinnenrei.pdf>

<https://www.hju.ac.jp/faculty/professors/index.php>

(エ) 入学者に関する受け入れ方針及び入学者の数、収容定員及び在学する学生数、卒業または修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職などの状況に関すること

「アドミッションポリシー」「入学定員・入学者数・収容定員・在籍者数」「就職実績」等を公表している。

<https://www.hju.ac.jp/guide/admission-policy.php>

<https://www.hju.ac.jp/guide/inc/pdf/nyugakuteiin.pdf>

<https://www.hju.ac.jp/career/results.php>

(オ) 授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること

「学則別表」「シラバス」等を公表している。

<https://www.hju.ac.jp/guide/inc/pdf/beppyoy.pdf>

https://clcis.hju.ac.jp/aa_web/syllabus/se0010.aspx?me=EU&opi=mt0010

(カ) 学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること

「ディプロマポリシー」「カリキュラム」を公表している。

<https://www.hju.ac.jp/guide/diploma-policy.php>

<https://www.hju.ac.jp/faculty/system/index.php>

(キ) 校地、校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関すること

「キャンパスマップ」「クラブ・サークル」「アクセス」を公表している。

<https://www.hju.ac.jp/life/establishment/index.php>

<https://www.hju.ac.jp/life/club.php>

<https://www.hju.ac.jp/info/map/>

(ク) 授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関すること

「学費等納入金」を公表している。

<https://www.hju.ac.jp/examination/expenses/index.php>

(ケ) 大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること

「トータル型サポート」「アカデミック・サポートセンター」「ボランティアセンター」「ハラスメント相談」「健康管理センター」「カウンセリングルーム」「障がい学生高等教育支援室」「就職サポート・スケジュール」等を公表している。

<https://www.hju.ac.jp/life/support/>

<https://www.hju.ac.jp/life/establishment/>

<https://www.hju.ac.jp/career/>

(コ) その他

「財務情報について」「事業計画について」「事業報告について」「補助金事業」「設置認可申請書・設置届出書」「履行状況報告書及び改善意見等対応状況報告書」「授業評価ア

ンケート」「点検・評価」「研究における不正防止への取組」「内部通報制度」を公表している。

<https://www.hju.ac.jp/guide/>

また、「教職課程の情報の公表」は、教職員免許法施行規則第 22 条の 6 に基づき、課程認定における情報を公表している。すなわち、次のとおりである。

1. 教員の養成の目標及び当該目標を達成するための計画に関すること
2. 教員の養成に係る組織、各教員が有する学位及び業績
3. 卒業者の教員免許状の取得の状況に関すること
4. 卒業者の教員への就職の状況に関すること

⑮教育内容等の改善を図るための組織的な研修等

本学では、ファカルティ・ディベロップメント（FD）委員会が中心となり、教務課やキャリアセンター等の事務部署と連携し、授業内容、教育方法、教育成果の改善を図るために、全学的な教学マネジメントの下での改革サイクルを確立している。

（1）授業評価アンケート

全開講科目について、前期末（前期科目）と学年末（通年・後期科目）の授業評価アンケートを実施している。アンケート結果は、データ分析を行い、全学的傾向や各開講科目について、Web 公表し、教員に対して授業改善のための情報を提供し、全学的に授業改善に向けて取り組む姿勢を明示している。各授業担当教員は、分析結果をもとに、授業改善に向けた具体的な取組を計画し、授業改善目標として Web 公表し、学生に学修を振り返る機会を提供している。

（2）教育システムの活用に関する教職員の研修

本学では教育支援システムとして「ポータルサイト」を運用し、学生との双方向のコミュニケーションを可能にした学修支援を行っている。コンテンツは、①メール、②お知らせ、③レポート提出、④履修状況、⑤履修登録、⑥教職履修カルテ、⑦達成度評価、⑧シラバス、⑨アンケート、⑩コース・資格申請、⑪希望進路登録（キャリア支援）、⑫授業用 SNS システムである。教員は、このシステムを活用し、担当する授業内容や教育方法を振り返り、一人ひとりの学生の主体的な学修態度を育むための改善策を検討することができる。また、教員と職員が、このシステムを利用し、協働することで、学生の主体的な学修を促すことができる。こうした成果は、教職員が十分にシステムを活用できることで得られるものであり、そのために、教職員のためのシステム利用に関する説明や、教育効果の高い利用の仕方の例示などについて、毎年、コンテンツの更新に合わせて研修会を実施している。

（3）FD 研修会、SD 研修会、FD・SD 合同研修会の実施

本学では、毎年、FD 研修会、SD 研修会、FD・SD 合同研修会を実施している。FD・SD 合

同研修会は、教職員を対象とし、「ブランド力調査と入試分析」「入試予想と教職員の役割」等をテーマとし、大学の質保証に向けて教員と職員が協働することをねらいとした、講演会やワークショップを開催している。FD 研修会は教員を対象とし、「キャリア教育の在り方」「シラバス・ルーブリック評価を用いた教学改善」等をテーマとして、教育内容や方法、評価などに関する講演会やワークショップを開催している。SD 研修会は、教員及び職員を対象とし、「卒業時の質保証」「チームワークを高めるためのコミュニケーション向上」等をテーマとし、大学の教育研究活動の適切で効果的な運営を図るために必要な能力や資質の向上を目指して、講演会やワークショップを開催している。

⑩社会的・職業的自立に関する指導等及び体制

(1) 教育課程内の取組について

本学は、キリスト教主義に基づいて、女性の生涯を支える教養教育と専門教育により、真理を追求し、世界と地域の人々に仕える豊かな人格の育成し、女性のライフキャリアを支援することを目的としている。そのために教育課程において、豊かな教養と専門的知識を通して、冷静な判断力と決断力を兼ね備えた「ぶれない個」を形成し、自己のライフキャリアの確立を目指す「ライフキャリア科目」を設けている。

ライフキャリア科目は、生涯にわたって女性のライフキャリアを支える根幹を形成することを目標とし、必修科目「キャリアプランニング」及び「女性とライフキャリア」と選択科目から構成している。「キャリアプランニング」は1年次前期に開講するものであり、社会の一員として主体的に生きていくために、自分自身にできることは何かを考え、学生一人一人が自分に適した大学生活をプランニングし、ライフキャリアを描いていくことを支援する科目である。また、「女性とライフキャリア」は2年次前期に開講するものであり、ライフキャリアの観点から、女性の生涯における様々なライフイベントを想定し、女性の置かれた現状における問題点を明らかにするとともに、自己のキャリア・アンカーについて考え、社会貢献できる将来像を描くことを支援する科目である。必修科目に加えて選択科目を履修することによって、「自己との関係」「他者との関係」「社会との関係」の領域において、冷静な判断力と決断力、前に踏み出す行動力、自己を活かし、他者と協働する力の「社会人基礎力」を身に付けることをめざしている。

人文学部では、専門科目として「キャリア・スタディ・プログラムⅠ～Ⅲ」（1年次後期～2年次後期）を設けており、キャリア形成の基盤をなす言語力等を育成し、3年次以降の「アカデミック・リサーチⅠ～Ⅳ」を通して批判的思考力と問題解決力を養うことを目標としている。このように、教育課程において学生が常に自己のライフキャリアを見通しながら、一人の社会人として自立し、一生涯というスパンで自己のキャリアを構築していくことをめざしていけるよう配慮している。

キャリア関連科目一覧

科 目	開講年次	単位数
キャリアプランニング	1 年前期	2
女性とライフキャリア	2 年前期	2
インターンシップ	2 年前期	2
インターンシップⅡ	3 年前期	2
海外インターンシップ	2 年後期	2
ライフキャリア特別講義Ⅰ	1 年前期	2
ライフキャリア特別講義Ⅱ	1 年後期	2
ライフキャリア特別セミナーⅠ	1 年前期	2
ライフキャリア特別セミナーⅡ	1 年後期	2
キャリア・スタディ・プログラムⅠ	1 年後期	2
キャリア・スタディ・プログラムⅡ	2 年前期	2
キャリア・スタディ・プログラムⅢ	2 年後期	2

(2) 教育課程外の取組について

本学にキャリアセンターを設置し、学生のキャリア支援・就職支援を行っている。1年次には授業科目「キャリアプランニング」と連携して、将来の自己のキャリアを想定しながら自己を分析し、大学生活の目標づくりができるよう支援するとともに、希望する学生には入学初年次からキャリアカウンセリングが受けられる体制を整えている。2・3年次にはキャリアセンター主催の「キャリアガイダンス」を実施するとともに、キャリア形成の目的に応じた各種セミナーを実施している（資料 36）。3・4年次には、学生が提出する進路登録票に基づいてキャリア支援課職員が個人面談を実施するとともに、キャリアカウンセラーによるカウンセリングも随時実施している。その他にも、「学内企業合同セミナー」や東京への「合説ツアー」等を企画・実施することで、学生一人ひとりが自己のキャリアを見つめ、人生の目標に適した進路を選択できるようきめ細やかな支援を行っている。

(3) 適切な体制の整備について

キャリアセンターは学部・学科、セミナーと連携を取ることによって、全学をあげてキャリア支援が行えるよう配慮している。例えば、学科単位やゼミ単位でキャリアセミナーを企画することで、その学科やゼミの特性に応じたキャリア支援が実施できるようにしている。また、キャリア支援委員会を設置し、キャリアセンター長、キャリア支援課長及び

各学科から選出された教員を構成員としてキャリア支援全般の運営にあっている。委員会は、キャリア支援の方針、キャリア教育に関連する授業科目の支援、インターンシップの実施及び拡充、キャリア支援に関わる生涯学習・言語教育等の課外講座、学校推薦者の決定、キャリア支援に向けた懇談会・企業訪問等に関する事項について協議することに加えて、キャリアセンターとの連絡を密にすることで、学生への周知が徹底するよう配慮するとともに、学部・学科からの要望をキャリア支援に反映させることができる体制を整えている（資料 37）。

添付資料

目 次

- 資料 1・・・【国際英語学科】カリキュラム・マップ
- 資料 2・・・【国際英語学科】カリキュラム・ツリー
- 資料 3・・・【日本文化学科】カリキュラム・マップ
- 資料 4・・・【日本文化学科】カリキュラム・ツリー
- 資料 5・・・「広島女学院就業規則」
- 資料 6・・・「特別専任教職員の任用等に関する規程」
- 資料 7・・・【国際英語学科】履修モデル（GSE コース）
- 資料 8・・・【国際英語学科】履修モデル（英語文化コース）
- 資料 9・・・【国際英語学科】履修モデル（英語科教員をめざす）
- 資料 10・・・【日本文化学科】履修モデル（日本語運用能力を磨く）
- 資料 11・・・【日本文化学科】履修モデル（日本文化を発信する力を育てる）
- 資料 12・・・【日本文化学科】履修モデル（国語科教員をめざす）
- 資料 13・・・図書の整備計画
- 資料 14・・・雑誌所蔵リスト
- 資料 15・・・雑誌継続購入リスト
- 資料 16・・・【国際英語学科】入学者選抜方法ごとの評価内容
- 資料 17・・・【国際英語学科】入学者選抜方法との関係
- 資料 18・・・【日本文化学科】入学者選抜方法ごとの評価内容
- 資料 19・・・【日本文化学科】入学者選抜方法との関係
- 資料 20・・・「広島女学院大学入試委員会規程」
- 資料 21・・・「広島女学院大学入試実行委員会規程」
- 資料 22・・・教育実習施設一覧（中学校・高等学校）及び承諾書
- 資料 23・・・〔博物館実習〕2016（平成 28）年度館務実習先一覧表
- 資料 24・・・〔博物館実習〕受け入れ館園の承諾書
- 資料 25・・・〔博物館実習〕実習希望届
- 資料 26・・・〔博物館実習〕2016（平成 28）年度館園実習先一覧表
- 資料 27・・・〔博物館実習〕実習先への依頼状
- 資料 28・・・〔博物館実習〕2017（平成 29）年度博物館実習予定表
- 資料 29・・・カリフォルニア州立大学サンマルコス校受入れ承諾書
- 資料 30・・・「広島女学院大学全学教授会規程」
- 資料 31・・・「広島女学院大学学部教授会規程」

資料 3 2 ・ ・ 「学部教授会の審議事項に関する規程（学長裁定）」

資料 3 3 ・ ・ 「広島女学院大学自己点検・評価委員会規程」

資料 3 4 ・ ・ 「広島女学院大学内部質保証委員会規程」

資料 3 5 ・ ・ 内部質保証システム

資料 3 6 ・ ・ キャリアガイダンスプログラム

資料 3 7 ・ ・ 「広島女学院大学キャリア支援委員会規程」

1. 学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況

(1) 学生の確保の見通し

①定員充足の見込み

人文学部国際英語学科及び日本文化学科の入学定員については、各学科の教育研究活動を広げ、推進していく必要があるとの考えのもと、養成する人材に係る社会的・地域的な需要を踏まえるとともに、教育研究活動の実施方法に留意しつつ、私立大学として安定的な財務基盤を築くことを前提に入学定員を設定している。

その規模については、学生募集の最大の母集団となる18歳人口の推移を前提に、本学の立地する広島県の年齢別人口の動向、高等学校及び中学校の在籍者数、高等学校を卒業した者の大学進学等の状況、人文科学系学部（国際・国際関係・外国語系統、文・教育・教養系統）の大学進学等の状況、近隣の人文科学系学部の入学志願状況並びに定員充足の状況など、本学を取り巻く様々な状況とデータを比較分析して想定した。そのうえで、外部委託により実施した広島県を中心とする高等学校に在籍している高校生に対する進学需要調査、同様に広島県を中心とする企業等に対する採用意向調査の結果を総合的に勘案し、他大学との競争力を有しつつ、確実に確保可能と見込まれ、かつ入学者選抜の機能が低下しない範囲の入学定員として設定している。

②定員充足の根拠となる客観的なデータの概要

(ア)人口推移並びに大学進学等の状況による中長期的な見通し

1) 年齢別人口の動向による長期的な見通し

全国の18歳人口は、近年で見ると平成4年をピークとして右肩下がりでも推移している。その後平成21～32年ころまではほぼ横ばいで推移するが、平成33年頃からまた減少することが予測されている。平成4年から人口が減少していく中、大学への進学率は平成12年までは右肩上がりに推移しており、その後約60万人レベルでの微増減を繰り返していることから、全国的な大学進学者数としては平成32年頃まではあまり変わらないことが想定される。（資料1）

本学の受験者層は広島県及び近隣県の出身者によって多くが占められている。県別に見ると、平成28年度の本学入学者（328人）の出身地は、広島県が270人で入学者全体の82.3%、山口県は17人で5.2%、島根県は12人で3.7%、愛媛県は7人で2.1%、岡山県は3人で0.9%、その他の県で19人（5.8%）となっている。平成27年度の入学者（340人）の出身地では、広島県においては286人で入学者全体の84.1%、山口県は24人で7.1%、島根県は12人で3.5%、愛媛県は5人で1.5%、岡山県は1人で0.3%、その他の県で12人（3.5%）となっており、8割以上が県内から入学している状況となっている。（資料2）

学校基本調査によると、広島県における平成28年度の女子18歳人口は13,365人で、その後3年間は微増もしくは前年とほぼ同数で推移、改組年度の平成30年度もほぼ同

数が見込まれており、志願者となり得る生徒数は前年度とほぼ同数程度が見込めると判断できる。ただし、改組完成年度（予定）翌年の平成 34 年度において、広島県内女子 18 歳人口は微減となり約 12,500 人、その後平成 43 年度に向けて増減を繰り返しており、特に平成 35 年度（約 12,000 人）と平成 44 年度（約 11,300 人）については下降幅が大きくなっているため留意しておく必要がある（資料 3）。その時点の備えとして、本学の教育研究及び課外活動の内容を一層充実させ、施設設備等について更なる整備を図ることで、志願者が増えるよう計画を進めていく予定である。

隣県である山口県における平成 28 年度の女子高等学校卒業生数は約 5,600 人で、そのうち 2,248 人が大学を志願している。3 年後の平成 31 年度は女子高等学校卒業生数が約 5,800 人、その 3 年後の平成 34 年度も約 5,900 人と微増となっており、山口県に関しては現状以上の学生確保が見込める。（資料 4）

また、島根県においては、平成 28 年度の高等学校卒業生数（男女合計）が約 5,900 人でそのうち 2,780 人が大学等へ進学している。3 年後の平成 31 年度では約 6,400 名が予想されることから島根県に関しても現状以上の数値が期待できる。（資料 5）

愛媛県においては、平成 28 年 3 月の女子高等学校卒業生数が約 5,800 人でそのうち約 2,400 人が大学へ進学している。3 年後の平成 31 年度、その数は約 5,850 人が予想されることから愛媛県に関しても、しばらく現状以上の数値が期待できる。ただし、その 4 年後の平成 35 年度で約 5,600 人と 250 人減るので注意が必要となる。（資料 6）

以上のような人口推移の動向をふまえて、学生確保に向けた積極的な取組みを実施していくとともに、将来を見据えた教育研究の一層の充実を図っていくことにしている。

2) 県内の高等学校及び中学校の在籍者数

平成 28 年度の学校基本調査によると、平成 28 年度の広島県内高等学校全日制に在籍している 3 年生女子生徒数は 11,737 人であった。改組の初年度（平成 30 年度）に受験対象者となる広島県内の高等学校（全日制）に在籍している 3 年生女子生徒数は 11,726 人、同じく 2 年目（平成 31 年度）に受験対象者となる高等学校 2 年生女子生徒数は 12,002 人、3 年目（平成 32 年度）に受験対象者となる高等学校 1 年生女子生徒数は 12,786 人、完成年度（平成 33 年度）に受験対象者になる広島県内中学校に在籍している中学 3 年生の生徒数は 12,631 人となっており、11,700～12,800 人の間をほぼ横ばいで推移しており、広島県内の大学受験対象者が大きく減少することなく、ここ数年は定員確保の見通しがあるものと見込まれる。ただし、その後は少しずつ増減を繰り返しながら減少していくので注意は必要である。（資料 7、8）

3) 県内の大学進学状況

学校基本調査によると、広島県内の高等学校を卒業した女子の過去 3 年間の大学進

学状況は、平成 26 年度は卒業生 12,200 人のうち大学進学者は 7,315 人で大学進学率は 60.0%、平成 27 年度は卒業生 12,307 人のうち大学進学者は 7,461 人で大学進学率は 60.6%、平成 28 年度は卒業生 12,140 人のうち大学進学者は 7,402 人で大学進学率は 61.0%となっている。また、広島県内の高等学校を卒業した女子の過去 10 年間の大学進学率は、平成 18 年度の 55.5%から平成 28 年度は 61.0%と 5.5 ポイント上昇していることなどからも、中長期的な入学定員の確保ができるものと見込まれる（資料 9）。

また、地域別の志願倍率については、広島県では平成 27 年度が 3.88 倍、平成 28 年度が 4.16 倍と上がっており、地域別の入学定員充足率については、広島県において平成 27 年度が 94.32%、平成 28 年度が 95.09%と 100%とはならないまでも 0.77 ポイントの微増になっていることから、前年度とほぼ同等の募集は見込めると考えられる。（資料 10）

(イ)人文学部（国際・国際関係・外国語系統、文・教育・教養系統）の設置状況及び志願者、定員充足状況

平成 28 年度において、全国で人文科学系学部を設置する学部数は 240 学部となっている。また、過去 5 年間の志願倍率は 7.13～7.54（約 505,000～525,000 人）、入学者数は 72,905～75,169 人であり、入学定員充足率は、104.42～106.82%となっており、分野について一定割合の大学志願率、進学率を保っている（資料 11）。

1) 国際英語学科（国際・国際関係・外国語系統、文・教育・教養系統）

私立大学一般入試おもな学部系統の志願者動向調査（資料 12）によると、「文・教育・教養系統」の志願者指数は、平成 26 年度で前年度比 97%、平成 27 年度で前年度比 99%、平成 28 年度で前年度比 104%、平成 29 年度で前年度比 107%と、近年 100%を越える右肩上がりの数値で推移しており、また「国際・国際関係・外国語系統」の志願者指数は、平成 26 年度で前年度比 119%、平成 27 年度で前年度比 100%、平成 28 年度で前年度比 107%、平成 29 年度で前年度比 116%と、一部増減はありながらも 100%またはそれ以上の比率で推移していることから、ここ数年は一定の志願者数を確保できると見込んでいる。

本学の設置する広島県で国際・国際関係・外国語（英語）系統の学科を設置する私立大学は日本文学などの系を含むものを合わせて 5 校 6 学部、入学定員は 520 人となっており、過去 2 年間の志願者状況をみると、平成 28 年度は、入学定員 520 人に対して志願者数は 2,348 人で志願倍率は約 4.5 倍、平成 27 年度は、入学定員 520 人に対して志願者数は 2,367 人で志願倍率は約 4.6 倍となっている（資料 13）。したがって、本学科を設置した場合においても安定した志願者を得ることが可能であると

見込まれる。

2) 日本文化学科（文・教育・教養系統）

私立大学一般入試おもな学部系統の志願者動向調査（資料 12）によると、「文・教育・教養系統」の志願者指数は、平成 26 年度で前年度比 97%、平成 27 年度で前年度比 99%、平成 28 年度で前年度比 104%、平成 29 年度で前年度比 107%と、近年 100% を越える右肩上がりの数値で推移していることから、ここ数年は一定の志願者数を確保できると見込んでいる。

本学の設置する広島県で日本文化系学科を設置する大学は英米文学などの系を含むものを合わせて 3 校 3 学部、入学定員は 290 人となっており、過去 2 年間の志願者状況をみると、平成 28 年度は、入学定員 290 人に対して志願者数は 1,045 人で志願倍率は約 3.6 倍、平成 27 年度は、入学定員 290 人に対して志願者数は 979 人で志願倍率は約 3.4 倍となっている（資料 13）。したがって、本学科を設置した場合においても安定した志願者を得ることが可能であると見込まれる。

(ウ)受験対象者への進学需要調査

国際英語学科及び日本文化学科の設置計画を策定するにあたっては、前述のように広島県内の年齢別人口の動向、高等学校及び中学校の在籍者数、高等学校を卒業した者の大学進学状況、他大学における志願状況などを踏まえたうえで計画していることから、十分な学生確保が見込めるものであるが、学生確保の見込みについて定量的なデータから検証することを目的として、平成 28 年 12 月 1 日から平成 29 年 1 月 31 日にかけて、本学への進学実績にもとづき在籍者が多い出身都道府県（広島県、山口県、島根県）に所在する高等学校に在籍している高校生（開設年度の受験対象者である現 2 年生）を対象とした進学意向に関する調査を学外の調査機関である株式会社進研アドに委託して実施した。

1) 国際英語学科

有効回答者数 5,342 人中、本学科の特徴である「ネイティブ教員による週 5 回以上の授業や 1 クラス 10 人以下の少人数制クラスで英語で話す力を養う」に対して魅力を感じた高校生は 72.2%にのぼり、また「留学や TOEIC 対応のため全学生に対し週 1 回の 1 対 1 の個別指導で英語をマスターし、航空業（CA・GS）、ホテル、旅行代理店など英語を使う職業をめざす」に対しても 71.3%の高校生が魅力を感じるしており、本学科に高い関心を示していることが分かる。

入学意向に関する項目では、入学定員 65 人の 4.2 倍にあたる 272 人が国際英語学科への積極的な入学意向を示しており、予定されている入学定員数を上回る入学意向者が見込める。本学の設置する広島県に所在する高等学校の在籍者に限定した場合で

も、250人の入学意向者が見込める。本学は隣接県からの入学者も確保しており、県内外からの学生確保によって、長期的かつ安定的な学生確保については十分に見込めるものと考えられる（資料14）。

2) 日本文化学科

有効回答者数5,342人中、本学科の特徴である「国内フィールドワークだけでなく、海外留学、留学生のサポートを通じて他国との違いを体験、日本文化を深く理解し、発信する力を養う」に対して魅力を感じた高校生は70.7%にのぼり、また「講義、過去問対策、模擬授業等を組み合わせた独自の教員採用試験対策で国語教員の現役合格をサポートする」に対しても67.7%の高校生が魅力を感じるしており、本学科に高い関心を示していることが分かる。

入学意向に関する項目では、入学定員40人の2.5倍にあたる99人が日本文化学科への積極的な入学意向を示しており、予定されている入学定員数を上回る入学意向者が見込める。本学の設置する広島県に所在する高等学校の在籍者に限定した場合でも、88人の入学意向者が見込める。本学は隣接県からの入学者も確保しており、県内外からの学生確保によって、長期的かつ安定的な学生確保については十分に見込めるものと考えられる（資料14）。

③ 学生納付金の設定の考え方

学生納付金については、大学の経営に係る財務的な視点と学生納付金の学生への還元など受益者に対する説明責任の観点を重視しつつ、近隣他大学の類似学部学科における学生納付金の設定状況を勘案したうえで、完成年度に収支の均衡が計れることを前提に教育研究経費比率や経営経費依存率を見据え、本学部学科の運営上における人件費及び教育研究や管理運営に係る経常経費等の財務予測により設定している。

具体的には、本学科完成年度における事業活動支出のうち、国際英語学科における人件費177,600千円、教育研究経費105,000千円、管理経費29,500千円の合計が312,100千円、日本文化学科における人件費114,500千円、教育研究経費64,600千円、管理経費18,200千円の合計が197,300千円と算定される。この経費合計額に相当する額を各々の学生定員、国際英語学科260人（65人×4学年）、日本文化学科160人（40人×4学年）で逆算すると、国際英語学科が学生一人あたり1,200千円、日本文化学科が学生一人あたり1,233千円となり、学科間で大きな差は生じない。

一方、近隣他大学の類似学部学科3校の学生納付金（入学金除く総額）の平均値は（資料15）の通り国際英語系統が約1,068千円、日本文化系統が1,007千円となっており、学科系統により差が見られる。

以上を踏まえ、具体的な学生納付金の設定にあたっては学部全体の収支均衡、学科の特性に応じた対外的な競争力を考慮し、総合的に勘案した結果として、人文学部は学科

で共通して学生一人あたり年間 1,060 千円として設定した。内訳は、授業料 780 千円、施設維持資金 280 千円としている。

(2) 学生確保に向けた具体的な取組状況

学生確保に向けた具体的な取組状況としては、大学案内や学生募集用パンフレットの配布をはじめ、ホームページの充実および高校生向けの一般広報紙媒体による広報活動の他、テレビ、ユーチューブ等多数のメディアを使用した広報活動を行うとともに、過去において入学者の受入れ実績のある高等学校を中心とする訪問活動などを通じて積極的な情報提供を行うこととしている。特に今年度は、全教員で短期間に集中して高校訪問をする予定であり、広く迅速に広報活動を行う予定である。

また、オープンキャンパスや大学見学会をはじめ各地域における進学相談会などの開催を通じて、各学部学科におけるディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーをはじめとする様々な教育情報について、広島県及び隣接県を中心とする高校生や保護者、高等学校教諭に対して広く周知を図ることとしている。具体的には、以下のような取組を行う。

①具体的な取組状況

(ア) 広報媒体

1) 紙媒体

設置告知用チラシ	平成 28 年 12 月から 13,000 枚配付
学部・学科改組案内冊子	4 月届出予定の案内冊子を 3 月中旬作成し、「大学案内」が完成するまで資料請求者へ配付。 (届出前であることから、「予定」とする。また学科名は仮称と表記する。) 「大学案内」簡易版として高校訪問や進学説明会等で使用および配付する。
大学案内	6 月から配付予定。
入試ガイド	6 月から配付予定。
AO型入試リーフレット	6 月から配付予定。
進学情報誌	12 月より発行される主要媒体（大学発見ナビ、進学事典（1 月版）、進学事典（4 月版）、就職・資格・キャリア号、大学・短期大学進学ガイド、地元進学 BOOK、Benesse マナビジョンブック 2017（保護者版）、進学ガイド春号、17 マイナビ進学、君はどの大学を選ぶべきか、進学 FORUM、志望校検討ガイド、他）への掲載。
オープンキャンパスチラシ	作成予定。

シおよびリーフレット	随時資料請求者や高等学校へ訪問し配布予定。 オープンキャンパスの時期が近付いたら、具体的内容を 紹介したリーフレットを作成し動員を図る。
キャンパスニュース	作成予定。在学生および保護者向けの学生課主担で制 作する新聞であるが、大学紹介（広報）の一つのツ ールとして、随時資料請求者や高等学校へ訪問し配付す る予定。
行事案内（チラシなど）	実施時期に合わせチラシ等を作成し発行する予定。

2) 電子媒体

ホームページ	5月1日に大学サイトに設置告知特設サイトを開設 予定。
携帯サイト	ホームページと連動したスマホサイトを有する。
外部業者サイト	スタディサプリ進路、ベネッセマナビジョン、マイ ナビ進学、逆引き大学辞典、キャリアタス進学への情 報掲載。

3) マスメディア

新聞広告	設置届出申請後予定
TV-CM	設置届出申請後予定

4) その他

電光掲示板の掲出（上 幟町校地）	上幟町校地にある電光掲示板への掲出を予定。 （学部・学科改組について、オープンキャンパスの 実施について、入学案内等）
---------------------	---

(イ) 高校訪問・塾訪問の実施

- 1) 教職員が、前出のアンケート協力高校や当大学への資料請求者の在籍高校をは
じめとするPRを行い、広く周知を図っていく。
5月以降 広島県内主要高校訪問を実施
6月以降 中国・四国・九州（沖縄含む）地区に人文学・国際・英米文化・日
本文化系として高校訪問を実施
- 2) 近郊の大学受験予備校や進学塾へ、大学・学部学科の紹介やPRを行い、広く周
知を図っていく。

(ウ) 高校ガイダンス・進学説明会等の参加

高校内ガイダンスや校外イベント企画へも積極的に参加し、広くPR活動を行っ
ていく。

5月以降、栄美通信、さんぼう、日本ドリコム、広告社等が主催する進学相談

会に出席予定。

- ・上記は業者主催の説明会で年間 46 回を予定。(資料 16)
- ・高校開催の説明会は教職員合わせて昨年 179 回実施しており、今年度もほぼ同等かそれ以上の活動を実施予定。(資料 17)

(エ) 関連団体などに対する周知

卒業生、実習施設、各種企業、近郊の病院・福祉施設等に対して、大学・新学部学科の設置を広く周知する。(改組告知リーフレットの配付、学院報、キャンパスニュース、各種広報物等での紹介など。)

②届出後の具体的な取組

文部科学省のガイドラインにより、このたび本学の改組は、届出後であれば学生募集活動は可とされていることから、学生確保に向けた取組について上記の内容で速やかに実施できるよう、準備を進めている。(ただし 60 日間は措置命令の可能性があるので留意する。)

届出後は、前項に掲げた取組に加え、学生募集に関する告知を速やかに行う。入試内容をはじめとする募集要項を、ホームページや各種サイト、各媒体等で広く告知する。また、潜在志願者（オープンキャンパス参加者及び資料請求者）に対して募集要項等を送付するとともに、高校進路指導教員等へ周知を行う。

入試については、AO型入試、指定校制推薦、公募制推薦、特待生入試、一般入試、大学入試センター試験利用入試等を実施する予定としており、教職員が一丸となって順次準備を進めていく。

2. 人材需要の動向等社会の要請

(1) 人材の養成に関する目的及び教育研究上の目的 (概要)

人文学部

言語や文化についての豊かな教養、専門的知識及び深い洞察にもとづき、幅広い視野に立って確固たる自己を社会の中で位置づけることができ、自己の文化や異文化を理解することによって多様な価値観を受容し、高い言語運用能力をもって他者との円滑な関係を築くことができる人材を養成する。さらに、現代社会が直面する諸問題に対して主体的に関わり、他者と相互に尊重しあい女性のライフキャリアを通して協働することによって、継続してその解決に取り組むことができる人材を養成する。

①国際英語学科

国際共通語としての実践的な英語力を身につけ、多文化への理解と柔軟な対応を兼ね備え、自国の文化をも理解した上で、グローバル社会で活躍する人材を養成する。特に一定の基準を超えた英語力を有する学生のために、GSE(Global Studies in English)コースを用意し、国際社会で貢献できる人材を養成する。

②日本文化学科

日本語や日本の文学・文化を深く理解し、日本の文化を世界に発信する力を語学教育や異文化コミュニケーション教育などにより育み、地域やグローバル社会に貢献できる人材を養成する。

(2) 上記(1)が社会的、地域的な人材需要の動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠

①社会及び地域における人材需要の需給見通し

人文学部は、自己の文化や異文化を理解することによって多様な価値観を受容し、高い言語運用能力をもって他者との円滑な関係を築くことができる人材の養成を目的としており、これをふまえて、国際英語学科では高い英語力を育成することでグローバル社会での活躍が期待され、また日本文化学科では高い日本語力を育成することで地域における職業人として、また日本文化のグローバル社会への発信者として貢献することが期待され、いずれも現代社会が求めている地域に根ざしながらグローバルな視点から発想することのできる人材として社会的需要に対して十分に応えることが見込まれる。

②関係団体等からの要望等

本学は平成28年度に広島経済同友会に正会員として加入し、同会と連携しながら社会において求められる人材の育成を推進することになっており、本学の卒業生が今後ますます地域社会を活性化する女性として活躍することが期待されている。本学学長は、こ

これらの連携を強化するために、例えば、もみじ銀行が主催する「女性活躍推進応援セミナー」において企業の経営者、管理職、人事総務担当者を対象として「企業や社会を生かす女性のライフキャリア」をテーマとした講演を行うなどの精力的な活動を通じて、本学がめざす女性のライフキャリア確立に向けての教育が注目されており、生涯にわたってキャリアを構築していく女性を育てる大学として期待されている。

人文学部の前身である国際教養学部では、東アジアの8つの国と地域にある60のキリスト教系大学で構成されるACUCA（アジアキリスト教大学協会）に正式加盟したことにより、同組織が推進する「Student Mobility Scheme (SMS)」の参加を通じて海外でのネットワークを構築し広げていくことで、国際英語学科の学生が海外企業、外資系企業、あるいは国内のグローバル企業から実践力のある人材として要望が高まることが期待される。また、日本文化学科の学生が外国人に日本語を教授する日本語教員として海外で就業する機会も拡大することになる。

③卒業後の進路

(ア)国際英語学科の卒業後の進路

国際英語学科は、英米を中心とした英語圏の文化を多面的に分析し理解するとともに、自国の文化の特質を捉えなおすことで、国際社会における出来事を的確に把握する力を習得させ、その上で、英語を用いてグローバルな観点から自己の考えや意見を伝えるとともに、積極的に行動することができる力を習得させることで、中学校・高等学校教員（英語）、国内にある外資系企業、海外にある外資系企業、海外拠点のある日本企業、通訳・翻訳者、国際協力NPO-NGO職員、海外開発援助（JICA）職員、航空関連企業、大使館・領事館職員、ホテル・旅行代理店、貿易関係企業、出版社編集事務・営業職などの進路が期待できる。

(イ)日本文化学科の卒業後の進路

日本文化学科は、日本固有の文化や伝統を尊び、多角的に理解を深めることによって、次世代へその特徴や意義を発展させていくことができ、世界の中の日本、世界の中の自己という視点を身につけることによって、国際社会のニーズを的確に察知し、専門的知見や技能を活かしながら積極的に行動することができる力を習得させることで、中学校・高等学校教員（国語）、学校図書館司書教諭、図書館司書、学芸員、公務員、日本語研究者、日本語教員、広告業界、コピーライター、サービス業、ジャーナリスト、アナウンサー、マスコミ業界、放送業界、塾講師、作家・童話作家、出版業界などの進路が期待できる。

④既設学科（現行）の就職状況

(ア)最近5年間の求人件数の状況

本学における最近4年間の求人件数の実績は、平成24年度は就職希望者397人に対して求人件数1,033件で求人倍率は2.6倍、平成25年度は就職希望者363人に対して求人件数1,519件で求人倍率は4.2倍、平成26年度は就職希望者398人に対して求人件数1,596件で求人倍率は4.0倍、平成27年度は就職希望者386人に対して求人件数1,610件で求人倍率は4.2倍、平成28年度は就職希望者344人に対して求人件数1,856件で求人倍率は5.4倍となっている。

このように、昨今の景気回復傾向を反映しながらではあるものの、求人件数を着実に伸ばしていることは、本学における人材養成の目的及び教育研究上の目的が人材需要面での社会的要請に十分に応えるものであることを示しており、新学部を設置した場合でも、就職先の確保については十分に見込めるものである。

(イ)最近5年間の就職者数の状況

人文学部の基礎となっている既設の国際教養学部国際教養学科は現在まで2期生が卒業しているが、その前身である英米言語文化学科、日本語日本文化学科を含めて最近5年間の就職希望者数に対する就職者数の実績は次のとおりである。平成24年度は90.6%（就職者数106人／就職希望者117人）、平成25年度は93.8%（就職者数91人／就職希望者97人）、平成26年度は88.7%（就職者数102人／就職希望者115人）、平成27年度は93.4%（就職者数141人／就職希望者151人）、平成28年度は89.0%（就職者数105人／就職希望者118人）となっており、卒業後の進路については十分に見込めるものである。就職先の特徴としては、国際英語学科の前身である英語系メジャーの卒業生は航空会社、空港、旅行会社、海運業等の海外との関連をもつ企業へ就職するケースが多く、一方、日本文化学科の前身である国語系メジャーの卒業生は半数以上が各業界の事務職として就職しており、修得した英語力、日本語力を活用した業務に従事している。このように、履修した専門性を生かした就業傾向がみられることから、人文学部に改組し国際英語学科と日本文化学科が独立することで、専門的な知識・技能を発揮する就職先がさらに充実することが見込まれる。

⑤企業、関係団体等への人材需要に関する採用意向調査

人文学部の設置は、前述のとおり社会的、地域的な人材需要の動向等及び本学の求人状況や就職状況などを踏まえたうえで計画していることから、十分な卒業後の進路が見込めるものであるが、本学部の人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的が、人材需要の動向等社会の要請を踏まえているかどうか、卒業後の具体的な進路や地域の人材需要の見通しがあるかを定量的なデータから検証することを目的として、平成28年12月1日から12月28日にかけて、学科の卒業生の就職先として想定される広島県を中心とした2,750事業所（企業及び団体）を対象として本学部卒業生の有

効性、採用意向などの人材需要に関する調査を学外の調査機関である株式会社進研アドに委託して実施した。

1) 国際英語学科

有効回答件数 703 社のうち 95.0%にあたる 668 社が国際英語学科の卒業生は、「社会にとって必要な人材」と受け止めている。

本学科を卒業した者に対する採用意向については、有効回答 703 社のうち 73.3%にあたる 518 社が採用の意向を示しており、採用想定人数は 338 人に上る。さらに、「採用したいと思う」と回答した企業や関係団体等のうち採用可能人数を未定としている 325 社の採用可能人数を 1 人としてカウントした場合、全体で 663 人の採用が見込まれる結果となっている。このように限られたサンプル調査においても、国際英語学科で学んだ人材への需要は高いことがうかがえる（資料 18）。

なお、本調査による企業や関係団体等の過去 3 年間の平均的な正規社員の採用人数を合計すると 40,475 人となり、この採用総数を本学科の卒業生に対する採用意向に照らしてみた場合、「採用したいと思う」と回答した企業の採用総数は 29,668 人となることから、卒業後の進路については十分な見込みがあるものと考ええる。

2) 日本文化学科

有効回答者数 703 社のうち 86.1%にあたる 605 社が日本文化学科の卒業生は、「社会にとって必要な人材」と受け止めている。

本学科を卒業した者に対する採用意向については、有効回答 703 社のうち 65.6%にあたる 461 社が採用の意向を示しており、採用想定人数は 261 人に上る。さらに、「採用したいと思う」と回答した企業や関係団体等のうち採用可能人数を未定としている 295 社の採用可能人数を 1 人としてカウントした場合、全体で 556 人の採用が見込まれる結果となっている。このように限られたサンプル調査においても、日本文化学科で学んだ人材への需要は高いことがうかがえる（資料 18）。

なお、本調査による企業や関係団体等の過去 3 年間の平均的な正規社員の採用人数を合計すると 40,475 人となり、この採用総数を本学科の卒業生に対する採用意向に照らしてみた場合、「採用したいと思う」と回答した企業の採用総数は 26,552 人となることから、卒業後の進路については十分な見込みがあるものと考ええる。

前述のとおり、本学の人文学部は、社会的、地域的な人材需要の動向を踏まえたものであるとともに、これまでの就職実績や想定される就職先による調査結果からも就職先の確保は十分見込まれるものといえる。

添付資料

目 次

- 資料 1 . . . 18 歳人口と高等教育機関への進学率等の推移（文部科学省資料より）
- 資料 2 . . . 本学受験者・入学者の県内比率（本学調べ）
- 資料 3 . . . 【広島県】年齢別人口（H27 年度）
- 資料 4 . . . 【山口県】学校基本調査（H28 年度）
- 資料 5 . . . 【島根県】学校基本調査（H28 年度）
- 資料 6 . . . 【愛媛県】学校基本調査より（H28 年度）
- 資料 7 . . . 【全国】2016 年 12 月時点 高校在籍者数（現高 2-3）
- 資料 8 . . . 【広島県】学校基本調査__中学校（H28 年度）
- 資料 9 . . . 【広島県】学校基本調査__高等学校卒業者の卒業後の状況
（H18, H26～28 年度）
- 資料 1 0 . . . 平成 28(2016)年度私立大学・短期大学等入学志望動向 P8-9
（日本私立学校振興・共済事業団）
- 資料 1 1 . . . 学部系統別の動向（大学）平成 24～28 年度私立大学・短期大学等入学
志願動向（日本私立学校振興・共済事業団）
- 資料 1 2 . . . 旺文社 web 大学進学 INFORMATION
- 資料 1 3 . . . 広島県内で本学類似学科がある大学の入試状況
大学受験パスナビ等：旺文社より引用
- 資料 1 4 . . . 広島女学院大学「人文学部」「人間生活学部」（仮称）
設置に関するニーズ調査結果報告書【高校生対象調査】
- 資料 1 5 . . . 近隣類似大学授業料比較
- 資料 1 6 . . . 2017 年度進学説明会参加予定表
- 資料 1 7 . . . 2016 年度高校内ガイダンス
- 資料 1 8 . . . 広島女学院大学「人文学部」「人間生活学部」（仮称）
設置に関するニーズ調査結果報告書【企業対象調査】